

---

# 恋姫+運命 正義の味方と霸王の物語

夢現の件正

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋姫＋運命 正義の味方と霸王の物語

### 【Nコード】

N2452H

### 【作者名】

夢現の件正

### 【あらすじ】

イリヤとの「約束」を胸に秘め、正義の味方を目指し続けた衛宮士郎は瀕死に近い重症を負い覚悟を決めた時、救いの手が差し伸べられる。・・・不本意な制限が「人災」でついてしまったが。

## プロローグ（前書き）

この作品はFateと真・恋姫無双のクロスオーバー作品です。最強物ではありませんが、かなりオリ主化しており、ssを書くことが初めてなので、到らない箇所やおかしな点が多々出てくると思います。寛大な心で読んでもらえれば幸いです。また、駄作の危険性もあるため、両作品に深い愛着がある方や、読んでつまらないと感じる方はあまり読まないことをお勧めします。

## プロローグ

「どうやら、ここまでのようだな」

座り込んでいた衛宮士郎は、自分の体の損傷を確認してつぶやく。

現在自分の周囲には戦闘により協会の執行者の遺体が数人分倒れている。

遺跡があつた森の一角は無残な瓦礫の荒野とかしていた。

執行者との戦闘はそれだけ激しいものであり、

勝利したもののその代償は極めて大きいものだった。

執行者との戦闘前からの魔術師との持久戦により体は疲労、全身は裂傷で血塗れ、

右手の半分は黒こげ、左手は骨折、右足は・・・と例をあげたらきりがない。

無事な部分を探すのが難しい。

その拳句、人の気配が近づいてくる。

この一帯に一般人がくることはない。

だからこそ、ここを戦場に選んだのだから。

「出来ることはやってきたし、後悔もない。ここで死ぬのも納得出来る。」

「約束があるので・・・最後まで足掻かせてもらうぞ！」

「足掻くのはいいけど、それはもう少し先におきなさいよ」

そこには見知った、なつかしい魔術師の姿があつた。

「遠坂・・・どうしてと聞くのは野暮かな？」

俺は一定の警戒をしながら述べる。

「あなたの考えてる通り、協会から封印指定になったあなたを捕まえるよう命令を受けてここに来たわ。・・建前はね」  
遠坂凜は気になる言い方をした。

「建前ということは別の理由があると考えていいのかな？」  
別の理由として挙げられそうな事例をいくつか念頭におきながら俺は尋ねた。

「士郎には、宝石剣のことで借りがあから助けに来たってこと」  
遠坂はずいぶん古い話を持ち出した。

イリヤがまだ生きていたころ、彼女の内にあった宝石剣の記憶をもとに宝石剣の投影を行った。

・・結果は「かろうじて」成功。

ただし、宝石剣の強度は一回使えば粉々になる脆さ。

俺はアーチャーの知識の一部があつたおかげで、死にはしなかつたものの・・。

起きたとき半年も眠りつづけていたことに驚いたことは今でも記憶に刻まれている。

・・その後、宝石剣の起動実験において遠坂が「うっかり」して起こした大惨事も。

それが原因で遠坂は時計塔に呼び出しをくらい、以後会うことは今に至るまでなつたかた。

遠坂にお咎めがなつたこともあり、俺は夢のためイリヤと共に故郷を去つたから。

「けれど、そんなことをしたら遠坂もただではすまないはずだ」

「当然方策を考えてるわよ」  
答える遠坂の背後から二人の人影が近づいてきた。

「この者かね？ 宝石剣の投影をした魔術師は」  
遠坂に尋ねる翁の正体に気づいた。

キシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグ、並行世界を旅する魔法  
使い。

見たことがあるように感じたのは、イリヤの記憶で「見た」からだ  
と理解した。

「ゼルレッチ翁なら並行世界に送ることで俺を助けることができる  
が……」

けれど、遠坂がただではすまないことに、変わりはない。

桜を見捨てて、一緒に行くことは出来ないだろ」

桜のことを思い出しながら、俺は言った。

桜は第五次聖杯戦争によって、間

桐慎二、臓硯の二人が死んだことにより間桐の家から解放された。

しかしキャスターに弄られ疑似的な聖杯化したことにより下半身が  
麻痺し、

日常生活を藤ねえと藤村組の人が手助けしている。

また、疑似的な聖杯としての機能は残ってしまった。

このことが魔術師にばればれば利用されるか、封印指定にされるだろ  
う。

下半身が動けない以上逃げることも難しい。

遠坂が逃げれば、冬木の街は他の魔術師の統治下におかれる。

そうなれば最悪の事態が現実味を帯びてくる。

「そこで私の出番というわけだ」

ゼルレッチ翁とともに現れた女性が答えた。

「あなたは？」

「蒼崎橙子。君と同じ封印指定の魔術師で人形師だ。君が昔、遠坂に投影して渡した宝具を報酬に君に代わりの肉体を与える契約をしている」

その答えを聞いて俺はおおよそそのことを理解した。

人形に魂を移し前の肉体を協会に引き渡す。

そして俺を並行世界に逃がすことにより発覚を防ぐといったところだろう。

納得するとともに、張りつめていた緊張の糸は切れ俺は意識を失った。

S I D E R I N

「それにしても宝石翁、あなたが協力するとは思ってもみませんでした」

蒼崎橙子が作業を進めながら言う。

「まあ、弟子が泣きついてきたことに加え、宝石剣の投影を行える固有結界使いにして現代の英雄であることやに興味があったのでな。

ところで、さつきから何もしゃべっておらんが、どうした遠坂」

「士郎が世界と契約をせず守護者にならなくてすんだことに対する安堵と喜び。

それに、士郎がそうならないように導いたイリヤに対する嫉妬で頭がぐちゃぐちゃで。

自分の感情が整理しきるのに時間がかかったただけです。」

桜が士郎から聞いた【イリヤとの約束】の内容を思い出しながら答えた。

蒼崎橙子は処置の完了を告げた。

魔術の行使も終わり最後の段階に入る。

「それでは送るが、本当にいいんじゃない？」

「ええ、話していると未練が後を引きそうですから」

私は答えた。

こうして、衛宮士郎はこの世界を去った。多くの人に影響を残して。

「おい、これはどうした!？」

蒼崎橙子はひどく慌てて、どなった。

「え、この部分の魔方陣はこれでいいはずじゃ

「それは通常の話だ!この場合はこっちの術式でないとエラーが発生する!」

・・・またやつちやた・・・」

私は自分の血に流れる「うっかり」スキル、

そうここ一番で必ず失敗する呪じみたスキルを忘れてた。

「どんなエラーが発生するんじゃない？」

大師父がたずねると、

「魔術回路に負担がかかるし、投影以外のほとんどが出来なくなる。固有結界は暴走確定だろうし、一定以上の魔術行使でも危険を伴う」



と蒼崎橙子は答えた。

士郎・・・ごめん。

もう届くことない謝罪を私の中でし続けるのだった。

## プロローグ（後書き）

プロローグの出来はいかがだったでしょうか？ちなみに本作の土郎は基本セイバールートで何割かアーチャールート（凜がヒロインではないため）の聖杯戦争を経験（臓硯はランサーが始末）。土郎はセイバー イリヤ とヒロインになったかたがこの世をさっさとしまっているため現在はフリーだったりします。

## 第一話・霸王との出会い

「……………痛つつ…」

衝撃と共に俺は目を覚ました。

目を開けるとそこは……針の如くそびえる岩の山と、地平の果てまで広がっている赤茶けた荒野。

「なんでぞ」

なつかしい口癖が思わず口から洩れた。

気を失う前の情報を思い出して、

俺は自分が気絶している間に並行世界に飛ばされた可能性に気づく。

「人を探して会話する必要性があるな。

大概の外国語を簡単な会話を通じる程度には習得しているから、会話出来ないということはないと思うが……」

正義の味方を目指す以上、会話は必要不可欠だったため必至に言語を学んだ。

学んだのはそれだけでは無いが、とにかくこの努力によって、今困ることはないだろうと俺は考えた。

並行世界ということに一抹の不安が残るが。

進もうとして、大事なことに気づいた。

目線が低くなっている。

肌の色は……未熟だったところの色に戻っている。

声も同様。

川があつたので自らの姿を確認すると、想像どおりかつての自分の姿があつた。

「人形に魂を移した結果か」

考えられるのはそれくらいだろう。

聖骸布とボディーマーは今の体に合わせられていたことに安堵した。

影響が魔術回路にもあるかもしれないので確認をすることにした。

「同調・開始<トレース・オン>」

身体機能・・・正常、ただし性能が60%増大

鞘・・・正常稼働確認、自動再生率3%

魔術回路・・・エラー、負担200%増大により固有結界は使用後99.9%暴走、

干将・莫耶以外の宝具投影時及び、全投影連続層写使用時86%身体異常発生、

通常投影、視力強化使用可

上記以外の魔術はエラーにより使用不可

・・・異常だらけだった。

身体機能の増大は蒼崎橙子製の人形である恩恵だろう。

鞘も以前投影したものが冬木の実家に置いてあつたからわかる。だが、

「・・・魔術師としては致命的だな」

何故こうなつたかは分からない。

事実を受け入れ、干将・莫耶と夫婦剣用の鞘を投影して腰に固定した。

干将・莫耶の投影に五分もかかるのでは戦闘中の干将・莫耶投影は無理だな。

道を見つけ、歩くこと半日。

出発時は夜明け前で薄暗かった空は、今や頭上にある太陽に明るく照らされている。

「着いたか」

以外にすんなり町についてしまった。

先に人と会話をしておきたかったが、あまり贅沢も言えない。それにしても

「町の姿から中国だと思うのだが・・・」

なにかが引っかかる。

町の人々の声に耳を澄ますと違和感が増大した。

騒ぎを聞いて駆け付けたところで、その答えに気づく。

「そうか！時代の差か！」

気づいた俺は小声で驚嘆した。

そう町並がやけに古めかしい。

言葉が古代の用法。

そして決定打が、

「漢代末期か。時代的には過去になるが、並行世界的にはどうなるんだらうな」

200メートルほど先に12人の、賊が、小さな少女を人質に

「俺達はどうでもしなけりや食っていけねえんだよ！

それもこれもみんな何進を始めとした高官が悪いんだ！」

と、かつてなことを周囲を囲んでいる衛兵に対してわめいている。

ここまで、声は届いていないが、唇の動きで言葉の内容が分かる

ちなみに何進は漢代末期の悪名高い高官の名前だ。

「そういう形でより弱き弱者に手を出している時点で、

貴様にそういうことを言う権利は無いがな」

聞こえてないことは分かっているが自然と言葉が漏れる。

全て救う方法を模索する。

俺は周りの人間に気づかれなないように懐に手をいれた上で、弓と1

3本の矢を投影した。

「とりあえず、痛い目にあってもらうとしよう」

弓に矢をたがえ、続けざまに13本の矢を放った。

11本の矢は11人の膝に当たり、残り2本は人質を取っていた首領格の両手を射抜いた。

ひるんだ賊達は衛兵に捕らえられていった。

「こんなところか」

「たいした腕ね」

振り向くと威厳あふれる少女とかなりの実力者と分かる2人の女性がいた。

「協力感謝するわ」

この言葉と立派な衣装にたち振る舞いで、この町の統治者がそれに準ずる人間と判断した。

「なに、たまたま余裕があり、この場に居合わせたただけだ。私がいなくともあの程度の賊ならどうとでもなっただろう」

「確かに。けれど人質はただではすまなかつたはず」

少女は適格に指摘した。

「それにあの弓の腕はただごとではない。

私も弓を用いるから分かるが、この距離であの数の矢で精確に射抜くのは至難の技だ。

しかも、人質に当たる可能性が十分あったにも関わらず、動揺もなかった。

それどころか成功しても淡々としている。当たるのが当然だと態度が示している」

理知的な雰囲気の水色に近い髪女性の言葉に対し

「確かに、あの弓さばきは凄かつたな」

長い黒髪の女性が素直な感想をもらした。

「そうね。それだけの腕を腐らせておくのはあまりに無駄だし、損失だわ。

あなた、私に仕えなさい。その腕を私なら誰よりも活用してあげられるわ」

少女の言葉に俺は苦笑しながら答えた。

「ありがたいとは思うが、やめたほうがいい」

「なぜ？」

「為政者とは十のうち九のため一を切り捨てる存在だ。

対して私は一から十まで救いあげることが目的とする愚か者だ。

もちろんん全てを救うことはできない。

だが、可能性があるなら全力で全てを救う。

それで、救うことができたこともあれば、できなかったこともある。

私は正義の味方という名の破綻者だ。

言えるのは為政者という存在にとって私は害にしかならないだろうということだ。

一を切り捨てるのには理由があり、

その段取りを壊してしまうような要因をそばに置いていいことはないだろう」

「いいたいことはそれだけ？」

「ああ」

少女は俺に近づいてきて怒鳴った。

「甘く見ないで!!」

私は曹孟徳！未来の霸王たるこの身にそれぐらいの者を扱えないと思うな。

切り捨てずにすむ方法を見逃しなどしない。

それにあなたは、本当に救えないと判断したらそれ相応の覚悟をしているでしょう」

「根拠を教えてください」

「人を見る目がなければ上に立てはしないわ。

それで返答は？」

「・・・く、くくくっ」

「なにがおかしい!」



俺の笑い声に黒髪の女性が怒鳴る。

「いや、すまない。恩人が昔に怒鳴った言葉を思いだしてな。いいだろう。」

条件付きでいいなら仕えさせてもらおう」

「内容は？」

「なに。客将とすること、戦う戦場は選ばせてもらうこと、の二つだけだ。」

代わりに給料は最低限の衣・食・住をまかなえるだけでいい。

それと普段は文官としても働こう」

「いいわ。代わりにあなたが私の邪魔をしないというなら飲みましよう」

「よろしいのですか？華琳さま」

「実際、かなり癖が強いと思いますが」

二人に対し、

「問題ないわ。ああいう言葉が出てくる以上、それ相応の能力があると思うしね」  
と少女は答えた。

「それじゃあ、自己紹介させてもらおう。私の名は衛宮士郎。士郎と呼んでくれ」

二人に俺は答えた。

「ちなみに真名はなんというの？」

「真名とは？」

「真名を知らないの？」

「遙か遠い国から来たのでな。この国の常識が多少欠けているのだ」  
「真名は自分が心を許した相手にのみ預け、呼ぶことを許す名よ」

先ほど華琳と少女が呼ばれていたことを思い出した。

「悪いが、私の国には真名の風習はなかったんだ。しいていえば、  
士郎が私の真名だ」

生まれたときの名は士郎であり、それ以外の名は煉獄の炎に燃やされてしまったのだから。

「……っ!」

「な、なんと……」

「むう……」

三人はひどく驚いている。

「ならば貴様は初対面の我々に、いきなり真名を呼ばせることを許していた……そういうことか？」

「この国の流儀に従うとそうなるな」  
長い黒髪の女性の問いに俺が答えた。

「そう……。なら、こちらあなたに真名を預けないと不公平でしょうね。」

私の名は曹操孟徳、真名は華琳。華琳と呼んで良いわ」

「いいのか？」

「私が良いと言っているのだから、構わないわ。……あなた達も良いわね？」

「分かりました。私の名は夏侯淵妙才、真名は秋蘭という」

「華琳さまがおっしゃられるのなら。わが名は夏侯惇元讓、真名は春蘭だ」

二人が名のつた後、城に向うことになった。

それにしても……。

まさか少女の「曹操」に出会うことになるとは。

セイバーのことといい、少女の王に縁があるのだろうか？

そこで華琳に仕えることを了承した理由の一つに、

彼女が一人無理をし続けたセイバーに重なって見えたことがあると気づいた。

「思っていたより、未練がましかったのだな」

「なにかあったか？」

「いや、なにも」

こうして新たな世界での運命の幕があがるのだった。

これは正義の味方と霸王の出会い的一幕

## 第一話：霸王との出会い（後書き）

少しは楽しんでもらえたでしょうか。文章をよりよく書こうと試行錯誤です。

本作の士郎は必要に駆られ努力した結果、魔術以外はかなり優秀です。魔術は誰かの「うっかり」で制限されてしまいましたから（笑）。干将・莫耶は使用できるが、干将・莫耶投影に今までは比べものにならない時間がかかり鶴翼三連は使えず、戦闘中の干将・莫耶投影は厳しいです。干将・莫耶以外の宝具の投影・使用は命にかかります。かわりに人形の性能のおかげで、力負けすることはなく、鞘のおかげで怪我の治りがはやいです。（目に見えてはよいわけがないので、戦闘中には意味があまりない）多少原作の士郎と性格に齟齬があると思いますが成長したということ、許してもらえると有り難いです。

## 正義の味方の仕官記録1

「ようやく終わった・・・」

現在俺は文官達に自分が身につけた未来における帳簿の付け方や、資料のまとめ方など様々な事務処理用の技術のレクチャーを終え、ようやく一息ついたところだった。

「それにしても、こつもすぐにこき使われるようになるとは」

俺は苦笑しながら、このようになった理由を思い返した。

### 《回想1》

出会いから翌日。

20

「それで、あなたは文官の仕事もすると言ったわね」

「ああ、役に立つと思うが」

華琳の問いに俺が答えると、秋蘭が疑問をぶつけてきた。

「しかし、遠い異国から来たお前に読み書きができるのか？」

「問題ない。よほど特殊な文字じゃなければ。」

「それも他の文官に聞けばすぐ分かる範囲だろう」

昨日のうちに、通りかかった文官に書物をみせてもらい確認済みだ。

「本当に大丈夫なんだろうな？」

春蘭はまだ疑っているようだ。

「なんなら文官のする仕事をここでやって証明してみせようか？」

書物を見せてもらった後、

荷物運びを手伝った文官からおおよその仕事内容は聞き出している。

「良いわね、それ。では、さっそくやってもらうわ」

華琳がいうと数人の文官が竹簡を運んできた。

「やけに手際がいいな。というより・・・、  
最初からそうするつもりだったのか」

「当然よ。臣下の能力を把握していないと話にならないわ。

とりあえず、一刻の時間でどれだけのことが出来るかみせてもらおう  
わ」

「やるのはかまわないが・・・」

「なにか？」

「別に、すべて片付けてしまっても構わんのだろう？」

俺が言うと周りの者達は呆気にとられた。

「ふ、ふふふふ、あはははは！いいわやって見せなさい」

華琳が言うと同時に俺は作業を開始した。

内容は・・・街の治安を守るため警備体制の草案か。

それなら、あの時の方法を応用して・・・。

一刻後、俺は最後を仕上げた。

「これで終わりだな？」

「わたしだって本気をだせばそれぐらい・・・」

「はいはい姉者も『適材適所』があるんだから」

「それはどういう意味なんだ、秋蘭？」

「姉者は凄いという意味ですよ」

「そうか、そうだな。『適材適所』だな、うん」

春蘭・秋蘭姉妹が漫才じみた会話をする中、華琳が尋ねてきた。

「ところどころ不思議なことをしていたけど、いったい何をしていたのかしら？」

さすがというべきか、華琳は処理速度の秘密に気づいたようだ。

「私が住んでた国における作業法だ。」

「こういう作業をより効率的に行うために編み出された技術だ」

「それを覚るのは、文官たちにとって良いかしら？」

「作業速度は間違いなく良くなるな」

「そう、内容も確認したけど良くできていたわ。」

それじゃあ明日から文官達に作業の役にたつ技術を教え込みなさい。

その間にあなたの案を元にした警備体制を敷く準備をするわ」

「分かった。だが今日からでもかまわないが？」

「今日は練習で私達に教えなさい。」

そうすれば、教える時に疑問に思われることや、理解しにくい点に注意して教えられるでしょう」

本当に華琳は頭の回転が速い。

こういうところが、凡人と天才の差なんだろうな。

少し教えるだけで俺以上に使いこなすようになってしまった。

・・・俺が習得するのに三か月かかった技術のすべてを。  
ちなみに、秋蘭も三ヶ月かかったが、  
任務など他に割いてる時間を考えると一か月半ぐらいだろう。  
春蘭は本人の名誉のため割愛させてもらおう。

こうして文官の仕事をしながら文官達に技術を伝えるようになった。  
同時に自分の出した案の責任をとって警備隊の隊長をすることにな  
った。

## 《回想1終了》

「文官達の仕込みも終わったことだし、少し余裕ができるな」

その余裕をどう使うか頭を悩ませていると、

「士郎！暇なら訓練を手伝え！」

春蘭が大声で呼んできた。

せっかく呼んでくれているので、参加することにした。

と言っても、

「今日こそは勝たせてもらうぞ」

「そう簡単に勝たせてやるほど、甘くないが」

春蘭との一対一の模擬戦なのだ。

互いに構えながら、初めての春蘭との模擬戦を思い返した。

## 《回想2》

「そういえば士郎、あなたどうして夫婦剣を持つてるの？」



華琳の何気ない一言がきつかけだった。

「私は大抵の武器を使えてな、・・・もっとも二流だが、  
ともかくその中で私の好みに合ったのが夫婦剣だ」

「見てもいいかしら？」

「ああ、構わない」

華琳は渡された夫婦剣を見て驚いて言った。

「これって干将・莫耶じゃない！どうやってこれを手に入れたの？」  
「私が生まれた国にいたころ、偶然手に入れてね。以来近接戦で使  
ってきた私の愛剣だ」

嘘は言っていない。

正確とはいえないだろうが。

「だが、使いこなせなければ、意味があるまい」  
華琳のそばにいた春蘭が言い放った。

「そう思うか？」

「違うと言っなら見せてもらいたいな。」

恥をさらす覚悟あるのなら、わたしと勝負してもらおうか」

いつの間にか戦わなければならない方向に話が進んでしまったよう  
だ。

「しかたがないか。まあ、訓練にもなるしな」

春蘭・秋蘭の二人が強いことは何気ない動作で分かっていたので、

この世界の武将の実力を知る試金石にちょうど良いと了承した。

「それではいくぞ！！せりゃあ！」

迫りくる大剣を双剣で防いだ。刃と刃が鳴り響き大剣は止まった。

「っ！想像以上に重い」

あの細い腕からどうやってこれほどの一撃を放てるのだろうか？謎だ。。。

身体能力は増大した現在の俺と互角、いや若干上か？

「っ！？やるではないか！まさか男に真正面から防がれるとは思わなかったぞ」

・・・どうやらこの世界では女性のほうが強いらしい。

今のセリフから俺はそう判断した。

というかいくらなんでも異常だろ。

爆ぜる音の後、避けた大剣が地面に大穴をあけるのを見て、

「本当に人間か・・・？」

俺は小声でばやいた。というかばやくべきだと思った。

「避けているだけでは、どうにもならんぞ！」

バーサーカーを彷彿とさせる連激を捌きながら、少しずつ隙を見せ  
ていく。

そして、

「!?!」

「そこだ!」

隙を突こうとした春蘭に対し、俺は干将で受け流し莫耶によるカウ  
ンターの一撃を放った。

自分の持つ心眼（真）による戦闘論理により勝利に届いたかに思え  
た。

が、

「ク、やるではないか!」

春蘭の大剣が莫耶を受け止めていた。

「わざと隙をつくることにより相手の渾身の一撃を誘い、それを受  
け流しての反撃。」

見事なものね、けど・・・。」

華琳が批評を呟く中、剣戟は続く。

春蘭と俺の戦いは均衡状態に入った。

春蘭は俺の守りを崩せず、俺は春蘭の猛攻で攻めきれない。

「いったいなんのさわざだ?」

秋蘭がやってきたことにより、勝負は引き分けで終わりを告げた。

「まさか、ここまでやるとはな士郎」

「それはこちらの話だ春蘭」

秋蘭に経緯を話し終えた華琳が話しかけてきた。

「随分と経験を積んできたのね士郎」

「流石に天才な華琳は気づくか」

「ええ。あなたに剣技の才能はない、あつたら最初の反撃で決まっていたわ」

「まあ、無い以上ああいう戦いしかないからな」

「謙遜する必要は無いわ。努力と経験だけで剣の天才である春蘭と互角に戦えたのよ。」

あなたが自分を貶すといことは私の大切な春蘭を貶すということよ。私はそれを許すつもりはないわよ」

その言葉に春蘭は

「ぐずぐず、華琳さまあ」

うれし泣きをしていた。

「まあ、ようするに今回の件は姉者の嫉妬が原因ということだ」

秋蘭の解説でようやく一連の流れを理解した。

「やれやれ」

華琳に泣きながら抱きつく春蘭を見ながら呟くのだった。

《回想2終了》

「ちっ、また今回も引き分けか」

「言っただろう、甘くないと」

あれから暇があればよく勝負をするようになった。  
30戦30引き分けが現在の結果だ。

「いいか！わたしが勝つまで誰にも負けるんじゃないぞ」  
「それじゃあ、いつまでも誰にも負けられないな」  
「言ってる！」

もはやお決まりのようになった会話をして別れた。

これは、何も特別なことのない正義の味方の仕官記録における一日である。

## 第二話：盗賊退治（前篇）（前書き）

今回内容が長くなってしまったので分割することにしました。

読んで不快に思った人も多いようなのですが、なにぶんssが今作が初めてな自分に誰もが面白いと感じる傑作を書くのは不可能です。なので、ただつまらないテンプレssでご都合主義の駄作と思うようでしたら、これ以上の貴重な時間を本作に割かずにもっと面白いssを探すことをお勧めします。

## 第二話：盗賊退治（前篇）

深々と雪の降るきれいな夜

『シロウ・・・約束してほしいな』

懐かしい声

『正義の味方になるなどは言わないよ・・・、けどね』

愛おしい声

『わたしの願い、わたしの想いは・・・他の見ず知らずの人々のものより軽い？』

妹であり、姉であつた大切な・・・

『約束したんだから。破つたら酷いんだからね』

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンとの最後の会話

『卑怯だけど・・・、最後だからいいよね。ああ・・・、安心した・・・』

それは心【内面世界】に刻まれた生涯忘れることはない、かけがない・・・想いと景色

「ん、んん・・・」

朝の陽ざしに目を覚まし一人感慨にふける。

「久し振りだな・・・。この世界では初めて夢に見たな」

目元に涙が付いている。

夢をみながら泣いていたようだ。

着替えを終え部屋を出る直前俺は

「イリヤ・・・。俺は約束守れているかな？」

返事が決して返ってこない問いをもらしていた。

現在俺達は賊討伐のための軍を編成している。

今回がこの世界での初戦だが、軍の準備は何度か見ている。

「見ているが・・・、まだ違和感が残るな」

城壁の下を走り回るのは、完全武装の兵士達。

束ねられた槍は薪のように積み上げられ、

その隣には槍束をふたまわり小さくした束がさらに大きな山を築いている。

弓兵隊の使う、矢だ。

武器に糧食、補充の矢玉。薬に防具に調理の鍋まで、戦に使う備品はその幅広さに事欠かない。



俺が協力、あるいは敵対などして関わった軍隊も基本は同じだ。槍と弓矢のかわりに銃火器と弾丸が入るぐらいだ。ただ……

「どうした、そんな難しい顔をして」と春蘭が話しかけてきた。

「いや、この国に来るまでにあつたことのある軍との差異を比較してただけだ」

「そんなに違うものか？」

「基本は同じだ。ただ……、いや風習が違うだけだ気にするほどのことではない」

「そうか？」

流石に輸送手段の差を考察していたとは言えない。

そう、現代は輸送手段が発達したため、備品は全てコンテナに収められる。

むき出しのまま運ばれる備品に違和感を感じていたのだ。

「……何を無駄話をしているの、二人とも」  
やってきた華琳の問いに

「か……つ、華琳さま……！これは、士郎が！」

と春蘭は俺に責任を押し付けようとしてきた。

「一人考え事をする時に表情を変えることはいけなかつたか。以後気をつける」

「ぐ……」

俺のカウンター気味のセリフに春蘭は声を詰まらせた。

あきれ顔で華琳が問いただしてきた。

「はぁ……春蘭。装備品と兵の確認の最終報告、受けてないわよ。」

数はちゃんと揃っているの？」

「は……はいっ。全て滞りなく済んでおります！士郎に声をかけられたため、

報告が遅れました」

春蘭はまだ、俺に押し付けたいようなので

「なるほど、表情を変えることは声をかけること同じか。

だとすると、私はずいぶん春蘭に声をかけられていたのだな。すまん、気付かなかった」

厭味の追加をすることにした。

「くっ、ああそうだ。今後気をつける」

「だがそれだと会うたびに会話しなければいけないな。そんな頻繁に会話したかったのか」

追い打ちをしたところで仲裁が入った。

「姉者。口で士郎に勝つのは私でも難しい。ここで引いといたほうがいい。」

士郎もあまり姉者をいじめないであげてくれ」

「……その士郎には、糧食の最終点検の帳簿を受け取ってくるよっ、

言っておいたはずよね？」

華琳の問いに

「ああそれならここにがあるのだが……」

「どうしたの？」

「まあ、華琳なら見たほうが速いか」  
俺は帳簿を華琳に手渡した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・秋蘭」  
「はっ」

「この監督官というのは、一体何者なのかしら？」

「はい。先日、志願してきた新人です。仕事の手際が良かったので、今回の食料調達を任せてみたのですが・・・何か問題でも？」

「ここに呼びなさい。大至急よ」

秋蘭に命じる華琳に、

「今呼んでもらってるところだ。それで、私はここで待っていたんだ。」

納得してもらえたか？」  
と言った。

「ええ、納得したわ。気が利くわね」

しばらくして、そこへ一人の文官と一人の女の子が来た。

「曹操様。連れて参りました」

「・・・士郎、あなた私の名を使ったわね？」

「ああ。この件は華琳に判断してもらおうべきだと思ったからな。」

最初から華琳には来てもらうつもりだった。

独断専行は時間短縮につながったことで、帳消しにしてくれるとありがたいのだが」

「本当に気が回るわね、ほめてあげるわ。けど、・・・次は許さないから、

そのつもりでいなさい」

・・・間違いなく次はないだろう。  
あの笑顔は・・・あかいあくまのと同種のものだ。

トラウマに震えそうになる声と体を無理やりおさえこんで  
「ああ、了解した」  
とそれだけ答えた。

華琳は気を取り直して文官を下がらせた後、女の子に問いかけた。

「おまえが食料の調達を？」

「はい。必要十分な量は、用意したつもりですが・・・  
何か問題でもありましたでしょうか？」

その言葉に華琳は声を荒立たせる。

「必要十分って・・・どういつつもりかしら？  
指定した量の半分しか準備できていないじゃない！」

そうこれが、俺と華琳の二人が呼び出す判断をした理由だ。  
『腹が減っては戦は出来ぬ。』という言葉どおり飢えては満足に戦えない。

「このまま出撃したら、糧食不足で行き倒れになる所だったわ。  
そうなったら、あなたはどの責任をとるつもりかしら？」

「いえ。そうはならないはずです」  
「何？・・・どういう事？」

「理由は三つあります。お聞きいただけますか？」  
「・・・説明なさい。納得のいく理由なら、許してあげてもいいでしょう。」

まあ、華琳なら行き過ぎた刑罰はしないだろうと考えていると  
「……ご納得いただけなければ、それは私の不能がいたす所。  
この場で我が首、刎ねていただいても結構にございます」  
そう女の子は言い切ってきた。

「……二言はないぞ？」

「はっ。では、説明させていただきますが……」

事態が不穏な方向に進むのを防ごうとしたが、  
女の子の目に死をもかけた覚悟の光が見えたため止めた。  
命は大事だが、それよりも大切なものがあることを理解できるぐら  
いには俺も成長している。

俺にとって「正義の味方」という想いがあるように。

それを無視して「命」を救っても「人」は救えないのだから。

「……まず一つ目。」

曹操さまは慎重なお方ゆえ、必ずご自分の糧食の最終確認をおこな  
います。

そこで問題があれば、こうして責任者を呼ぶはず。生き倒れにはな  
りません。

少し想定外もありましたが、結果に違いはなかったはずですよ

女の子は俺を横目ににらんできた。

「まあ、彼女の段取りを壊したのだから仕方がない。

「ば……っ！ 馬鹿にしているの！？春蘭！」

「はっ！」

まずい！華琳は本気だ

「とりあえず、首を刎ねるのは後でもできる。」

判断は残り二つの理由を聞いてからでも、遅くはないんだろう?」

出来るだけ感情の色を抑え、冷静に聞こえるよう注意していった。

「士郎の言う通りかと。それに華琳さま、先ほどのお約束は……」

秋蘭の援護もあつたおかげで華琳は落ち着いたようだ。

「……そうだったわね。で、次は何?」

「次に二つ目。糧食が少なければ身軽になり、輸送部隊の行軍速度も上がります。」

よつて、討伐行全体にかかる時間は、大幅に短縮できるでしょう」

確かにそのとおりだが……。

「ん……?なあ、秋蘭」

「どうした姉者。そんな難しい顔をして」

「行軍速度が早くなつても、移動する時間が短くなるだけではないのか?」

討伐にかかる時間までは半分にはならない……よな?」

「ならないぞ」

「良かった。私の頭が悪くなったのかと思つたぞ」

「そうか。良かったな、姉者」

「うむ」

そう。春蘭の言うとおりだ。

移動だけじゃなく戦闘も、休憩の時間も必要だ。

そもそも食料がちよつと軽くなつた程度で、移動速度だって倍にな

るわけじゃない。

「まあいいわ。最後の理由、言ってみなさい」

「はっ。三つ目ですが・・・私の提案する作戦を採れば、戦闘時間はさらに短くなるでしょう。よって、この糧食の量で十分だと判断いたしました」

・・・そういうことか。

彼女が死すら覚悟でおこなった危険な賭け、それは

「曹操さま！」

どうかこの荀幾めを、曹操さまを勝利に導く軍師として、麾下にお加え下さいませ！」

華琳の軍師となるための賭け。

春蘭・秋蘭姉妹が驚く中、華琳は沈黙したままだ。

「どうか！どうか！曹操さま！」

「・・・荀幾。あなたの真名は？」

「桂花にございます」

「桂花。あなた・・・この曹操を試したわね？」

「はい」

この言葉に

「な・・・っ！貴様、何をいけしゃあしゃあと・・・」

華琳さま！このような無礼な輩、即刻首を刎ねてしましましょう！  
春蘭は怒るが、

「あんたは黙っていなさい！私の運命を決めていいのは、曹操さまだけよ！」

覚悟を目に秘めた荀幾の気迫に口を噤む。

「ぐ……っ！貴様ぁ……！」

抜刀する春蘭を俺はあわてて止め、

「落ち着け……！」

春蘭……！」

「ぐう……！」

何とか抑えることができた。

「桂花。軍師としての経験は？」

「はっ。ここに来るまでは、南皮で軍師をしておりました」

「……そう」

……今の間、気になるな。

「秋蘭、南皮というと袁紹の統治している土地だろうけど、何かあったのか？」

「華琳さまは袁紹と昔からの腐れ縁でな……」

「……そういう事が」

まあ、とてもじゃないが友好的な関係ではないだろうな。

「どうせあれのことだから、軍師の言葉など聞きはしなかったのでしょうか。」

それに嫌気が差して、この辺りまで流れてきたのかしら？」

「……まさか。聞かぬ相手に説くことは、軍師の腕の見せ所。

まして仕える主が天を取る器であるならば、その為に己が力を振るうこと、

何を惜しみ、ためらいましようや」

「……ならばその力、私のために振るうことは惜しまない？」

「ひと目見た瞬間、私の全てを捧げるお方と確信いたしました。も



し「不用とあらば、

この荀幾、生きてこの場を去る気はありません。  
遠慮なく、この場でお切り捨ててくださいませ！」

やはりその覚悟をしていたか……。

「……………」

「華琳さま……………」

「春蘭」

「はっ」

どう動くつもりなんだ？

華琳は春蘭から受け取った大鎌を、ゆっくりと荀幾に突きつけた。

「桂花。私がこの世で尤も腹立たしく思うこと。それは他人に試されるということ。

……………分かっているかしら？」

「はっ。そこをあえて試させていただきました」

「そう……………。ならば、こうする事もあなたの手のひらの上という事よね……………」

そう言うなり、華琳は振り上げた刃を一気に振り下ろし……………！

「……………」

「……………」

「……………」

荀幾はその場に立ったまま。

そして血は、一滴も飛び散りはしなかった。

「……寸止めか」

小声で呟いた。

退いた刃の先に絡んだ淡い色の髪の毛は、荀幾の髪だろう。

ほんの少しでも荀幾が動いていたなら、そのまま真つ二つになってもおかしくはなかった。

「当然でしょう。……けれど桂花。もし私が本当に振り下ろしていたら、

どうするつもりだった？」

「それが天命と、受け入れておりました。天を取る器に看取られるなら、

それを誇りこそすれ、恨むことなどございませぬ」

間髪入れず華琳は指摘する。

「……嘘は嫌いよ。本当の事を言いなさい」

「曹操さまのご気性からして、試されたなら、必ず試し返すに違いないと思われましたので。

避ける気など毛頭ありませんでした。……それに私は軍師であつて武官ではありませんぬ。

あの状態から曹操さまの一撃を防ぐ術は、そもそもありませんでした」

「そう……」

小さく呟いた華琳が、荀幾に突き付けていた大鎌をゆっくり下ろす。

「……ふふつ。あはははははははははは！」

「か、華琳さま・・・っ!？」

華琳の顔にうかんだそれは、紛れもない歡喜の笑み。

「最高よ、桂花。私を二度も試す度胸とその智謀、気に入ったわ。

あなたの才、私が天下を取るために存分に使わせてもらう事にする。  
いいわね？」

「はっ!」

「ならまずは、この討伐行を成功させてみせなさい。

糧食は半分で良いと言ったのだから・・・もし不足したならその失  
態、

身をもって償ってもらわよ?」

「御意!」

霸王はこうして一人の軍師を加え戦場へと進む

## 第二話：盗賊退治（前篇）（後書き）

現在残りの盗賊退治の修正・補完を行っています。

次回に本作の土郎の「正義の味方」としてのありようをのせるつもりですが、華琳との摩擦をなくすためとはいえ正直かなりオリキャラ化してしまっているように思うので、それが嫌だという人は本作に見切りをつけて読まないことをお勧めします。

## 第二話：盗賊退治（中篇）

現在俺達は賊討伐のため行軍をしている。

「それにしても、ようやく馬に乗るのも様になったな」

「まあ、秋蘭達の教え方が上手かったことが一番の理由だと思うが、むしろこれだけ優秀な教え役から学び、毎日時間を割いたのだから、もう少し上達したかったところだ」

前の世界では必要性がほとんどなかったため、俺は乗馬が出来なかった。

だが、この世界では馬に乗れなくては話にならないので、春蘭達に頼んで教えを請うことにしたのだ。

おかげでそこそこには乗馬出来るようになった。

……うまく乗れない俺を見てにやにやしている春蘭を見るのが腹立たしくて、

一人での練習もしていたことは秘密にしよう。

多くの技術は自分の可能性たるアーチャーとの戦闘時に、

奴の記憶と共に流れてきた技術経験のおかげで大幅なショートカットが出来たが、

奴も乗馬経験がなかったらしく「反則」抜きだったので習得が遅いのは仕方がない。

「まあ、なんでも完璧に出来る人間なんていないのだから気にしないことだ」

フォローをする秋蘭に軽い口調で返事を返すことにした。

「そうだな。　だが、華琳はなんでも完璧に出来そうだな」  
「華琳さまは「出来そう」なのではなく「出来る」のだ」

……秋蘭、さっきのフォローと矛盾するんだが。

普段は真面目で常識人なのに華琳と春蘭の事となると人が変わる。  
「親バカ」とか「子煩悩」という言葉があるが、この場合は何て言うんだらう。

そんなことを考えながら進んでいると、前方に桂花の姿が見えたので声をかける事にした。

「桂花。　少し話をしているか？」

その声を聞いて桂花は嫌悪感を隠そうともせず、不愉快だと万人に分からせる口調で返事した。

「なんで、……なんで、あんたなんか真名を汚されなくちゃいけないのよ!？」  
わたしの段取りをぶち壊して、計画を失敗させそうになった奴に!？」

「いや、真名については華琳の命令だが？  
まあ、段取りをぶち壊しそうになった件については悪いと思っている。

知ってたらあんな事しなかった。だから、今こうして謝ろうと声をかけた」

俺は冷静に返答したのだが……。

「じゃあ、今すぐわたしの見えないところへ行って、死んできてくれる？」

そうしたら許してあげられるかもしれないわよ？」

桂花はとんでもない事を言ってきた。

……少なくとも、目が冗談ではないと示している。

「そこまでしないといけないのかね！？その上、そこまでしても許すとは言わないのか！？」

流石に突っ込んだ。

今の言い方では可能性ができるというだけだ。

彼女が言い間違いをすることはまずないのだから。

「うるさいわね。大の男が細かいことで。可能性をあげるだけでも万歩譲ってあげるんだから、むしろ感謝しなさい」

どこまで毒舌なんだろうか。

相手の生死を細かいことと言いつつ、万歩譲って可能性だけ。ここまでくると、いつそ清々しく感じるのは俺だけだろうか。

正直、口で勝てそうにないと感じたのはいつ以来だろうか。

というより嫌味で返すと泥沼な展開になりそうだとそれは面倒なので黙っていると

「そこまでにしとけ。 士郎は華琳さまの軍の大事な戦力だ。 簡単に死なれるのは困る。」

それから真名については、

士郎の言った通り華琳さまの命令なのだから我慢するしかないだろ

う

秋蘭の仲裁は正直ありがたかった。

……同じことを俺が言っても確実に反発するだろうから。

「……………分かってるわ。曹操さまのため、曹操さまの命令なのでから、

わたしは例えどんな低劣で、愚劣で、

神にも勝るとも劣らない偉大なる曹操さまでさえ救いようのない、木偶の坊に真名を犯される死にも勝る絶望的な屈辱にも耐えて見せましょう!!」

……………どこぞの毒舌シスターも賞賛しそうな毒舌だな。

しかも華琳を讃えながら、ここまで人を貶めるとは。

まあ、これがデフォルトなのだろうと考えて、それを前提にして接すれば何とかなるだろう。

……………正直凄く疲れるが。

「まあ、なんだ。……………頑張れ」

何気ない気遣いが、疲れた今の俺にはありがたい。

「礼を言う、秋蘭。それにしても桂花も糧食を半分にするなんて、ずいぶん無茶をしたな」

面倒なので話題を変えてこれ以上矛先がこちらに向かないようにした。

「別に無茶でもないわよ。今の曹操さまの軍なら、これぐらい出来て当たり前なんだから」



確かに出来るだろう。  
だが……。

「確かに自軍の強さもある上に優れた軍師が入ったから出来るだろうが、

もしなにか他の要因が入ったら厳しいと思うが？」

そう、余裕があまりない以上予測が少しずれるだけでもアウトなのだから。

「そこも考えて、余裕を持たせているから大丈夫よ」

華琳が出した糧食量は様々な事態に余裕を持たせる量だ。  
いくら多くの面を短縮出来ても余裕はかなり減っている。

「まあ、セイバーや虎みたいな規格外がない限り、大丈夫か」

彼女達のためにウナギ登りになった、

当時の我が家のエンゲル係数を思い出して小声で呟いた。

「まあ、その辺りの手並みはおいおい見せてもらおうとしよう。

……しかしあのやりとりは肝が冷えたぞ」

それには俺も同意だが。

「まあ、軍師の募集はしていなかった以上、あれぐらいの強攻策でもない無理だろうな」

「そうだな。経歴を偽って申告する輩が多いせいで、文官はよほど名の通った輩でない限り、使ってみないと判断がつかん」

「ちよつと、待って。試験官だった秋蘭はともかくなんであんたが知っているのよ!」

なんでも何も

「試験官ではなかったが、秋蘭の補佐をしていたからだか?」

確かに試験場にはいなかったがいろいろ裏で雑務をしていた。

「ああ、あの時はいろいろ楽させてもらった。で、華琳さまはどうだった?」

「思った通り、素晴らしいお方だったわ……。あのお方こそ、私が命を懸けてお仕えするに相応しいお方だわ!」

秋蘭の問いに、恋する乙女の顔を浮かべ桂花は答えた。

なるほど……。華琳に惚れているという事か。

「まあ、華琳ほどの為政者はそうそういないだろうな。完璧な万事における才能、人を惹きつける魅力、そしてそれらを生かす心。正直華琳以上の為政者は思い浮かばない」

強いて挙げればアーサー王たるセイバーだが、彼女は『自分自身』を殺しすぎた。

……。私情に流されてはいけない時もあるが、それは私情を殺し尽くすことではない。

時には自らの想い、自らの願いをみせるべきだったのだろう。自らを全く見せない者を信じきれほど人は強くないのだから。

……アーチャーが誰からも信じられなかったように。

「あなたのような木偶の坊にもその素晴らしさを気付かせられるなんて、

流石は曹操さまだわ」

……分かっていたが、意地でも俺を褒めたくないのだろう。

「おお、貴様ら、こんな所にいたか」

「どうした、姉者。急ぎか？」

「うむ。前方に大人数の集団がいるらしい。華琳さまがお呼びだ。すぐに来い」

それならすぐに行くべきだな。

華琳の前に着いたとき、兵の一人がこちらに来るのが見えた。

秋蘭が前に出る。

「……遅くなりました」

「ちょうど偵察が帰ってきたところよ。報告を」

「はっ！行軍中の前方集団は、数十人ほど。旗がないため所属は不明ですが、

格好がまちまちな所から、どこかの野盗か山賊だと思われます」

「様子を見るべきかしら」

「もう一度、偵察隊を出しましょう。夏侯惇、衛宮、あなた達が指揮を執って」

妥当な判断だな。

俺の視力は偵察向きだし、春蘭もいれば戦力として十分だろう。

俺の視力の良さは警備でみせたため自軍に知れ渡っている。

ただし、四キロ先が見えるなどという、けた外れであることは隠している。

「わかった」

「了解した」

「それと衛宮。あなたは、夏侯惇の抑え役もやりなさいよ」

「……まあ、何とかしよう」

考えてなかったが、それは偵察自体より大変だな。

「おい、何を納得している！それではまるで、

わたしが敵と見ればすぐ突撃するようではないか！」

「違うの？」

「違うのか？」

「違うないでしょう？」

「うう、華琳さままでえ……」

本当のことだからなあ。

まあ秋蘭が黙っていてあげるのが唯一の救いか。

俺達は華琳の本体から離れ、先行して移動を始めていた。

「まったく。先行部隊の指揮など、わたし一人で十分だというのに……」

「偵察がなければ同意するが。通りすがりの傭兵部隊とかだったら、突っ込むんじゃないぞ？」

「士郎に言われるまでもないわ。そこまで迂闊ではないぞ」

そうなら楽なんだがな。

「ん？あれはいつたい？」

「どつした？」

結構普通ではない光景になれた身ではある。

「……この世界の人は腕力だけであれだけ人を吹き飛ばせるのか」「なんだ、あれは！」

春蘭もようやく気付いたようだ。

しかし、何かが高く上がってるぐらいにしか見えないだろう。戦っているとまでは流石に分らないだろう。

「戦っているのは……、こゝ、子供!？」

いくらなんでもありえないだろ!？

「なんだと!？」

俺の言葉を聞くが早いか、春蘭は馬に鞭を振り、一気に加速させていく。

俺は必要最低限の指示を出し、あわてて春蘭を追った。

一瞬弓を使うか視野に考えたが、あの子の強さなら十分間に合うだろう。

まだ、弓を使うべき時ではない。

「でえええええいい！」

女の子が巨大な鉄球を振り回し、その度に野盗たちが空を飛ぶ。

「ええい、テメエら、ガキ一人に何を手こずって！数でいけ、数で！」

だが、数の暴力の前に疲弊している。

「はあ……はあ……はあ……。もう、こんなにたくさん……多すぎる

よ……！」

「ぐふうっ！」

「……え？」

そこへ春蘭が、遅れて俺がその場に乱入した。

「大丈夫か！勇敢な少女よ！」

「どうやら間に合ったようだな？」

どうやら突然の事態に混乱しているようだ。

「貴様らあ！子供一人によってたかつて……卑怯というにも生温いわ！」

「てやあああああつ！」

「さて、悪事を働く以上、当然覚悟は出来ているな？ああ、返答はしなくていい。」

「どちらにしろ、やることに違いはないのでな！はあああああああつ！」

瞬く間に敵の数は減っていく。

「うわあ……つ！た、たた、た退却！退却！」

「逃がすか！全員、叩き斬ってくれるわ！」

気持は分かるが止めないと。

「待て、春蘭！」

「士郎！なぜ止める！」

「私達の仕事は偵察だ。その子を助けるために戦うのはいいとして、敵を全滅させることが目的じゃないだろっ！？」

俺も問題がなければ全滅させたいところだが。

「ふんっ。敵の戦力を削って何が悪い！」

「悪くはない。が、今はもっと他にすべき事がある」

「……例えばなんだ！」

「逃がした敵をこっそり追跡して、敵の本拠地を掴む」

「……おお、それは良い考えだな。誰か、おおい、誰かおらんか！」

「春蘭が突撃した後に、前もって指示しておいた。すでに何人が偵察に出てる」

……こうなるのは春蘭がいる以上分かり切ったことだった。

「むうう、また、貴様に手柄を取られたか」

「はぁ……」

武勇は見事なのに……。

まあ、なんとか抑えられたから良しとしよう。

「あ、あの……」

おずおずと女の子が声をかけてきた。

とりあえず、怪我の確認をしよう。

「おお、怪我はないか？少女よ」

「あるなら言ってくれ、治療しよう」

「はいっ。ありがとうございます！おかげで助かりました！」

うん。

気持ちのいい返事だ。

「それは何よりだ。しかし、なぜこんな所で一人で戦っていたのだ？」

「一人で戦うには敵が多すぎだな」

「はい、それは……」

女の子が話をしようとするので、向こうから本隊がやって来た。

「来たみたいだな」



「……………っ！」

「士郎。報告は聞いたわ。御苦労さま」

「あ、あなた……………！」

……………怒気だつて？

「お兄さん、もしかして、国の軍隊……………っ!？」

「……………一応、そう呼べなくもないかな」

次の瞬間、鉄球と双剣が甲高い音色を鳴り響かせた。

「……………助けられた相手に攻撃する理由、聞いていいかね？」

もし不意を突かれていたら、野盗達と同じく空を飛んだらろう。

「国の軍隊なんか信用できるもんか！」

ボク達を守ってもくれないクセに税金ばかり持って行って！」

……………なるほど。

「てやあああああっ！」

「……………くうっ！」

まともに受け止めるのはきついで、受け流しながら問いを重ねることにした。

「だから君は一人で戦ってたのか…？」

「そうだよ！ボクが村で一番強いから、ボクがみんなを守らなきゃいけないんだっ！」

盗人からも、おまえたち…役人からもっ！」  
「くっ！本当に未恐ろしい腕力だな！」

人形の性能が無ければ耐えられなかっただろう。

守りながらも、問いの答えと自身の情報を整理する。

- 1、彼女は近くの村人
- 2、彼女の村は盗人の被害を受けている
- 3、彼女は盗人から村を守らないのに高い税金を奪う役人を憎んでいる
- 4、この一帯は華琳の納める土地ではない
- 5、盗賊追跡の名目で遠征出来ても、政策に口出しできない

結論、勘違い・筋違い

まあ、なんとというか。

結果として空回りしてしまっているが、その想いは間違いではない。

それにしても、いつの時代も最低な役人はいるものだ。

いや、乱世の分この国は多いのだろう。

見つけしだい、その手の輩は自分に無理や影響が出ない範囲において、

あらゆる手段で排除することになっているのだが、

今の時点ではやっても似た輩が来るだけで意味がないか。

傷つけずに勝つため、持久戦に持ち込むべく攻撃しているが少々厳しい。

ふと横目にみると

「……………」

何かに耐えるように黙っている華琳の姿があった。

「でえええええいつ！」

「ちいつ……………！」

正直手が痺れてきている、傷つけることを前提にすればいくらでも手段があり楽なのだ。

「二人とも、そこまでよ！」

華琳の声が場を支配する。

「え……………っ?」

「剣を引きなさい！ その娘も、士郎も！」

「は……………はいつ！」

その場に歩いてくる華琳の気迫に当てられて、女の子は軽々と振り回していた鉄球を、

その場に取り落とし、鈍い音と共に地面を陥没させた。

……………バーサーカーの斧剣の重量を上回ってないか、あれ。

「……………士郎。この子の名は?」

「聞く前に戦闘になったから知らないな」  
「き……許緒と言います」

こういう威圧感のある相手を前にするのは初めてなのだろう。

許緒と名乗った少女は、完全に華琳の空気に吞まれきっている。

「そう……」

そして、華琳の取った行動は……。

「許緒、ごめんなさい」

「……え？」

許緒に頭を下げる事だった。

「曹操、さま……？」

「何と……」

「華琳さま……」

「あ、あの……っ！」

4人が声を漏らす中、俺は華琳の器の大きさを改めて実感した。

「名乗るが遅れたわね。 私は曹操、山向こうの陳留の街で、刺史  
をしているものよ」

「山向こう……？ あ…それじゃっ…？ しゅ、ごめんなさいっ！」

どっちら勘違いに気づいたようだ。

「山向こうの街の噂は聞いています！向こうの刺史さまはすぐく立

派な人で、

悪いことはしないし、税金も安くなっただし、盗賊もすごく少なくなっただけ！

そんな人に、ボク……ボク……！」

「構わないわ。今の国が腐敗しているのは、刺史のわたしが一番よく知っているもの。」

官と聞いて許緒が憤るのも、当たり前の話だわ」

「で、でも……」

許緒はまだ申し訳なさそうにしている。

「だから許緒。あなたの勇気と力、この曹操に貸してくれないかしら？」

「え……？　ボクの力を……？」

「私はいずれこの大陸の王となる。けれど、今の私の力はあまりに少なすぎるわ。」

だから……村の皆を守るために振るったあなたの力と勇気。この私に貸して欲しい」

「華琳さまが、王に……？」

「ええ」

「あ……あの。」

曹操さまが王様になったら……ボク達の村も守ってくれますか？

盗賊もやっつけてくれますか？」

「約束するわ。陳留だけでなく、あなた達の村だけでもなく……この大陸の皆がそうして暮らせるようになるために、私はこの大陸の王になるの」

「この大陸の……みんなが……」

華琳ならば出来るだろう。

それだけの意思と覚悟をもっているのだから。

王とは優しいだけではない。

民のために時には少数を切り捨てなければならぬから。

王とは厳しいだけではない。

民の想いが王と国を支える以上、民に見放されれば成り立たない。

王とは自分を殺しすぎてはいけない。

自分を全く見せない者を信じられるほど民は強くない。

王とは自分を生かすすぎてはいけない。

民の為に時には私情を殺さなければ、国が滅ぶ。

セイバーは自分を殺しすぎ、ギルガメッシュは自分を生かすぎた。

華琳はそれを全てそろえている。

霸王としての華琳を俺は評価している。

自分のような破綻者を使いこなすといった彼女を。

だから、こうしてそばにいる。

すべて従うわけではないが、霸王の約束に敬意を表し乱世が終わる

その時まで、

彼女の覇道を助けよう。

そう決めた。

「さつきから黙ってどうしたのかしら士郎？」

「なに、改めて華琳の王としてのありように敬意を表したくなっただけだ」

「あら、それじゃあ今まで以上を期待していいかしら？」

「無論だ。私がいてよかつたと、心の底から思わせて見せよう」

これは正義の味方が本当の意味で霸王を認めた一幕

## 第二話：盗賊退治（後篇）

現在俺達は盗賊団の砦が見える地点で行軍を停止させた。砦は、山の影に隠れるようにひっそりと建てられていた。許緒と出会った場所からそんなに離れてなかったけど

・・・こんな分かりにくいところじゃ、俺でも見つけるのは難しい。なるほど。根城として十分か」

もちろん近付くとすぐに見つかってしまうので、砦はまだ豆粒ほどの大きさにしか見えない。俺以外の者には。

「許緒、この辺りに他に盗賊団はいるの？」

「いえ。この辺りにはあいつらしかいませんから、曹操さまが探してる盗賊団っていうのも、

あいつらだと思えます」

「敵の数は把握できているの？」

「はい。およそ三千との報告がありました」

「我々の隊が千と少しだから、三倍ほどか……。思ったより、大人数だな」

俺は秋蘭、春蘭の解答に口を挿んだ。

「だが、連中には春蘭のような将がない。統率も訓練もない烏合の衆なら問題あるまい」

「けれど桂花、策はあるのでしょうか？糧食の件、忘れてはいないわ  
「よ」

「無論です。兵を損なわず、より戦闘時間を短縮させるための策、既に私の胸の内に」

「説明なさい」

「まず曹操さまは少数の兵を率い、砦の正面に展開してください。

その間に夏侯惇・夏侯淵の両名は、残りの兵を率いて後方の崖に待機。

本体が銅鑼を鳴らし、盛大に攻撃の準備を匂わせれば、

その誘いに乗った敵はかならずや外に出てくる事でしょう。

曹操さまは兵を退き、十分に砦から引き離れたところで・・・」

「私と姉者で、敵を背後から叩くわけか」

「ええ」

そこまで黙っていた春蘭が口をはさむ。

「・・・ちょっと待て。それは何か？華琳さまに罠をしようと、そういうわけか！」

「そうなるわね」

「何か問題が？」

「大ありだ！華琳さまにそんな危険なことをさせるわけにはいかん！」

「落ち着け春蘭。私が付いていて華琳に危険があると思うのか？」

そうさっきの策に俺の名はでていない。

なら、当然華琳と行動を共にするということだ。

「あなたのような木偶の坊でも使えないようなら、軍師とは呼べないわ。」



面の皮の厚さと同じ硬さの守りできつちり華琳さまを守りなさいよ  
！」

「……これは認めてくれているのか？  
というより認めても褒める気がないだけか。

「だが、そんなことしなくても、烏合の衆なら正面から叩き潰せば  
良かるう」

「  
」  
「  
」

……春蘭。

それでは犠牲や時間がかかるから方策を考えているのだが？

「油断した所に伏兵が現れば、相手は大きく混乱するわ。

混乱した烏合の衆はより倒しやすくなる。曹操さまの貴重な時間と、  
もつと貴重な兵の損失を最低限にするなら、一番の良作だと思っ  
ただけれど？」

「な、なら、その誘いに乗らなければ？」

「……ふっ」

「な、なんだ！その馬鹿にしたような……っ！」

「曹操さま。相手は志を持たず、武を役立てることもせず、  
盗賊に身をやつすような単純な連中です。

間違いなく、夏侯惇殿よりも容易く挑発に乗ってくれるものと……

「  
」  
「……な、ななな……なんだとおー！」

「……春蘭、そこで挑発に乗ったら、桂花の言葉を証明してしま  
うのに。」

「はいどうぞ。春蘭、あなたの負けよ」

「華琳さまぁ・・・」

「・・・とはいえ、春蘭の心配ももつともよ。次善の策はあるのでしょうね」

「この近辺で拠点になりそうな城の見取り図は、既に揃えてあります。

あの城の見取り図も確認済みですので・・・万が一こちらの誘いに乗らなかった場合は、  
城を内から攻め落とします」

・・・どおりで探しても近辺の見取り図を探しても見つからないはずだ。

今回の食糧補給役を任されたときから開始したのだろうな。  
さすがだ。

「分かったわ。なら、この策で行きましょう」

「華琳さま！」

「これだけ勝てる要素の揃った戦いに、囷のひとつも出来ないようでは

・・・この先の霸道など、とても歩めないでしょう」

「その通りです。ただ賊を討伐した程度では、誰の記憶にも残りません。

ですが、最小の損失で最高の戦果を上げたとなれば曹孟徳の名は天下に広まりましょう」

「春蘭、私だけでなく許緒も今回はいるんだ。それでも不安か？」

「・・・。士郎！貴様、華琳さまに何かあったらただではおかないからな！

全力でお守りするのだぞ！」

「無論だ。君に負けるまで敗れてはいけないのだから？安心して暴れてくるが良い」

「・・・ああ。その言葉たよりにさせてもらおう」

「では作戦を開始する！各員持ち場につけ」

華琳は力強い声で兵に指示を出していった。

春蘭達の隊が離れていく。

これで、こちらの手勢は本当に数えるほど。

「あ、兄ちゃん。どうしたの？」

「ん？・・・ああ、許緒か」

華琳の約束の後で、律儀に謝りにきた彼女に気にしてないことを告げると、

何故か慕うようになった。

・・・お兄ちゃんは・・・、抵抗があつたので妥協案で兄ちゃんに落ち着いた。

「季衣でいいよー。春蘭さまと秋蘭さまも、真名で呼んで良いって言ってくれたし」

「そうか。先の問いについては、華琳を守るにあたって、利用できそうな地形を少し探していたところだ」

そういう下準備はしておいたほうが良いからな。

「そっか・・・、たいやく、だもんね。うう、なんか、緊張してき

「ちゃった・・・」

「なに、近づいてきたら吹き飛ばせばいい。細かい部分は私が受け持つ。」

「季衣がそうしてくれるだけで、私も楽になる」

「まだ小さい季衣にそこまで期待するべきではないだろう。」

「兄ちゃん強いもんね。ボクと戦った時手加減してたもんね」

「さて、なんのことだね」

「俺はとぼけたが、」

「隠さなくてもいいよ。冷静に考えると、隙が出来ちゃったときに限って攻めなかったもん」

「季衣には通じなかった。」

「ただ、甘いだけだよ」

「違うよ。兄ちゃん、それしかなければ遠慮しないでしょ？甘くても流されないもん」

「どうして、そう思う？」

「うーん・・・、なんとなく！」

「やれやれ。なんとなくでは仕方がないな」

「直感では仕方がない。」

「「こら、その二人ー！遊んでないで早く来なさいよ！作戦が始められないでしょう！」」

「ああ、すぐ行こう。・・・それでは季衣、いくぞ」

「うんっ！」

戦いの野に、激しい銅鑼の音が響き渡る。

「……………」

響き渡る……………」

「……………」

響き……………」

「……………」

……………響き渡る銅鑼の音は、こちらの軍のもの。

だが、響き渡る咆哮は、城門を開けて飛び出してきた盗賊達のもの。

「……………桂花」

「はい」

「これも作戦のうちかしら？」

「いえ……………これはさすがに想定外でした」

「連中、今の銅鑼を出撃の合図と勘違いしているのかしら？」

「はあ。どうやら、そのようで……………」

「……………そう」

……………流石にこれには呆れる。

戦場での情報伝達は重要な要素。

その基本がこれだとは……………」

「華琳、挑発の言葉とか、用意してたのか？」

この時代の合戦では戦う前に名乗りがある。

「……………一応、こういう時の礼儀ですからね。

まあ大した内容ではないから、次の賊討伐にでも使うことにするわ」

「それがいいだろう。賊に言う内容に違いはさほどないからな」

「曹操さま！兄ちゃん！敵の軍勢、突っ込んできたよっ！」

「……あれ、全軍きてないか？」

「華琳、私には全軍が突撃しているように見えるか？」

「ええ、私にもそう見えるわ。まあ、多少のズレはあったけれど、こちらは予定通りにするまで。総員、敵の攻撃は適当にいなして、後退するわよ！」

「報告！曹操さまの本隊、後退して来ました！」

その報告に春蘭は怪訝そうな表情を浮かべた。

「やけに早いな……。ま、まさか……。華琳さまの御身に何か……！？」

「心配しすぎだ、姉者。隊列は崩れていないし、相手が血気に逸ったか、

作戦が予想以上に上手くいったか……。そういうところだろう」

「そ、そうか……。ならば総員、突撃準備！」

「ほら姉者。あそこに華琳さまは健在だ。季衣と土郎もちゃんと無事だよっだぞ」

「おお……。よかった……。…」

安心した所で、二人は盗賊団を観察した。

「……これが、敵の盗賊団とやらか」

「隊列も何もあったものではないな」

春蘭は不満そうに言う。

「ただの暴徒の群れではないか。この程度の連中、作戦など必要なかつたな、やはり」

「そうでもないさ。作戦があるからこそ、我々はより安全に戦うことができるのだから」

「ふむ……。そろそろ頃合いかな」

「まだだ、敵の殿が来るまで待て」

「だが、これだけ無防備をされているとだな、思い切り殴りつけたくなる衝動が……」

「気持ちは分かるがな……」

暴走しようとする姉を妹はきっちり抑える。

「敵の殿だぞ！もういいな！」

「ああ。夏侯淵隊、撃ち方用意！」

「ようし！総員攻撃準備用意！相手の混乱に呑み込まれるな！平時の訓練を思い出せ！」

混乱は相手に与えるだけにせよ！」

「敵中央に向け一斉射撃！撃ていっ！」

「総員、突撃いいいい」

現在、敵の軍勢は策もあつたことによりボロボロになっている。

「はあっ！」

「ぐあっ！」

「……正直ものすごく弱い。  
おかげで、多くの者を殺す覚悟をしていたにもかかわらず、まだ一人も殺していない。  
……まあ、腕の二本やそこら奪っているので、日常生活ですら大変だろうが。  
それぐらいは自業自得だろう。」

「逃げる者は逃げ道を無理に塞ぐな！後方から追撃を掛ける、放っておけ！」

「まあ、基本だな」

窮鼠になられても困るしな。

「華琳さま。ご無事でしたか」

「御苦労さま、秋蘭。見事な働きだったわ」

桂花が季衣に春蘭と追撃に行くよう指示していたから、二人は当分戻らないだろう。

初陣にして春蘭の性格を見抜いたり、人間性とはかく軍師としては見事の一言だ。

「……何か私に対して無礼なこと考えたでしょう」

「さて、私は客観的な事実を考えただけだが？」

「桂花も見事な作戦だったわ。負傷者もほとんどいないようだし、上出来よ」

「あ、ありがとうございます！」

「それと……土郎。見事な戦いだった……けど、なぜ一人も殺さなかったの？」



「殺さず無力化できたからだか？」

「生き残った連中が悪事をしたらどうするの？」

「無力化、それが出来なければ殺す。それだけだ」

「・・・そのせいで、誰かが死んだら？」

「遺族の恨みを一生甘んじて受けよう。ただ、殺されるつもりはないが」

「なぜ、殺されるつもりはないの？」

「約束したのでな。『生きられるだけ生きる、自身の命を決して捨てない』と」

「・・・そう。覚悟をもって進むのなら、我が覇道を妨げない限り私は土郎、

あなたを認めるわ」

「・・・そうか、なら私も。

覚悟をもって進むのなら、我が信念に外れない限り華琳、君の覇道の一助となるう」

周りは無言。

二人の醸し出した場の雰囲気は全ての者が呑まれている。

そして、

「く、くくく、くはははは！」

「ふ、ふふ、あははははは！」

いつしか二人は笑いだした。

「まさか、あの時の言葉、本気とはね！」

「こちらの台詞だな。本気で私のような破綻者を使いこなすか！」

これは霸王と正義の味方が互いを認め、誓いあった一幕

現在、俺達は街が見える所まで戻ってきた。

「兄ちゃん、街に着いたらご飯買ってきていいかな？朝食食べてないからお腹すいちゃって」

華琳の所に残ることにした季衣がいった。

あの辺りを治めていた州牧が盗賊を恐れて逃げたため、華琳が代わりに治めることになった。

結果、季衣も村の心配がなくなったのだ。

「……………誰のせいで、朝食が無くなったか、分かっているんでしょね……………」

怒りを抑え桂花が言った。

「にゃ？兄ちゃん。ボク、何か悪いことした？」

「いや、誰かさんの見通しが甘かったただけだ。季衣は何も悪くない」

そう桂花は約束を守れなかったのだ。

理由は予想以上に兵が残ったため糧食の消費が増えたこと、そして……………季衣がセイバーや虎と同じだったことだ。

ここまで言えば分かるだろう。

そう、季衣は人の10倍食べるのだ。

奇しくも、俺の懸念が命中したわけだ。

「桂花、不可抗力や予測できない事態が起こるのが、戦場の常よ。賭けは覚えているわね？」

「……分かりました。  
ですが、せめて……最後は、この夏侯惇ではなく、曹操さまの手で……！」

「……………」

春蘭は無然としている。

「とは言え、今回の遠征の功績を無視できないのも事実。

……いいわ、死刑を減刑して、お仕置きだけで許してあげる」

「曹操さま……っ！」

「それから、季衣と共に、私を華琳と呼ぶことを許しましょう。  
より一層、奮起して仕えるように」

「あ……ありがとうございます！華琳さまっ！」

「そういえば、華琳」

「何かしら、士郎？」

「太平要術という古書は見つからなかったが、良かったのかね？」

「いいわよ。その可能性が高いことは分かったのだし、

桂花と季衣という二つの宝が手に入ったのだから」

このとき俺たちは気付かなかった。

その書が我らの運命を大きく左右させるということに。

## 正義の味方の休日記録1

「士郎、失礼するぞ」

「士郎、少しいいか？」

珠にしかない休日をごとう過ごすか考えていると春蘭・秋蘭姉妹がやってきた。

「なんのようだね？ 急用でないのなら、今度にしてもらいたいのだが」

『出来るときに、自分自身のための時間を持つこと。』

ずっと張り詰めままじゃ、いつか壊れたやうもん。

それにシロウには「楽しむ」ことを知って欲しいから』

これは、イリヤの教育の一つ。

いつもこう言って、俺を連れまわした。

長い間、たびたびそううしてイリヤと過ごす内に、

「楽しむ」ことが分かるようになっていった。

まったく、こんな事にも口出して貰わなければならなかった自分自身に苦笑する。

「急用に決まっているではないか！」

「ああ、私たちだけでは限界がある」

・・・どうやら、気迫から本当のことと判断。

「良いだろう。私の力で良ければ貸そう。ただし、貸し一つだぞ」

イリヤの教育の一つが思い浮かぶ。

『貰える物は貰っとくこと。  
理由無しで無償で働く人を信じられるほど普通人は強くないんだか  
ら』

この教育のおかげでアーチャーほどには世間の風当たりが強くなる  
ことはなかった。

・・・貰わずにしていると、イリヤが必要以上に貰っててきた（強制回  
収）から。

実際貰って損はなかった。

貰った物でより多くの人を救えたのだから。

「く、良いだろう。では、付いて来い！」

「分かった。その代わりしつかり役立って貰うぞ」

こうして休日を二人の急用とやらに付き合うことになったのだが・・・

「何故、服屋に行く必要があるのだ？」

しかも女性服専門店。

店内は女性ものの服がずらりと並び、女性達が商品を見比べている。

数人の女性達が俺を見てひそひそと何やら話している。

・・・というか読唇術が使えてしまう自分が憎く思えたのは初  
めてだな。

話の内容は黙秘するしかない。

ただ内容は決して良いものではなかったことだけは確かだ。

「華琳さまの服を選ぶために決まっている出はないか！」

「ああ。華琳さまのためにもより良いものを用意せねば。私たちだけではいつもと変わらない。」

そこで異国の出身かつ男性の士郎に頼むことにしたのだ」

・・・これは、俺のミスだな。

確かに「彼女達」にとっては急用だったのだから。内容も聞くべきだった。

「・・・まあ、力を貸すと言った以上、全力を尽くすさ。

要するに華琳のために今までとは違う異国出身の私ならではの服を用意すれば良いのだな？」

「ああ、そうだが」

「今日中に二十件はまわるのだ、時間が惜しい！」

・・・早めに切り出せて良かった。

「そんな時間の無駄使いをしなくていい。ここで布と糸を買って私が作るう」

そう言った俺に二人は驚いている。

「士郎、お前裁縫が出来たのか？」

「言っとくが士郎、二十着は必要なのだぞ？」

・・・思った以上にいるのだな。

「まあ、明日には用意できる。こつ見えても家族のためによく服を作ったものだ」

イリヤが「シロウの作った可愛い服が欲しい」と言い、俺は彼女のために数多の服を作った。

文字通り可愛い服からウエディングドレスまで。

・・・何故かブルマやスクール水着まで作らされた。

「正直、期待できないのだが」

「ほう、そんなことを言うのか、春蘭？」

「気に障ったか？」

「ああ、障った。春蘭、その言葉を忘れるな。後で後悔させてやる。」

教えて貰おうと来ても私は君に教えない」

「良いだろう！華琳さまに合わぬものを用意したら許さんぞ！」

「それでは、期待させてもらおう」

そうして俺は大量の服を作ることになった。

翌日、二人は俺の作った大量の洋服に目を丸くした。

正直徹夜したので眠い。

「・・・本当に前が作ったのか？」

「見たことのない服だが、素晴らしい出来映えなのは分かる」

「なにも私一人で作ったわけではない。昨日の店の店主及び従業員にも協力してもらった」

異国の服飾技術とデザインを学べるという事もあり、喜んで協力してくれた。

・・・薄々気づいていたから頼んだのだが、本当に天才だった。

彼らは少し教えるだけで、ものにしてしまった。

「……………土郎」

「何だね？」

「昨日の言葉、撤回しては駄目か？」

「駄目だな」

「どうしても？」

「私はこれから休む。店主たちに作り方を教えて疲れたのでな。

……私は教えないが君が私以外に教えを請うのは止めないか？」

そういつて俺はその場を後にした。

「秋蘭、どういう意味なのだ？」

「ようするに、直接は教えないが、店主に作り方を教えたので、店主から学べということだ」

「土郎ー、恩に着るぞー」

「やれやれ。本当に素直ではないな」

これは何気ない正義の味方の休日記録における1日である。



## 正義の味方の仕官記録2（前書き）

正義の味方の 記録シリーズは外伝てきなものであり、かなり自由が利きますので、なにかリクエストがある方は感想に書いてください。

全てとはいませんが、大いに参考にさせていただきます。

## 正義の味方の仕官記録2

衛宮士郎の基本的な一日は朝四時の起床を持って始まる。

郊外の森で弓を射ること一時間。

「やはり少しずれがあるように思うのだが、どうだろうか秋蘭？」

「気付いていたか。相変わらず見事だな。どこが不満なんだ？」

「この距離ならまだいいが、これが後100増えたら当たると思っ  
か？」

「無理だろうな。」

そうか、そういえばお前の弓は止まった位置での遠距離狙撃が主軸  
だったな」

「そういうことだ。もう少し感覚を直す必要があるな」

強化なしではせいぜい五百がいいところだ。

それだけに多少の差異が生じる。

この誤差のため、弓を使わないでいたのだから。

少しでも調整しとかなければ。

その後秋蘭と別れ、途中の泉で汗を流し少し食糧を取り、  
街にある警備隊の詰め所本部へ向かう。

朝八時にその日朝勤務の警備隊員達20名と朝食を共にする。

ちなみに朝食は質素ながらも士郎が作る和食（対中国人用ver）  
だったりする。

ここでしか食べられないため、これを目的として警備隊を志願する  
者がいたりする。

「隊長！焼き魚もうないんですか？」

そう、現在の警備体制は俺の出した草案を元に作られたため、言いだした責任を取り俺が隊長をしている。

「ああ、今日は余分には取れなかったのな。それでも、昼までもつだけ食したはずだ」

「なら、あいつが余分に食べている魚はどうしたんですか？」

「今朝私が料理しているところへ来て、自分で買った魚を持ってきたのだ。」

今以上の朝食費は捻出できないため、本来そこまでは品を増やせない。

しかし、自分で材料を買ってくるならその問題は解決されるということだ」

「そ、その手があったか！」

「じゃあ、明日から俺も材料を用意するのでよろしく頼みます」

「私もお願いします」

「わたしも」

「自分も！」

皆が次々に頼んでくる。

「・・・ふう。なら後で費用を全員から徴収する。それで、品を増やす、それでいいな？」

返事は全員、「はい」の一言だった。

朝九時に城へ出勤し、文官としての仕事をする。

「士郎、あなたの出した治水工事に対する案だけど使わせて貰うわ」  
「わかった。では、報酬の設定は・・・」  
「・・・といったところが妥当じゃないかしら」  
「ふむ。なら・・・というのも良いと思うが？」  
「あら、いいわね。では、あなたに頼んでいいかしら？」  
「ああ、了解した」

正午に城で昼を食べる。

「士郎も今飯か？」  
「ああ、春蘭と季衣もか？」  
「うん、けどおかわり8回までにされちゃった」

「・・・ほんとにセイバーがいたときを思い出す。  
制限しないと歯止めが利かないところが特に。」

「本当に季衣は気持ちのいい食べっぷりだな」  
「はい。春蘭さまと兄ちゃんもいるから余計においしく感じて！」  
「良く噛んで食べなければ、体に悪いぞ」  
「うん」

午後一時に食後の運動を春蘭と。

「今日は勝つぞー！」  
「やれやれ、どうせ後で言い訳するのだから、たまには違うことを  
言ったほうが良いと思うが？」  
「ほぞけー！」

結果は今日の一戦を加えて42戦42引き分け

午後二時に街の見回り。

「その者、止まれ」

「畜生、なんてしつこい！」

「せいっ！」

俺は石を投げた。

正直矢では殺傷力が強すぎる。

その点、無力化に投石は非常に有効だ。

「ぐあっ！何もんだお前。どうして、私がスリだと分かった？」

「ただ、実行していた所を見つけただけだ」

「い、いつたいどこで!？」

「さあな。それをお前が知る必要はない」

……まさか街の中央の見張り台からとは思うまい。

現場まで、一キロ近くあるのだから。

スリを警備隊が牢屋へ連れて行く間に被害にあった者たちへ、盗まれた品を返しに行く。

「本当にいつもありがとうございます」

「それが、我らの仕事だ。気にしなくていい。お礼がしたいというなら、

この干物を20匹買おうと思うのだが、少し値引いてくれ」

「ええ。半額で結構です」

そして、最後の品……なのだが。

どこかで見た覚えが。

「ああ、見つけた！あなただったのね、盗んだの返してちょうだい！」

・・・やはり桂花のだったか。

「やれやれ、捕まえたスリの盗んだ品を返品していたのだがね？君は、青い服を着た小柄な出っ歯とすれ違わなかったか？」

「・・・し、知らないわよ。そんな女！」

「おや、私は性別まで言っていないのだがね。小柄な出っ歯で、性別を女と考えると流石は、軍師だ」

「ぐっ」

桂花は悔しそうにしている。

俺の誘導尋問に引つ掛かったのがかなり気に入らないようだ。

「まあ、いい加減疲れたのでね。帰らせて貰おう」

そう言って、最後の品を桂花に渡す。

「・・・、これで勝ったと思わないでよね！」

「やれやれ」

午後七時になじみとなった酒場で夕食を取り、わずかに酒を嗜む。

「衛宮殿、今日も活躍だったようですね」

「何、運良く見つけただけだ」

「謙遜を衛宮殿が警備隊を作ってから、街の治安は今まで以上となったと評判です。」

子供達もまるで、正義の味方のようなといつも親に語っていますよ」

正直、未だにその名で呼ばれるには力不足も甚だしい。  
そう、俺は思っているのだが・・・。  
微妙な気分を悟られないようにしながら時間をすごした。

午後八時に明日の仕事ための下準備と今日の反省点を振り返る。

「・・・ここは、こうしたほうがいいな。・・・む、ここは矛盾している。

そうか、あそこを変えたせいか。後で訂正したものをださなければ・・・」

午後九時に今日の記録を書いて就寝。

その内容は今ここに出ている。

これは、基本的な正義の味方の仕官記録における一日である。

### 第三話：予言

現在俺は敷地内の広場で皆が集まるのを待っている。

「そろそろかな」

正確な時間を知らせるものは存在せず、細かい時間が決まっていな  
い以上仕方がないことだ。

それに女性は準備に時間がかかることは自然なことだ。

・・・それを知るのに、かつて随分高い授業料を強制的に払わさ  
れた。

「なんだ士郎、随分早いな」

「ああ、春蘭。こういう時は男が先に待っていないかならないと、  
相場が決まっている。」

それより華琳と秋蘭は？昼食は済んでいると思うのだが？」

「うむ、なにか髪のみとまりが悪いとかでな。今、秋蘭に整えさせ  
ている」

「なるほど。納得だ」

彼女の両脇の螺旋を整えるのは手間だろう。

「あなた、随分女性の化粧や髪型に理解があるのね」

「理解できなければ、・・・いろいろ危険だったのですね」

赤いあくまとか、金のあくまとか・・・。

無神経なひと言が即座に自身の体へ数倍返しにされるのだ。

「まあ、その上州牧ともなったお方が、だらしない格好で公の前に



出してみる。

臣下たる我々どころか、主の品格まで疑われるわ」

「あら、珍しく意見が合ったじゃない」

「当然だ」

「見た目が全てではないが、極めて大きな要因の一つだからな。

陳留の州牧になった以上、そこも疎かには出来まい」

そう。

あの戦いの後、華琳はより広い地域を治める州牧へと昇進したわけだが、

引き継ぎや手続きを済ますのについて先日までかかった。

落ち着いたのを機に、一度、みんなでより賑やかになった街の様子を見て回ろう、

ということになったわけだが。

「どうした、士郎？」

「いや、華琳には既に陳留刺史としての十分な実績があり、

本来の州牧が逃亡した非常時でもあるから、州牧になったのは当然なんだが、

本来ならもう少し時間がかかると思うのだが？」

中央が大きな権力を持ちながら腐敗した場合、かなり駆け引きが重要になる。

「私が中央の知人に手回したからよ」

「なるほど、そういえば桂花は袁紹のもとにいたのだったな。

袁紹は名家だろうから中央との繋がりも作りやすかったろうな」

「それだけがあそこにおいて良かった点なのよね・・・」

「けれど、それが私の役に立っている」

「華琳さま……」

「悪いけどなりふりを構っているほど、今の私たちに力も余裕もないの。」

「使えるものなら正義の味方でも部下の繋がりでも、遠慮なく使わせてもらおうわ」

「どうやら、髪は上手くまとまったようだ。」

「ん？」

「どうかした？」

「季衣はどうした？」

「街へはみんなで行くと聞いていたが……いつも賑やかな、季衣の姿が見えない。」

「季衣は熱を出してしまってたな。」

「……楽しみにしすぎて昨日は眠れなかったことも原因らしい」

「……ある意味子供らしい理由だった。」

「……出来れば今からでも看病したいんだが……」

「止めとけ。本人が気にする。逆効果になるだけだ。」

「私たちだって本当は看病したいんだ」

「ならば、せめて土産くらいは買って帰らないとな」

「なんだ、考えることは同じか……」

「あんたたち、観光に行くわけじゃないのよ？」

「視察をすることと、土産を買うことは両立しないわけではあるまい。」

「構わないだろう、華琳」

「土郎がそういう所を疎にしない事は分かっているからいいとして・・・、

春蘭はしっかりと仕事をするならいいわ」

「はいっ！」

「・・・返事だけにならなければいいけれど」

「さて、揃ったのなら出掛けるわよ。桂花、留守番、よろしくお願いね」

「華琳さまあ・・・。なんでこれは連れて行くのに私はお留守番なんですかあ・・・？」

・・・これって。

「警備隊で日々街を回っている私以上に、街に詳しいというのなら桂花の代りに留守番でも構わないが」

それが出来れば、季衣の看病に回っている。だが、季衣は許さないだろうな・・・。

「・・・分かったわよ」

こうして、俺達は町へ向かった。

-----

街の前で三人の少女が話をしている。

「あれが陳留か・・・」

全身傷痕だらけの凜々しい少女が言った。

「やっと着いたー。風ちゃん、もう疲れたの」

おしゃれな少女の言葉に風と呼ばれた先ほどの言葉が返す。

「いや、沙和・・・これからが本番なんだが」

「もう竹カゴ売るのが、めんどくさい。真桜ちゃんもめんどくさいよね・・・」

真桜と呼ばれた少女が反論する。

「そうは言うてもなあ・・・全部売れへんかったら、

せつかくカゴ編んでくれた村のみんなに合わせる顔がないやろ？」

「そうだぞ。せつかくこんな遠くの街まで来たのだから、みんな協力してだな・・・」

「ううー・・・。わかったよお」

沙和はまだ不満そうだが了承した。

「最近は何んや、立派な州牧さまが来たとかで治安も良くなったみたいや。」

特にこの街は警備隊とやらが優秀で安全と噂されてるんもあって、いろんな所から人も来とるからな。気張って売り切らんと」

「・・・そうだ。人が多い街なら、みんな得手分けして売った方が良くないかな？」

「・・・なるほど、それも一理あるな」

「それじゃ、三人で別れて一番売った奴が勝ちってことでええか？  
負けたヤツは晩飯、オゴリやで！」

その言葉に真面目な風が反応した。

「こら真桜。貴重な路銀を……」

「分かったの」

「沙和まで……」

「よっし。二対一で、可決つてことで！ 凧もそれでええやろ？」

凧は諦めて

「はぁ……やれやれ。仕方ないな」  
了承した。

「ほな決まり！」

「おーなのっ！」

「……なら、夕方には門の所に集合だぞ。解散！」

そうして、三人は街へ入って行った。

-----

「はい！それでは、次の一曲、聞いていただきましょう！」

「姉さん、伴奏お願いね！」

「はい」

三人の旅芸人が一曲を奏で始めた。

「ほう。旅芸人も来ているのか……」

「あれは……、南方の歌か。あちらからの旅人はさほど来なかつたはずだが？」

「我々の働きで街道が安全になってきた、ということが認められたということだろう。」

そつでなければ連中は寄つてこないからな」

「なるほどな」

「特に彼女らは女だけのようですね。武芸に相当の自身があるか、安全でなければ、

こんな所までは来ないでしょうよ」

「ありがとうございますー」

「次、もう一曲、言ってみましょう!」

・・・だが、それほど人気はないみたいだな。

下手ではないが人だから出来るわけでもなく、

おひねりなんかもほとんど入っていないようだ。

「まあ、腕としては並という所ね。」

それより、私たちは旅芸人の演奏を聴きに来たワケではないのよ?」

「ああ。街の視察だが広い上に時間もあまりない。手分けして見ることを提案するが?」

「では、わたしは華琳さまと・・・」

「士郎は私を案内しなさい」

確かに街の案内はいつも警備隊長として見回っている俺が適任だろう。

「了解した」

「えー・・・」

「・・・諦めろ、姉者。我々は士郎ほど街に詳しくないだろう」

「うう、・・・分かった」

・・・いや春蘭、そんなに羨ましげに見られてもな。

「華琳さま。私は街の右手側、姉者には左手を回らせます。」

それでよろしいですか？」

「問題ないわ。では、突き当たりの門の所で落ち合いましょう」

「はっ」

「・・・はあ」

そんなわけで俺達は、春蘭や秋蘭と別れて回る事になった。

俺と華琳が担当する街の中央部は、真ん中を走る大通りと、そこに並ぶ市場がメインとなる。

「どうだ、実際の街の雰囲気は？随分良くなっていると思うが？」

「ええ。やはり人の流れや客層、雰囲気は地図や報告書だけでは実感できないわ。」

たまにはこうやって視察して実際に確かめておかないと、

住民たちの意にそぐわない指示を出してしまいかねないわ」

「さすがだな、華琳は。それに気付かず民を数字と文字だけで知った気になる、

愚かな為政者がどれだけいる事が・・・」

「・・・それで不幸になった者がどれだけいたことか。」

「そうね。それに・・・ああいう光景は紙の地図だけではなかなか確かめられないもの」

華琳が視線を止めたのは、露店の前の人だから。

「はい、寄ってらっしゃい見てらっしゃーい！」

そこにいたのは、露天商らしき女の子だった。

ネコの額ほどのスペースには、竹カゴがずらりと並べられていて、

そして……。

「なんだと!？」

「カゴ屋のよう……だけれど？」

「いや、カゴではなく……こちらだ」

店主らしい女の子の脇に置いてある、カラクリ。

この時代にあれだけ精巧な歯車が技術として存在することに当初は驚いたものだが……。

「この仕組みはまさか……。      同調・開始<トレース・オン  
>」

「製造目的は全自動のカゴ編み、……流用した技術は……カラクリ夏侯惇人形!？」

思わず叫んでしまった。

「お、カラクリ夏侯惇人形知ってるん？  
いやー、先日陳留から帰ってきた家族が持ってきたんや。凄い技術が使われてん見て、  
土下座をして拝み倒して手に入れたんよ。教材として使わして貰ってるんや」

……当然知っている。

……俺が以前から暇を見つけて趣味で作った、  
渾身の出来たる夏侯惇人形。

先日、村へ帰るといっ子供にあげたのだが……。

「せや、この全自動カゴ編み装置使ってみてや!」



「・・・悪いが、右上方の歯車及び、左下方の動力伝達が甘い。さらには、全体の強度不足から竹のしなりに耐えられない。それでは、木端微塵に爆発してしまう」

「土郎、これがどういう仕掛けか分かるの？」

「がらくた弄りは、小さいころからの趣味の一つだ」

しかも自分の技術が使われている上、解析までしたのだ。

「・・・あなた、なにもんや？一目でそれ見抜くなんて」

「・・・からくりに詳しい文官だ」

結局最後まで質問され、当たり障りのない回答をし続けたのだった。

-----

全員集まり後は帰るだけとなった。

俺は途中の店で珍しい食べ物を手にいれ、調理して季衣の土産とすることにした。

どう調理するか考えていると老人に声をかけられた。

「そこのお方、少し待ちなされ」

その声に春蘭が反応する。

「貴様・・・あの時は見逃したが・・・！」

「やめなさい、春蘭」

「どづいづことだ？」

俺は秋蘭に尋ねた。

「彼は華琳さまのことを「乱世の奸臣」と呼んだ占い師だ」

なるほど彼があのような有名な人相見の許子将か。

「・・・無茶をなされるな、・・・今のままでは無限の剣に刺殺されましょう。」

神の医伝承せし医師を探しなされ、それが未来を創りましょう。

・・・くれぐれも「運命の書」に気をつけなされ」

そういつて、彼は去って行った。

・・・「無限の剣」に気付くとは。

神の医を伝承せし医師、その者なら制約をはずせるといふことか？

「どつという意味だったのかしら？」

「さて、優れた医者を探しとけということだろう」

「運命の書」・・・今は気にしても仕方がない。

若干の懸念と、制約解決への道筋をその日手に入れた。

「・・・そういえば、・・・太平要術の別名は確か・・・」

「どつした、華琳？」

「なんでもないわ」

これは正義の味方の未来を告げる一幕

---

---

「この書凄いわ・・・。  
私たちの思いも付かなかった有名になる方法が、たくさん書いてある」

追われていたファンを名乗る盗賊が持ってきた書を読み、  
華琳たちの前で演奏をしていた三姉妹の一人、紫の短髪をした張梁  
が言った。

「ちょっと・・・ホントに!？」

活発な青い髪をした張宝が念押しをした。

「本当よ。これを実践していけば、きっと有名になれるわ!」

緩そうなピンクの長髪の張角が声をあげる。

「すごいんだね、この太平要術って書」

「よおっし!ならわたしたち三人、力を合わせて歌でこの大陸、獲  
つてみせるわよ!いいわね!」

「おおーっ!」

「ええっ。」

「運命の書」たる「太平要術」との長い因果が巡り始める

#### 第四話・王への想い（前書き）

今回は本作土郎版の無限の剣製の詩を載せました。  
文法上に間違いがあったら教えてもらえるとありがたいです。

#### 第四話：王への想い

「ここにもいないのか・・・」

現在俺は、仕上がった仕事を華琳に見せるべく、城の中を探し回っている。

これを渡せば今日の仕事は終わることもあり、早く済ませたいのだが・・・。

「さて、後はどこを探すか・・・」

「・・・げ」

桂花は人の顔を見るなり嫌そうな顔を見せてきた。

「やれやれ、それが軍師ともあろう方が見せる顔かね？」

「ええ、人に合った顔を見せるのも軍師として当然よ」

「・・・相も変わらず口が悪い。」

「まあそんな事より、桂花は華琳を知らないか？」

「ふんっ。たとえ知っててもあんたなんか教えるもんですか！地の底を這いずり回ってお探しなさい」

ふむ、どうやら知っているようだな。

「ほう、華琳から頼まれた仕事を完成させ、持ってきたのだがね？彼女は随分楽しみにしていたようだ・・・」

「どうした、士郎」

良いタイミングだな。

「ああ、秋蘭。華琳を知らないか？随分探しているのだが・・・桂花も知らないようだな」

「だ、誰が知らないなんて言ったのよ！

知っているけど教えてやらないって言っただけでしょ！」

なぜ悪い方に言い訳するのだろうか？

「むしろそっちの方が悪かろう。華琳さまなら、今日は一日お休みだぞ？」

「どういうことだ？私は昨日の夜に頼まれた仕事を今日持つてくるように言われたのだが？」

「・・・やれやれ。また悪い癖か」

「悪い癖？」

「士郎は華琳さまが一日仕事を休んでいるところ・・・見たことがあるか？」

「・・・そついう悪い癖か」

昼間休んでいたり、街に遊びに出ている所は見たことがある。だが、まる一日休んでる華琳は見たことがなかった。

「ご自身の体と公務を比べれば、かならず公務を優先させるお方だからな・・・。

今日の休みも、私と姉者で無理矢理に休ませたのだ」

「じゃあ、春蘭は？」

「華琳さまの代理で、季衣と一緒に視察に出掛けている」

「よく、華琳があので二人で納得したものだな・・・」

秋蘭と桂花ならともかく、

あの二人に華琳みたいなしっかりした視察が出来るとは思えない。

「・・・軍関係の視察だったからな。まあ、色々あったのだよ、こちらも」

「・・・お疲れ様」

あの華琳を説得するなんて・・・春蘭は役に立つどころか間違いく寝返るだろうし、秋蘭の苦勞が目に浮かぶ。

「なら、この書類も・・・今日は見せない方が良いな」

「何だったら預かってあげましょうか？」

「秋蘭がいるから、桂花に渡した証明が出来るな。良いだろう。もし、紛失したら桂花の責任になるが構わないな？」

「やっぱりやめるわ」

桂花は悔しそうに俺を睨んでくる。

「急ぎでないものなら、明日の朝にしてくれると嬉しいのだが。華琳さまに何か言われたら、私の名を出して構わんぞ」

「別に構わんが・・・、華琳の場合は下手な氣遣いに怒ると思うが」  
「うむ。理解はしてくださるだろうが、納得はされないだろうな」

なんて難儀な王様だ。

「・・・まあ、仕事の中身を良くするために時間がかかったことにしよう」

「そうか。気を使わせて、悪いな」

「気にするな。何かあったときの貸しにでもしよう」

「ああ・・・そうだ。城を出るなら、むこうの庭を通った方が近

道だぞ  
「

秋蘭の言葉に桂花が慌ててい言う。

「ちよつと、秋蘭!？」

・・・なるほどな。

「礼を言おう」

-----  
-----

「・・・やはりか」

秋蘭の言った通りのルートの中で華琳は眠っていた。

「おて、べつじょじょか?」

華琳はぐっすりと眠っている。

起こしてしまつのも悪い。

SIDE 華琳

「・・・」

べつじょから起きたことに気づいてないようだ。

(ごじつして、私寝たふりしてるのかしら?)



自分でも分からないまま眠ったふりをする華琳。

「それにしても……こうして改めて見ると……」

(改めて見ると?)

「本当に小さいな」

怒りに堪える華琳だったが、次の言葉で治まった。

「その小ささを感じさせないほど、彼女の器が大きいということか」

だが、次の言葉で今まで感じたことない感情が起こる。

「……今の俺を見たらセイバーはなんて言うだろうか？」

(……土郎?)

……俺は君が愛してくれた自分を貫けているかな？」

それは、いつものどこか皮肉げな土郎ではなく、自分の知らない土郎だった。

そして、彼はどこか不思議な詩を口ずさむ。

「I am the bone of my sword .

《体は剣で出来ている。》

Steel is my body, and fire is my blood .

《血潮は鉄で、心は硝子。》

I have created over a thousand

blades .

《幾たびの戦場を越えて不敗。》

Unaware of stop . Nor aware of move .

《ただ一度の敗走もなく、ただ一度の忘却もなし。》

Withstood pain to create weapons . Making a vow of my soul .

《担い手は雪の丘にて 果てなき想いを鉄と鍛つ。》

So , those hands will ever hold memories .

《故に、我が生涯に意味はあり。》

My soulful wish was unlimited blade works .

《この心は無限の剣で出来ていた。》

「……………不思議な詩ね」

「！！……………起きてたのか？」

「ええ……………」

「よく詩だとわかったな？」

「分かるわよ。」

心がこもっているのだから……………」

お互いに黙り込んでしまった。

「……………ねえ、士郎？」

「……………なんだ？」

「教えてもらえないかしら？セイバーって子のこと」

(なんで私はこんなことを聞いているのだろうか?)

自分の気持ちが・・・よくわからない。

「・・・彼女とは、生まれ故郷で出会った」

「どんな形で出会ったの？」

「未熟だった私が戦争に巻き込まれた時に命を助けられた。今でも覚えてる。

月の光が綺麗な夜に輝く彼女の姿を」

話す士郎に華琳は言葉を重ねる。

「どんな子だったの？」

「頑固で融通が利かなくて、季衣なみに大食で、とても心優しい子だったよ」

「・・・その子とはどうして一緒にいないの？」

聞くべきではないと思いつつも、口を止められなかった。

「それには彼女の過去から話そう。彼女は・・・、王だったのだ」

「王・・・だった？」

「彼女は彼女の生まれた国の王の子として生まれた。

そして彼女が成長した時、王を選定するための儀式が行われた。

それは一本の岩に刺さった剣を抜くもの。

その剣は特殊で王にふさわしい者にしか抜けない剣だった。

多くの武将が挑み失敗し、誰一人抜けなかったため忘れられた。

武将達が争う中彼女はそれを抜こうとした時、

魔術師・・・この国の道士に当たるものが忠告し未来を見せた。

それを抜けば人であることを捨てることになる。その先に破滅が待っていると。

だが、彼女は抜いた。何故だと思う？」

聞いたとおりの子ならおそらく……。

「彼女は言った。そこには民の笑顔があった。それは間違いじゃないと。」

そして彼女は少女であることを止め、王となった」

「少女であることをやめた？」

「……彼女の国では慣習として女性は王になれなかった。

だから、彼女は性別を偽った」

それはどれだけ負担だったろう。

周りの者たちに隠し通すのは心身ともに厳しいものだったろう。

「彼女は完璧だった。剣の腕は凡百の武将達より強く、その軍略は並みいる軍師を抜き、兵の統率は神がかりだった。……まあ、個人としての武は猪突猛進だったが。」

とにかく、彼女は誰よりも戦争が上手かった。だが、彼女は戦争に向いてなどいなかった」

「……どうして？」

「彼女は……優しすぎた。だから、誰よりも傷つき続けた。それでも、戦い続けた。そうしなければ、民を侵略者から守れなかったから。」

同時に彼女は民のために最少の犠牲で残りを救うべく、一を切り捨て続けた。

例えば、侵略者に食糧を渡さないために一つの村を焼いた」

……時にはそれぐらいしないと守れないことがあるだろう。

「そんな犠牲を強いなければならぬ大きな幾つもの戦争にいつも彼女は勝ち続けた。」

彼女以外には出来もしない偉業だろう。

そんな彼女をいつしか彼女の部下たちは「王は人の心が分からない」といいだした。

・・・誰もそれまで気にもしなかつたくせに。彼女の傷だらけの心を知らないのに。

彼女の不幸は当時本当の意味で彼女を理解し支えてくれる者がいなかったことだ。

彼女に華琳にとっての秋蘭・春蘭のような存在がいれば違つたろうに」

・・・自分を本当に知ってくれるものがどれだけ有り難いか私は知っている。

「彼女は自分を殺しすぎた。そうしなければ耐えられなかつたうえ、本来の自分を出せない環境だから仕方がなかつたろうが。

自分を見せない彼女を多くの者が裏切り内乱が起こつた。

・・・そして国は滅び、民は残つた。彼女を信じた部下達は彼女を守つて死んだ。

彼女を裏切つた部下達は彼女たちによつて死んだ。・・・あまりにも死んだ。

だから、彼女は間違つた考えと願いをするようになった」

「間違つた考えと願い？」

「そう、「自分は王になど相応しくなかつたのではないか」と」

「・・・それ、本気で思つたの？」

「・・・それどころか「王の選定からやり直そう」と、

聖杯と呼ばれる奇跡を起こすという伝説の品を探して旅に出た。そして私と出会つた。

どう思つ？」

「馬鹿としか言えないわ！」

そんな事をしたら信じた部下達の想いはどうなる！  
裏切った部下達の無念は何処にぶつけられたい？

「ああ……。私は同じことを彼女に言い、衝突したよ。結局、なんとか説得できた」

「そう……」

「そして彼女は故郷へ帰り死んだ」

「っ……！どうして！」

「彼女は聖杯を手に入れるまでという前提で特殊な術をかけられたことで生きていた。」

「聖杯を欲しなくなった以上生きられなかった」

「だからなのね」

「ああ。全く、おまけに最後が「土郎、あなたを愛している。」だからな。」

「答えも聞かずにいってしまったよ」

この時になってようやく華琳は気付いた。

先ほどから感じていた感情が嫉妬だということに。

「今でも彼女を愛してるの？」

「……かつて愛していたことを生涯忘れることはないだろうな。だが、今もあのころと変わらず愛しているかと言われれば分からない」

華琳はこれからを考える。

先ほど感じた自分の気持ち、それが本物かを。  
本物だった時どう行動するかを。

……。今はまだ……。答えは出ない。

これは正義の味方に対する霸王の気持ち動き出す一幕

### 正義の味方の仕官記録3

「隊長っ！」

「あちらに逃げた者達はお前達四人に任せろ！逃がさない事に集中しろ！」

中央部に逃げた三人は私が対処する！」

「了解！」

現在、俺達は街の中を逃げているゴロツキ達を捕まえるべく走っている。

「はあっっ！」

「ぐは・・・っ」

中央に逃げた者達全員を縛り上げた俺は、部下達の応援に行くべく駆け出した。

のだが、

「おお、士郎！ちょうど良い所に」

俺が見たのは倒れ伏すゴロツキ達と春蘭、そして呆然としている部下達の姿。

「どうやら部下達の手助けをしてくれたようだな」

「・・・全く、何をやっているのだ。お前の部下達は」

「あまり酷な事を言われてもな。つい最近入ったばかりで、鍛えている最中なのだ」

そう、だからこそこうして経験を積みませたり、応援に向かったりとして手間をかけている。



「ともかく、礼を言わせて貰うぞ、春蘭」

縛り上げられたゴロツキを運んでいく、警備隊を見ながら、春蘭はためいきをひとつ。

それに対し俺は言う。

「警備隊には実践に投入できるまでに届かない者達も多い。それを補う形で私が共に回っているのが現状だ」

ただそういう者達も少しづつ成長しているし。

警備隊の活躍もあって、入隊希望者も日に日に増えている。

最終的には今の数倍にまで増やすつもりなのだが、それもそう遠くはなさそうだ。

「まあ、軍からも何人が出している現状を早く解決してもらいたいな」

「ああ、そのつもりだ。それで、今日はどうした？春蘭が街に出るとは珍しい」

「珍しくて悪かったな。私が買い物に来るのがそんなに不満か？」

「ふむ、どうやら機嫌を損ねてしまったようだな。おわびに案内でもしようか？」

街の案内も警備隊の任務の一つなのでな」

「それを頼もうと思っていたのだ」

まあ秋蘭も案内したからな。

「それで、今日は何を買いに来たのだ？」

「下着だ」

春蘭はきつぱりと言いつた。

「……………なるほど、少し待ってくれ。女性の警備隊員に案内させよう」

……………なんとかこれで回避できるか？

「お前に案内を頼むと言ったのだ。おわびなのだろう」

無理だった。

—————

「まずはここだな」

「ここはダメだ」

「品揃え、質、共に評判だが？」

「前に来た事があるが……………半裸の筋肉達磨が踊りながら接客に出て来て、

思わず叩き斬りそうになったぞ」

「変態ではあるものの、悪い存在ではないようだが？」

「……………人とは言わないのだな」

何件か回るが、春蘭は否定の言葉しか出さない。

「……………春蘭はどういうのがいいのだ？」

「なんでもいい」

……………随分とタチの悪い「なんでもいい」だな。

「ここで最後だ。街で下着を売る場所は全部回った」

「ここは知らないな」

「では、これで失礼させてもらおう」

「……ようやく終わったか。」

帰って明日に提出する書類を仕上げなければ。

「ここまで来たのだ付き合え！」

不意を突かれ俺は店に引き込まれた。

「……春蘭、君は私が男だと分かっているかね？」

「ん？何を言う、土郎。分かっているぞ」

「いらっしやいませ。今日は彼氏に下着を選んでもらいにきたのですか？」

俺達の会話に対し店員が言った。

「ちょっと待て！どこの誰が彼氏などと……っ！」

「でも、殿方に真名で呼ばせるなんて……ねえ？」

「ねえ？」

「……普通はそう思うだろうな。」

春蘭は店員の言葉と勧められるカップル用下着にますます怒る中、俺は頭を抱えなくなった。

つて、まずい！

「よさないか、春蘭！ここで獲物を抜こうなど正気か！？」

「おやめなさい！」

店内を貫くその声に、俺や春蘭はおろか・・・俺達を囲んでいた店員達まで、動きを止める。

「・・・まったく、どこの田舎者が騒いでいるのかと思えば・・・。呆れて物も言えないわ」

「か・・・華琳さまっ!？」

「礼を言おう、華琳。一時はどうなるかと思った」

俺の言葉に華琳は言う。

「あら、土郎。今日は仕事だと言っていないかった？」

「・・・仕事として春蘭を案内したまではいいのだが、・・・まさか買うところまで付き合わされるとは」

疲れた声で俺は返答した。

「まあ・・・何となく予想は付くが」

華琳に付き添っていた秋蘭が言った。

「で、ですが、私と土郎のことを・・・そ、その・・・恋人などと！まったくもう、

ワケが分かりませぬ！」

春蘭は必至に言い訳をしたが、

「それは姉者が悪い」

「それは春蘭が悪いわ」

「それは春蘭が悪い」

「なんですと！」

全員から否定を食らった。

「女性物の下着を売る店に男連れで来れば、

その連れはそれなりに近しい関係と考えるでしょうよ」

「姉者。士郎が男だと・・・忘れていたのではないか？」

「・・・春蘭は私が男だと分かっていると聞いたな？」

俺の問いに春蘭は頷いた。

「では、男と女がどう違うか分かるか？」

「ああ、それは・・・」

「それは？」

「金的を蹴れば悶絶する！」

場の空気が止まった。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「な、なんだその目は！」

「・・・あたりまえだ。」

「・・・今回は部下の無知を詫びさせて頂戴。士郎」

「いや、私も気付くべきだった」

まさか、そこからとは。

「姉者。姉者の下着は私が選んでやるから。な？こっちへ来い」

「お？おう・・・？」

「華琳さま。申し訳ありませんが、私は我が愚姉の面倒を見ねばならぬようです。

代わりに士郎がお相手をいたしますゆえ・・・それでご容赦していただきたく」

「・・・仕方がないわね。いいわ、言つて来なさい」

「士郎。すまんが、華琳さまのお相手を頼むぞ」

「・・・俺にはここから出る選択肢が無いんだな・・・。

「・・・了解した」

「しっかり私の相手をなさい。分かったわね？士郎」

「まあ、最善を尽くそう」

SIDE 華琳

「これはどう？」

「そうだな・・・、同じので色がもう少し淡いのがあったな・・・。見つけた。

「このほうが、君に似合う」

「これはどうかしら？」

「ふむ・・・、少し余計な部分の装飾が多い。少し動きづらいと思うが？」

「・・・なんでこいつ動揺一つしないのよ？」

・・・せつかく珍しい士郎が見られるかと思ったのに。

「士郎、あなた随分慣れてきているのね？」

私は内心の動揺を見せないように気をつけながら言った。

「・・・むかし家族に同じことをさせられてな」

「あら、家族と異性としての女性とは勝手が違うと思うけれど？」

「・・・少し特殊だったのな」

どこか懐かしむ士郎に対し、私は探りを入れていく。

「特殊って？」

「・・・私は養子でね。血の繋がりがなかったのだ」

「・・・なるほど。」

「その家族とやらは知っていたの？」

「ああ。分かっていて、いろいろとからかわれたよ。」

「・・・半分以上本気だったらしいが・・・」

「・・・？」

最後の部分がよく聞き取れなかった。

まあ、あまり一度に聞くのも悪い。

士郎の過去の詮索は今度にして今は素直に・・・、士郎を動揺させることを優先するべきね。

「士郎、これは・・・どうかしら？」

「……正直、自分でも恥ずかしい。  
だが、……よし！  
少し効果があったようね。」

「……っ！……それは想い人が出来たときにも見せるべき  
だな」

「一瞬だが、顔色が僅かに変わった。  
それに、言葉も少し詰まった。」

「この調子でいくわよ！」

結局、……自身への損害も大きかったが、捨て身な作戦は効果も  
上々だった。

S I D E 華琳out

「ああ、楽しかった」

「……それは良かった。……でなければ、私の苦勞は……」

「……何故わざわざ、あのような下着を選ぶのだ？  
……理由は分かるが、……あまり分かりたくない。  
そこまで俺をからかいたかったのか……。」

「あら、そんなに私といるのは疲れる？」

「あまりに華琳が綺麗なものだから、それに気疲れしてしまっ  
てな。  
ああ、気にしなくていい。私も楽しんだ」

終始いつものバランスを崩された精神状態もようやく回復した。



同時に反撃を試みることにした。

「……………。あら、嬉しいことを言ってくれるわね。それじゃあ、機会があったら頼むことにするわ」

……………手強いな。  
すぐに切り返したか。

「華琳さま。こちらの買い物も終わりました」

どうやら春蘭の買い物も終わったようだ。

「で、春蘭はちゃんと買ったのかしら？」

「もちろんです。三枚ひと組の……………」

「……………秋蘭？」

「は。全身全霊をもって阻止いたしました」

「結構」

……………春蘭。

それを買おうとするのは女性としてどうかと思っぞ。

「……………？良く分かりませんが、それは秋蘭に止められたので、秋蘭に選んでももらいました」

「それは、ちゃんと買ったとは言わないでしょう」

「はあ……………」

「今度は士郎にでも選んでもらいなさい」

華琳は聞き捨てならないことを言った。

「……………悪いが、私では力不足だ。秋蘭のような慣れ親しんだ者

以外には荷が重い」

「なら、慣れる必要があるわね。幸い警備隊の仕事は終わったでしょっ?」

まずい。

「悪いがしご」書類は明後日まででいいわ」・・・分かった」

・・・このあと、さらに二件回ったことを追記する。

これはいつもより少しハードな、正義の味方の仕官記録における一日である。

## 第五話：黄巾党討伐（前篇）

「……………というわけです」

その日の朝議も、暴徒たちの鎮圧から戻ってきた春蘭の報告で始まった。

「そう……………やはり、黄色い布が」

「こちらの暴徒達も同じ布を持っておりました」

秋蘭も続けて報告した。

ここ最近増えてきた、謎の暴徒たち。

各々黄色い布を身に付けた彼らは、何の予兆もなく現れては暴れ、俺達にあっさりと鎮圧されていく。

「桂花。そちらはどうだった？」

「は。面識のある諸侯に連絡を取ってみましたが、……………どこも対応に手を焼いているようです」

「具体的には？」

「……………ここ、それからこちらも」

地図の上に丸石が置かれていく。

「それと、一団の首魁の名前は張角というらしいですが……………正体は全くの不明だそうです」

「正体不明？」

「捕らえた賊を尋問しても、誰一人として話さなかったとか」

「土郎は何か気付いたことはある？」

「……とりあえず、黄色い布という共通点から黄巾党と呼ぶとして、

「デモ」に似ている気がするな」

……過去の経験から考えると。

「「でも」とはなんなの？」

「そうだな……、政治などに不満を持った民衆たちが、それを主張する集団示威行動のことだ。社会不満が民衆に溜まっている状況下では、

無秩序に集まった結果として暴動に発展する傾向も強い」

「……まさに今の状況というわけね」

「問題なのは無秩序に集まったせいで、集団の目的がぶれてしまう場合だ」

……情報伝達技術が拙いこの時代なら起こりうる。

そうだと本当に面倒になる。

「どういうこと？」

「無秩序なわけだから集団としての意思が統一されず、それぞれが好き勝手にやるかも知れないということだ。その結果、誰も制御しきれなくなる」

まして、乱世の時代だ。

利用しようとしたり、便乗したりする悪党は必ずいるだろう。

「……そうだとすると、対処が面倒ね」

「まあ、似ているだけで、同一ではないだろう。

だが、……制御しきれなくなる可能性があると考えていいと思う

「が」  
「とにかく、まずは情報収集ね。その張角という輩の正体も確かめないと・・・」

その時、慌てて一人の兵士が入ってきた。

「会議中失礼いたします！」

「何事だ！」

春蘭が問いただした。

「はっ！南西の村で、新たな暴徒が発生したと報告がありました！また、黄色い布です！」

言い終わった時には、既に全員の表情は真剣になる。

「休む暇もないわね。・・・さて、情報源がさっそく現われてくれなければ。」

今度は誰が言ってくれるのかしら？」

「はいっ！ボクが行きます！」

「いや、私が行こう」

俺と季衣の言葉が重なった。

「あなた達はここ最近働き過ぎよ。今回は休んでもらうわ」

「華琳さま！ボクはボクの村みたいに困っている村を助けたいんですよ・・・！」

「・・・正義の味方を名乗る以上見過ごせない時がある」

俺達二人の言葉に華琳は言う。

「あなた達の心はとても貴いものだけれど、……無茶を頼んで体を壊しては、

元も子もないわよ」

「無茶なんかじゃ……ないです」

「無茶には慣れていてるのでね、体が壊れる限界は超えんさ」

反論に対し華琳は言う。

「そうね。一つの無茶で、あなた達の目の前にいる百の民は救えるかもしれない。

けれどそれは、その先救えるはずの何万という民を見過ごす事に繋がることもある。

……わかるかしら？」

……華琳の言葉はかつて戦場でイリヤに言われた言葉を連想させた。

『……シロウが死んだら、誰がこの先の大勢の人達を救うの？  
彼らは救わなくて良いというの？』

『だからって、彼らを見殺しにしていいわけがない！……俺は行く！』

……俺の反論は次の言葉に黙らされた。

『シロウ！偶には人に頼りなさい！私はこの人たちを見殺しにするなんて言っていないわ！

彼らも救うし、この先の大勢も救うの。今ここには士郎以外に行動できるものがある。』

時には無茶も必要だけど、少なくとも今ではないわ。』

それは記憶に刻まれた想いの一つ

S I D E 華琳

「だったらその百の民は見殺しにするんですか！」

季衣の言葉に私は怒鳴った。

「するわけ無いでしょう！」

「………っ！」

私の声に土郎以外が身を縮ませる。

……土郎だけはどこか呆然としている。

だが、今は言うべきことを言おう。

「今日の百人も助けるし、明日の万人も助けて見せるわ。

その為に必要と判断すれば、無理でも何でも遠慮なく使ってあげる。

……けれど今はまだ、その時ではないの」

「季衣。お前が休んでいる時は、わたしが代わりにその百の民を救ってやる。

だから、今は休め」

春蘭が慰めた。

「ううー……」

「季衣、ここは私たちの負けだ」

「……兄ちゃん？」

士郎はひどく嬉しそうな雰囲気です。季衣に言った。

「士郎、あなたは文句を言わないのね」

正直、急に黙り込んだことが気になる。

……嬉しそうなもの。

「いや、むしろ礼を言いたい。(……イリヤに怒られたのにな。

まったく、姉の言葉を蔑ろにするところだった。いつまで経っても出来ない弟だよ)」

後に言った言葉は咳くような小声だったが、私はなんとか聞き取ることができた。

……イリヤ。……今の言葉からすると【イリヤ】は士郎の……。

士郎にとってそれはどれだけ大切な想いなのだろうか？

……それは、彼の根幹に関わる想いなのかもしれない。

……セイバーに勝るとも劣らない大切な……。

「随分、嬉しそうですね？」

私は自分の思考を気付かれないように会話を続けた。

「なにしろ、あそこまで見事なたんか啖呵を聞いたのでね。



華琳、君に仕えて良かったと改めて思ったよ」

士郎の言葉と笑みに私の心臓が跳ねた。

・・・自分でも顔が赤くなつたのがわかる。

だけど、ここで黙り込む私ではない。

「なら、私のために全てを捧げてみる？」

「それは魅力的だな。だが今の私には荷が重いようだ。

華琳に心から捧げて欲しいと思わせられるまで止めておこう」

流石に一筋縄ではいかないようね。

「なら、私はあなたが自分からどうしても捧げたいと思わせるようにするとしましょう」

・・・私は素直ではない。

うすうす感じている。

この気持ちが本物かもしれないと。

念のため、自分のものになるよう直接的に言うべきなのかもしれない。

だが、今はこの関係が心地良い。

いつかその時が来るまでは、この関係を楽しもうと思った。

S I D E 華琳 e n d

「桂花。編成を決めなさい」

「御意。・・・では秋蘭。今回の件、あなたが行ってちょうだい」

話し合いが再開された。

・・・華琳との会話の間、睨んでくる桂花の視線が痛かったが。

「なにっ！この流れだと、どう考えても私だろう！どうして秋蘭が出てくる！」

「今回の出勤は、戦闘よりも情報収集が大切になってくると、華琳さまもおっしゃたでしょう。出来る？あなたに」

無理だな。

「ぐ・・・っ」

「決まりね。秋蘭。くれぐれも情報収集は入念にきなさい」

「は。ではすぐに兵を集め、出立致します」

「秋蘭さま！」

「どうした。私も華琳さまや姉者と同じ気持ちだが」

「そうじゃなくなつて・・・。あの・・・ボクの方まで、よろしくおねがいしますっ！」

その季衣の言葉に対し、秋蘭は

「ふ・・・うむ。お主の想い、しかと受け取った。任せておけ」  
微笑し言った。

秋蘭達の出発を見送ろうとする季衣の姿を見つけ、俺は城壁の上にあがった。

「隣に座っていいか？」

「あ、兄ちゃん・・・」

「……やはり気にしているのか？」

「……兄ちゃんは どうして納得したの？  
ボク全然疲れてないから納得できないよ」

落ち込んでる季衣に俺は昔話をすることにした。

「……あるところに一人の男がいました」

「兄ちゃん？」

「男は馬鹿で自分の限界が分かっていますませんでした。  
いつでも限界を超えて無理や無茶ばかりするものだから、皆に迷惑  
をかけてしまいます。」

あるときは、少女を守ろうと死にかけました。

あるときは、助けようとした相手に助けられました。

けれど、男は馬鹿だからこりません。

そのせいで、皆に迷惑をかけたのに。

ある日、男の姉が言いました。

何故、そんなに無茶するのかと。

男は言いました。

救いたいからと。

姉は怒りました。

何故、人に頼らないと。

姉は周りにいた人たちと協力して男より上手く救いました。

姉は言いました。

「無茶や無理すべき時はあるけれど、一人で全てを抱えるな。」

「一人で出来ないことも、皆なら出来ることがある。」

「本当に救いたいのなら、人を頼ることも覚えなさい。」

男は無理や無茶全てを無くせませんでした、

必要な無理や無茶だけをするようになりました」

「……」

「さて、季衣。今の君は秋蘭たち以上に皆を助けられるか？」

「……ボクはボクの我がままで皆に迷惑をかけようとしたんだね」

「その想いは間違いではない。ただ、一人ではないことを忘れるな」  
そう言って、俺は季衣の頭をぐりぐりと撫でた。

「……兄ちゃん、さっきの話の男って兄ちゃんのこと？」

「さて、誰だろうな？」

「ずるいよー。ちゃんと答えてよ」

「……そうだな、いつか必ず教えよう」

「うん、約束だよ」

季衣はそういうと、城壁の上に上がり歌を歌い始めた。

「……ほお」

上手いわけではないが、聞いているだけで嬉しくなるような歌声だ。

「良い歌だな。何という歌なんだ？」

「さあ？ちよつと前に、街で歌ってた旅芸人さんの歌なんだけれど……」

確か、名前は張角……」

「なんだとっ!？」

「あっ!兄ちゃん!」

「すぐ華琳に報告するぞ!」

その日の晩遅くに、討伐から戻った秋蘭を含めた主要メンバーが集められ、

緊急報告会が開かれた。

「その旅芸人の張角という娘が、黄巾党の首魁の張角ということで間違いはないようね」

季衣の報告は秋蘭、桂花の裏付けにより確定された。

「正体が分かっただけでも前進ではあるけれど……。  
可能ならば、張角の目的が知りたいわね」

「……歌い手なら周りが暴走している可能性もあるな」

何気ない言葉に熱狂的なファンなら反応することがある。

……だが、いきなりそこまで大量のファンが付くものか？

そこまで凄い歌い手なら少しは以前から聞いててもおかしくないはずだが。

「だとしたら余計タチが悪いわ。大陸制覇の野望でも持つてくれていた方が、

遠慮なく叩き潰せるのだけれど。

夕方に、都から「早急に黄巾の賊徒を平定せよ」と軍令が届いたのだし」

……ここまで、大騒ぎになるまで動かないようでは……。

この国はもう長く持たないな。

……さて、どこまで俺の知る歴史と同じ流れだろうか？

並行世界である以上、完全に同一と置いていたら足元を間違いなく掬われるな。

「華琳さまっ！」

「どうしたの、春蘭。兵の準備は終わったの？」

「いえ、それが・・・また件の黄巾の連中が現れたと。それも、今までにない規模だそうです」

・・・集まる前に終わらせられれば良かったんだが。

「・・・そう。一步遅かったということか。春蘭、兵の準備は終わっているの?」

「申し訳ありません」

最後の物資搬入が、明日の夜明けになるそうで・・・、既に兵に休息をとらせています」

「間が悪かったわね・・・。恐らく連中は、いくつかの暴徒が寄り集まっているでしょう。」

今までのようには行かないわよ」

「・・・確かに。それだけの集団が集まった軍団となれば・・・偶然ではなく、必然。指揮官がいるな」

経験上、こういう事に偶然はない。

「仮にいなかったとしても・・・それだけの能力持つ奴は、集団に一人や二人はいるものだ。そいつが必ず指揮官に祭り上げられる」  
「出来れば万全の状態で当たりたくはあるけれど、時間も無いわね。さて、どうするか・・・」

「華琳さま!」

「華琳」

俺と季衣は声をあげた。

「・・・」

「季衣と士郎はしばらく休むことになっただろう！」

その言葉に俺は反論する。

「ああ、だから昼間報告した後、私と季衣は体を十分休めておいた」  
「それに、華琳さまはおっしゃいましたよね！無理すべき時は、ボク達に無理してもらって！それに百人の民も見捨てないって！」

「・・・そうね。その通りだわ」

華琳は了承した。

「春蘭。すぐに出せる部隊はある？」

「は。当直の隊と、最終確認をさせている隊はまだ残っているはずですが・・・」

「士郎、季衣。それらを率いて、先発隊としてすぐに出発なさい」

「了解した！」

「はいっ！」

華琳は続ける。

「撤退の判断は士郎に任せるから。すぐに本隊も追い付くから無理しないように」

ならば、時間を稼ぐ戦い方をすべきだな。

「承知した」

こうして、華琳はそれぞれに指示を出し解散となり、俺と季衣は準

備を早々に済ませ、  
出発した。

こうして正義の味方は戦場へ行く。



## 第五話：黄巾党討伐（中篇）

「季衣、現在の封鎖状況は？」

「西側の大通り、三つ目の防柵まで破られました！」

先発隊として黄巾党と戦っていた俺達はあまりの数の多さに厳しい状況だった。

そんな中、義勇軍として立ち上がった者達と合流出来たのは、基本的に運が悪い俺としては幸運だったと言えない。おかげでまだ持ちこたえている。

俺は使わずにおきたかった弓を最大限に利用して敵を倒していく。

「はっ……！」

放れたれた五本の矢は、

遠くで防柵を壊そうとしていた者たちを確実に射抜く。

「……兄ちゃん、どうして今まで弓使わなかったの？」

「……使うに足る時が無くてな。手札は適切な時に適切な物を切ることになっている。」

今回の防衛のようにな」

俺は話しながらも矢を放つ。

「おまけにそんな道術使えたんだ」

投影を見て季衣は文句を重ねる。

「そうは言っても普段は役に立たなくてね。・・・作り置きする」とができないからな」

そう。

今の制限付きの投影では、投影物を長期存続させるのは酷く疲れる。干将・莫耶を長期存続できるよう投影したときは疲労で倒れそうになった。

おかげで途中でしばらく休まざる負えなかった。

故に基本的には使い捨てでの使用が限界だ。

通常の仕事にさし障る。

・・・やはり、医者を探す必要があるな。

「けど、矢がいくらでも放てるのは便利だと思う」

「いくらでもないが、かなり便利なのは事実だな」

さらに四本の矢を放つ。

「それはともかく、防柵はあと二つか。どのくらい保ちそうだ？李典。」

私見では一刻が精々と思うが」

義勇軍の一人である少女に聞いた。

・・・夏侯惇人形を入手したあの少女とこうして共闘することになるとは。

こういうのを縁があるというのだろうか。

「せやなあ・・・。師匠と同じ意見や」

「やはり微妙なところだな。皆が間に合えば良いのだが・・・。

ところで李典、師匠は止めて欲しいのだが・・・」

「いやだつて、夏侯惇人形作つたん師匠なんやつて？子供から聞いて確認したんや。」

あれだけのもん作る人を師匠て呼ばずに誰を師匠て呼ぶんや？」

「……………」

…………諦めるしかないか。

「しかし、衛宮さまがいなければ、我々だけではここまで耐えることは出来ませんでした。」

ありがとうございます」

体中に傷跡を持つ義勇軍の少女、楽進は礼を述べてきた。

「お互い様だ。君たちがいなければ、敗走していたところだった」

「いえ、それも衛宮さまの指揮があつてのこと。いざとなれば、後のことはお任せします。」

自分が討つて出て……………」

その言葉に俺は、

「ふざけるな！！」

怒声を上げた。

「……………」

「…………命を賭けることはいつでも出来る。大切なのは最後まで足掻くことだ。」

…………簡単に命を捨てることは絶対に許さん」

…………まったく、人のことを偉そうに言えはしないのにな。

まあ、ここは大目に見てもらおう。

「そつだよ。今日はぜつたい春蘭さま達が助けに来てくれるんだから、

最後まで頑張つて守りきらないと！」

「……せやせや。突っ込んで犬死にしても、誰も褒めてくれへんよ」

「……うむむ」

「……まだ納得できないようだ。

「今日百人の民を助けるために死んじゃつたら、

その先助けられる何万の民を見捨てることになるんだよ。わかつた？」

「……肝に銘じておきます」

俺は季衣の言葉に笑みを浮かべる。

「あ、何がおかしいの、兄ちゃん！」

「なに、季衣の成長が嬉しくてな」

そついつて、俺は季衣の頭を撫で回した。

「……もう、あまり子どもあつかいしないでよ」

「……そんな嬉しそうな顔では説得力ないぞ？  
む、まずいな。」

「衛宮さまー！東側の防壁が破られたのー。向こうの防壁は、あと一つしかないのー！」

義勇軍の一人、干禁が報告した。

「ああ、確認した！しばらくそちらに矢を放ち時間を稼ぐ、西側は  
防御部隊に任せ、  
残る全員で東の侵入を押しとどめる！」

千里眼で状況を判断し、俺は指示を出した。  
さて、ここからが正念場だ。

気合を入れ直したのだが、

・・・どうやら正念場はこないようだな。

「報告です！街の外に大きな砂煙！大部隊の行軍のようです！」  
「なんやて！」

「えー・・・また誰か来たの？」

「いや、旗印は曹と夏侯！味方だ！攻勢に出るぞ！」

俺達は味方に合わせて出撃した。

味方本隊の軍勢に浮足立った敵はもろかった。

数だけを頼りに戦っていた以上、数に勝られた話にならないのは当然だ。

「士郎！季衣！無事かつ！」

「危ないところだったが、問題ない」

「春蘭さまー！助かりましたっ！」

「二人とも無事で何よりだわ。損害は・・・大きかったようね」

確かに街自体の損害は大きかった。  
だが、真に守るべきものは守れた。

「確かに。だが、彼女たちのおかげで、最小限の損害で済んだ。  
一番守るべき住人は全員無事だ」  
「・・・彼女らは？」

その言葉に楽進が答える。

「・・・我らは大梁義勇軍。黄巾党の暴乱に抵抗するため、  
こうして兵を挙げたのですが・・・」

「「「あー」」」

三人の声が上がった。

「・・・何よ、一体」

「・・・さあ、私も聞きたい。李典なら華琳も視察であつたはずだ  
が。

絡繰を置いていたカゴ屋の少女だ」

「・・・思い出したわ。士郎に質問攻めをしていた子ね。どうした  
の、こんな所で」

「ウチも大梁義勇軍の一員なんよ。そっか・・・あの時の姉さんが、  
陳留の州牧さまやったんやね・・・」

俺は干禁に質問することにした。

「干禁はどうしたんだ？」

「ええとねー、前に服屋でむぐぐ」

「（そ、それは内緒にしておいてくれっ！）」

「（むぐぐ・・・んー？よくわからないけど、内緒にしとけばいいの？」

わかつたの・・・）」

「……残念だが、俺には分かった。  
まあ、黙っていてやるう。」

「どうしたんですか？春蘭さま」  
「い、いや、何でもないつ。何でも！」

「……で、その義勇軍が？」

「はい。黄巾の賊がまさかあれだけの規模になるとは思いもせず、  
こうして衛宮さまに助けをいただいている次第……」

「そう。己の実力を見誤ったことはともかくとして……  
街を守りたいというその心がけは大したものね」

「面目次第もございません」

「とはいえ、あなた達がいなければ、私は大切な将を失うところだ  
つたわ。」

「士郎と季衣を助けてくれてありがとう」

「はっ」

そこで、俺は華琳に提案する。

「華琳、彼女らを部下にしてやってくれないか？」

「義勇軍が私の指揮下に入るとのこと？」

「聞けば、曹操さまもこの国の未来を憂いておられえとのこと。」

「僅かな力ではありますが、その大業にぜひとも我々の力もお加え下  
さいますよう……」

楽進は自分達の意味を告げた。

「……そちらの二人の意見は？」

華琳の問いに二人も同意する。

「士郎。彼女たちの能力は・・・？」

「鍛えればひとかどの将になれるな」

「そう・・・良いでしょう。三人の名は？」

それに三人は答える。

「楽進と申します。真名は凧・・・曹操さまにこの命、お預けいたします」

「李典や。真名の真桜で呼んでくれてもええで。以後よろしゅう」

「干禁なのー。真名は沙和っていうの。よろしくおねがいしますなのー」

「凧、真桜、沙和ね。・・・士郎」

「ふむ？」

「さしあたりあなたたち三人は、士郎に見させます。別段の指揮がある時を除いては、

彼の指揮に従うように」

その言葉に俺は反論する。

「華琳。客将でしかない私に任せるのはどうかと思うが？」

「そうですね。なんでこんなのに、部下をお付けになるんですか・・・

「！」  
「・・・・・・・・」

・・・今まで静かで良かったんだがな。

それにしても・・・桂花に言われるのは少々釈然としない。

「任務ご苦労さま、桂花。で、なんの話だったかしら？」



「衛宮のことです！こんな唐変林に華琳さまの貴重な部下を預けるなど……！」

「あら、士郎なら上手く活用してみせると思っけれど。あなた達は どう思うっ？」

華琳の問いに三人は口々に言う。

「見事な指揮でした。衛宮さまなら文句はありません」

「同じくや。師匠が上司なら色々学べそうやし」

「同じくなのー。すごい弓と道術だったのー」

「……仕方がないとはいえ、随分投影したからな。いつまでも完全には隠せないか。」

「……師匠というのも気になるけど、士郎、あなた道士だったの？」

「……いや、少し変わった道術を使えるだけだ」

「何ができるの？」

「一時的に仮初めの矢を作れる。」

使い捨てで作り置き出来ないから、矢を持ち運ぶ必要がないくらいにしか意味がない」

その言葉に秋蘭が反応する。

「……矢を取る動作を省ける以上、弓使いとしては重宝すると思うが？」

「……そうだな」

万全な時と比較してしまうと、どうしても見劣りしてしまう。

「他には？」

流石だな。

まだ隠していることがあるか確認するか。

「今の私に出来るのはそれぐらいだ」

「……今の」あなたはそれ「ぐらい」ね。まあ、追及はしないで上げる。

とにかく三人はあなたに付けるから」

……華琳は気付いていて黙ってくれるみたいだな。代わりに譲歩しろということか。

こうして、俺に三人の部下が付けられた。

-----

「さて、黄巾党に対しこれからどうするかだけど……。大軍となった上、盗賊団やそれなりの指導者と結びついて組織としてまとまりつつある。誰か意見はある？」

……旅芸人という以上基本的な拠点をもたないだろうが、……大軍になり始めている以上、食糧の問題があるはず。なら……。

「華琳。」

「なにかしら士郎？」

「物資を探し出し叩くことを提案しようと思うが」「良いわね。その案使わせて貰うわ」

皆が納得する中、季衣と春蘭だけ取り残される。

「どうということだ？」

「いくら決まった拠点を持たなくても、大軍なら食糧を貯めておく場所が必要ということだ」

「そつか。お腹がすいたら戦えませんが」

「そういうこと。どこかに、連中の集積地点があるはずよ」

俺達は集積地点を探すべく行動を始める。

そして……。

「ここね」

俺達は見つけ出すと、すぐ軍を率いて駆けつけた。

そこは山奥の古ぼけた砦。

「既に廃棄された砦ね……良い場所を見つけたものだわ」

「敵の本隊は近くに現れた官軍を迎撃しにいつているようです。

残る兵力は一万がせいぜいかと」

「……連中にとつては拾った程度である以上、

あと一日遅かったらもぬけのからになつてたろうな」

「……この流動性こそが一番厄介な所だな。」

「……秋蘭、こちらの兵は？」

「義勇軍と併せて、八千と少々です。向こうはこちらに気付いていませんし、

荷物の搬入で手一杯のようです。今が絶好の機会かと」

「ええ。ならば、一気に攻め落としましょう」

そこで桂花が前に出た。

「華琳さま。一つ、ご提案が」

「何？」

「戦闘終了後、全ての隊は手持ちの軍旗を全て砦に立ててから帰らせてください」

なるほどな。

官軍の狙いもおそらくここである以上、宣伝効果が期待できる。

「・・・面白いわね。その案、採用しましょう。ただし、作戦の趣旨を違えないこと。」

狙うは敵の守備隊と、糧食を一つ残らず焼き尽くすことよ。いいわね

「はっ！」

「あ・・・華琳さま？」

「何？沙和」

「その食糧つて・・・さっきの街に持っていつちゃ、ダメなの？」

・・・それがどういう事態を招くか俺には分かる。それが悪い方向にしか働かないことを。

「・・・ダメよ。糧食は全て焼き尽くしなさい」

「どうしてなの・・・？」

・・・仮にも上司となり、真名を預かった以上俺が教えるべきだな。

「・・・一つは華琳の風評が傷つく。下賤な賊から食糧を強奪して食べたと。」

それにより、救えたはずの者が救えなくなる」

「けど……！」

「もう一つ、奪った食糧を街に持っていけば、今度はその街が黄巾党の復讐対象になる。」

「それでは本末転倒でしかない」

「……あ」

確かにもつたないが、それで人を危機にさらせない。

「あの街には警護の部隊と糧食を送っているわ。それで復興の準備は整うはず。」

華琳さまはちゃんと考えておられるのだから……安心なさい」

「そういうこと。糧食は全て焼くのよ。米一粒たりとも持ち帰ることは許さない。」

それがあの街を守るためだと知りなさい。いいわね？」

「分かったの……」

……まあ、頭では分かったが、感情が納得してないってところだな。

「なら、これで軍議は解散とします。先鋒は春蘭に任せるわ。」

いいわね？春蘭」

「はっ！お任せください！」

「なら、この戦をもって、大陸の全てに曹孟徳の名を響き渡らせるわよ。」

我が覇道はここより始まる！各員、奮励努力せよ！」

軍議も終わり、部隊の配置となった。

俺は先の戦で見た三人の戦い方に合わせて兵を再配置することにし、その終了報告を待つだけとなった。

「隊長。楽進隊、布陣完了しました！」

「承知した」

・・・それにしても。

今までも感じていたが、少女たちを戦場に出すのは抵抗感がある。彼女たちは覚悟を持ち、相応の実力を持つ以上感傷でしかないが。

「・・・隊長？」

「ん、どうした？何か問題があったか？」

あつたのならすぐ行動しなければ。

「い、いえ。隊長の表情が暗く感じたものですから」

「・・・いや、よく教えてくれた、凧。礼を言おう。上に立つ者が暗くては士気にかかわる。

私もまだまだ未熟だな」

「はっ。ありがとうございます！・・・暗かった理由をお聞きしてもいいでしょうか？」

・・・さて、どうするか？

話しても特に問題はないか。

「・・・ただの感傷だ。どうも、君たちのような少女を戦場に出すことに抵抗感があつてな。

安心しろ。それに流されたりはしない」

「ですが、我らは望んでここにいますから気にする必要など・・・」

「ああ、承知している。これは私の性根の問題でな・・・自分で甘い筋違いと思うが、それを消すことは許容できなくてな」

「何や何や。なに、話しとるん」

「ずるーい！布陣終わったんだから、わたしも混ぜてなのー！」

どうやら他の二人も終わったようだな。

「なに、たわいもない無駄話だ。それより、布陣が完了したのなら持ち場につけ。

そろそろ頃合いになる」

布陣完了の報告を華琳に出した後、すぐに春蘭の声が辺りに響く。

「銅鑼を鳴らせ！鬨の声を上げろ！追い剥ぐ事しか知らない盗人と、威を借る官軍に、

我らの名を知らしめてやるのだ！総員、奮闘せよ！突撃いいいいっ  
！」

不意を打たれた敵軍は混乱から立て直る暇すら持てなかった。

「はあああああっ！」

俺は双剣を振り敵を掃討していく。

弓を隠す必要はなくなったが、

攻め込むときはやはり双剣のほうがりやすい。

「沙和！兵を百連れて右へ回れ。真桜は左方を塞げ！凧は俺の後に  
続き、

撃ちもらした者を掃討せよ！」

「「「はいつ！」「」「」

俺達は城内を確実に掃討し続ける。

「隊長！周囲の掃討、終わりました！」

「了解した！ならば、手薄になっていく北の方へ向かうぞ！」  
「はっ！」

凧、真桜、沙和の三人がいるおかげで俺は格段に楽となった。  
・・・基本的に俺の武は守勢だからな。  
宝具という反則が使えない以上、攻めが甘いのは仕方がない。

俺は敵兵の攻撃をいなし反撃しながら三人に指示を出し、  
三人は指示に従い敵兵を減らしていく。

「とりあえず、これぐらいか」

辺りにはもはや敵兵は居らず、春蘭の声が響くのみ。

「火を放て！糧食を持ち帰ること、まかりならん！持ち帰った者は  
厳罰に処すぞっ！」

春蘭たちの指示で、糧食は庭の中央へ集められ、火を掛けられてい  
く。

こうして俺達は目的を果たした。

-----  
-----

城までの帰り道。

華琳は俺達を集め、簡単な会議らしきものを開いていた。



特に急ぎの用はないが、  
帰ったら片付けに専念してすぐ休めるようにという配慮だろう。  
華琳らしい気遣いだ。

「作戦は大成功でしたね、華琳さま！」

「ええ。皆もご苦勞様。特に凧、真桜、沙和。初めての参戦で、見  
事な働きだったわ」

三人は華琳の言葉に礼を言った。

「さしあたり、これでこの辺りの連中を牽制することが出来たはず  
だけれど・・・」

「はい。しばらくは大きな動きは出来ないでしょう。

ただ、もともと本拠地を持たない連中のこと。

今回の攻撃も、時間稼ぎにしかならないはずです」

「でしょうね。だから、連中の動きが鈍くなった今のうちに、  
連中の本隊の動きを掴む必要があるわ」

・・・だが本拠地を持たない以上時間がかかるな。

「地道に情報を集めるしかないな」

「ええ。補給線が復活すれば、優先順位の高い順に補給を回してい  
くでしょう。

しばらくは小規模な討伐と情報収集が続くでしょうけれど、ここで  
の働きで、

黄巾を私たちが倒せるかどうかが決まると言っていていいわ。

皆、一層の努力奮闘を期待する！以上！」

「ついでに黄巾党との緒戦は幕を下ろす

## 正義の味方の観察記録【桂花編】

「……くくくつ、あの男に自分の立場をわきまえさせてやるんだから」

私は今、憎きあの男、衛宮士郎の弱点を探すために観察をしている。

あの男は最近あまりにも目に余る。

皆に認められ、華琳さまの貴重な部下を配下にし、あまつさえ華琳さまと親しげに話す。

あの男に吠え面かかせてあげると考えたのは数日前のこと。

……だがアイツのことを冷静に考えると、それがどれだけ難しいか思い至った。

……欠点が思いつかないのだ。

武官としても文官としても優秀であり、多芸に秀でる。

……いや、そもそもアイツのことを大して知らない。

そこで、奴を観察して弱点を探ることにした。

現在、夜明け前で正直眠いが堪える。

そう全てはアイツの弱点を見つけるため！

アイツは的に向かって矢を放っている。

前は森で射ていたらしいが、弓を解禁したのでここでするようになった。

……あの戦の後、華琳さまからアイツの弓の事を聞いた。

……正直悔っていた。

さつきから見ているけど、……的からじゃなくて「矢」から外さないって何よ？

また、アイツが放つ矢は前に放った矢に命中した。  
・・・正確にもほどがある。  
思わず殺気を込めた視線を向けてしまった。

次の瞬間、奴は私に向って矢を放った！  
・・・かなりの距離を置き、岩を目隠しとした上で岩の上から覗いていたのに。

S I D E 士郎

「む、おかしい。確かに殺気を感じたのだが？」

視線をその方向へ向けるが岩や木があるだけだ。

「・・・気のせいか」

調整を再開することにした。

S I D E 士郎 e n d

・・・痛い・・・。

どうやら反射的に岩から手を離していたらしい。

おかげで岩の上から落ちて腰を打ったようだ。

ふと、自分の愛用の帽子が無い事に気づく。

辺りを探すこと一刻。

ようやく見つけた。

・・・矢で木に縫いとめられたそれを。

「・・・アイツ、絶対に許さない！」

私は現在、警備隊本部の厨房に侵入している。  
観察だけでは生温い。

前日に衛兵に持ってこさせた大量の蛇を厨房に仕込む。

「くくくっ！これで料理どころではなくなるわね！」

そして、外でアイツが慌てふためくの待つことにした。  
のだが、

「・・・桂花、こんな所でどうした？」

・・・よりによって奴に見つかるなんて。

・・・いや、それより何故平然としているの？

厨房の蛇は全て逃げてしまったの？

とにかく言い分けしなくては！

「・・・あなたの料理が上手いと聞いたから食べに来たの」

「ふむ、珍しいな。・・・本来なら断るが、幸い食材が手に入った  
おかげで余分にある。

食べていくといい」

そして私は付いて行った。

・・・そう、ついに行ってしまった。

気付くべきだった。

食材という言葉に・・・。

「それでは食べるといい」

出された料理はあまり見たことのない調理だった。



あれから、私は昼まで目を覚まさなかった。

・・・気分は最悪だ。

・・・よりよって、・・・いや考えちゃダメ、忘れなきゃ！

私は当初の目的である観察に集中することにした。

アイツは現在街の警備をしている。

私は一定の距離をおいて覗いている。

そうして後をつけているとなにやら騒ぎが・・・。

S I D E 士郎

「待てえーいつ！！盗人め！！」

「よせ、凧！！」

逃げる盗人にしびれを切らした凧は気弾を放つ。

気弾は気を練って放つかなりの威力で範囲も広い攻撃だ。

こんな所で使ったらっ！

「ちいつ！」

俺はとっさに干将・莫耶で上へ打ち上げた。

S I D E 士郎 e n d

ん、なにかしら？

空から音が・・・。

見上げると・・・熱い気の塊が・・・って！

とっさに避けようとしたが、文官でしかない私にはかわしきれず、余波で吹き飛び気を失った。

「アイツめ、アイツめ、許さない、許さないんだからっつっつ！！」

・・・その後、気絶から覚めた私は凧から説明を受けた。アイツが打ち上げた凧の気弾で私は気絶したらしい。アイツは被害の出た街の住人に謝りに行っているそうだが、私に謝りに来ないアイツを許す気はない。

現在、私はヤツに痛い目を見せるための罠を作っている。弱点を探すなんて面倒なことをせず、最初からこうしていれば良かった。

・・・ここまで精巧に作ればヤツも引つかかるはず！

私は木陰に潜んだ。

S I D E 士郎

「約束に遅れてすまなかつたな、華琳」  
「話は聞いているからいいわ。それに、その分付き合ってもらったのだから」

俺は華琳の買い物に付き合った後、城へと帰ってきた。本来は華琳の道案内だけだったのだが、・・・あの事故で時間に遅れたため、侘びとして買い物にも付き合った。

帰ってすることを考えていると、俺は違和感を感じた。



かつて慣れ親しんだ感覚。

・・・地面か？

「同調・開始<トレース・オン>」

・・・やはり罨か。

「華琳。こちらに寄った方がいい」

「え？わざわざ寄る必要なんて・・・なっ!？」

まずい！

「危ない！」

俺は足を滑らせた華琳に手を伸ばし、落ちる前に引つ張り上げる。仕掛けがあつたのか、縄がくぼんだ穴から飛び出して大木の影にぶら下がった。

「なにこれ・・・落とし穴？」

「大丈夫か、華琳。・・・怪我はないようだな」

「ええ、ありがとう。おかげで助かったわ」

「こんなところに落とし穴を仕掛けるとは」

・・・予想ではおそろく・・・。

SIDE 士郎end

「おのれ衛宮士郎！華琳さまが罨にはまるのを待つて助けて、好意を得ようとするなんて、  
なんて卑劣で浅ましいヤツなの！」

私の罠を利用するなんて！

どこまで私を虚仮にすれば気が済むの！？

「・・・やれやれ、この罠は君が仕掛けたのかね？」

朝から何か変だと思っていたが悪戯は感心しないな

「うるさい！朝から今まで私にひどい目を見せておいて、白々しい！」

「・・・例をあげてくれないか？」

人をあんな目に遭わせといてしらを切るつもりなの！？

「早朝は矢で帽子に穴を空け、朝は蛇を食わせ、昼は気弾に巻き込んだでしょうが！！」

「・・・なるほど。・・・まあ百歩譲って、私以外にまで迷惑をかけるんでもらいたいかが？」

う、確かに華琳さまに迷惑をかけてしまったけど・・・。

「わ、私は悪くないわ！あんたが引つ掛からないのが悪いんだから！そうよ、そうに決まってるわ」

「・・・やれやれ。それが軍師ともあろう者の言い草かね？」

ぬけぬけと・・・！！

「うるさい！そもそも、なんであんたが華琳さまと一緒に歩いて・・・

・・・

「おだまりなさい！」

「ひっ！？」

か、華琳さま！？  
す、凄く怒ってらっしやる！？

「そう……この罾を作ったのはあなただったのね、桂花」  
「あ、いや……えっと……その……」

な、なんとか誤魔化さないと！！

「あ・な・た・な・の・ね」

ひうつ！？

……無理みたい……。

「……はい」

「そう……軍師ともあろう者が敵ではなく、  
自分の主を罾にかけるなんて……いい度胸ね」

「そ、そんなつもりはなかったんです！

ただ、たまたま華琳さまが罾のあるところに足を踏み入れただけで……」

「何故、自分の城に罾があると思うのかしら？」

私がここを歩いてはいけない理由でもあるのかしら？」

「あ……ありません……。」

自分でも顔が青くなっていくのが分かる。

華琳さまの口調は丁寧なのに、身体が凍りつきそうなほど怖く感じる。

私は必死になって打開案を模索する。

「あなたにとっておきのお仕置きが必要なようね。男のお文官たちを呼んで、

代わる代わる質問攻めにさせてやるうかしら」

想像して目の前が真っ暗になった気がした。  
い、いや！

「ひいいいいい！それだけのご勘弁を！そんなことされたら、  
妊娠し過ぎて死んでしまいます！」

「こんなくだらないものを作るような性根は、死んだ方がましだと  
思わない？」

いくら男が嫌いとはいえ、私にこんな辱めを与えた罰は軽くないわ  
よー！

「う、う、ごめんなさいいいいいい！」

私はその場に耐えきれず逃げ出した。

「こらあつ、桂花！待ちなさい！」

「お許しを、華琳さまー！」

逃げながら、私は必死に謝る。

「ぜつつつつつつつつたい、許さない！」

私は小さい身体を最大限に生かして逃げ回るが、確実に追い詰めら  
れていくのが分かる。

「うう、衛宮めー！また、私をハメたなー！覚えてなさいよー！」

私は怨嗟の叫びをあげる。

「……自業自得でしかないだろう」

「なにもかもアンタが悪いー！」

・・・ついに捕まってしまった。

「そんな言い訳、通用しないわよ！」

「ひゃあああああんっ！」

華琳さま、お許しを〜！」

「許すものですか！」

私は華琳さまに尻を日が暮れても叩き続けられた。

・・・これは私による正義の味方の観察記録で、最悪の一日の記録よ。

## 正義の味方の休日記録2

「華琳、この近くに湧き水のような良質の水源はないか？」

「あるにはあるけど、急にそんな事聞くななんてどうしたの？」

「なに。少々、意見の相違があったのでね。証明しなければならなくなったのだよ」

俺は華琳に返答した。

話は数日前に遡る。

「ここや」

「ここが噂の名店か」

「そうや、華琳さまも認めたほどやでー。期待して良いはずや」

「沙和も一度来たけどすごい美味しくて食べ過ぎちゃったのー」

「ならば、期待出来そうですね」

現在時間の空いた俺と凧達は、有名な名店に来ている。

店に入り、それぞれが注文する。

「店主。麻婆豆腐を頼む」

そう俺は注文した。

かつての自分は、泰山製マーボーによるトラウマを払拭すべく上手い麻婆豆腐を作り、探すことを続けた。

結果、トラウマが払拭された今でも、こうして麻婆豆腐を時々食べる。

「何度食べてもあきないの」

「ここの餃子は絶品やな」

「隊長、こちらの回鍋肉も奥が深い」

皆が出てきた料理を絶賛する中、出てきた麻婆豆腐を食べて俺は言った。

「・・・惜しいな・・・」

「どつという意味だ？」

批評が店主に聞かれたらしい。

「言葉通りの意味だが？味付け、火加減など全て完璧に近い。材料もただ一点を除いて良質のものが使われている。

だからこそ、その一点が惜しいと言ったのだ」

「これ以上の麻婆など有りはしない！この道一筋30年、その成果がこの麻婆豆腐だ！」

「硬直した思考の下の30年ではそう思うのも仕方がない。だが私はこれ以上の麻婆豆腐を知っているし、作れもする」

「師匠、麻婆豆腐も作れたん？」

心外なことを真桜は俺に言った。

他の二人も訝しげだ。

「出来ないとは言っていないはずだが？むしろ、得意だ。

今度ここの以上の麻婆豆腐を、そこで意外そうな顔をしている二人共々ご馳走しよう」

「ならば作って貰おうじゃないか！ここで！」

怒りに顔を赤くして店主は叫んだ。

「止めはしない。いずれは越えなければならぬ壁を知る必要が在るだろう。」

少し準備の為の時間を貰うが」

こうして俺はこの店にて麻婆豆腐を作ることになった。

そして、その日がやってきた。

……の……だが……

「……何故、こんな広場に特設厨房を作らなければならぬほど人が集まっているのか、  
解説を頼んでも構わんかね、華琳？」

何故街中の人間の大半が来ているのか、

三日前に指定されていた作る量がとんでもなく増大したのか？

あの場にいなかったはずの華琳に聞いた。

「理由はいくつかあるわ。一つはあの店の味を多くの者が認めていること。」

二つ目に土郎、あなたの存在よ」

「私の？」

「そう、あなたのことを知らない人間は街にいないわ。」

街の治安を守り、常に有言実行、助けられた者は数知れず、美味な異国の料理を作る。

そんなあなただからこそ、あの店を超える麻婆豆腐を作ること二期



待感を持っている」

これだけの人間が俺を認めてくれているというか。

「最後が最大の理由」

そう言つて華琳は俺に木札を渡した。

《衛宮特製麻婆豆腐販売券　あの華琳様が認めた店の味を超えると言つた衛宮の麻婆豆腐をあなたもどうぞ。》・・・と書かれていた。

俺の手の平の中、木札が軋む。

「……………これ作つたの誰だ？」

感情を殺して、俺は聞いた。

「ゴメン、師匠。いやあ、師匠の料理の腕をたくさんの人に見せとつてな」

「嘘なの。何でも、夏侯惇人形の改造費が足りなかったらしいの」

「さ、沙和。な、なんでそれを？」

「……………あれだけ大きな声で呟けば、気づくのは当たり前なの」

俺は出来るだけ優しい声色で話かける。

「そうか。真桜がやってくれたのか。そんな苦勞を・・・てくれた真桜には、

秘伝の麻婆豆腐をだそう」

「ゆ、許してくれるん？」

「許すも何も悪いことをしたと思つたのか？」

「そ、そやな。悪いことしてないもんな」

「私の素直な気持ちを込めた最高の麻婆豆腐を城に帰ったら作る。残さず食べてくれ」

「了解や。それじゃ師匠、よろしくお願いしますわ」

俺は流れるかのような動きで効率的に料理をしていく。

大量にあった材料の山もいつしか無くなり、この日のために用意したそれも使い切り、騒がしかった広場もいつしか沈黙が支配した。

そして、

「完成だ」

大量の麻婆豆腐が出来上がった。

最初に現場にいた三人と店主、せして華琳の五人が審査を行うことになった。

「では、食べてくれ」

五人が五人とも口にすると動きを一瞬止めた。

「……美味しい」

「凄いの！こんなの初めてなの！」

「美味い！師匠、一体どうやってこんなん作ったんや？」

「見事ね、士郎。確かにこれと比べたら店主の麻婆豆腐は数段落ちるわ」

四人が誉める中、店主が叫んだ。

「……何故、何故なんだ？ 味付け、火加減ともに私の麻婆豆腐の方が僅かに上だ！

なのに何故、ここまで私の麻婆豆腐が劣るのだ……！」

「豆腐ね。豆腐に絶対的な差があるわ」

「流石に華琳は気づくか。そう、この豆腐は私の手作りだ」

「豆腐？ 豆腐なんかそんなに違うはずが……！」

「食うがいい。そして、気づけ」

俺は残しておいた一丁の冷や奴を出す。

食べて店主も理解したようだ。

「この豆腐は一体？」

「豆腐の味は水が命だ。この国において、良い水は貴重かつ探すのが難しい。

そのことが水の扱いを疎かにさせてしまったようだな」

「く、確かに私の負けだ！」

「だが、問題はそれだけではないだろ？」

「え？」

「君は言ったな？ これ以上のものはないと。

だが、これでも私は全てのことこれ以上はないと思っていない」

「そうか……。私はかつてに自身の限界を決めてしまっていたのだな」

「そうだ。どんな道も終わりはない。終わらせることはできたとしても」

「完敗だ」

清々しい表情を浮かべ店主は言った。

その後、麻婆豆腐は多くのものの舌を唸らせ、豆腐がこの街の特産品となったことは蛇足に過ぎないだろう。

「し、師匠？ これ何や？」

「真桜に食べてもらうための秘伝の泰山製麻婆豆腐だ」

真桜の前には真っ赤なマグマを思わせるソレが置かれている。

「最高の麻婆豆腐じゃ・・・」

「ああ、最高に辛い麻婆豆腐だ」

「許すつて、悪くないつて・・・」

「悪いことをしたと思ったのか聞いたただけだが？」

私は許すとも、悪くないとも言った覚えはないのだが？」

「気持ちを込めるつて・・・！」

「ああ、怒りと殺意を込めて作ったよ」

「な、凧、沙和！」

助けて・・・！」

だが、返事は無情だった。

「ご愁傷様なの」

「隊長、私も食べては行けませんか？」

「ああ、辛党の凧の分も用意した。凧にとっては最高に美味しい麻婆豆腐だ」

「じ、じゃあ私

「残さず食べると言ったはずだが？・・・食べさせてもらいます」

その後、半月の間真桜は麻婆と聞くと体を震えさせ、凧は俺に泰山製麻婆豆腐をねだるので、店主に泰山レシピを渡した。

これは何気ない正義の味方の休日記録における一日である。

## 第五話：黄巾党討伐（後篇）

「……とまあ、そういうわけです」

現在、俺達は黄巾党と戦闘していた官軍の援護に行った春蘭達の報告を聞き終わった。

……話を要約すると、「黄巾党を追って孫策の領地に踏み込んでしまったが、

孫策は黄巾党退治に協力してくれた」ということになる。

それがどういう意味を持つか気付いてない春蘭に対して、華琳はため息を一つついた。

「……呆れた。それで、孫策に借りを作っただまま帰ってきたというの？」

確かに……孫策に借りを作ってしまったのは問題だな。どこかで、借りを返さないと余計に面倒になる。

「え、ええつと……連中の領に逃げ込んだ盗賊の退治は手伝ったのですから、

差し引きで帳尻は……」

「合っていないわよ。他国の領に入る前に黄巾党を片付けておけば、差し引く必要すら無いじゃない」

「それが……私たちが仕掛けた瞬間、ものすごい勢いで逃げられまして……」

今思えば、あれも連中の策略だったのではないかと」

「・・・策略？ 凧？ それは本当なの？」

「わたしに聞けよ！」

・・・ 桂花の疑問はもつともだ。

・・・ だから俺は凧を春蘭と一緒に行かせたのだから。

「す、すみません、自分は官軍の撤退を支援をしていたもので・・・

」

・・・ 春蘭にその手の類の行動は期待できないからな。

「なら、季衣」

「聞けつてば！」

・・・ 悪いが春蘭。

こういう件で春蘭は期待出来ないんだ。

「ええつと・・・。それまでは都の軍を一方的に攻めていたんだけど

・・・ ボクと春蘭さまが攻撃を仕掛けたらばーって撤退していつて・

・・・」

確定だな。

・・・ 春蘭が相手とはいえ、搦め手を使用出来るか。

それが出来る人材が増えると手強くなる。

「華琳さま・・・」

「・・・ええ。春蘭や季衣相手だったとはいえ、

黄巾党はそれだけの作戦を展開できる指揮官を得たことになる。

その将を討てたというのは幸いだっただわね」

だが、人材が増えてきていることに変わりはない。

「・・・これからは面倒になるな」

「ええ。これからは苦戦する事になるでしょうね。」

以後、奴らの相手は気を引き締めるように。特に春蘭と季衣、いいわね！」

「はっ！」

「はい！」

「・・・それから春蘭。その孫策という人物。」

どんな人物だった？確か、江東の虎、孫堅の娘よね」

「はい。風格といい、雰囲気といい、気配といい・・・袁術の食客と名乗っておりますが、

とてもそのようには見えませんでした」

・・・同じ意味の言葉だけを言われてもな。

「そういう難しい言葉を無理に使わなくても良いわ。武人の夏侯惇としては、どうみたの？」

「・・・檻に閉じ込められた獣のような目をしていました。」

袁術とやらの人となりは知りませんが、あれはただの食客で収まる人間では無いでしょう」

・・・なるほど。

なら、俺の知識と同様にいずれは天下に出てくると考えてよさそうだな。

「そう・・・。春蘭、その情報に免じて、この件についての処分は無しにするわ。」

孫策への借りは、いずれ返す機会もあるでしょう」



「……ありがとうございます」

「それでは、他に何か報告すべき意見はある？」

「いえ、春蘭の件で最後です」

「黄巾党はこちらの予測以上の成長を続けているわ。

官軍はあてにならないけれど……私たちの民を連中の好きにさせることは許さない。

いいわね！」

「分かってます！全部、守るんですよね！」

季衣は気合いを入れて言った。

「そうよ。それにもうすぐ、私たちが今までに積み重ねてきた事が実を結ぶはずよ。

それが、奴らの最後になるでしょう」

まあ、手間をかけてきたからな。

「民衆の血も米も、ひと粒たりとて渡さないこと！以上よ！」

そして、その日の軍議は解散となった。

軍議が終わった後、俺と凧は部隊を連れて、情報収集のために郊外の森の道を進んでいる。

こつという地道な作業には真桜や沙和は向いていないため、留守を任せた。

重要な作業をおろそかには出来ないからな。

俺は二人の今までの行動を思い出し、ため息をついた。

「……あいつらの根性は一度叩き直す必要があるな……」

「隊長、どうかしたのですか？」

どうやら俺は小声ではあるが考えを口にしていたようだ。

「いや、なんでも……あるな」

「え？」

俺の目は黄巾を巻いた者達の姿を捉えていた。

「 投影・開始<トレース・オン>」

弓と五本の矢を投影し、標的に目がけて放つ。

「行くぞ、凧！」

「は、はい！全員、周囲を警戒しながら続け！」

士郎と凧が着いた場所には、倒れ伏すした五人の男の姿があった。

矢尻を刃ではなく、ただの鉄の固まりにした結果として、男達は生きていた。

それでも急所を射られたため、気絶していたが。

「……お見事です、隊長！」

「それより誰か縄を持ってきてくれ！」

それ以外の者は敵部隊がいないか確認するため周囲の警戒を継続！」

俺は渡された縄で男達を拘束しながら懐を調べてゆく。

「・・・偵察でしょうか？」

「だとしたら、本隊が近いな・・・む？これは・・・」

俺は見つけた巻物に目を通す。

書かれていたのは少し離れた地域の地図と汚い字。

「集合場所の連絡・・・どうやら連絡兵のようだな」

「これで、敵の主要地点がひとつ分かりますね」

「いや、もつと重要な可能性がある」

「え？」

今まで連絡兵は何回か捕らえたが、どれも口頭でいい加減なモノだった。

にもかかわらず、今回はしっかりと知っている。

考えられる理由は二つ。

上達したか、あるいは・・・。

「いずれにしろ、帰って報告するぞ」

その日の軍議は、俺見つけた連絡文書が最重要課題として取り上げられていた。

「大手柄ね、士郎」

「それは良かった」

「さきほど偵察に出した部隊が帰ってきました。

連中の物資の輸送経路と照らし合わせて検証もしてみました、敵の本隊で間違いないようです」

秋蘭の報告は俺のもうひとつの推測通りだった。そう、大切な情報だからこそしっかりしていたのだ。

「……やはり、張角もいるのか？」

「ああ。張三姉妹の三人が揃っていると報告も入っている」

華琳が念を押す。

「間違いないのね？」

「何と言うか……三人の歌を全員が取り囲んで聞いていて、異様な雰囲気を漂わせていたとか」

「……何かの儀式？」

「詳細は不明です。連中の土気高揚の儀式ではないかというのが、偵察に行った兵の見解ですが」

「まるでライブだな」

自分が行ったことがないが。

「らいぶ？」

「娯楽の一種で、歌い手の歌を聴く集会のようなものだ。私のいた国では、

千人や万人単位の集まりもあった」

「良く分からんな。そんなに集まっては歌声などまともに聞こえんだろう」

「それを可能にするカラクリが存在したのでな。残念ながら、材料の問題で作れないが」

鉄製の精密部品は流石に無いからな。

作れば情報伝達も楽になるのだが。

「そう、残念ね。ともかく、士郎のおかげでこの件は一気にカタが付きそうね。」

動きの激しい連中だから、これは千載一遇の好機と思いなさい。皆、決戦よ！」

「れんほーちゃん。おーなーかーすーいーたー」

ここは黄巾党本隊の天幕。

そこで張角【真名を天和】という少女が張梁【真名を人和】という末妹に文句を言っている。

考えなしな姉の言動に人和は頭痛を抑えている。

「はいはい……。そんなに言わなくても、分かっているわよ」

「人和。わたし、もうこんな所いたくないわよ。ご飯も少ないし。」

お風呂だってちよくちよく入れないし……。何より、ずーっと天幕の中で息が詰まりそう！」

次女の張宝【真名を地和】の言葉に人和は答える。

「それも分かっているわよ。でも仕方ないでしょ……。」

曹操ってヤツに食糧が焼かれちゃたんだから」

「仕方なくないわよ。別の所に行けばいいでしょ。」

今までだって、うるさくなったら他の所に移動していたじゃない」

それが出来ないから人和は苦勞しているのだが。

「……私たちの行動が朝廷に目を付けられたらしくてね。」

大陸中に黄巾党の討伐命令が回っているのよ」

「……はあ？私たち、何もしていないわよ！」

「まわりの連中がね……」

きっかけは天和・地和の言葉だった。

「大陸のみんなに愛されたいのー！」という天和の言葉に、

「大陸獲るわよっ！」と地和が煽った。

その結果としてこの事態を招いた。

二人とも深い考えがあったわけではないが、周りは真面目に考えてしまったのだ。

人和はため息をつく。

「え？じゃあ、今までみたいにいるんな国は回れないの？」

「連中が付いてくると、どうしても大きな動きになってしまうわ。

彼ら連れて県境は越えられない」

「なら、置いていけばいいじゃない」

出来れば楽のだが、出来ないことを人和は承知している。

「できるならとっくにやってるわよ。何度か試してみたけど

……その度に、誰かが寄ってきて……一人来たら、百人来るんだから」

その後、姉二人が言い争う中、増えすぎた取り巻きに人和は頭を悩ますのだった。

俺たち先発隊が偵察を終える頃、敵本隊到着の報告を伝令が持ってきた。

「そうか・・・各隊の報告はまとまったか？」

「ちょうど終わったところやで。連中、かなりグダグダみたいやな」

真桜の言葉に秋蘭はうなずく。

「やはりな・・・。華琳さまの予想通りか。報告を、真桜」

「はいはい。まず、総数は約二十万」

「うはー。ものすごい大軍勢なのー・・・」

「本隊だからな。想定内と言える」

「それって・・・ボク達だけで勝てるんですかね？」

そう、二十万人の全てが戦えれば厳しいだろう。

だが・・・。

「・・・で、真桜。戦えそうなのはどれくらいだ」

「流石やな、師匠は。三万くらいやないかな。武器も食糧も全然足りてるように見えんし。」

おまけに内輪同士の小競り合いも見えたから、指揮系統もバラバラなんちゃうかな？」

華琳の計画通りにいったようだ。

随分前に、デモのように張角にも制御出来なくなると面倒だと言った。

だがそれは、各地にバラバラに分散していたらの話だ。

一か所にまとまってしまえば、制御出来ない以上は烏合の衆に過ぎない。

さらに厄介な流動性も殺せる。

そのために戦闘力を奪った連中を本拠地にまとめて、わざと戦えない頭数だけを大きくする。

「華琳の狙い通りだな」

「ああ。受け入れる本拠地がないのだから陣内に取り込むしかないだろう。」

その結果は、見ての通りだ」

「神出鬼没の大熊も、太り過ぎればただの的、という事ですね。」

その例えに一部の女性陣は嫌そうな顔をした。

・・・まあ、女性なら仕方ない反応だろう。

「それでは始める。華琳さまの本隊に伝令を出せ。皆は予定通りの配置で、

各個攪乱を開始しろ。ただし、張三姉妹にだけは手を出すなよ。以

上、解散！」

華琳は張三姉妹の人を引き付ける魅力に注目しているため、生け捕りを命じている。

俺としても、今ある情報では悪い人間ではなさそうなので文句はない。

俺たちは奇襲を開始した。

弓矢を用いて火矢を放ち、黄巾党は突然の奇襲に混乱する。

指揮系統ができていないため、情報は錯綜し、混乱は深まっていく。いくら兵がようと、統率できる者がいないのなら意味はない。

大軍をまとめる器の有無が決定的な差となりここに示される。



「風。華琳たちの本隊が来たようだ」

大地を揺らして華琳の本隊がその威を示す。

絶妙なタイミングで仕掛けてくるのは見事としか言えない。

「さすが華琳さま。予定通りですね・・・」

一系乱れぬ大軍団の突撃は、混乱の極地にある黄巾党の大集団とは雲泥の差だ。

「なら、私たちも予定通りに行く。季衣と真桜が合流後、左翼へ向かうぞ！」

「はい。後は季衣と真桜が来るのを・・・」

「兄ちゃん！」

「師匠、おまたせー」

タイミングよく二人が来た。

「ちょうど良い時に来たな。二人とも無事だったか？」

「ぜんぜん。」

「なんや、こつちが一方的すぎて悪いくらいやったわ」

「うん。で、華琳さまも来たし、そろそろかなって真桜ちゃん」と

「・・・今回に限らず戦争はいつも後味が悪い。」

だが、明確な【全てを救う】方法がない以上切り捨てるしかない。

「・・・わずかでも明確な可能性があれば、実行するが。」

「・・・いや、あったとしても華琳の下で部下を持つ限りは難し

い。

・・・上に立つとは責任を持つことなのだから。それに、【霸道を妨げない】と誓ってしまったからな。我ながら面倒な事になってしまったと苦笑を洩らす。

「隊長、指示を」

凧の言葉で思考を切り替えた。

「これより我らは本隊に合流し、本隊左翼として攻撃を続行する！ただし張三姉妹は生け捕りにせよ！総員、今までの苦勞を晴らすぞ！」

「応っ！」

「全軍突撃

っ！」

俺はいつものように双剣を振るって敵の両手などを奪い無力化していく。

・・・本当は殺してやったほうが良いのかもしれない。だが、殺さずに済むのならそうすると決めている。運が悪かったと諦めてもらうしかない。

もつとも何割かは殺してしまったが。

戦場では個人に細かな気配りをする余裕はない。

将として戦場にいる以上は、細かな気配りを戦場の動きに向ける必要があるのだから。

「敵右翼が緩んでいるので、さらに圧力をかけるよう季衣に伝令！真桜には前線をこのまま維持するよう伝える！弓兵隊は季衣の部隊の援護を！」

戦場では、一瞬の判断ミスがたくさんの命を喪失させるのだから。

「この辺りまで来れば・・・平気かな」

「もう声もだいぶ小さくなってるしねー。・・・でも、みんなには悪いことしちゃたかなあ？」

「難しい所だけれど・・・正直、ここまでのものになるとは思っていなかったし・・・」

潮時でしようね」

三姉妹は混乱に乗じて逃げ出していた。

「・・・お金ないけどね」

彼女たちに何かを持ち出す余裕は流石になかった。

「う・・・」

「そんなものはまた稼げばいいんだよ。ねー？」

「そう・・・そうよ！また、三人で旅をして、楽しく歌って過ごしましうよよ！」

「で、大陸で一番の・・・」

「そうよ！今度こそ歌で大陸の一番に・・・っ！」

だが、そう都合良くはいかなかった。

「・・・盛り上がっているところを悪いが、張三姉妹だな」

三人は顔を強張らせる。

「大人しく付いてくれば悪いようにはしないが」

「付いて行かなかったら？」

「多少は痛い思いをするが、傷はつけずに捕える。安心しろ」

穏便に済まそうとする中、空気を読まない馬鹿が二人現れた。

「張角さまっ！」

「テムエ！俺達の張宝ちゃんに何をしようとしているんだっ！」

「やれやれ。気概は買うが……」

俺は無言で一人に莫耶の柄を叩きつけ、もう一人に遠心力をつけた蹴りを放った。

「ぐはあっ！」

「がはっ！」

結果、一人はその場に崩れ、もう一人は派手に吹っ飛んだ。

「……諦めましょう、姉さん。……いきなり殺したりはしないのよね？」

「ああ。それは間違いない」

「……ならいいわ。投降しましょう」

その言葉に、残りの二人は悲痛な表情を浮かべる。

「人和……」

「れんほーちゃん……」

こうして俺は三人を本陣へ連れて行った。

そこで話し合い、結果として張三姉妹は華琳の兵力集めに協力することになった。

が、黄巾党成立の事情を聴き出す段階になって、出てきた単語に華琳はひどく反応した。

「あなた達、それをどうしたの！」

「んー。逃げてくるとき、置いてきたの」

「今は灰になっていると思うわ」

「そう・・・、灰にね」

俺は胸騒ぎを感じ、華琳に尋ねた。

「・・・【太平要術】とは一体どんな書なんだ？」

「何故聞くの？」

「・・・許子将が言っていた「運命の書」が気にかかるからだ」

「・・・太平要術は読む者に合わせてその内容を変えろというわ。その内容はその者にとって適したものになるとされる。

私が幼い頃に読んだ時は為政者の在り方や、統治術が書いてあったわ」

その言葉に三姉妹が顔を見合わせ言った。

「そういえば私が読んだ時は有名になる方法だったけど・・・」

「わたしが読んだときはその部分は見つからなかったけど、

舞台上で目立つたための道術がいろいろ書かれてた！その習得方法も！」

「えー？わたしが読んだときは、上手な歌の歌い方が書いてあったよー？」

俺はその書が持つ危険性に気づいた。

「極悪人に太平要術が渡つたら・・・」

「ええ。今回以上に酷いことに成りかねないわ！春蘭、念のためあの陣にもう一度火を！」

・・・「運命の書」は太平要術で間違いなさそうだ。

だとすると、これで本当に終わりだろうか？

・・・嫌な予感は消えない。

「へえ、こんな盗みの方法があるのか」

黄巾党に便乗していた一人の盗賊がいた。

この者は黄巾党の本陣から盗んだ書を読んでいる。

これは未だ止まらない運命を示す一幕

### 正義の味方の休日記録3

「とりあえず、これぐらいが妥協点か・・・」

昼の太陽が照らす庭園にて、俺は休日であることを利用して試作品を完成させた。

「師匠、何してるんや？」

「これは・・・木札？」

「それにしてもたくさんあるのー」

俺が試作品を吟味していると、凧達が現れた。そういえば、三人は午前中の任務だったな。

「ああ、三人か。子供達のために遊具の試作品を作ったところだ」

「この木札がですか？」

「ああ。トランプ・・・意味は切り札という名の遊具だ」

本当は紙で作りたかったが、紙は貴重だからな。

「師匠、ウチらがそれで遊んでみてええやろうか？」

「あ、賛成なのー。どうやって遊ぶのー？」

「こら、二人とも。いきなり、そんなことを言いだしても隊長に迷惑だろ」

俺は二人の提案を検討する。

「……そうだな。実際に使用して問題点を見つけることも必要か。……いいだろう。」

とりあえず、それぞれの札について説明しよう」

カードの説明をした後、基本のババ抜きから始めることにした。

「えい。また、ババなのー!？」

「へへっ、甘いで。」

それぐらいで引つかかったらあか「……あがりです。」って風にな先越された!」

三人は結構盛り上がっている。

先上がった俺は試作品の問題点を考えている。

まず、木札であるため子供には重い。

手に大量に持つ遊びは難しいな。

木目を墨と漆で消したのも重さに拍車をかけているか。

後は……もう少し製作費を抑えなければ。

そのためには……。

「あら、何をしているのかしら?」

「随分と木札があるみたいですが……」

「どっつやら遊戯のようだな」

やって来た華琳達に俺は答えた。



「私の国の遊戯に使う遊具の試作品が完成したのでね。試しに使っているところだ。」

「あら、面白そうね。私たちも参加していいかしら」

俺に否定する理由はなかった。

「ドボン」

「くっ！少しは手加減したらどうだ、士郎！」

「・・・これでもかなり手加減しているのだが？」

実際、他の皆は上がっている。

ドボンは5枚ずつ配り残ったトランプは積み重ねて、真ん中に置き、いちばん上のカードをめくり、そのとなりに置く。

表になって出ているカードと同じマークか同じ数字のカードを出し、出せるカードがない場合は、積み重ねたトランプから1枚ひく。

それでも出せない場合は、手持ちのカードになり、積み重ねたカードがなくなったら、

捨てたカードでもう一度積み重ねて使う。

自分以外の誰かの出したカードと、

自分の手持ちのカードの合計が同じ数になったら「ドボン」というて上がることができる。

足し算ができれば問題ないゲームなのだが・・・。

「・・・春蘭。足し算を間違えるのはどうかと思うのだが？」

「うっ、うるさい！たまたまだ！」

・・・すでに三回も間違えてたまたまか。

「子供達に単純な計算を覚えさせるのに役立ちそうね」

「そうですね。掛け算や引き算などの応用も出来るそうです」

華琳の言うとおり、その部分も考えて作った。

やはりそれ位は出来た方がいいからな。

「ええい！いい加減違うのにしろ！」

「そうだな・・・」

確かにこのゲームでは春蘭は勝てそうにない。

・・・だが、春蘭でも勝てそうなゲームは少ない。

感情がすぐ出るから、ババ抜きやダウトは難しいな。

俺は頭を悩ましていると、華琳が言ってきた。

「時間も押しているから、素早く終わる遊戯にしてもらいたいわ」

「・・・なら、あれにするか」

俺が最後にやることにしたのはインディアンポーカー。

インディアンポーカーとは、自分の額に一枚トランプカードを当て、自分以外のカードが全部見える状態で、自分のカードの大小で勝ち負けを決めるゲーム。

これなら、春蘭もある程度は勝てるだろう。

人間観察力、状況判断力などが問われる非常にシビアなゲームだから、

トップにはなれないだろうが。

勝負は現在佳境。

沙和と春蘭、真桜が脱落。

沙和は降りすぎで、春蘭は全く降りないのが敗因だった。真桜は運悪く弱いカードばかりだった。

「降りる者はいるかしら？」

凧と秋蘭が降りた。

凧は華琳のJを見て降りたのだろう。

Qを引いていたのにな。

秋蘭は流石に人間観察力が高い。

周りとの会話で自分のカードが弱いことに気づき降りた。

さて、俺はどうするか。

周囲の様子からそこまで弱くはないだろうが……。  
勝てるほどかどうか……。

「土郎、賭けをしない？」

「賭けだと？」

揺さぶりをかけてきたか。

「負けた方が次の休日に勝った方に一日従うというのはどう？」

「ふむ。魅力的ではあるが……」

「あら、それでは成立でいいかしら？」

……周りの反応は全員唾然としているため、判断材料に出来ない。

くっ、これを見越して賭けを……!

「いいだろう。特に断る理由もない」

勝算は五分といったところか。

「それでは行くぞ」

「ええ」

華琳のハートのJに対し、俺は……クラブのJ。

「ええと、こういう時はどっちの勝ちや?」

「……華琳さまのハートの方が強い」

そう、同じ数字の時はクラブよりハートが強い。

「……華琳は分かっていたのか?」

「一応ね」

……読み負けか。

ルールを完全に覚えきっていない者がいることを計算し忘れたか。  
……俺もまだまだだな。

「だから、あのような賭けも出来たというわけか」

「(……勝っても負けても損はないもの)」

「ん?良く聞こえなかったのだが?」

「……とにかく、次の休日は私に付き合ってもらおうよ」  
「承知した」

結局、そのままの勢いでインディアンポーカーは華琳の勝ちに終わ

った。

その後、売りだしたトランプは子供に親しまれるようになった。

・・・大人にも【賭けごととして】親しまれるようになったのは誤算だったが。

これは正義の味方の休日記録における一日である。

## 正義の味方の休日記録4

「……………これでいいか？」

……………俺は先日の賭けに従い、華琳のために休日を費やすことになつた。

……………それは別にいい。

……………だが。

「……………何故、執事服なのだ？」

そう、俺は執事服を着せられている。

……………まさかこの世界でも着ることになるなんて。

「あら？士郎の国では男が主人に仕えるとき着る服装と聞いているけど？」

「……………そうだな」

余計な情報を与えた服屋の主人に報復することを決めた。

……………この服にはいい思い出がない。

思い出すは災難の類……………いや、人災か。

……………若干アーチャーの記憶も混在しているが。

「それから、今日一日は私をご主人様と呼び、それに合った言動をすること」

華琳は良い笑顔で宣った。

「……どうしてもか？」

「ええ。どうしても」

「……かしこまりました、ご主人様……」

この時の俺の顔はさぞ面白かったのだろう。

華琳はいつも以上に上機嫌だった。

「ご主人様、これでよろしいでしょうか？」

「ええ。ではこの書類をお願い」

「かしこまりました」

やるからには徹底的にやる。

それが俺のスタンスなわけだが……。

正直、自分を見つめ直したくなった。

現在、俺は華琳の仕事を手伝っている。

「華琳さま、どうしてこいつがここにいるんですか!？」

《せつかく華琳さまと二人きりのはずだったのに!》

本音が丸見えな軍師に対し、俺は言う事にした。

「私のご主人様のそばでお仕える事がそれほどおかしいでしょうか？」

言葉はあくまでも丁寧に、けれど悪意は十二分に込めて。

「……分かってて言うてるでしょ!それにご主人さまってなに  
よー!

アンタが言っ「桂花、私が士郎にそう呼び、一日従うように言ったのだけれど？」

「・・・分かりました。」

「ならば、なにも問題ありませんね？では、業務を続けましょう」

「・・・正直、人を呪い殺せそうな桂花の視線は痛かった。

まあ、それで表情を変えるほど素直ではない。

「士郎、喉が渴いたわ。お茶を入れてきて」

「どのお茶になさいますか？」

中国茶は発酵度合いで分けるだけでも、

緑茶・白茶・黄茶・青茶・紅茶・黒茶と6種類もあるからな。

「・・・では白茶で」

「かしこまりました」

白茶だと銀針ギンシン白毫ハクモウが確か厨房にあったな。

「・・・アンタに出来るの？」

桂花に挑発ぎみな返答をする。

「何故、出来ないと御思いになられるのでしょうか？」

お茶はイリヤがうるさかったので、料理以上に得意分野だ。

「なら、見せてみなさいよ」

「かしこまりました」



俺は厨房に行き、準備を整え戻った。

「いかがでしょうか？」

「・・・完璧ね」

「お褒め頂きありがとうございます」

「くっ！この程度でいい気にならないことね！」

悔しそうな桂花に俺は、

「そうですね。あなたさま（程度）にそう言われるようではまだまだですね」

毒を込めた返答をする。

「なんですって！」

込められた悪意にきつちり反応する桂花。

そういえば、イリヤは俺が執事の格好をすると性格が悪くなるって言うていたな。

執事の基礎を教えてくれたあの人の影響かな？

結局、午前中は桂花に対し慇懃無礼で通した。

昼になり、華琳・春蘭・秋蘭の三人に昼食を出すことになった。

「うむ、うまい！」

「ふむ、食べたことのない料理だが確かに美味だな」

二人の反応は上々。  
だが、問題は華琳だ。  
華琳の基準は名人級となっているため、たいていの料理人は駄目だしを食らう。

「………土郎」

「なんででしょうか？」

「確かに美味しいのだけれど、違和感を感じるわ」

「………と言われますと？」

「無理に別の材料で誤魔化したように感じるのだけれど？」

「……やはり気付かれるか。」

日本料理に欠かせない調味料が無かったため、別のもので代用したからな。

それでもかなりの味に仕上げたのだが……。

「………仰るとおりです。足りない調味料を代用品で補いました」

「………そう。なら、今度出す時は代用品を使わずに出してちょうだい。期待しているわ」

「かしこまりました」

「……調味料作成には時間がかかるから当分は無理だな。  
まあ、期待に応えられるようにしとくか。」

昼食の後、華琳と戦闘訓練をすることになった。

それにしても……。

「つく！」

「本当に見事な守りね」

大鎌【絶】と夫婦剣【干将・莫耶】が火花を散らし、音色を辺りに響かせる。

・・・春蘭と同等の実力だと？

完璧な才能とは華琳のためにあるような言葉だな。

・・・華琳に出来ない分野を俺は知らない。

「・・・本当に何でも出来るのですね」

「当たり前でしょ。私を誰だと思っているの？」

そう言い切られると反論出来ないな。

その後、響合う音色は一刻の間止むことはなかった。

その後、華琳の買い物に付き合うことになった。

「この髪飾りは似合うかしら？」

「・・・そうですね。似合いますが、一回り小さいこちらの方がよりお似合いかと存じます」

服屋などを巡った後、本屋へ向かう。

「ここがあなたのお勧めの本屋？」

「そのとおりです。見かけはよろしくありませんが、品揃えは街一番でございます」

実際、自分も中を見て驚いた。

貴重な本のオンパレードだったのだから。

入って半刻。

「店主」

「何でしょうか？」

「この本棚の本を全部頂戴」

・・・流石は華琳、豪快だな。

値段もとんでもないだろうに。

まあ、それだけの価値はある。

だが・・・。

「すみませんね、お客さん。当店は一人、一日一冊のみとなっております。」「

・・・そう、この制限のため多くの読書家が悔しい思いをしている。

「・・・どうしても？」

「はい。一人でも多くの方に読書の素晴らしさを広めたいので」

「・・・なら、これを」

「まいどあり」

華琳は残念そうに店を出た。

「・・・本当なら、店ごと買いたいくらいなのだけれど」

「無理でしょう。あの店主は本に対し信念を持っていますから」

「そうね。さもなければ、あれだけの貴重本を集められないでしょう」

「・・・買うことは無理でしょうが、別の案ならあります」

・・・思いついた案を言う事にした。

「どんな方法かしら？」

「あの店主がたくさん売らないのは多くの人に読んでもらうためです。」

実際、立ち読みは禁じられていません」

「それで？」

「誰でも本を読める施設を作ります。」

その上で、あの店主に貴重本を寄付してもらって代わりに管理人になつてもらいます。」

これなら、本が売られて読めなくなることはありません。」

店主も多くの人に読んでもらえ、生活を保障されるので受け入れると思います」

ようは図書館の設立である。

「・・・検討してみましよう」

この会話から数年後、図書館が建てられることになる。

日が沈み、予約していた料理屋で夕食を食べることになった。

「・・・腕を上げたわね」

「確かにそうですね」

「ありがとうございます！」

ちなみに、俺が麻婆豆腐を食べたあの有名店がここだ。

「あ、あの・・・」

「どうかしたかしら？」

「なにか気にかかることでも？」

店主は恐る恐る尋ねてきた。

「今日の衛宮さまは一体？」

・・・今日一日、色々な人に奇異の目で見られた。  
おかげで説明も慣れた。

「ご主人様の言いつけで、本日限りですがこのような言動をさせて  
いただいています。

違和感を感じられることでしょうが、ご容赦願います」  
「わ、分かりました」

夕食後、城へと帰還。

「本日はこれで終わりでもいいでしょうか？」

「ええ。」ご苦労様

「・・・で、満足できたか？」

「十二分に満足させて貰ったわ」

それは良かった。

・・・満足して貰えなかったら、今日一日の俺の苦勞は何だったのか分からなくなる。

「けれど、やはりいつもの土郎のほづがしっくりくるわ。」

そういう私に対しても変わらない態度が気に入っているみたい」

「そうか。私としても今日のような言動よりもいつもの言動のほうがいい」

こうして、その日は幕を閉じた。

これはかなり変わった正義の味方の休日記録における一日である。

## 正義の味方の休日記録4（後書き）

普段から、敬語を使い慣れていないので、おかしい部分が多々ある  
と思います。

教えて頂けたら修正いたします。



## 第六話：反董卓連合（前篇）

「む？」

俺は中庭で上機嫌そうにしている季衣の姿を見つけた。

「どうした、季衣。ずいぶん嬉しそうだが？」

「あ、兄ちゃん。へへー。手紙、書いてるんだー」

「なるほど。ひさしぶりに出せる手紙なら、嬉しくて当然か」

この時代の情報伝達手段は手紙しかなく、しかも相手のいる地方に行く旅人や商人などに預けるだけ。そのため届くのに時間がもの凄くかかる。

そんな方法ですら、黄巾党の騒ぎで使えなかったのだから、季衣の上機嫌も頷ける。

208

「ねえ、兄ちゃん」

「む、なんだね？」

「楽しみにしている、ってどう書くんだった？」

「それはこう書く」

俺は地面に文字を書いた。

「ありがとう、兄ちゃん！」

「あら、どうかしたの？」

「季衣に手紙の書き方を教えたところだ」

現れた華琳に俺は端的に回答した。

「手紙？相手に証拠にされない、正しい脅迫文の書き方とか？」  
「・・・ごく一般的な手紙の書き方だ」

「・・・脅迫文については俺が学びたいところだな。」

「それにしても、季衣は秋蘭につけて物事を学んだ方が良いわね」  
「同意だな。このまま猪になられても困る」

猪突猛進は春蘭だけで十分だ。

「にゃ？猪って？」

「単なる例えだ。とにかく私も暇を見つけて季衣に物事を教えよう」  
「えー。ボク、お勉強って苦手なんですけど・・・。」

体動かしてる方が楽しいし・・・そっちを勉強するんじゃダメですか？」

そんな季衣に華琳は苦言を呈す。

「好きなことを学ぶのは勉強と言わないわ。」

知らないと困ることや立場が悪くなることくらい、学んでおいても損はなくてよ？」

「華琳の言つとおりだな。」

今の小遣いで幾つの饅頭が買えるかくらい計算出来た方がいいと思うが？」

「ううう・・・。それはそうだけど・・・。兄ちゃんはとうだったの？」

「何？」

「だから、兄ちゃんは勉強は嫌じゃなかったの？」

季衣の言葉に一瞬俺は言葉を失った。  
なぜなら……。

「……私は嫌とは思わなかった」

「どうして？」

「……昔の私は今以上にやせ我慢が強くてね。」

「……自分の理想を追うため、自分に出来ることは何でも勉強したからな」

「……その延長上に、毎日の命がけの魔術訓練があつたのだから。人として壊れている自分は、季衣の参考にならない。」

「もつとも、私は才能がないから覚えるのに時間がかつたよ」

「兄ちゃん理想つて？」

「【全てを救う正義の味方になる】という理想だ」

「今の兄ちゃんがそうなの？」

「……季衣は純粹だな。」

「……残念だが、違う。全てを救う正義の味方など誰にもなれはしないさ。」

私は届かないと分かり切つたそれを、生涯追い続けると決めただけだ」

「……どうして、届かないと分かっているのに目指すの？」

華琳の質問に俺は答える。

「……本当に譲れないことなら、出来る出来ないの問題ではない。やるか、やらないかの問題だからだ。そして、私はやると決めた」

「……確かにそうね」

華琳は納得してくれたようだ。

「話は変わるが、何かこの国に動きは？」

「……どうしてそう思うの？」

「市井が平和になったところで、こつも国が腐敗していればな。似た例などいくらでも知っている」

「……何進が殺されたそうよ」

……国の有力人物が死んだか。

「……大きく動くことになるな。現在、有力なのは誰になる？」

「何でも……董卓と言っらしいわ」

董卓……俺の知識では極悪人だが……。

「華琳はその人間を知っているか？」

「初めて聞く名よ。桂花や秋蘭たちも知らないそうだし

、張三姉妹も戦っていた将の中に、そんな名は聞いたことがないと  
言っていたわ」

「そうか……」

俺の知識では有名人のはずだ。

やはり持っている知識と似ていることは多いが、鵜呑みに出来ない  
な。

「このあいだ都から戻った間諜も、

董卓の正体は不明と言っていたし……恐らく、誰かの傀儡なので  
しょうけれどね」

・・・その可能性は高いな。  
・・・場合によっては・・・。

「できた！華琳さま、兄ちゃん！ボク、ちょっと手紙出しに行ってくるよ！」

あっちに行く隊商、昼過ぎに出ちゃうって言ってたし！」

「ええ、いつてらしゃい」

「気をつけていくといい」

「うん」

動く時はすぐ傍まで来ている。

なら、今だけでも平穩を楽しんでもらいたいな。

衛宮士郎はそう思った。

その華琳との話から、しばらくの時間が過ぎた。

俺達が兵を訓練し、力を蓄える間にも、

都の董卓は着実に勢力を強めているとの報告が入っている。  
だが、それは華琳の治めるこの街に影響を及ぼしていない。

「む？」

俺がいつものように街を巡回していると、スリを発見した。

俺はそいつに近付くと、相手の腕を捻り上げ、地面に押さえつけた。

「つてえ！なにしゃがる！」

「何してるかと言われたら、スリを押さえつけているとしか言えんな」

「な、なんの証拠があつて!」

「その君、これは君のではないか?」

俺はすぐ近くにいた青いリボンの少女に、スリの手から取り上げた財布を見せて問いかけた。

「え?あ、ない!確かに私のです!」

少女は自分の懐をあわてて確認した上で答えた。

「ち、ちくしょう!」

スリは観念したようだ。

「隊長!どうかしましたか?」

「スリの現行犯だ。縛って、牢屋に連れてけ」

部下に指示を出し、俺は少女に財布を返す。

「これからは気を付けるといい」

「ありがとうございます!・・・あの、お礼をしたいのですが」

「ああ、別に気にする必要はない。街の治安を守ることは我らの当然のし『ぐ』」

腹の虫がよりによってこの瞬間に空腹を訴えた。

くっ、不覚!

少女は笑いをこらえた後、提案してきた。

「もしよろしければ、何か御馳走しましょうか？私、料理屋で料理人をしているんです」

「・・・なら、御馳走にならせてもらおう」

「はい！」

・・・流石に断れる雰囲気ではなくなってしまったしな。

「そういえば名乗っていなかったな。私は衛宮。この街の警備隊長も兼任しているものだ」

「私は典章といます。兼任ということは他に何かしているのですか？」

「文官と武官も兼任している。それにしても、その若さで料理人とは大したものだ」

「ありがとうございます！それにしても、凄いですね」

俺と典章は会話をしながら典章の働く店へむかった。

「あ・・・・・・・・」

その途中でおかつぱ頭の少女に声をかけられた。

「何かね？」

「すみません。ちょっと教えて欲しいことがあるんですけどお  
」

「ふむ。道に迷ったのかね？」

「えっと、お城・・・の前に、美味しい料理食べさせてくれると  
る、教えてくれよ！」

「ちよっ！文ちゃあん！」

おかつぱ少女の連れであるボーイッシュな「文ちゃん」という少女が口を出してきた。

「いいじゃんか。あんなバカでかいもん、別に逃げやしないんだし。それより斗詩い。」

あたい、お腹すいたよー！お腹すいた、お腹すいたー！」

……彼女を見てみると、【藤ねえ、またの名を虎】をすごく思  
い出す。

……理不尽な所とか、人の計画を無視する我がままな所とか。

「うー。まったくもう、しょうがないなあ……」

「……苦勞しているようだな」

「……ありがとうございます」

俺も苦勞したからな。

斗詩という少女もこつという理解の言葉がうれしいはずだ。

「それでは料理街に案内ということでもいいかね？」

「はい。よろしくお願いします」

通り道だし問題はないな。

「それでしたら、ご一緒にどうですか？」

それまで黙っていた典韋が提案してきた。

「ん？どうゆうことだ？」

「実は私の働いている料理屋へ衛宮さまを案内しているところなんです。」



味には自信がありますから、満足してもらえるか」と

「へー、良いじゃんか。よし。行かせてもらおう!」

「ちよつと、文ちゃん。いくらなんでも・・・」

「構いませんよ。お客が増えることに問題などありません」

こうして俺達四人は典章の働く店へと行った。

「美味いつ!斗詩も食ってみろ!びつくりするほど美味いから!」

「もう食べてるよう・・・」

・・・もし虎と合わせたら意気投合しそうだな。

俺は想像を急いで振り払った!

・・・苦勞が相乗すること間違いないのだから。

・・・消費量も虎と同じくらいか。

「それにしてもこれ、美味しいなあ。南皮でもこんな美味しい店、なかなかないぜ!」

「確かに美味しいな。最近美味しい店だと聞いていたがこれほどとは」

「ありがとございます!どんどん食べてくださいね」

「そつえば聞いていなかったな。君たちは城に用事があるようだが?」

「はい。ええつと、ですね・・・」

「失礼する。」

華琳と秋蘭の二人が店に入ってきた。

「華林と秋蘭か。華琳たちもここで食事を？」  
「あら。士郎たちも来ていたの。・・・そちらは？」  
「美味しい料理屋を案内してくれと頼んだ者たちだ。結果として、一緒に食事をしている」

「お兄さんにはお世話になってますー」  
「ふうん・・・若い女の子には優しいのね、士郎」

「・・・どこか懐かしい寒気だな。」

「そうだと言いたいところだが、困っている者になら性別関係なく優しいつもりだ」

「・・・かつての自分とは違い、動揺するほど甘くはない。」

「あ、いらしゃいませ！曹操さま、夏侯淵さま、今日もいつものでよろしいですか？」

「っ！」

「・・・？」

「・・・今の斗詩という少女の反応・・・。  
今まで得た情報を整理しよう。」

「南皮」出身で、「城」に用事があり、「曹操」に驚く・・・。  
・・・南皮を統治しているのは確か・・・。  
それにこの時期。  
なるほどな。

憶測だが二人は・・・。

「ええ。お願いするわ」

「私も同じもので」

俺は思考を切り替えた。

「そついえば、二人は常連のようだな」

「まだ若いのに、大した腕の料理人よ。お抱えで欲しいくらいなのだけれど……」

確かに典章は見事な料理の腕だった。

「……断られたのか？」

断つたとすると、よほどの理由があるな。

「ええ。親友に呼ばれてこの街に来ただけけれど、結局合流出来なかつたらしいのよ。」

それで、手掛かりが見つかるまでここで働いているんですって」

「ふむ。名前と特徴を教えてもらえれば探してみよう」

それも警備隊の仕事のうちだ。

「はいっ。お待たせしましたー！」

「典章、彼があなたの親友を探してくれるそうよ。良かったら、特徴を言ってみてはどうかしら」

「本当ですか？」

「もちろんだ。その子も料理人かね？」

「いえ、食べるのは大好きなんですけど……料理はさっぱりなんです。」

ただ、私を呼んでくれたって言うことは、料理屋で働いているんじゃないかな……と」

「仕事について何か書いていなかったのか？」

「住み込みの良い仕事が見つかったから、来いとだけしか……。ただ、私が呼ばれるくらいですから、彼女も食堂の給仕か、力仕事の裏方をしているかと。」

力には自信のある子なので」

「……その程度の内容で来いを言う方も問題だが、来る方も問題だな。」

「それでその子の真名ではない名前は？」

「ええっと、真名じゃない名前なら、許緒……」

「……なんでさ？」

「……」

「……」

「……」

「……にや？」

俺・華琳・秋蘭が呆然とする中、店へ入ってきた季衣は自分の名を呼ばれて奇声を出した。

「あー……」

「あー。流琉ー どうしてたの？遅いよう」

「遅いよじゃないわよーっ！あんな手紙よこしてわたしを呼んだと思ったら、」

なんでこんな所にいるのよーっ！」

「ずーっと待ってたんだよ。城に来て書いてあったでしょー！」

「季衣がお城に勤めてるなんて、冗談としか思わないわよ！」

どこかの大きな建物をお城と思ってるんだと思って……もうっ！」

「……止めないとまずいな。  
物理的な被害が出始めた。」

「士郎と秋蘭、二人で止めてくれる？」

「了解した」

「分かりました」

俺は季衣を、秋蘭は流琉という子を掴み上げた。

「季衣、周りの食事中の客に迷惑をかけるのは頂けないな」

「それに部屋で暴れるのもな」

二人はすまなそうに身を縮めている。

「おー！なかなかやる」

「ええ。お見事です。」

どうやら二人は食事を終えたようだ。

「お初にお目にかかります、曹孟徳殿。私は顔良と申します」

「あたいは文醜！我が主、袁本初より言伝を預かり、南皮の地より  
やって参りました！」

「……こんな場面で恐縮ではありますが、ご面会いただけますで  
しょうか？」

「……どうやら憶測は当たったようだな。」

「……あまり聞きたくない名を聞いたわね。」

「まあいいわ、城に戻りましょうか。」

現在、城に戻り面会が始まった。

「袁紹に袁術、公孫贇、西方の馬騰まで・・・  
よくもまあ、有名どころの名前を並べたものね」

「董卓の暴政に、都の民は嘆き、恨みの声は天高くまで届いている  
と聞いております。」

先日も、董卓の命で官の大粛正があつたとか・・・」

「それをなげた我が主は、よをただすため、  
董卓をたおすちからをもつたえいゆうのかたがたに・・・」

・・・見事なまでの棒読みだな。

「持って回った言い方は止しなさい。あの麗羽の事だから・・・」

どうせ、董卓が権力の中枢を握ったことへの腹いせなのでしょう？」

「う・・・っ。」

「その大粛清も、都で悪い政事をしていた官を粛正しただけと聞い  
ているわよ？」

統制の取れていない文官がやりたい放題にしている事を、

董卓の所為にしているだけではないですか？」

「・・・よく知っていますねー」

情報は政治においても重要な要素だからな。  
当然、華琳は情報収集力に力を注いでいる。

「あまり知りたくもないけれどね。どう思う、桂花」

「は。顔良殿、先ほどあげた諸侯の中で、既に参加が決まっている

方々は？」

「先ほど挙げた皆様は既に。今も、流れを見ていた小勢力や、袁家に縁のある諸侯たちを中心に、続々と表明を受けております」

「桂花。私はどうすればいい？」

「参加されるのが最上かと……。これだけの英傑が一挙に揃う機会など、

この先あるとは思えません。

ここで大きな手柄を立てれば、華琳さまの名は諸侯の間に一気に広まります」

「……ここで華琳や俺が参加しなくても、

諸侯に董卓は無実の罪で殺されることには変わらないな。なら、俺は参加して……」

「そうね。顔良、文醜。麗羽に伝えなさい。曹操はその同盟に参加する、と」

「はっ！」

「ありがとうございます！これであたり達も、麗羽さまにおしおきされないで済みます！」

「この辺りと聞いたのだが……」

森を進んでいくと、木々の間から轟音が聞こえてきた。

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ、はぁ……」

「ふう……ふう……ふう……ふう、ふう……」

昼食後、そのままでは収まりが付かないだろうと、

華琳は郊外の森で気の済むまで二人が喧嘩することを許可した。

「どう？調子は。」

「あ、華琳さま。見ての通りですわー」

辺りは砕けた木や、穴があいた地面など荒れ果てている。

「やるなら徹底的にやれ、という言葉に全力で従ったようだな」

「ウチ、何度死ぬ思ったか、教えたるか？」

「・・・言わなくても予想は付く」

俺達が会話している間も、一撃必殺クラスの激突は終わらない。二人は子供じみた言い争いを続けながら、自然を破壊していく。また一本、木が吹っ飛んだ。

「さつきから、ずっとあのノリやで」

「あれでいいのよ。下手にしこりが残るよりは、余程ましだわ」

・・・アーチャーの記憶に刻まれた（恐らく心と体にも）、遠坂とルヴィアの喧嘩を彷彿とさせる光景だな。

・・・まあ、あちらと違ってほのぼのとしているだけかもしれませんが、巻き込まれたら命にかかわる点は同じだけだ。

「で、師匠。その面会とやらはどうなったん？」

「ああ。これからみんな、都へ遠征することになった。

もう凧と沙和には準備を命じておいた」

「都かぁ・・・」

「恐らくこの戦で、都の権力は完全に失われる。」



大陸ももつと混乱することになるはずよ……」

「なんやて……!?!じゃあなんで華琳さまは、そんな戦いに行くん?」

守るための力を溜めた方が、ええんとちゃうん?」

「変化の波にむざむざ吞まれるよりも、波の頂にいたいと思ったからよ」

「……ゴメン。」

ウチ、海って見たことないねん。」

「混乱が起こるのを外から見ると、内から見極め、確実に収めたという事が」

「……ああ。それなら、何か分かる気がするわ」

「ちよおりやあああああー!ー!」

「どおりやあああああー!ー!」

森を今までとは違う快音が響いた。

「……きゆう」

「うみゆう……」

子供二人は同時に倒れた。

「相討ちか」

「やれやれ。向こうも終わったようね」

二人は互いに謝り始めた。

どつちら、仲直りもできたようだ。

「ようやく決着が着いたようね。二人とも」

「華琳さま……」

「曹操さま……」

「立ちなさい、典韋」

「はい」

「もう一度誘わせて貰うわ。季衣と共に、私に力を貸してくれるかしら？」

料理人としてではなく、一人の武人……武将として」

「分かりました。季衣にも会えたり……季衣がこんなに元気に働いている所なら、

わたしも頑張れます」

「ならば私を華林と呼ぶことを許しましょう」

霸王はこうして一人の将を加え都への遠征に向かう

## 第六話：反董卓連合（中篇）

使者との面会から数日。

俺たちは軍を率いて、諸侯連合の集会所に来たのだが……。

「さて皆さん。何度も言いますがけれど、我々連合軍が効率よく兵を動かすにあたり、たった一つ、足りないものがありますの」

沈黙する軍議の中で、金色のクルクルドリルヘアが偉そうに一人喋りまくっている。

……彼女が袁紹。

ずっと観察していた結果として、俺は彼女に【劣化ルヴィア】という印象を持った。

俺の知人であるルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトは、優雅な物腰、気品溢れる言葉遣い、

白鳥の如き美貌と非の打ち所のない人物を猫かぶり演技で演じ切る才女だった。

魔術、知略、武術と様々な分野で優秀な才能を持ち、庶民には冷たくあたるお貴族だが、

庶民あつての自分たちだと理解しているので彼らのことを強く愛していた。

ルヴィアから【様々な才能】と【人格の長所】と【人としての器】を抜き、

短所を50%増量したら、袁紹と同じになるだろう。

……金髪ドリルヘアの外見とか、名家出身の金持ちとか、プライドの高さとか、

油断と傲慢など、あまりにも似てるせいでどうも違和感を感じて止

まない。

「兵力、軍資金、そして装備・・・全てにおいて完璧な我ら連合軍。而してただ一つ足りないもの。それは優れた総大将ですわ！」

「・・・ようするに自分になると言いたいのか。」

「・・・これが総大将とは・・・前途多難だな。周りも呆れはて、白けきっている。」

「はいはい。麗羽でいいわよ」

華琳の言葉に周りの諸侯も肯定する。

「・・・言い争っても徒労でしかないからな、コレが相手では。」

「それでは最後に、先陣に誰が立つかですけれど・・・、調査ついでに白蓮さんの手勢が攻め落とせばいいんですわ」

大した手勢を持たない白蓮こと公孫贇は当然納得できない。共に行動している劉備も啞然としている。

「おいおい・・・！いくらなんでも私たちだけでは！」

「我がままですわねえ。では、びりっけつの華琳さん。あなたにもお願いしますわ」

「・・・確かに最後に集合場所に来たが・・・。」

「・・・いいわ。やってあげる」

こうして、公孫贇達と共に泗水関を攻略することになった。

「士郎、あなた軍議の間、随分と面白い顔をしていたけどどうかしたの？」

「・・・袁紹が知り合いに変に似ていたのですね。ずっと違和感を感じていただけだ」

陣地に戻ると華琳が質問してきた。

「そんなに似ていたの？」

「普通に似ていたのなら問題なかったのだが・・・華琳  
「なにかしら？」

「もし有能で、自制が効き、民の有難みを知り、  
欠点が軽減された袁紹が目前にいたらどう思う？」

華琳は呆気にとられたようだ。

「・・・想像できないわ」

「・・・それがさっきの私の違和感というわけだ」

「・・・なるほど、納得したわ。まあ、それはさておき泗水関に  
ついてだけど・・・」

桂花が説明を始めた。

「泗水関に籠もる敵兵は六万から八万。率いるのは張遼と華雄。  
公孫贖たちの軍勢と併せれば兵力は上回りますが、  
難攻不落の関である泗水関に籠もっている以上、厳しいかと」

俺は提案することにした。

「華琳、一つ提案があるのだが」

「なにかしら、士郎」

「敵を公孫贄たちに挑発させて関から引き離させるといっつのはどうだろつか？」

「悪くはないわね。少数である上に、有名な関羽や張飛の挑発なら十分期待できるわ。」

おまけに情報によると敵将の華雄は春蘭のような性格みだし」

その言葉に春蘭が反応した。

「華琳さま！それでは私が華雄みたいに突っ込むしか出来ないみたいじゃないですか！」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・何かいつてくださいよ」

・・・黙っているのが皆の優しさなんだが。

「士郎、公孫贄たちのところに行ってこの策を伝えてきてちょうだい」

「了解した。ついでに私の部隊を連れて行っていいか？」

向こうを援護して見せないと信用してもらえないだろう」

「いいわ。ついでに、劉備の情報収集もお願い」

「もちろんだ」

「待て！おまえたちは何者だ？なぜ我らの陣に入ってくる？」

「私は衛宮、曹孟徳の客将だ。陣に訪れることは先触れの使者から伝わっているはずだが？」

目つきの鋭い黒い長髪の少女は警戒を緩めず対応する。

「……我が名は関羽。字は雲長」

「ほう、君が噂の……。とりあえず、私を君の主の所へ連れて行つてくれないか？」

泗水関の攻略について話すことがある」

「……いいだろう。ただし、おかしな真似はするな」

「無論だ」

そして、劉備たちの前へ連れて行かれる。

「あなたは、曹操さんと居た……」

「衛宮だ。主である曹孟徳からの提案を伝えにきた」

「提案？」

「泗水関に籠った大軍を攻略するのは難しい。

そこで、君たちに挑発してもらい敵をおびき出すという案だ」

「……朱里ちゃん、どう思う？」

劉備の問いに応じ、脇に控えていた諸葛亮が質問してくる。

それにしても……小さいな。

「危険を犯す見返りは？」

「泗水関の攻略中、私と我が隊が君たちを援護する。

また、十分に敵を引きずりだしたら即座に主たちも動く」

「桃香さま。ここは提案を受けるべきだと思います」

「待て。そやつ信用できるのか？」

関羽は諸葛亮に尋ねた。

「少なくとも、曹操さんは味方の足を引っ張って、自らの評判を落とすような人ではありません。」

なら、間接的ではありませんが彼も信用していいと思います。

それに、その案が最適なことは確かです。関に籠もられたままでは勝ち目はありません」

「確かに。力押しではどれだけの犠牲が出るか・・・」

公孫賛も納得したようだ。

「・・・分かりました。その提案を受け入れます」  
こうして、泗水関攻略の準備が整った。

S I D E 桃香

どこか怖い人。

けれど、なぜか惹かれる人。

それが、私の衛宮さんに対する印象だった。

・・・怖いというのは態度とかではなく、もっと本能的なモノ。  
・・・ソレが何かを知ると、自分が壊れてしまうのではないか。  
そう感じる。

惹かれるのも同じ部分だと思う。

「なにかね？」



見ていたら、衛宮さんに気付かれた。  
せつかなので質問することにした。

「衛宮さんはどうして曹操さんに仕えよう?」  
「……そうだな。彼女の王としてのありように敬意を持ったか  
らだ」

傍にいた朱里ちゃんが言う。

「野望に満ちたありようがですか?」

「いや、【霸王としての覚悟】を持って進んでいくありようにだ」  
「霸王ですか?」

「王とは十のうち九を救うために一を切り捨てる存在だ」

「そんなの間違っています!」

その言葉に私は反射的に反論していた。  
そんなこと認められない!

「何が間違っている?」

「王は守るためにいるんです!切り捨てるなんて……!」

「だが、人の力には限界がある。全てを救えはしない。」

「皆が協力すれば……」

「協力しても限界はある。」

「それでもあきらめなければ!」

衛宮さんはしばらく黙った後、

「劉備、理想を抱いて溺死する覚悟はあるか?」

そう言ってきた。

「え？」

私は意味が分からず、疑問の声をあげた。  
その言葉に重い意味がある気がした。

「そろそろ泗水関に着く。準備に入るぞ」

結局、【霸王としての覚悟】の意味「も【溺死】の意味も分からず  
じまいだった。

S I D E 桃香out

現在、劉備の軍が挑発を行っている。

俺の目にはいきり立つショートカットの女性とそれを必死に抑える  
女性の姿が見えている。

どうやら我慢も限界にきているようだ。

俺は最後の一押しするため劉備に関羽たちへの指示を頼んだ。

「離せ張遼！あれほど虚仮にされて、黙っているなど私には出来ん  
！」

「待ちつてば！あんなん見え透いた手えや！それに乗ってもーたら、  
それこそ敵の思つ壺やで！」

「くっ……だが、今まさに奴らは私たちの武を愚弄しているの  
だぞ！」

それを許せるとでも言うのか！」

「許せん。許せんよ！せやけどウチらは何としても泗水関を守らんとアカンねん！」

「そのためやつたら罵声ぐらいいくらでも耐えたる！だからおまえも堪えてくれ！」

「くっ……うああああ！」

俺は罵声を上げさせていた部隊を後方へ下げてもらった。

そして一人前へ出て、俺は弓に矢を番え、砦の上にいた華雄に向け放つ。

矢は狙い通りに華雄の頬をかすめ、華雄から一筋の血が流れ落ちた。

俺は大音声でとどめの挑発をする。

「くくくっ、はははっ！！あれだけ罵られたあげく、相手に矢傷を負わされながら、

黙って引きこもっているとはな！負けるのがそんなに怖いか？

どうやら、碌な誇りを持たない将や腰抜けの兵卒ばかりのようだ！

こんな連中に時間を使うのは無駄だな！

我らは下がって臆病者どもを肴に酒でも楽しませて貰おう！

ではな！負け犬華雄！」

俺はゆっくりと後方の部隊へ戻った。

「お、おのれ、おのれ、おのれえ！い、言わせておけばあ……！  
私は誰がなんと言おうと出るぞ！ここまで虚仮にされて、黙ってい  
られるものか！

お前達もそうだろう！？」

張遼は慌てて言う。

「こ、このアホ！なに煽つとんのや！」

兵士たちが賛同の歓声を上げる。

「わー！お前らもなに賛同してんねん！」

張遼の声はもはや華雄の耳に届かない。

「いくぞ、我らが臆病者ではないことを、天下に示そうではないか！  
奴らに我らが武を貶したことを後悔させてやるうぞ！！」

兵士たちが鬨の声を上げた。

「上手くいったな。」

近くにいた張飛が残念そうに話しかけてきた。

「おしかったのだ。あと少しで華雄をやっつけられたのに」  
「倒してどうする？張遼一人が残ってしまったては関が落とせなくな  
る。」

「ああいう猪は最後に倒す方が得策だ」

「もしかして、わざと掠めたのか？」

関羽は驚いた様子で言った。

「でなければ、矢を放つ意味は無かるう。それよりも、急いで引いた方がいい」

引く自分たちを華雄の軍勢が追いかける。

そろそろ頃合いだな。

「いくぞ！射撃を始めろ」

弓矢の雨により敵の勢いが削がれた。

そして、背後に控えていた華琳たちが絶妙のタイミングで突撃をかけてきた。

華雄の軍勢は浮き足立った。

「はっ・・・！」

俺は続けざまに十本の矢を放ち、十人の敵兵が倒れた。

傍に控えさせた兵から矢を受け取り、再び放つ。

放たれ続ける雨のごとき矢は予定調和のごとく敵を倒してゆく。

味方はその矢に勇気づき士気を上げ、敵はその矢に怖気づき士気を下げる。

今回は劉備の軍勢と行動を共にしているので、投影は使わない。

「これだけの距離の速射を繰り返して、一発も外さないなんて・・・」

近くで冷静にこちらを孔明が見ているのだからなおさらだ。

周囲の状況を見極めていると、関羽と華雄が一騎打ちを始めた。

・・・華雄は弱いわけではないが、関羽の卓越した武には到底かなわないな。

ある程度は持ちこたえたが、予想通りに関羽に敗れて、華雄は張遼に無理矢理引きずられて逃げ出した。

・・・万全ならここで矢を放ち、張遼を倒すのだが、今の俺にこの距離を命中させることは出来ない。

・・・だが戦果は十分だ。

もはや、敵軍に戦う力は残されていないかった。

逃げ出した敵軍に対し、疲弊して劉備たちの動きが止まっている隙に華琳たちは敵を追撃し、泗水関を落とした。

俺は劉備たちに別れを告げ、華琳たちの前に戻った。

「ご苦労様、士郎。見事な働きだったわ」

戻ると、華琳からねぎらいの言葉が待っていた。

「そう言ってもらえると頑張ったかいがある。それで軍の損耗は？」

「多少はあつたけど、微々たるものよ。これなら補充兵を合わせれば、問題ないわ」  
「それは良かった」

「兄様、見事な弓術でした！」

傍にいた流琉が言った。

「ありがとう、流琉。にしても、何故兄様なのかね？」

「季衣の兄様なら、私にとっても兄様だからです。」

それより、今回の戦いで兄様は凄く有名になりましたよ！

秋蘭さまと兄様で「双弓」、兄様自身は「心眼の射手」って！」

・・・大層な二つ名がついたな。

まあ、心眼スキルを持つてるから外れてはいないか。

「あまり有名になりたくはなかったのだが・・・」

「諦めなさい。あれだけの實力を持っているのだから、避けられるものではないわ」

「分かっている。まあ、名に恥じない働きをしていこう」

「ええ。期待しているわ」

こうして正義の味方はその名を世に知らしめ、諸侯連合の初戦は終りを告げた。

## 第六話：反董卓連合（後編）

泗水関の戦いで快勝した俺たちだが、袁紹はそのことが気に入らなかつたらしい。

結果、次の虎牢関攻略は袁紹による全軍の指揮で戦う事になった。

「……よりによって、ただ突っ込むだけとはな」

無策をあれだけ自信満々に宣言できるとは、

袁紹は頭の螺子が根こそぎ抜けているんだろうか？

「まあ、袁紹だから仕方ないでしょう」

華琳の言葉は単純であるが故に、とんでもなく説得力があった。

「今回は華琳だけでなく、呂布と張遼がいるから苦戦しそうだな」

おまけに袁紹の指揮というマイナス要素までついてるのだから。

「確かにな。」

呂布の武勇は天下無敵。飛將軍の名は伊達では無い。それに張遼の用兵は神出鬼没と聞く。

恐らく、董卓の軍で最強の武將は奴ら二人だろう」

春蘭の言葉を聞いていた華琳は正直な感想をもらす。

「……欲しいわね、その強さ」

「また悪い癖が……華琳さま」「今回はかりはお控えください。張遼はともかく、呂布の強さは人知を超えております」



春蘭・秋蘭が華琳を諫めた。  
俺は呂布に関する情報を思い出して言う。

「……張三姉妹の証言では、黄巾党約三万をたった一人で倒した  
そうだ。」

やられた張本人たちの話である以上、間違いはないだろうな」

「……すでに【英雄】になっているんじゃないか？」

「もしどうしても呂布をご所望とあらば、今いる武官全て失うもの  
と思っただきたい」

「……随分と弱気ね」

「秋蘭共々、それほどの相手と認識しております」

二人の説得に華琳も渋々納得した。

「……分かったわ。……呂布は諦めましょう。でも、張遼だ  
けならどうなのかしら？」

「張遼の強みは個人の武より用兵にあります。」

兵を奪い取った上で捕えろという命であれば、兵は桂花が。」

張遼は姉者と士郎が何とかしてくれるでしょう」

「お任せください！」

桂花は華琳の役に立てる喜びに目を輝かせている。

一方、春蘭はというと……

「わ……わたしが！？また無茶を……」

「あら、してくれないの？桂花はしてくるようだけれど？」

「……ふふん」

「くうう・・・っ！張遼ごとき、ものの数ではありません！十人でも二十人でも、お望みの数だけ捕らえて参りましょう！」  
華琳の言葉で勝ち誇る桂花に対抗意識をむき出しにし、無茶苦茶な宣言をした。

・・・まあ、それだけ華琳に対する思いが強いということにしておこう。

「士郎はやつてくれるかしら？」

「状況次第だが、最善を尽くそう」

「なら、張遼は桂花と春蘭か士郎に任せるわ。見事、捕らえてみせなさい」

「はっ！」

「お任せを」

「了解した」

俺は春蘭に言う事にした。

「・・・援護が必要なら、いつでも知らせるがいい。幸運を祈ろう」

「必要ない！だが、気づかいは感謝しよう！」

・・・ハイテンションだな。

「ふふ、楽しみにしているわよ、三人とも」

「おー。来た来た、来た来た・・・来た・・・っつか、  
だけ来るねん！  
来過ぎやろ！」

諸侯連合全軍が来ているのだから、張遼もぼやくのは当然だろう。

「・・・なんと」

華雄も驚きの声をあげた。

「どうやら全軍が来ているようなのです！

まったく、これも華雄が無様に泗水関で負けるから・・・」

「ぐぬぬ・・・。」

睨んでくる華雄に対し、小動物を思わせる小柄な陳宮は傍の呂布の影に隠れた。

242

「りよ、呂布どのお・・・。けだものが、いじめるのですう・・・」  
「・・・なかよく」

必要最低限しかしゃべらない呂布の一言に対し、華雄は

「わ、わかつているっ！

・・・うつつ、兵の確認をしてくるっ！」

そう言っつてその場を離れた。

「悪い奴やないねんけどなあ。ねねも、ちょっと言い過ぎやで」

「うう・・・。ねねは悪くないのです・・・」

「ま、ええわ。恋。なんとかなりそうか？」

それに対し呂布は一言、返答する。

「……なんとかする」

「せやねえ……。何とかせんと、月も賈馱つちも守れんか……」

「……（コクッ）」

「んー。陣形の展開はばらつきがあるみたいやな。この手の定石は籠城やし、

向こうもそのつもりやろうけど……」

そこへ一人の兵士が慌てて駆け寄ってきた。

「申し上げます！」

「何や？敵の状況ならちやーんと見えとるで！」

「そ、それが華雄殿が出撃されるようです！」

その報告により、場の空気が凍った。

「……はあっ！？なんやそれ！」

「そ、そんなの聞いていないのですっ！」

「前言撤回や！あんの猪……！」

驚く二人に対し、呂布は言う。

「……出る」

「呂布どのっ！」

止めようとする陳宮に対し、張遼も行動に移しながら言う。

「……しゃあないやろ！せめて華雄を引きずり戻さんと、月に合わせる顔がないわ！」

陳宮は関の防備、しっかり頼むで！」

「わかったのですっ！」

猪に振り回されて、彼女たちは戦場へ赴く。

「出て来たわね。泗水関の時と言い、連中は籠城戦をしらないのかしら？」

「旗印は華。先日の失態を取り戻そうと思って、華雄が独走したのではないかと」

「……懲りないというか。」

「……やはり、見逃しておいて正解だったな」

「そうね。向こうはさぞかし苦労しているでしょう。まったく、春蘭でもしないわよ、そういう事は。」

華琳の言葉に春蘭は納得いかないようだ。

「華琳さま、どうしてわたしを引き合いに……」

「……猪という共通点があるからだ。」

「呂布と張遼も出てきたな。」

こんな尻拭いまでさせられるとは……本当に苦労しているようだな

「けれど、この隙を逃すつもりはないわ」

そう言って、華琳は部隊に指示を出していく。

こうして虎牢関の戦いは始まった。

「風、左方の敵弓兵部隊に動きがある！矢に注意を！」

俺は弓を放ちつつ、指示を出す。

それにしても、視力強化が出来て良かった。

おかげで戦場の把握において先んずることができる。

戦況は互角といったところか。

だが、できればここで敵を減らしたい。

戦いながら、衛宮士郎は自軍を有利にする方法を模索する。

その時、その目は指示を出す華雄の姿を捉えた。

俺は風・沙和・真桜に自分の作戦を伝えた。

そして、頃合いを見て俺は矢を華雄に向けて放った。

華雄に俺の存在を知らせるための一矢は、狙い通り華雄の戦斧に直撃した。

俺の存在に気づいた華雄は、一直線に向かってくる。

俺は華雄に対処できるように矢を放つ。

本気で狙えば、華雄を倒せるだろうが・・・猪は敵にいた方が有利だからな。

今回や前回みたいに。

さて、作戦を始めよう。

「貴様！ようやく見つけたぞ！我が武を貶した報いを今こそ受けよ！」

「ほう？私は本当のことしか言った覚えがないのだが・・・。」

ああ、本当のことを言われたから怒っているのか。それは失礼した。負け犬に負け犬と言ったことは謝罪しても良いが？」

相手の動きを単調にするべく、俺は華雄を挑発したのだが、

「貴様！その減らず口を永久に閉じさせてやる！」

・・・面白いぐらいに乗ってきた。

華雄の戦斧を俺は莫耶で受け流し、干将で華雄に防がれることを前提とした反撃を行う。

剣戟を交えながらも、挑発を続ける。

「やれやれ、たかが弓兵でしかない私の双剣程度に防がれるようではな・・・。」

よくもまあ、その程度でしかない武にそこまで過剰な誇りを持てるものだ。」

「貴様、まだ私の武を貶すか！」

怒りの籠った戦斧による一撃を前に踏み出て双剣ですらす。

・・・実際には華雄は弱くない。

実力は春蘭に迫っている。

勝つのが目的ならば近接戦闘では簡単にいかない。

だが、俺の守りを破るのは至難だろう。

まして、怒りのあまり攻撃が単調になっただけではな。

「今すぐ私を黙らせないのだから貶されても仕方ないだろ？」

君に反論する余地などあるのかね？」

「お前を倒して我が武を証明してやる！」

遠心力の付いた袈裟切りに対し双剣を重ねてはじく。

「それが出来ないようだが？まったく、言うだけでは意味がないのにな。所詮口だけか」

「くうう……！うおおおおお！」

剣戟が辺りに音を響かせる。

わざと隙を作って敵の行動を誘導すること半刻。  
自軍が優勢になってきたのが良く分かる。

「……充分だな」

「何がだ！？」

俺は薄く笑った。

怒りで周りが見えていない華雄はまだ気付かない。  
そこへ張遼が向かってきた。

「このの、どあほう！何しとんのやー！」

「止めるな、張遼！こいつだけは！」

「この大戯け！部下の指揮はどうした？」

「な……に……？」

「だから、部下の指揮や！お前の部下達、みんなやられてもつたやないか！」

「……き、貴様まさか！」

どうやら、俺が浮かべた笑みの理由に気づいたらしい。

俺は華雄に冷徹な視線を向ける。

「気づくのが遅かったな。華雄、君の武はかなりのものだ。だが、君は将として最低だ」

「まさか……はじめから……！」



「そう時間稼ぎだ。」

頭を失い烏合の衆とかした君の部隊がやられるまでのな」

「だ、だが貴様の部「私には優秀な副官達がいるのでね。」

私がいなくても十分戦える」・・・くっ！ならばせめて・・・！」

華雄まだ俺と戦おうとするが、張遼がそれを許さない。

「どんだけアホ晒しやあ氣いすむねん！せめてそういう事は、虎牢関の上からにしとき！」

「はーなーせー！」

「撤退や！撤退！虎牢関に戻れば、まだ十分戦えるわ！」

「・・・こりない猪が身内にいると、苦勞が絶えないようだな」

俺は張遼に同情の声をかけた。

「・・・まったくや」

張遼は華雄を無理矢理連れて戻ろうとするが、華雄は抵抗している。

追撃をしようと思っていたのだが、

俺の目は自軍に立ちふさがるために、呂布が虎牢関の前にいるのを捉えた。

・・・援護のための余力を残すべきだな。

俺は隙をつき虎牢関へ向かった。

「おらあ！総員駆け足ー！ここで突撃すれば、虎牢関はあたいらの

もんだぞっ!」

「皆さん、いそいでくださーい!」

文醜と顔良は自軍を虎牢関に通そうと声をあげている。だが、立ち塞がるのは天下無敵の反則的存在。

「……そうはさせない」

片手で振るわれた方天画戟がまとめて数人の兵を振り払う。吹き飛ばされた兵の一人が顔良にぶち当たった。

「きゃっ!」

「お、呂布じゃんか!勝負だっ!」

「……時間が無いから本気でいく」

挑んだ文醜だったが、圧倒的な腕力の一撃で防御ごと吹き飛ばされた。

「く……っ!遅かったか……!大丈夫か、二人とも!」

「な、何とか……。ありがとうございます」

「ひゃーっ。死ぬかと思ったぁ……!」

駆け付けた関羽と張飛によりその場はかるうじて持ち直した。

「愛紗!鈴々がいくのだ!」

「待て鈴々!一人では無理だ!」

「大丈夫なのだ!でええええええええいっ!」

張飛は並の兵を二・三人は貫けそうな突きを並はずれた速度で放った。

「…………当たらない」

だが、呂布は事も無げに防いで見せた。

「にやにやーっ!?こいつ、強いのだ……っ!」

「だから無理だといったたろう!二人でいくぞ!」

二人で攻撃をするが、明らかに呂布に押されている。

本来なら両手で扱うべき武器を片手で凄まじい速度で振るってくる。そのくせに隙がない。

「……………これで終わり」

強力な連撃を受けて隙のできた関羽に止めを刺すべく、呂布は方天画戟を振るおうとした。

「……………!」

だが、呂布の攻撃は降りそそぐ矢に阻害された。

「愛紗!」

「大丈夫だ!……今の矢は?」

「愛紗、あそこなのだ!」

そこには赤い外套の男がいた。

「どつやら間に合ったようだな」

「・・・お前は、衛宮・・・!?」

「ここから援護する!・・・いけるか!？」

「誰にももの言っている!当然だ!いくぞ、鈴々!」

「わかつたのだ!」

関羽と張飛が再び呂布に攻撃を仕掛けた。

三つの剣戟が辺りに響く。

俺は二人の攻撃の隙間を縫って、矢を放つ。

放たれた六本の矢は全てはじかれたが、呂布は二人に対する反撃を止められた。

若干だが、こちらが有利だな。

関羽と張飛は十分以上に強い。

それでも呂布には勝てないが、俺が呂布の動きを矢で阻害しつづければ話は違う。

攻撃にも守りにも邪魔が入る以上、いずれは隙ができる。

にしても、全ての矢を見事に防ぐな。

・・・矢除けの加護でもあるのだろうか?

ついに呂布に隙ができた。

俺は十度目の速射をしようと矢を番えたが、殺気を感じて身を翻した。

弓矢を捨て、干将・莫耶で偃月刀の一撃を防ぐ。

「・・・随分な挨拶だな」

「・・・ようウチの一撃止められたもんや」

「なに。そこの猪のおかげだ」

そう。

俺が感じた殺気は張遼ではなく華雄のものだった。

・・・本当に役に立つな。

「・・・ほんまにどこまで足引つ張るつもりなんやろつな。・・・  
アンタ、名前は？」

「・・・衛宮だ」

「その名、よう覚えさせてもらっわ」

そう言つて、張遼は無理矢理に華雄を連れて呂布のもとへ向かつて  
いった。

俺は弓矢を失い、魔力切れで投影も出来なくなったため、馬で走り  
去る張遼を見逃すしかなかった。

関羽たちは俺の援護がなくなったせいで、再び押され始めていた。  
その上に、張遼が戻ってきては引くしかなかった。

その日、虎牢関を落とすことはできなかった。

しかし、翌日になり偵察から意外な報告を受けることになる。

「・・・虎牢関が、無人？」

「はい。」

袁紹が偵察を放ったところ、中は呂布どころかネコの子一匹いなか  
ったそうで「

桂花から伝えられた情報に皆唾然としている。

・・・どういうことだ？

「何の罫かしら」

「分かりません。呂布も張遼も健在な現状、虎牢関を捨てる価値は

どこにもありませんし」

「……都での内紛か？」

罨以外ではそれしか考えられない。

「可能性としては考えられるけど……罨の可能性のほうが高いわ」

「いつそのこと、どこかの馬鹿が功を焦って関を抜けに行ってくれば良いのですが……」

「さすがにそんな馬鹿はいないでしょう。春蘭でもそこまではしないわよ」

……華雄はするかもしれないな。

「だから華琳さま、どうしてそこでわたしを引き合いに出すのですか……」

「華琳さまー。いま連絡があつて、袁紹さんの軍が虎牢関を抜けた行つたみたいなのー」

「……」

「……」

「……」

「……」

沙和の報告に場が白けきつた。

「……いたな。そんな馬鹿」

思わず口に出した。

「そうね。たまには馬鹿に感謝するのも悪くないかもね。……袁

紹が無事に関を抜け次第、私たちも移動を開始するわよ」

「どづいづことや賈馱っち！」

張遼が怒鳴った。

「……甘かった。注意するべきは十常侍どもだけだと思ってた」  
「詠ちゃん……」

賈馱と董卓の表情はどこまでも暗い。

「……どづいづことや？」

「……月の両親の代わりに月が奴らの傀儡になったこと。そして、

ボクたちが自由に行動するために月の両親を辺境に逃がしたことは知っているわね？」

「もちろんや」

「抑えつけてきたことに反感を持ってた十常侍による反乱も、張遼たちのおかげでなんとかあった。けど、今まで十常侍を裏で操ってた奴がいた。」

しかも、逃がしたはずの月の両親を人質として連れてきたのよ」

「なんやって!？」

「……状況は最悪よ」

張遼は齒を食いしばり尋ねた。

「……何もんや、そいつ」

「……王允子師、それがそいつの名前よ」

いついつて戦場は洛陽に移る



## 第六話：反董卓連合（完結篇）

洛陽城の城壁の上にて、賈馥と張遼は今後を話している。

「……王允子師はどうすんや？」

「……どうも出来ない。少なくとも、人質をどうにかしない限り」

そして、それが無理なことも賈馥には分かっている。

王允子師は悪人であり、基本的に抜け目がない。

自らの野望である大陸支配のために董卓を利用しようと、十常侍たちを唆した。

董卓と賈馥ならある程度、今の王朝を維持できると踏んだからだ。

董卓が表で行動している間に自分は影で色々動き、最後は人質を利用して董卓を自らの傀儡にしようと考えたのだろう。

……王允子師の誤算は十常侍たちの暴走だろう。

それがなければ、諸侯連合にも対処できると踏んでいた。

おそらく、王允子師は様子見をしている。

賈馥たちが勝てば計画通りに行動する。

負けたら逃げて再起を図る。

王允子師について諸侯たちは知らないから、取り入る機会は十分あるだろう。

そしてそのために……

「……ボク達が負けたら口封じのために月の両親は絶対殺される」

王允に関するこれまでの情報からそれが容易に分かる。

「……辛いかもしれへんけど、いざとなったら月連れて逃げえ

よ？」

「けど！」

「月の両親も死なしとうないと思うに決まってんやる！」

「……………」

「死ぬつもりはあらんけど、逃げる時間は稼いだる。」

「……………分かった。あんたもそう言ったからには死なないようにね」

賈馱と張遼が互いに微笑んでいると、一人の兵士が駆け寄ってきた。

「ああ、賈馱さま、張遼さま！こちらでしたか！」

「何かあったんか？」

「はっ。地平の向こう、虎牢関の方向より大軍団が迫っている様子。

恐らく、連合軍かと……………」

「相変わらず早いなあ……………。総員に戦闘準備を通達！今度は籠城戦  
やし、長期戦になるで！」

そこまで言って、不安要素を思い出し張遼は尋ねることにした。

「……………あと、華雄は！」

「出撃準備を……………」

「阿呆う！止めさせい！」

張遼は頭痛を堪えて怒鳴った。

攻城戦が始まって数日が過ぎた。

「状況はどう？」

「……あまり芳しくありませんね。袁紹や袁術も攻城戦を繰り返してはいますが、城の城壁は高く、一進一退の状況です」

華琳の確認に対し桂花は停滞している状況を伝えた。

「華琳は？」

「さすがに今回は出て来ないようで……」

敵一番の隙を華琳は尋ねたが、答えは期待はずれだった。

「……期待していたのだがな。」

流石に三度目は……当人ではなく周りが必死で止めるか」

俺は率直な私見を述べた。

「まあ、仮に今回も出て来たら、見殺しにされるでしょうね」

「私なら春蘭が出たら一度目で見殺しにしますが」

桂花の言葉に毎度同じく春蘭が反応した。

「だからどうして私を引き合いにだす！」

「……」

「……」

「……」

「……」

そして、毎度同じく皆黙った。

「な、何だ……」

「・・・いやなんでもない」

俺は春蘭に言った。

「・・・言っても何の意味もないのだから。」

「ただいま戻りました」

流琉と季衣が戻ってきた。

「お帰りなさい。様子はどうだった？」

「・・・全然ダメでした。上からああも反撃されたら、手も足も出ないですよー」

流琉が情報を補足する。

「劉備さんの軍も攻めてきましたけど、状況は同じようでした。」

今は袁紹さんの軍が攻めてますけど・・・たぶん、状況は変わらないんじゃないかと」

「そう。あまり時間もないし、早く決着をつけたいところだけれど・・・」

華琳の言葉通り、時間が経てば城攻めをしているこちらの士気が下が・・・。

その手があるか。敵の士気を下げる手段としては・・・。

「華琳、一つ思いついたのだが」

「なにかしら」

「全諸侯によって一日中攻め続けるというのはどうだろうか？」

華琳は一瞬俺の言葉の意味を考えていたが気付いたようだ。

「……その手があったわね。十分な効果が期待できるわ」

周りも気付いたようだが、いつもの二人は分かっているようだ。

「一日中攻めていてはこちらが疲れてしまっただけじゃないか」

「そうですね」

俺は二人にも分かるよう説明を始める。

「全軍が一度にそれをやればな。」

だが、例えば一日を六等分して一つの隊が六分の一だけ攻めれば問題ない」

「あ、それなら敵は一日中休めないけど、こちらは十分休める！」

季衣は俺の説明ですぐ分かったようだ。

きっちり教育すれば問題ないな。

「ああ、そういうことか」

……春蘭はそつとしいてやった方が良いな。

「華琳から諸侯に提案してもらえないか？」

「その方が早いわね。良いわ。早速、軍議で提案しましょう」

こうして、この作戦は実行されることになった。

……俺も随分辛かったからな。

脳裏に思い出すのは、この世界に来る前の戦いの記憶。

魔術師たちによる持久戦において、一日中どんな時でも襲ってくる

ので、  
いつも浅くしか眠ることが出来なかった。それが二週間も続いた。  
やられると堪ったものではない。

それは向こうも同じだったようだ。

はじめてから数日後。

董卓軍は音をあげた。

「報告っ！城の正門が開きました！」

凧の報告を聞き

「見えているわ！皆の者、聞きなさい！」  
華琳は自軍の鼓舞を始めた。

「ここが正念場！この戦いに勝てば、長い遠征もおしまいよ！けれど、

もし奴らをあの城に押し戻してしまったら、この遠征は永劫に続いてしまうでしょう！」

この戦いばかりの日々を終わらせるわよ！総員、戦闘準備！突撃！」

「はあああっ！」

「っほっ！」

回し蹴りを食らった敵兵の一人が肋骨をぶち折られてその場に崩れた。

「真桜！右翼の沙和の援護に行け！」

俺は指示を出しながらも干将・莫耶で敵兵を倒していく。  
戦力差は揺るがず、この戦の帰趨は決した。これなら、敵に手加減  
をする余裕が出てくる。

そして、殺さずに戦闘不能にするのは矢よりも双剣のほうがやりや  
すい。

戦場を見ていた俺の目は張遼を見つけた。

俺は凧に後を任せて、張遼を追った。

「……やれやれ。やっと撒いたか。けど、どう見てもこっちの  
負けやなあ……。」

月と賈馱っち、上手く逃げられたやるか

「ふむ、月とは董卓のことでもいいのかな？」

「もちろんや……って、あんた衛宮！」

張遼は面白いくらいの反応を示した。

「何をそこまでおどろいているのかね？」

「いや、普通いきなり後ろにいたら驚くやろ！」

「まあ、それは置いといて……張遼、君は董卓のために戦ったと  
いう事でいいかね」

「……だとしたらどうすんや？」

張遼は警戒しながら答えた。

「取引をしないか？」

「取引やと?」

張遼は困惑しているようだ。

「君が我が主である曹孟徳に降る代わりに、

私は董卓を逃がすことに全力を尽くすとを約束しよう」

「・・・あんた正気か?」

「少なくとも、君は董卓を守るだけの価値を見出した。

そして、君がそうするのだから董卓は悪人ではなく、傀儡にさせられただけだろう。」

なら、私が救うのに問題はない」

張遼は目を細めて言う。

「信用できんわ」

「当然だな。だから、前提条件をつけるつもりだった」

「・・・なんや?」

俺は言い放つ。

「私が君に勝つたらだ」

「なんやと!?!」

「だから、私が君に勝つたらさっきの取引を受けてもらえないかと言っているんだが」

呆気にとられながらも張遼は尋ねてくる。

「・・・それなら、取引する理由はないやん」

負けたら殺されるか降るしかないのだからその反応は当然だ。



「理由は二つ。一つは確実に華琳に降ってもらうため。二つ目は正義の味方として救える者は全て救うと私は決めているからだ」

「・・・正義の味方？」

「そうだ。全てを救えるとは夢にも思っていないが、それを目指すと決めている。

董卓は救える可能性があるから救う。それだけだ」

張遼は不思議なモノを見たような顔をしている。

「あんた、頭おかしいんじゃないか？」

「ああ、そうだな。私は精神破綻者だからその言葉は間違いなく正しい。

だが、それが譲れない私の理想だ」

「・・・ほんまにできるんか、あんたに」

「それを君に勝って証明しよう」

張遼は偃月刀をかまえて、

「本気なんやな。その目、恋や華雄つちとおんなじ目えや。

・・・ええやろ。けど勝てたらの話や！」

俺たちは戦闘を始めた。

「答える！衛宮はどこだ！」

「ええい！知らないと言っているではないか！そちらこそ張遼はどこだ！」

「知らん！ええい、なんとしても答えさせてやる！」

猪二人がさ先ほどから剣戟を交えている。  
春蘭は華琳との約束を果たすべく、張遼を探して戦場を駆けていた。  
華雄は二度に渡る屈辱を晴らすべく、衛宮を探して戦場を駆けていた。

そして、二人は行き当たった。

「うおおおおおっ！」

「でやあああああっ！」

互いの得物が空気を震わす。

華雄の袈裟切りを春蘭は大剣で受ける。

春蘭の払い切りを華雄は戦斧で弾く。

振るう一撃はどちらも必殺の力と速度が籠もる。

手加減などという考えなど、ただでさえ感情が高ぶった猪たちには  
思いつかない。

殺したら、当初の目的である探し人の行方を聞けないのに。  
実際は両方とも知らないから関係ないが。

二人の猪は互いに無益だと気付くことなく、武勇を辺りの者達に見  
せつける。

その武勇を見る者は辺りに居らず、剣戟の音色はお互いだけが聞き  
続ける。

「ふふ……っ！楽しいなあ、やっぱり本気で戦える相手っちゅうのは、血が滾るわ！」

張遼の声が響く中、俺は思考する。

戦う前から分かっていた。防性の自分の剣技では負けなくても勝てない。

現在の互いの距離は十メートル。

剣技以外で戦うのにこの距離が必要だった。

そして、それを稼ぐためにここまで時間がかかった。

「……張遼。剣技では負けなくても、勝てないことが良く分かった」

「なんや、降参か？」

「まさか。私はもともと剣技で戦う者ではない。

私は今持てる全ての力を使って君を打倒する。構わないか？」

張遼は答える。

「出し惜しみなんかすんな！おもいつきりこんか！」

「では……遠慮なくいくぞ！」

張遼は衛宮が弓を使ってくると思っていた。

衛宮の弓は紛れもなく超一流であり、

間合いが遠ければ、自分が一方的にやられると考えている。

だが、この距離なら十分勝てるかと踏んでいた。

だが、衛宮がしてきたことは弓であって、弓でなかった。

衛宮は双剣の片方を投げつけてきた。

怪訝に思ったが、張遼は冷静にそれを弾き、間合いを詰め寄ろうとした。

そして、見た。その手に黒い柄の十字の剣が出現したのを。

「なっ！」

投げつけられたそれを、驚愕で遅れながらも防いだのだが……。

「ぐっ！」

想像以上の襲撃が襲ってきた。

考える暇もなく、次から次へと投げつけられる。

衛宮は自身を弓とし剣を矢として放ってくる。

それでも全て防いだが……、衛宮は間合いをいつの間にか詰めて来ていた。

「やられんで！」

とっさに攻撃しようとした。

だが、衛宮の手に現れた銀色の戦斧が襲ってきた。

「なっ！？」

防いだが、予想とは違ったとんでもない重量に手が痺れるた。

それでも反撃しよとした。

が、

「後ろを見た方がいいぞ」

という衛宮の声に本能的に後ろを見た。

そこには襲い来る先ほどの双剣の一つがあった。

「くっ！」

なんとか防いだが、体は平衡を失った。

「終わりだ」

ウチの首筋に刃があてられた。

「……あなた、道士だったんか？」

「魔術……この国での道術に当たるものが使えるが、使えるだけで道士ではない。

言っただろう。剣士でも弓兵でも道士でも武将でもなく、正義の味方だと。

使える技術は全て使う」

「……卑怯……とは言えへんな。「出し惜しみすんな」っていったもんな」

張遼は諦めた様子で言った。

「だが、私は今の私の持てる全てを使わなければ勝てなかった。まったく、華琳にさえまだ知らせてなかったというのにな」

張遼は驚いたようだ。

「……あなた、知らせてないんか？」

「まあ、使う機会がなかったというのもある」

今回、俺が勝ったのは不意打ちを連発したからに過ぎない。  
まず、投影と鉄甲作用による黒鍵の投擲。

予想外の得物の出現と想定外の威力の黒鍵で相手の余裕を奪った。  
ちなみに、この黒鍵は概念部分を省略した劣化品で、そのため七秒しか持たなかったりする。

次に、投影したリーゼリットのハルバートによる攻撃。

実のところ、あまりの重さに振り下ろす（というより落とす）ことしか出来ない。

強化が使えれば違うが。

こちらも魔術付加を省略した劣化品で、さきほどの黒鍵と同じ欠陥を持つ。

とにかく、これにより思考を俺だけに向けさせた。

そして、とどめに一番最初に投げた干将を莫耶で引き寄せることによる背後からの奇襲。

完全に意識が俺だけに向いていた張遼に対処する術はなっかつただろう。

死なれては困るから声をかけたが。

種を知られてしまえば、もはや通じない一発芸。

まあ、張遼は運がなかったと思ってもらおう。

「まあ、秘密の切り札まで切ってくれたことやし、取引に応じるわ  
「そうか」

俺は張遼から董卓たちについて詳しい情報を聞き出した。  
そこへタイミング良く風が現れた。

「隊長！大丈夫ですか？」

「良い時に来てくれた。風、張遼が降るから、丁重に華琳のもとへ

連れて行ってくれ」

「隊長は？」

「華琳に「妨げにならない程度に正義の味方をしてくる」と伝えてくれ」

「へ？」

困惑する風を置いて、俺は洛陽城へと向かった。

「だあああああああっ！」

「おおおおおおおっ！」

剣戟は未だ止まず。

ぶつかり合う金属音が曲の如く場に流れる。

「やるな！」

「そちらこそ！」

二人は探し人の事を抜きにしても相手を武人と認め、互いを倒さんとしている。

「姉者！」

「秋蘭か。今こいつを倒して・・・」

「・・・悪いが張遼は、士郎が倒した。今華琳さまのところへ向かっている」

猪二人は互いに反応する。

「「なんだと!!」」

春蘭は倒すべき相手を先に倒されて、  
華雄は倒すべき相手が敵本陣に行ってしまう倒せなくなったと思  
い意気消沈した。

しばらく意気消沈していた二人だったが、

「夏侯惇、この遣る瀬無さをお前で晴らせてもらっぞ！」

「こちらの台詞だ！華雄！」

互いに再び刃を交えようとした時、一本の矢が春蘭の左目に刺さ  
った。

「姉者っ！姉者あつ！」

「ぐ……ぐ……ぐう……っ」

「か……夏侯惇!？」

激痛に春蘭は声を上げる。

「ぐ……あああつ！」

「くっ、おのれええっ！」

怒りを込めた秋蘭の一矢が不遜な雑兵に放たれた。

「ぐはっ！」

そして、絶命させた。

「姉者！大丈夫か、姉者っ！」

怒りに震え、華雄が吼える。



「くう・・・っ！誰だ！誇り高き武人同士の一騎打ちに水を差したクズは！出てこい！  
わたしが叩き斬る！」

「しつかりしろ、姉者！気を確かに持て！」

「ぐああああああ・・・っ」

「姉者っ！」

「夏侯惇っ！」

春蘭は刺さった矢を左目ごと抜き取った。

「・・・天よ！地よ！そして全ての兵達よ！よく聞けえい！

我が精は父から、我が血は母からいただいたもの！

そしてこの五体と魂、今は全て華琳さまのもの！

断りも無く捨てるわけにも、失うわけにもいかぬ！我が左の眼・・・  
永久に我と共にあり！」

「夏侯惇・・・！」

春蘭は左目を食べ始めた。

「姉者！大丈夫か、姉者！」

「・・・大事ない。取り乱すな、秋蘭。わたしがこうして立つ限り・・・  
戦線は崩れません」

実際、春蘭が傷を受けたことによる兵への動揺は、士気の向上へと変わった。

「姉者・・・！せめて、これをその目に・・・」

「うむ」

春蘭は眼帯をかけて立ち上がった。

「水を差されたが・・・待たせたな、華雄。さあ、一騎打ちの続きと行こうではないか」

華雄は春蘭が立っているのも辛い状況だと気付いていた。

「・・・わたしは夏侯惇、お前と全身全霊を懸けて戦いたい。だからこそ、万全の状態のお前でなければ意味がない。ここは引かせて貰う。」

・・・誇り高き武人としての一騎打ちをお前とするために！」

そう言つて、華雄はその場を去つて行つた。

「やはり負けたか」

黒い髪の三十代の男が駆けている。

王允子師、それがこの男の名だ。

若いころ道士としての道を進んでいたが、その我欲により破門された。そして、現在は学んだ道術を利用して大陸支配を目論んでいる。

自身の器のなさを自覚しようともせず。

だが、この男は自身が悪人なためか、小悪人を利用することに長けていた。

それと道術によってこの男は大陸支配が見えるところまで来た。だが、今回はここまでと判断した。

というより、十常侍たちの暴走の時点で分かっていたが、可能性を捨てきれず、

ここまで先延ばしをした。

「すぐに董卓の両親を始末しなければ！」

自分について知っている者を殺し、再起を図ること、そのために王允は走る。

董卓たちは諸侯が殺すだろうと考え除外しても、董卓の両親は・・・。

彼は気付いていない。今彼が言ったことを「見た者」が、正義の味方がいたことを。

王允は監禁場所にたどり着き、証拠を隠滅しようと刃を出す。

「そこまでだ」

振り返ると、そこには赤い外套の男がいた。

「覚悟してもらおう」

俺はこいつを黒幕かそれに近い者と判断した。

そいつは何か呟くと炎を右手から飛ばしてきた。

「やったか？」

そいつは的外れなことを呟いた。

故に、俺が目前に現われて驚いた。

俺は干将を振り男の右手を切り飛ばした。

「ぐっつ！」

そいつは左手の刃物を董卓の両親に向けて投げた。俺は莫耶で打ち落とした。

だが、その隙にそいつはなにか呟くと煙が噴き出た。

それでも追おうとしたが、新たに刃物が投げられたため打ち落とさなければならなかった。

そして、逃げられた。

とりあえず、彼らを起こすことから始めよう。

三つ編みの眼鏡の少女と豪華な衣装の小動物じみた雰囲気少女が話している。

「月！早く逃げなきゃ！」

「けど、けど、お母さんたちが……！」

「……残念だけど、せめて月だけでも生きなきゃ！」

「だけど私のせいでたくさんの方が……」

「君一人の責任でもないだろうに」

聞きなれない声に二人は動きを止めた。

二人が振り返ると、そこには赤い外套の男と……大切な二人がいた。

「お母さん！お父さん！」「おばさん！？おじさん！？」

両親に抱きつく董卓と、それを困惑した表情で見つめる賈馱。

「悪いが、時間の余裕は無いんだが」

四人は俺を見つめた。

「あんた、何もの？」

「霞の知り合いと答えよう」

「霞の？」

ちなみに霞は張遼の真名であり、二人に信用してもらったために教えてもらった。

「ああ、彼女に頼まれ君たちを逃がすことになった。

運良くその二人も助けられたので連れてきた」

「あ、あのありがとうございます」

礼を言ってくる董卓。

「礼はまだ早い。これに着替えるといい」

途中で見つけた庶民用の服を二人に渡した。

「それを着れば目立たなくなるだろう。それと、逃げるなら劉備の所に逃げるといい。

彼女は「皆、仲良く」を信念にしているようだから、悪いことにはならないだろう」

そう言いながら、俺は虎牢関の戦いの後にあつた一幕を思い出して

いた。

《回想》

「曹操さん！」

劉備が本陣に尋ねてきた。

「劉備、どうかしたのかしら？」

「曹操さんに泗水関の件のお礼がしたくて」

「あれは互いの利が一致したから行っただけ。感謝する必要はないわ」

「それでも、ありがとうございます」

そして今度は俺に礼を言う。

「衛宮さん。さきほどの戦いで愛紗ちゃんを助けてくれて、ありがとうございます」

「・・・必要はないと言っても変わらんか」

「はい」

劉備が去った後、華琳が尋ねてきた。

「諸葛亮や関羽たちについては聞いていたけど、劉備に関してはどう思う？」

「・・・王としては認められないな」

「どうしてかしら？」

「皆仲良く全て救いたいそうさ」

華琳は驚いた表情をした。

「・・・あなたと同じということ？」

「私と同じ生き方をする者を王としては絶対に認められないな。もっとも完全に同一ではないだろうが」

「なら、理想を追う者としてならどう思う？」

華琳は分かり切っているであろう質問をしてくる。

「・・・それがどういふことか理解し、

その上で覚悟を持って進むというのならいいが・・・」

「そうでなかったら？」

「私は理想を追う者としての劉備を認められない」

俺はそう言いきった。

《回想終了》

「本当にありがとうございました」

四人に対し、

「私について誰にも何一つ話さなければそれでいい。約束を果たしただけだ。」

感謝されたくもないし、お尋ね者にもなりたくないのですね  
そう答えた。

「あ、あのお名前は？」

尋ねてきた董卓に、

「・・・アーチャーとでも覚えておけばいい」  
とだけ返答した。

そして、その場を去った。

あの激しい戦いから一夜明けて。

「もう、復興が始まっているのか・・・」

既に華琳は兵を場内に入れ、道路や倒壊した建物を片付けさせ始めている。

「ええ。陛下の側近に繋がりがあってね。そちらから既に許可をもらってあるわ。」

張遼の件も御苦労さま。にしても頑張ったみたいね、正義の味方」  
「ああ。邪魔にならない程度にな」

周りは良く意味が分かっていないようだ。当然だが。

「・・・すごいんやな。分かってて、あんたを使いこなすなんて」

事情を知る霞に、

「でなければ仕えはしない」  
と答えた。

「あれ・・・?」「あ！ちびっこ!」

流琉と季衣の言葉に反応してそちらを見ると劉備たりが炊き出しをしていた。

見れば、董卓たちも一緒に手伝っている。



「……ありがとな」

「約束を果たしたただだが、素直に礼を受け取ろう」

劉備たちの炊き出しを見ていた華琳が呟く。

「何を聞いてもまず民のため……か」

「それは華琳も同じではないか？でなければ公共の道や橋を優先的に直させないだろう」

「……」

華琳は顔を赤くした。

「あ、華琳さま、照れてるー！」

「……うるさいわね」

季衣にからかわれ、華琳はふてくされた。

「ここにいらしゃいましたか。華琳さま」

「秋蘭、事後処理御苦労さま。……春蘭は？」

「それが……」

秋蘭の様子に華琳の顔色が青ざめる。

まさか……。

「まさか……冗談、よね？」

「御心配なく、至極元気です。」

「……が、華琳さまにはもはや顔を見せるわけにはいかない」と  
「どうしたのっ!？」

「少々、怪我をしまして……。命に別状はないのですが……」

「っ！」

「華琳さま！姉者は本陣の救護所にあります！」

「わかったわ！」

その声は既に角の向こうから。

華琳の小さな姿は、あっという間に見えなくなってしまっ。

「うう……」

「よく我慢したな、季衣」

「だって、兄ちゃんが血が出るほど手を握り締めて堪えてるんだもん。

ボクだって耐えなきゃ」

……自分でも気付かないうちにそこまで握り締めていたようだ。

「季衣、兄さま、後でみんなでお見舞いにいこうね」

「……ああ。今春蘭に一番会いたいのは、華琳だからな……」

「春蘭……その目はどうしたの」

華琳の質問に沙和が答える。

「華雄さんと戦ったときに、流れ矢に当たったの」

「おいこら、沙和っ！それは内緒だ……！」

「あ……あはは」

華琳は言う。

「そう。流れ矢に当って……」

「申し訳ありません……」。

このような醜い……もはや、華琳さまに合わせる顔がありません  
「！」

顔を伏せる春蘭に華琳は想いを伝える。

「どこを失ったというの。」

失ったものなど、何もないでしょう？いつもの春蘭とかわらないわ

「しかし、この左目は……！」

「その瞳は私への忠義の証として捧げられたもの。」

春蘭の体は春蘭のものでも、春蘭の左目と心は、ずっと私のものよ

「華琳さま……っ！う……っ！う……っ！う……っ！」

「これからも私の剣となつて戦つて頂戴……」

「うわああああああああんっ！」

こうして、俺たちの諸侯連合における戦いは終わった。

「く、くくく。天は……天は私を認めたのだ！私こそが王になる  
べき存在だと！」

あたりには彼を襲つて、返り討ちにあつた血塗れの盗賊たちの死体。  
道術による幻覚で同士討ちに果てた彼らの首魁から見つけた一つの  
書。

これは誰も気づかぬ所で運命が大きく音を立てた一幕

正義の味方の観察記録【真桜編】（前書き）

ソーラーパネルの事が思ったより不評だったため、設定を変えました。  
ソーラーパネルを面白いと思っていただけた方々に謝罪申し上げます。

正義の味方の観察記録【真桜編】

「師匠？失礼するで」

ウチは師匠こと衛宮士郎の部屋へ入った。

初めて師匠の部屋に入ったんやけど、・・・見事に私物があらへん。寝台と机に椅子・・・だけ。生活感がないにもほどがあるやろ。

「うーん？留守みたいやな」

今日は師匠の休日やし今の時間ならいると思うたんやが。

それにしても・・・金を仰山稼いどるはずやのに・・・。

真桜は最近になって師匠が売り出した、簡易型カラクリ春蘭人形や、服のデザイン料などを思い出す。・・・それと、四分の三を徴収された麻婆事件における売上金を。

いったい何に使ってるんやろ。

本当に謎だらけな人やな。

「ん？これなんやろ？」

部屋を調べていた真桜はそれを見つけた。

机の下の隅に壁から飛び出ている小さな木の棒があった。良く見ると、下に下げられるうようだ。

「・・・・・・・・ちよつと試すぐらいええよな？」

誘惑に負け、ウチはそれを・・・・・・・・下げた。

次の瞬間、何かが外れる音がした。

音の方向を見ると、部屋の壁に四角い穴が開いている。

「・・・・・・・・入口・・・・・・・・みたいやな。」

そこには階段が下に続いていた。  
かなり深いようだ。

「・・・・・・・・ここまで見てひくのは問題やな。」

ウチは覚悟を決めて、穴を降りてゆく。

そして、下に着くと今度は道があった。

ウチはその道を辿っていく。

・・・・・・・・ちゆうか、道を照らしている光はなんや？

・・・・・・・・明らかに火やないんだけど？

真桜は知らないことだが、

士郎が偶然手に入れたある品を利用した電気の灯りだったりする。

奥まで来た真桜が扉を開けて見たのは・・・・・・・・一つの部屋だった。

右の壁にはカラクリ夏侯惇

・・・・・・・・ではなくカラクリ夏侯淵やカラクリ許緒（未完成）などが置  
かれ、

左の壁には見知った工具

・・・だけではなく見知らぬ工具までもが置かれている。そして、正面にはもう一つ扉がある。床の一部には様々な材料がつまれ、中央で一つの物体をいじる衛宮士郎の姿があった。

「ん？真桜か。よくこれだな。偽装はそれなりにしたのだがな」  
「師匠・・・、いつの間になこないな場所を作ったんや？」

ウチは呆然としながら尋ねた。  
なんでやねんって、ここが秘密基地やからだ。

「以前から少しずつ作っていき、先日完成したばかりだ。  
ちなみに、階段部分は斜面だった元の地形を利用して作った」

驚きも薄れてくると、今度は興奮してきた。

「師匠！今度からウチもここに来てええか！？」  
「理由は？」

ウチは興奮を抑えきれんと答える。

「秘密基地に憧れへんものがあるやろうか？いや、おらん！」  
「なるほど」

「それにウチは師匠の弟子なんや。弟子は師匠からいろいろ学ぶものやろ？」

師匠は少し考えていたみたいやけど、決心したようや。

「いいだろう。その代り、きっちり手伝ってもらおうぞ」  
「まかせときー！」

そういつと師匠が作っていたカラクリの前に行った。  
けど……、これ何や？

「……師匠。これ何や？」

素直に尋ねることにした。

「先日、街をめぐっていた時、面白いものを見つけてな」

そういつて、師匠は一つの透明な丸い球をウチに見せた。

「これは？」

「どつやら道士によって作られたもので、常に一定量の冷気を出す品のような」

恐る恐る触ってみると、氷のように冷たかった。

「夏には重宝しそつやな」

「これを利用して食糧保存のカラクリを作ろうと思つてな」

それが、これつちゆうわけか。

「で、ウチは何をすればいいんや？」

「その部品とこの部品の連結をしてくれ。」

その間に設計図を今から描くからそれを見て作業をしてくれ」

そういつて、師匠は物凄い勢いで描き上げていく。

慌てて、ウチも作業を行った。

ウチが作業を終えた時、師匠も描き終わった。



「はや！いくらなんでも早すぎや！ちゆうか、それなに？」

師匠が手に持つ見慣れない小さな木の棒を差して言った。

「ああ。これは鉛筆と言つて、炭を木の棒の中に仕込んだものだ。木簡や竹簡には使えないが、紙になら十分使える。」

なるほど。筆では均等な線が描けへんもんな。

「では、これを見て手伝え」

「了解や！」

それから徹夜で作業を手伝った。

師匠もろとも時が経つのを忘れて没頭した。

翌朝、眠い眼を擦りながら自室へ戻ろうとした。

「真桜………」

「真桜ちゃん………」

怒りに震える二人と出くわすまでは。

……やば、そっぴや仕事すんの忘れてもうた！

結局、三刻にもわたる二人の説教を受けるはめになった。

こうしてどないにも締められへん最後でこの記録は幕を閉じる。

ちなみに完成したカラクリは厨房に置かれ、城内の料理を嗜む者達

に重宝されたそうや。

これはウチによる師匠の観察記録で、弟子入り初日の記録や。

## 第七話：劣化剣製

「はあああああつ！」

凧の岩をも砕く正拳突きを、莫耶で受け流しそのまま相手の右手を取り

・・・一本背負いをした。

「ぐはっ」

地面に叩きつけられ、むせる凧に俺は今の試合の批評を言う。

「凧、筋は悪くないが素直すぎる。

虚実を混ぜなければ、簡単に読まれて今のように反撃を食らうことになる」

「はい」

今日は新兵たちの調練後、凧たちの訓練をしている。

少し離れた所で、沙和と真桜が地面に座り込んでいる。

あの二人も先ほどから訓練を続けたため、グロッキー気味だ。

「隊長・・・・・・・・。春蘭さまはどうなんや？虚実なさそうやけど？」

「彼女はほん・・直感で動いてそれを補っている」

「なるほど」

あれも一種の才能だな。

まちがいなく、心眼（偽）も持っているに違いない。

「それにしても、隊長の守りは凄いですね」

凧の言葉に苦笑する。

「努力と経験の差にすぎない。同じだけのものを三人が積みれば私も強くなる」

「・・・ちなみに、隊長が積んだのはどんな経験なの？」

俺の場合は反則で積んだ経験が多いから参考にできないが・・・。  
アーチャーの経験を参考にすると・・・。

「毎回の如く自分よりも遥かに強い者との命懸けの戦闘を繰り返したり、

毎回の如く退くことの出来ない不利な戦いを勝ち残るなどだな」

「・・・それ、死ぬんちゃう？」

まあ、かなり高確率で死ぬな。

「その可能性が高いな。ゆえに、三人には地道に経験を積むことを勧める。」

それより真桜。螺旋槍はうまくいったようだな」

俺は真桜の持つドリルのついた槍を見て言った。

戦闘中、金ぴかのアレを彷彿とさせる見事な回転をしていた。

「師匠のおかげや。どうしても解決できんかった技術部分も助言してもらったしな。」

それにアレくれたんも師匠やし」

アレとは道士が作ったらしい品 part 2、

四角い黒い箱で常に一定量の電気を作り出すというものだった。

製造目的は雷で敵を倒すというものだったが、雷が敵にぶつける前に自分にぶつかってしまう欠陥品ということで売られたようだ。

ちなみに、冷気を出す品も同じ作者でこちらは実用に足る威力が出せなかったようだ。

それぞれ三つずつ手に入り、残りも有効に活用しようと思っている。その内の一つはすでに秘密基地の灯りに使われている。

残りの使用法に思考を巡らそうとしたところで、華琳、春蘭そして霞が来た。

「士郎、三人はどう?」

「基礎は十分だ。後は才能を経験と努力で磨いていくだけだ」

「そう。では今後もお願いな」

「了解した」

華琳と会話していると、霞が話しかけてきた。

「士郎、再戦を申し込ませてもらう!」

「構わんが」

「前回みたいに正義の味方として全力でや!」

その言葉に華琳が怪訝そうな表情を浮かべた。

「どういうことかしら?」

「霞と戦った時に奥の手を使っただけだ」

「へえ、私は聞いてないけど?」

「まあ、矢を出す道術とたいして変わらないからな」

それを聞いていた春蘭がかみついてきた。

「土郎！貴様は私と戦っていた時は本気ではなかったのか！？」

「そんなわけないだろう。卑怯な不意打ちでしか春蘭くらの武将には通じない。」

「使っても意味がないから使わなかったただけだ」

「そうか」

「とりあえず見せてもらおうわ」

こうして霞と再戦することになった。

距離は前回と同じく十メートル。

いつのまにか秋蘭や季衣たちまで来ている。

「ほなら、いくで！」

距離を詰めて来ようとした霞に対し、俺は手に投影した劣化黒鍵の投擲を開始した。

三本、五本、六本、九本、俺は幾度も投げつける。

霞はそのたびに偃月刀を振り、弾き、いなし、かわし、距離を詰める。

かわした一本が木に当たり、刀身が幹を貫通した。

「……凄い威力ですね」

「ああ。当たればタダでは済まないな。」

「春蘭や霞のような武将なら対処できるでしょうけど、秋蘭では弓が持たないだろし、

季衣たちのような重い武器ではあれを全て防ぐのは厳しいでしょうね」

とうとう後少しで偃月刀が届く範囲にまで詰めたので、双剣を抜く。

「はあああつ！」

「おおおおつ！」

互いの得物がぶつかり合う。

霞の飛龍偃月刀が風斬り音と共に迫りくる。

俺は莫耶によってそれを弾く。

同時に胸元にわずかな隙を作る。

霞はその隙に即座に偃月刀による突きを放つ。

俺はそれを干将で防ぎ、カウンターで袈裟切りを放つ。

霞は柄でいなし、唐竹割りに得物を振るう。

俺は双剣を重ねて刃を止め、押し切ろうとする相手の力を利用して距離を離す。

離れると再び劣化黒鍵の投擲を開始する。

舞踏の如き戦いは日が暮れるまで続いた。

「やはりこうなるか」

「結局勝てんかったわ」

引き分けに終わり、俺たちは皆の元に戻った。

「士郎、あの剣は？」

華琳に俺は答える。

「黒鍵という投擲用の剣だ」

「矢だけではなかったのね」

「使い捨てには変わらないがね。ほんの少ししか持たない」

その言葉に皆が周りを見ると、あれだけ投げられた剣は一つも見当たらない。

「・・・他に何か作れるの？」

「刃物なら作れる。ただし、今の私では半刻と持たないが」

その言葉に秋蘭は疑問に思っていたことを聞いた。

「今の私では」と前も言っていたが、以前は違ったのか？」

「その通りだ。この国に来る前は、壊れない限り持つ物を瞬時に作れた。」

そのため剣製と呼ばれていた」

「今は無理なの？」

華琳は尋ねた。

もし、そんな物が作れるなら矢にかける費用は無く済む。

剣や槍は壊れたら消えてしまったため意味はないが。

「出来なくはないが、一日に最大三つまでだ。しかもまる一日寝込むことになる」

そう都合よくはいかないらしい。



「原因はなんなんだ」

春蘭の問いに俺は考えて言う。

「・・・詳しくは分らんが、おそらくこの国に来る前に起きた事故が原因だろう」

・・・可能性としては「彼女のうつかり」が高そうだな。  
・・・というか・・・考えるほどそれしか考えられないな。

「あの・・・直す方法はないの？」

尋ねる季衣に答える。

「目星は付いている。いつかは治るさ。」

「なら、治ったら最大限に働いてもらおうよ」

「了解した」

「あ、あの・・・」

おずおずと流琉が語りかけてきた。

「どうした？」

「霞さんが・・・」

見ると霞がうなだれている。

「どうした？」

「ウ……げ……た」

「なんだって？」

「ウチの偃月刀が壊れたって言っとなるんや!!」

良く見ると、飾りの龍の角が壊れている。

干将の一撃を受けた部分だ。

仮にも宝具である干将が当たったのだから、飾りの部分では当然の結果だな。

「どうしてくれるんや!!」

結局、数日かけて修理して返すことになった。

ついでにデザインは踏襲したまま徹底的に改良したので、霞に喜ばれた。

これは正義の味方が力の片鱗を示した一幕

## 第八話：セイギノミカタ

爽やかな風が吹き抜ける、晴天の午後。  
その日の俺は街の警邏をしていた。

「衛宮さま、いつもありがとうございます。これでも食べて頑張ってください」

「仕事なのだから礼は本来不要だが、貰わない方が失礼だな。ありがたくいただきます。」

そして、その分頑張ってみせよう」

相変わらず、街の人々の顔は明るい。

それを実感できる警邏を俺は気に入っている。

さて、次は治安が少々悪い辺りだな。

そう考えながら角を曲がったところで、一キロほど先で騒いでる者たちを見つけた。

十人の男達とそれに相對する少女の姿を。

俺は距離を詰めるため駆け出した。

「てめえ、何者だ！」

お決まりな台詞を吐く首領格の男に対し少女は名乗る。

「天知る、神知る、我知る、子知る！悪の蓮花の咲くところ、正義の華蝶の姿あり！」

かよわき華を護るため！華蝶仮面ただいま参上！」

周りの者達は全て呆気にとられている。

……唇の動きで内容が分かる俺も一時的に思考が停止した。  
……

「テメエ……頭おかしいんじゃないか？」

「ほう、よりによって街に放火しようと思っていた者たちにそう言われるとは思いませんでしたな」

なんだと……！

放火という言葉に俺は怒りを覚えた。

この時代において火事がどれだけ危険なことか……。

「うるせえー！テメエなんぞに俺たちの気持ちがあつてたまるか  
！」

「では、どんな大義名分とやらを聞かせてもらえるのかな？」

「俺たちの仲間は曹操の軍によって片輪にされちまつたんだ！許せるものか！」

……

「その仲間も盗賊をしていたのではないか？」

「関係ねえ！奴らに復讐するんだよ！」

「だが、無関係な民を巻き込む理由にはなりはせぬ！」

華蝶仮面は槍を振るって、手前の三人を殴り飛ばした。

三人が気絶し、残りの七人は動揺したようだ。

「こ、こいつの命が惜しければ動くな！」

近くの家屋から出てきた十一人目が男の子を人質に脅しをかけた。  
迂闊に動けば刃物で人質は切られるだろう。

「っ！どこまでも見下げ果てた奴らだな！」

「何とでも言え！」

賊どもは逃走するべくじりじりと後ずさる。

華蝶仮面は悔しげな表情を浮かべながら隙を窺っている。

長く膠着した場を動かしたのは、一条の矢。

それは男の子を捕えていた者の額に命中し、昏倒させた。

動揺する賊たち

そして、その隙を少女は見逃さない。

「はあああっ！」

疾風の如く振り回される槍が戦おうとする賊達を昏倒させていく。

迅雷の如く放たれる矢が逃げる素振りを見せた者を気絶させていく。

数秒後には腰を抜かして座り込む首領格の男と倒れ伏す賊達の姿があった。

「怪我は無いな？」

駆け付けた俺は男の子に声をかけた。

「衛宮さま！」

駆け寄ってしがみつくその子の頭を撫でていると安心して眠ってしまったようだ。

家の者が出てきたので、その子を手渡していると、男が怒鳴ってきた。

「て、テメエは何者だ!？」

「ふむ。そちらの少女に言った言葉と同じとは芸がないな。

そうだな……。お前たちの仲間を倒した正義の味方とでも言おうか？」

「て……。テメエがやったのか!許さねえ!ゼツテ殺してやる!！」

「好きなだけ憎めばいい。だが……。無関係な者を巻き込むことは許さん」

俺は男にむけて殺気をぶつけた。

それに耐え切れず、男は気絶した。

「やれやれ。この程度で気絶するとは……」

賊達を縛り上げながら、呟く俺に華蝶仮面とやらが話しかけてくる。

「いや、あれだけの殺気では無理はないと思うのだが……」

「ふむ、まだいたのか。何か用かね？」

「いや、正義の味方と名乗った貴殿の名を聞こうと思ったのでな」

……。正義の味方が。

「ああは言ったが、本当の意味での正義の味方ではない。いやそんな者などどこにもいない」

その言葉が私には癪に障った。  
少なくとも私は正義の味方のつもりだ。

「ここにいるが？」

男は冷笑で返した。

「何が可笑的い!？」

「いや、なに私が矢を放たなければあの子が危険だったというのに、そんな台詞が言えるとはな」

確かにそうだが……。

「あ、あれは偶々「偶々だろうが矢われる命に変わらない」  
……ならば貴殿の言う正義の味方とはなんだ！」

私は思わず叫んでいた。

その言葉に男は複雑な感情を込めて言う。

「私がいらないと言った正義の味方は【全てを救う存在】だ」

「何故いらないと言う！」

「……百人の人間がいたとしよう。そのうち一人を犠牲に残りを  
確実に救える。」

これを実行する者を正義の味方と呼ぶか？」

「そんな者が正義の味方なわけあるまい！」

犠牲を出さないための正義の味方のはずだ！

「では、百人のうち百人救える方法がわずかにある。これを実行するのが正義の味方か？」

「そうだ！」

「では、失敗した時百人が全員死ぬとしてもか？」

私は男の言葉に一瞬詰まった。

「・・・失敗しなければいい！」

「上手くいったとしよう。だが、救ったその一人が後に千人を殺した。どう思う？」

「それはその一人が悪いだけだろう」

救ったものに責任はない！

「だが、救わなければなかった犠牲だ。この時点で全てを救えていない」

「へ理屈ではないか！」

「だが、亡くなった者の遺族にとってはその救った者は憎む対象に過ぎない。

また、失敗することも多々ある。

故に本当の意味での正義の味方はいないと言ったのだ」

私は納得できず切り口を変えることにした。

「・・・貴殿は【本当の意味での正義の味方】ではないと言ったな」

「ああ」

「なら、貴殿は何故正義の味方とあの男に言った？」

「私が【正義の味方という名の愚者】だからだ」

それはどこか悲しげであり、けれど確固とした意思を感じさせる言



葉だった。

それに私は……殉教者を連想した。

「……どういうことですか？」

私は思わず尋ねていた。

「……全てを救えないと分かっているながら、それを目指す愚者。それが私だ。

先ほど、百人の例を出したな？」

「それがどうしたかな？」

何の関係がある？

「私はそれが千人に一人だろうと万人に一人だろうと国に一人だろうと、

全てを救う可能性があるならば実行する。

例え、百回のうち一回しか成功せず、失敗したら万人が死のうとも」

「……！！！」

私は愕然とした。

正気なのか？

それがどれほど危険なことか誰でも分かる。

……だが、本気なのだろう。

自分を愚者と呼んだ時から、悲しげであり、

けれど確固とした意思を感じさせるその響きと態度は全く変化しないのだから。

「もちろん極論ではあるし、それが可能な方法があればの話だ。

現実には可能性すらないことも多い。

その時は迷わず一を犠牲にする」

「・・・失敗したら・・・どうなされる？」

責任の重さを想像して、口が震える。

「私個人に対してならいくらでも恨まれよう。憎まれよう。それが当然のことだ」

「それで済むと？」

それで済む問題ではない。

「済むわけがない。例え死んでも罪は消えない。

出来ることはその罪を生涯忘れず背負うことと、後始末だけだ。それは贖罪ではなく義務だ」

「・・・」

口で言うのは簡単だろう。

だが、それがどれだけ重いことだろうか。

しかも、彼の真剣な眼が今までそうして生きてきたことを示している。

「自らの功も罪も背負うと決めている。自身の行いから目を背けるつもりは無い。

だが、決して届かない理想を目指して、

こんな馬鹿な真似をする私は愚者以外の何ものでもないだろう」

「死のうとは思わないのですかな？」

死んで責任を取ったほうがどう考えても楽なはずだ。

「思わない。私の命が万人分の価値があるなどと自惚れるつもりはない。」

死んで楽になるわけにはいかない。・・・それに個人的な理由から死ねない」

「個人的な理由？」

「ああ。【生きられるだけ生きる】と【自分を幸せにする】という約束があるのでね」

そんなことが許されるはずがない。

「許されると・・・思つのですか？」

「許されない。それを納得した上で守っている。」

だから、私個人を殺そうとするのは許容できるし、殺されても文句はない。

最後まで、生きるために足掻くがね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

真実その通りなのだろう。

彼の言葉は懺悔にも似ているが、許されたいとは微塵も、いや許されたくないと思つているようにみえる。

私は黙り込んで考える。

それを実行することがどれだけ重いかを。

悪人ならそのような生き方をしようとはしないだろう。

普通の人ならそのような生き方に罪悪感から耐えられないだろう。

彼を見ていて気付いた。

届かないと分かっている理想を追つと語る彼に惹かれている自分を。弱者のために槍を振り、正義の味方になろうと思つた自分だからこそ惹かれるのだろう。

私は・・・決めた。

S I D E      華蝶仮面out

どうやら俺は正義の味方という彼女に反応すぎたようだ。

「・・・喋りすぎたな。やれやれ、他人に聞かせるような事では無いというのにな」

そう言っただけ俺は警備隊に賊たちを引き渡すためにその場を立ち去ろうとしたのだが、

「お待ちください！」

華蝶仮面に止められた。

「なにかね？」

「どうやら、私も愚者だったようです。私も貴殿と行動を共にしたい！」

私は呆氣にとられた。

・・・正気か！？

「・・・二つの理由からやめた方がいい」

「その理由は？」

私は丁寧に答えることにした。

「一つは先ほど言ったように、この生き方は碌な結果がない。救った相手に裏切られることもあった。失敗し、最悪な結果になってしまったこともあった」

「覚悟の上ですが？」

「……本気みたいだな。」

「二つ目は現在の私は曹孟徳に仕えているからだ」

「何故仕えているのです？彼女の生き方は貴殿と合わないはず」

華蝶仮面は驚いているようだ。

「幾つか理由がある。まず、王とは一を切り捨て残りを救う存在だ。故に私は私を家来にしない方が良かったのだが……」

思い出して、笑みが浮かぶ。

「どうなされた？」

「いや、その時の台詞が傑作だったのな。」

【私は曹孟徳！未来の霸王たるこの身にそれぐらいの者を扱えないと思うな。】

切り捨てずにすむ方法を見逃しなどしない】と啖呵を切られてな」

彼女は考えているようだ。

「実際俺のありようを知ってなお、自らの覇道を邪魔しない限り認めると言っただけだからな。」

それに民を想う気持ちも持ち、一を切り捨てる重みも知っている」

彼女は切り捨てられる一が常にあることを知り、それに言い訳を一

切しない。

大義名分で誤魔化したりしない。  
そんな所も俺は認めている。

「次に、彼女の覚悟だ」

「覚悟？」

「そうだ。彼女は自らの行動に、理想と野望の結果に生じる全てを背負う覚悟がある。」

「そう、自分の想いに他者を巻き込むことによる結果を背負う点が。」

「そして、王としての高い資質。」

これ等の理由から私は彼女に仕えているが、君が行動を共にする理由に成りえないだろう」

「いえ、そういう理由なら私も仕えようと思う」

「・・・なんだって!？」

「正義の味方とは関係ないのだぞ!？」

「ですが、貴殿は認めた。」

そして、野望だけなのではなく、民に対する想いも持っている事が分かりもつした。

いずれは乱世を終わらせるため、誰かに仕えるつもりでしたから問題はありません」

「・・・言っても無駄だな。」

「分かった、好きにするといい。そういえば、名を名乗っていないかったな。私は衛宮士郎だ」

華蝶仮面は納得した表情を浮かべた。

「名高き心眼の射手でしたか。我が名は趙雲、字は子龍。真名は星と申す。」

以後は星と呼んでください」

そう言って、蝶の仮面を彼女は取った。

・・・なんだと!?

「どうかなさったか？」

「いや、なんでもない」

・・・あの趙雲とは。

世の中何が起こるか分からないものだ。

これは正義の味方が別の正義の味方に正義の味方を語る一幕

## 第九話：官渡の戦い（前篇）

その日、俺は頭痛を堪えて真桜に話しかけていた。

「真桜。これはどういうことだ？」

庭の真ん中にあるのは巨大なオブジェ。

俺が設計案を出したから投石機だということは分かっている。  
それはいいが……。

「ん？師匠、どうかしたんか？」

「私は組み立て式で設計したはずだが？」

「いや、普通に作った方が強度も精度もええやん。だから設計し直したんや」

……組み立て式にした理由があるんだが。

「……華琳が許可したのか？」

俺の問いに答えたのはどこぞの毒舌軍師。

「私が許可したわ。それがどうかしたかしら、弟子以下の設計能力の役立たずの唐変朴」

「いや、華琳ではなくて良かったよ。ああ、華琳ならこんな間抜けな過ちを犯さないか」

……遠坂なら間違いなくするだろうが。

俺の言葉に二人は視線を向けてきた。



真桜のは抗議のものだが、桂花のは殺意という違いがあったが。

「・・・何が間抜けな過ちなのかしら？」

「ウチは過ちなんか犯さへん」

二人に呆れ顔を見せながら、そのミスを指摘する。

「・・・完成した大きさと門の大きさを比べて分かることは？」

二人は一瞬呆気にとられ、そして、

「・・・あつ」

気付いた。

そう、このまま完成したら門を通すことが出来ない。

「人がそこまで考慮して設計したというのにな。

未熟な弟子は仕方ないにしても、優秀な軍師の仕事がこれかね？」

真桜は反省の色を見せるが、桂花は認めたくないようだ。

「うるさいわね！もう軍議の時間でしょ！さっさと行くわよ！」

そう言って、その場を誤魔化して去って行った。

俺も軍議に向かうか。

残されたのは必死で設計図を元に戻す真桜の姿と、

やる事がなくなりその場で待機し続ける工兵たちの姿のみ。

反董卓連合解散後は、漢王朝が力を失ったために諸侯同士の戦いが本格的に始まった。

今までの所、野盗や盗賊退治と諸侯の動向についての報告ぐらいが軍議の議題だったが、今日は違った。

「・・・呂布が見つかった？」

「あの戦いの後、南方の小さな城に落ち延び、そこに拠点を構えることにしたようです」

そこは周りに大きな勢力のない無法地帯。確かに逃げるだけなら一番妥当な場所だ。

「なるほどね・・・。秋蘭、呂布が逃亡した時、何名か武将が同行していたわね」

「はい。陳宮と華雄も呂布と行動を共にしているという情報が届いています。」

「・・・恐らく、まだ呂布と一緒にいるのでしょうか」

「・・・どうしますか？呂布が本気になれば、」

こちらはかなりの損害を被ることになりますが・・・」

桂花の言葉を俺は冷静に検討した。

・・・あの技量と腕力と速度、それに三万人を一人で倒した体力。それに秋蘭に季衣と流琉、張飛に文醜の五人で足止めが限界だったという事も聞いている。

桂花の言葉は誇張ではないだろう。

「・・・今は放っておきましょう」

華琳の言葉に春蘭と桂花が異議を唱える。  
が、華琳はそれに答えずに霞に尋ねる。

「……霞。呂布は、王の器に足る人物かしら？」

「……正直、よう分からん」

霞の返答に、春蘭は訝しげだ。

「……どういう意味だ？まさか、かつての味方だったからといって……」

「んなわけあるかい。……恋が何を考えとるか、わからんちゅうこつちや。」

秋蘭、流琉、正面からやりおうたアンタなら分かるやろ？」

……俺は直にはなく遠距離から短時間の戦闘だったからな。

「……む。それは確かに」

「えっと、武将っていうより、野生のクマや虎を相手にしているのと同じ感じでした」

秋蘭と流琉が答えたのだが……、流琉はその年で近接戦闘での猛獣退治か。

……まあ、それがこの世界のデフォルトなのかな。

「……相手にしたことあるんかい」

……違ったらしい。

「え？季衣はあるって言ってましたけど……皆さんはないんですか？」

「あるかいな」

流琉はその答えに驚き、

「兄さまはありますよね？」  
と尋ねてきた。

「……似たようなのなら……」

……キメラなら相手にしたことがあるのだが、似たようなという表現でいいだろうか？

……魔術師謹製だから野生ではないが。  
まあ、それぐらいは勘弁してもらおう。

「ですよね」

「ま、まあそついつこつちや」

その説明で納得出来ないものが一人。

「だから、どついつ意味なんだつてば！」

その問いに俺が答えることにした。

「よつするに、周りが知恵を付けない限り、  
自分から攻めてくる事はないという事だろつ」

俺の解説を霞が引き継ぐ。

「せや。軍師の陳宮はそこそ切れ者やけど、  
まだまだおこちやま  
や。

おまけに華雄は……」

「ど、どうしてこちらを見るのだ……!」

直接言うより分かりやすいからだろう。  
皆も納得している。

「そういうこと。あの辺りは治安も悪いし、南蛮の動きにも気を配る必要があるわ。  
しばらくは動かないでしょう。ただ、監視だけは十分しておくように」

「華琳さまがそうおっしゃるなら……」

華琳の説明に桂花は折れた。

「それに今はもっと警戒すべき相手がいるわ。秋蘭、情報は集まっている?」

「はっ。先日の袁紹と公孫賛の争いですが……予想通り、袁紹が勝ちました。」

公孫賛は徐州の劉備の所に落ち延びたようです」

現在の劉備は反董卓連合での功績で初期の支配地である平原から徐州に移っている。

「それで袁紹の動きは?」

「河川四州はほぼ袁紹の勢力下に入りました。北はこれ以上進めませんから、

後は南へ下るだけかと」

……袁紹か。

彼女がどういう人物かは、反董卓連合でよく分かっている。

「袁紹が攻め込んでくる可能性が高いのは領土の大きい我々が」  
「その通りよ。麗羽は派手好きでね。」

大きな宝箱と小さな宝箱を出されてどちらかを選ぶように言われたら、  
迷わず大きな宝箱を選ぶ相手よ」

華琳の言葉に流琉が確認をしてくる。

「だから、領地の大きな我々が狙われるという事ですか？」

「そういうこと。国境の各城には、万全の警戒で当たるよう通達しておきなさい。」

「・・・それから河南の袁術の動きはどうなってる？」

「・・・袁術か。」

彼女は甘やかされ続けた子供そのものだったな。

まあ、親バカ丸出しな副官の影響だろうな。

「特に大きな動きはありません。」

我々や劉備の国境を偵察する兵は散見されますが・・・その程度です」

「あれも相当な俗物だけれど・・・動かないというのも気味が悪いわね。」

警戒を怠らないようにしなさい」

「はっ。そちらにも既に指示を出しています」

こうしてその日の軍議は終わった。

俺は文官の仕事をするべく、歩いていると星にあった。

彼女は俺と同じ条件で華琳の配下になったのだが、

その時の華琳の表情といい雰囲気といい、懐かしい【赤いあくま】を彷彿とさせた。

・・・星は涼しげなままだったが、俺はトラウマによる震えを必死で隠し通すしかなかった。

「星、演習は終わったのか？」

星はその将としての能力の確認のため季衣、沙和、凧と実戦演習に行っていた。

「ええ。私の力を十分示しましたぞ」

「そうか、それは良かった」

「それで、軍議の方はどうなったのです？」

俺は星に軍議で決まった情報や、新たな報告について話した。

「・・・では、もうすぐ攻めてくると？」

「・・・袁紹の性格を考えると、想像以上に早いかもしれない」

そして、その予想は嫌なくらい当たった。

非常招集が掛けられたのは、三日後だった。

「華琳！袁紹が動いたというのは本当か！？」

いくらなんでも早すぎるだろ！？」

「馬鹿は決断が早すぎるのが厄介ね。秋蘭、敵の情勢は」

「敵の主力は全て揃っているようです。その数、およそ三万……。ですが、敵の動きは極めて遅く、奇襲などは考えていない様子。むしろ、こちらに自らの勢力を誇示したいだけという印象を受けたとの報告です」

・・・袁紹しかしないだろうな。

「バカの麗羽らしい行動ね」

「それで報告のあった城に兵はどのくらいいるのだ？三千か？五千か？」

春蘭の言うぐらいはいないと守るのは難しいな。

「ああ。城におよそ七百といったところだ」

「ななひやくう！？」

皆が息を飲む。

「一番手薄な所を突かれたわね・・・」

桂花の言った通りだ。

平均では五千なのだが。二番目に薄い所でも二千はいる。

「そんなもの、手も足も出んではないか！籠城したところで一日と保たんぞ！」

「桂花、今すぐ動かせる兵士はどのくらいいる？」

返ってきた言葉は・・・絶望的なものだった。

「いくらなんでも相手の動きが速すぎます。半日以内に二千、



もう半日あれば季衣や凧たちが戻って来る予定ですから、なんとか二万は……」

「少ないわね。親衛隊を加えればどうなる？」

「季衣も流琉も出ているのだから、兵だけ遊ばせておいても仕方ないでしょう。どうなの？」

こういう決断を即断できるのも華琳が王として優れていることを示す。

「なら、もう五千は……」

「……七千か。それでも心許ないわね」

だが、そこへ秋蘭が驚くべきことを言う。

「華琳さま。それが……兵の増援は不要だと」

「なんですって!?!」

「馬鹿な。みすみす死ぬ気が、その指揮官は!」

……普通に考えれば自殺行為だ。

だが、指揮官ともあるう者が、それに気付かないはずがない。というより未熟なら余計に助かりたくて援軍を欲するはず。

なら、そうする理由になる情報はあるか？

俺は指揮官になったつもりで情報を分析する。

……まさか、そういうことか!?

だとしたら、優秀かつとんでもなく度胸が据わった指揮官だな。

「……分かったわ。ならば増援は送らない」

「華琳さま!?!」

桂花が驚愕した。

どうやら華琳も気付いたようだ。

「城の指揮官は何という名前か？」

「はい、程往と郭嘉の二名にございます」

あの冷静な様子から秋蘭も気付いているな。

秋蘭の言葉を聞き、笑みをかみ殺すものがひとり。

これは俺しか気付いていないようだ。

「なら、その二人には袁紹たちが去った後、こちらに来るように伝えなさい。」

皆の前で理由をちゃんと説明してもらっわ・・・そうでないとなん得できない子もいるようだしね」

「・・・承知しました」

俺は提案することにした。

「華琳、一つ良いか？」

「何かしら？」

「私一人が援軍に行くのは良いだろうか？」

その言葉に反応するのは二人。

「士郎！正気か！？」

「何、ふざけたことを言ってるのよ！！」

桂花と春蘭が怒鳴ってきたが、

「ええ。お願いするわ。無事に連れて来てちょうだい」と華琳は俺に告げた。

「私も一緒に行つて良いだろうか？久しぶりに二人に会いたいののでそれまで黙っていた星が華琳に頼む。

「知り合いなの？」

「ええ。友人です」

だから笑っていたのか。

「君の友人は随分と度胸が据わっているのだな」

「それはもう。筋金入りでしょう」

談笑する俺たちを引き裂くように華琳は告げる。

「はいはい。分かったから、二人ともすぐ準備を整え出発しなさい」

「しかし華琳さま！ たった二人行かせても・・・！」

春蘭はなお食い下がるが、華琳は取り合わない。

「皆は勝手に兵を動かさないこと。これは命令よ。

・・・守れなかったものは厳罰に処すから、そのつもりでいなさい」

その後、軍議が終わると俺と星は準備を手早く済ませ出発した。

そして……。

「元気そうだな、風、稟。」

「おひさしぶりですねー、星ちゃん」

「ええ。本当に久しぶりです。公孫贖のところに行ったのを最後に、居場所がしれませんでしたからね。今までどうしていたのです?」

こうして指揮官の二人と会っている。

「まあ、公孫贖は早い時期に見切りをつけて去ったのだが、その後は諸国漫遊だな。」

仕えるべき人物を探しながら、弱者の救済などをしていたんだが。ああ士郎。この二人が程往と郭嘉です」

この二人が程往と郭嘉か。

金髪ロングの頭に人形を乗せた不思議少女が程往で、眼鏡をかけた真面目な秘書のような少女が郭嘉のようだ。

「私は程往、字は仲徳ですー」

「私は郭嘉、字は奉考と言います。以後よろしくお願いします」

俺も二人に挨拶することにした。

「お初にお目にかかる。私は衛宮士郎。君たちの出迎えのため星と共に来たものだ」

「おおー。有名なひとが来ましたねー」

「確かに。噂では五里先を射抜く心眼の射手を送ってくださるとは。流石に噂は誇張でしょうが」

……想像以上に有名になっているようだな。

この時代の中国の五里というと約二千七百メートルか。制限がなければ可能なんだがな。

「それにしても、星ちゃんと仲が良いのですねー」

「それには同意ですね。真名も許しているようですし」

二人の言葉に星が答える。

「尊敬しているからな」

「・・・尊敬すべき生き方をしているとはいえないがな」

「言ったはずですが？私も愚者だと。故に尊敬の念を抱くのもおかしくないはずです」

俺たちのやりとりを聞いていた二人が言う。

「どうやら信頼できるようですし、私のことは風でいいですよー」

「私も稟と呼んで下さって結構です」

正直、リンと呼ぶことに抵抗があるが我慢しよう。

「分かった。そうさせて貰おう」

その晩、袁紹軍は引き上げていった。

俺たちは二人をつれて帰還する。

俺たちが戻ったのは真夜中だった。

そのため真夜中の緊急会議だったが、城にいた主要メンバーの全員

が予定時刻に揃った。  
誰も寝ていた様子がないあたり、自分たちのことを気にしてくれた  
ようだ。

「……さて。それでは、説明してもらおうかしら？どうして程  
往は増援がいららないと？」

「……ぐー」

「……俺のまわりにはいなかったタイプだな……強いて言えばリ  
ズが近いか。」

独特な不思議ぐあいが。

「こら、風！曹操さまの御前よ！ちゃんと起きなさい！」

「……おおっ!？」

「おはよう。……で？」

華琳に催促され、風は語り出す。

「あー……ふむ。えつとですねー、相手は数万の袁紹軍だったわ  
けですが。」

前線指揮官の文醜さんは派手好きですから、

たった七百の相手なんか、相手にしたくないだろうと思ったのです。  
ですが、

ここで曹操さまが増援を送って下さったら向こうもケンカを売られ  
たと思いますよねー。

袁紹さんたちの性格だと、売られたケンカはなんであれ絶対買っ  
ちやいます。

「……そしたらこちらは全滅してしまいますねー」

「なるほど……。袁紹と文醜の性格は良く分かっていたようね。  
では、顔良が出て来たら？」

桂花が尋ねるのはもっともだが、それはない。  
なぜなら……。

「あの三人が出てくれば、顔良さんは必ず補佐に回るはずです。抑えが効きませんから」

苦勞人である彼女からしたら、

あの二人を野放しにするなんて危険な真似は絶対にしないでらう。

……というか顔良……あの二人の尻拭いをずっとし続けてきたのか。

俺は彼女に同情した。

「……分かった？春蘭」

「はあ。だが、お主ら……もし袁紹が七百の手勢を与しやすいと見て、

総攻撃を掛けてきたらどうしていたのだ？」

「損害が皆一つと、兵七百だけで済みますね。」

相手の情報は既にそちらに送っていましたから、無駄死にというわけではないですし。

袁紹さんの風評操作にも使えたと思いますけど」

可能性は低かったが……それが嫌だから、俺はあの時行くことを決めた。

「そうなれば、貴様は逃げるつもりだったのか？」

「まさか。その状況で逃げきれなんて、これっばちも思っていないよ」

「……むう」

だからこそ度胸が据わっていると思った。

「郭嘉。あなたは程往の作戦、どう見たの？」

「……………」

ん？様子が変だな。

「郭嘉。華琳さまのご質問だ。答えなさい」

「……………ぶはっ」

辺りを染めるは鮮血の赤。

猛烈な勢いで噴き出す稟の鼻血に場は騒然となった。

「ちよっ！ど、どうしたおぬし！」

「誰か、救護の者を呼べ！救護ー！」

普段冷静な秋蘭ですら取り乱した。

ちなみにこの時俺は思考が一時停止中。

「ちよっとボク、お医者さん呼んできますっ！」

「あー。やっぱり出ちゃいましたかー。ほら、稟ちゃん、とんとん  
しますよ、とんとーん」

そう言って風が稟の首筋の後ろを軽く叩く。

「……………う、うう……………すまん」

「ほづ。稟の鼻血を止められるようになったのだな」

星の言葉に思考を回復した俺は尋ねることにした。



「・・・以前から・・・なのかな？」

「うむ。稟は極度の妄想癖がありまして。結果、毎度の如く辺りを鼻血で染めていました。」

私が共に旅をしていたころは、苦勞しましたな」

「稟ちゃんは曹操さまの所で働くのが夢でしたから、余計に歯止めが利かないみたいですよ」

・・・常に鼻血が付きまとう旅・・・。  
・・・出来れば経験したくない旅だな。

「実は旅の途中で凄いい医者さんに止め方を教わりまして。なんでも、神さまが編み出した医術を習得しているとか」

その言葉に俺は反応する。

「・・・その医者は？」

とうとう見つけた。

神の医を伝承せし医師！

「凄く熱血したお兄さんで、華陀という名でした」

華陀・・・三国志でも名高い名医か。

これで治療の目途がたった。  
後は見つけるだけか。

「・・・すまん、風。もう大丈夫だ」

「いいえ」

どうやら持ち直したようだな。

「大丈夫かしら？郭嘉とやら」

「は、はい。恥ずかしいところをお見せしました」

「無理なようなら、後でも構わなくてよ？」

「そ、曹操さまに心配していただいている……！……ぷはっ！」

前回より三割増で噴き出す鼻血。

……後でも意味がなさそうだな。

「衛生兵！衛生兵ー！」

「……程往。代わりに説明してくれるかしら？」

秋蘭が慌てる中、華琳は諦めて風に説明を求めた。

……まあ、当然か。

「はいはい。……稟ちゃんは最悪の場合になれば、城に火を放って、みんな逃げようと考えていたみたいですね！。七百の兵ならそれも十分可能ですし」

それに俺が足止めの援護射撃で指揮官クラスを狙えば、万全になる。

「下手に数が増えると、逆に動きが取れないと？」

「三千の兵ではそうはいかなかったでしょう」

華琳がまとめにはいる。

「だから、士郎と星の二人を送ったということ。二人なら動きに支

障はないし、

逃げられる可能性は確実になる。それに護衛は必要でしょう?」

「・・・むう」

春蘭も渋々ながら納得したようだ。

「華琳さま。いま報告が入りまして、袁紹の軍は南皮へ引き上げたようです」

「こちらの損害は?」

「ありません」

「そう。見事な指揮だったわ、程往、郭嘉」

華琳の言葉に二人は嬉しそうに返事をする。

「ありがとうございますー」

「・・・ふがふが」

郭嘉、鼻血を拭きながらではキメても間抜けなんだが。

・・・「隙のない秘書」からこの十分ほどで随分とイメージダウンしたな。

「それから二人は今後は城に戻らず、ここで私の軍師として働きなさい」

こうして二人の軍師を加え、戦いは続く

## 正義の味方の休日記録5

太陽の光が空を染め始める夜明け、二人の人影が問答をしている。

「……本当にやらなければならないのかね？」

「無論ですとも！」

そもそも私の秘蔵のメンマを勝手に料理して皆に振る舞ったわびと  
して、

一日付き合う約束のはず！」

そう、だから今日という休日に一日付き合う約束をした。

それにしても、星がメンマにここまで変質的な執着を持っていると  
は思わなかった。

それはどこぞのカレーマニアな代行者並みだった。

それはさておき、問題なのは……。

「……いくらなんでもコレはないだろう」

俺が手に持っているのは誰もが趣味を疑う蝶の形のマスク、華蝶マ  
スク（仮）。

星は俺にこれを装着して星と一緒に街の治安を守れというのだ。

「どこに問題がありましたでしょうか？この文様、この形、  
まさに職人の魂が込められているとしか言いようがない至高の一品  
ですぞ！」

星の美的センスが俺には理解不能だ。

それはともかく……実際、コレにはいろいろと込められているの

だが。

実はこの華蝶マスク（仮）、……道士が作った品part3だったりする。

効果は認識阻害。

認識阻害は装着した人物を特定出来なくさせる効果なのだが……。個人差が激しすぎて、相手によっては全く無意味なのだ。

もし、製作者が目の前にいたら……。

自らの死を度外視して偽・螺旋剣を放っていたかもしれない。

「それとも約束を破るつもりですか？」

星の駄目押しに、俺は……覚悟をきめた。

「………了承した」

ここから俺の本当の災難が始まった。

「では打ち合わせを始めましょう。まずは名乗りから」

なんでさ！？その言葉に初めて星を見た時の名乗りが脳裏に浮かぶ。まさか、あの恥ずかしい台詞を俺も言うのか！？

「そんなことまでせねばならんのかね！？」

「当然ですとも！ああ。勝利時の構えなども決めねばなりませんな！」

全てを決め、台詞と構えを覚え、練習すること三刻。

ようやく打ち合わせを終えた時点で、俺の精神疲労は厳しい状態にまで追い詰められた。

これ以上の精神疲労を避けるため、  
少しでもばれないように髪型と服装だけでも変えなければ。  
・・・確か黒いコートがあったな。  
後は今日一日平和であることを祈ろう。

こういう時、自分の幸運の低さが憎くなる。

目に映るのはゴロツキ四人と強請られている老人、そして眺めるし  
かない一般市民。

よりによってこんな時に！

俺は八つ当たりな思いにより二倍増の怒りをバカどもに覚えた。

「それでは始めましょうぞ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・了解した」

俺は始めたくない気持ちを何とか抑え込み返事をした。

俺たちは屋根へと上がり、高笑いを始めた。

「だ、誰だ！？」

ゴロツキの一人がお約束な台詞をわざわざ吐いてきた。

・・・できれば答えたくないというのに。

「天知る、神知る、我知る、子知る！」

星は生き生きと名乗りながら、俺を横目で見てくる。

・・・・・・・・・・仕方がない。

「・・・悪の蓮花の咲くところ、正義の華蝶の姿あり」

極力感情を消して、棒読みに近い状態で星の後に続いた。

「かよわき華を護るため！」

「・・・弓華蝶」

「星華蝶！」

「・・・二人揃って」

「「華蝶連者ただいま参上」！」

そして締めには星が決めた【カツコイイK・A・M・A・E】をする俺たち。

「・・・あれ、なんか目から水が・・・。」

周りの者達は全て呆気にとられている。

そういえば・・・星が前回名乗ったときは賊どもしかいなかったな・・・ということとは俺は最初から初期メンバーと認識されるのか？

俺の憂鬱度は三倍増となった。

「・・・・・・・・こいつらおかしな格好してやがるが、気遣いの類か？」

ゴロツキの台詞に、

「「黙れ!」」

俺たちは怒鳴った。

同じ時、同じ感情、同じ台詞だが、そこに至る過程が二人は違った。

星はお気に入りの格好を貶されて怒った。  
衛宮士郎は気にしていることを言われ怒った。

「所詮は下郎に我らの姿の素晴らしさは理解できんか。哀れなことだ！」

・・・すまんが俺にも理解できない。

「・・・我らのことを気にするより、自分たちのことを気にするべきだな。  
もっとも手遅れだが」

俺は油断しきっていた四人の懐に入ると、八つ当たりな怒りを込めて殴り、蹴り飛ばした。

得物すら抜いてなく、油断していた四人は地面に崩れた。  
・・・本当は、苦戦、口上、必殺技と段取りがされていたのだが、

・・・そこまでは耐え切れない。

「正義は勝つ」！

俺たちは星が決めた【カツコイイK・A・M・A・E2】をした後、その場を去った。

かなり距離を置いたところで星が文句を言ってきた。

「ダメではないか！打ち合わせ通りにやらなければ！」

「すまん。あまりにも隙だらけだったものだから反射的にな」



「まあ、それは理解できるが・・・」

俺は文句を聞き流しながら、これ以上名乗ることがないよう願った。だが、Luckが致命的に低い自分の願いが叶うわけがなかった。

その後、繰り返しつとに五度。

それだけでは済まされず・・・。

「・・・あ、あなた「言うな」・・・え？」

・・・凧にばれた。

「で、でも隊「言うな！」けれ「頼むから言わないでくれ・・・」」

その時の俺はひどく哀愁を漂わせていたことだろう。

絶句する凧を残してその場を立ち去った。

その日、星は大いに満足し、俺は心に大ダメージを負った。

これは正義の味方の休日記録における記録から抹消された一日である。

## 第九話：官渡の戦い（中篇）

袁紹が劉備たちの国、徐州の国境を越えた。

その報が入ったのは、軍師達を集めての軍議が終わる直前のことだった。

「……そう。麗羽が」

「……袁術に徐州を一人占めされるのが惜しくなったといったところか」

そういう一時の感情で動く部分が袁紹にはあるからな。

「でしょうね。子供と大して変わらないんだから。

……風、お茶をもう一杯もらえるかしら？」

「さて、我らはどうする？」

先ほどの軍議で決まっていたのは、近いうちに攻めてくるであろう袁紹への対応だった。

だが、こうなつた以上、決め直す必要があるだろう。

「皆の意見を聞きたいわ。これから我らは、どうするべきかしら？」

華琳の言葉に軍師たちはそれぞれ意見を述べる。

「徐州の遠征軍には袁紹、文醜、顔良という敵の主力が揃っています。

この機に南皮へ攻め入り、徹底的に袁紹を叩くべきではないでしょうか」

「袁紹も袁術も大軍ではありませんが、先見の明のない小物ゆえ、

放っておいてもいいでしょう。

しかし、劉備はいずれ華琳さまの前に立ち塞がるであろう相手です。これを期に、まずは徐州を攻め、劉備を討つべきかと」

稟と桂花の意見は見事に割れた。

「士郎はどう思う?」

「……戦の前段階において大切なのは正当性だ。これがなければ勝つても損するだけだ。

劉備を攻めても弱い者いじめでしかなく、袁紹を攻めても火事場泥棒でしかない。

これでは正当性がなく、民は納得しないだろう。

私としては正当性を手にするため、劉備が救援を要請するように仕向けるべきだと思う」

これは半分は言葉通りだが、

正義の味方として救える者は救いたいという思いが半分の言葉だった。

「風はどう思う?」

「基本的にはお兄さんと同じ意見ですねー。私としては静観するのが良いかとー」

まあ、俺の案以外ならそれしかないだろうな。

「士郎、どうやって要請するように仕向けるのかしら」

それはさほど難しくはないだろう。

なぜなら……。

「弁の立つ者が諸葛亮の前ではのめかすだけで事足りるだろう。真意が分からないほど節穴ではないのだから」

向こうとしては他に手が無い以上のって来るだろう。

「……いいでしょう。今日中に使者を選定して明日には出発させるわ」

まあ、それなりに選ばないと藪蛇になりかねないからな。融通が全く効かない関羽の姿が脳裏に浮かんだ。

だが、事態はその晩に急変する。

仕事も片付き、就寝しようとしていた俺の所に届いたのは、大至急の集合命令だった。

すでに日付も変わっているというのに。

玉座の間に着いてみると、既に数人が来ていた。

軍師組に緊張感が見えないことから、今すぐ戦うといった事はないだろうが。

近くにいた凧に集合理由を聞くことにした。

「おはよう、凧。すまんが……」

ん？どうもおかしい。

「……凧？」

凧は立ったまま寝ているようだ。

俺もそれは出来るが、目を開けたまま寝るとは。良く見ると他にも寝ている者が二名。

「…ぐう」

「…むにゃむにゃ」

風と沙和は分かりやすく全力で寝ている。

「二人とも、起きろ！」

「…おおっ！」

「…おおっ！」

凄いシンクロ率だな。

「…お兄さん。女の子の寝込みを襲うとか、良い度胸してますねー」

「んー。時と場所を考えて欲しいかなあ？」

出来ればもうちょっと、雰囲気の良い場所がいいのー」

二人がからかってきた。

昔の自分なら面白いくらいうろたえたらうな。

「そうだな。男としてはそれ位の度胸と甲斐性があるべきなのだろうが、

あいにくと、私にはどちらも欠けていてね。期待には添えないようだ」

…女性の怖さは心身に刻まれているから、とてもではないが出来ない。

「それは残念。できれば今からでも手に入れて貰いたいですな」

……いつからいた、星？

「そういう事は愛する人にも言うべきだな、星」

「んじゃあ、ウチは愛しているから言っただけいいんやな？」

…霞まで悪乗りしてきたか。

「それが本当に心底そうならな。もっとも、手に入れるのは無理だと答えさせてもらうが」

「ちえ。いけずやなあ」

無駄話をしていた俺たちに桂花は怒りの視線を向けてきた。

「そこ！うるさいわよ！」

「風、早くこちらに来なさい。あなたの場所はこちらでしょう」

「おおつ。すっかり忘れてました」

稟が風を連れ定位位置に揃ったところで、ようやく華琳たち三人が入ってきた。

「全員揃ったようね。急に集まってもらったのは、他でもないわ。

秋蘭」

「先ほど早馬で、徐州から国境を越える許可を受けに来た輩がいる」

その言葉に皆が驚いた。

「入りなさい」

「……は」

入ってきたのは見覚えのある黒髪の武将。

「見覚えのある者もいるようだけれど、一応、名を名乗ってもらいましょうか」

「我が名は関雲長。徐州を治める劉玄德が一の家臣にして、その大業を支える者」

…関羽が来たという事は救援の要請か？いや、「国境を超える許可」と言っただな。だとすると。

「ふむ……劉備は華琳さまの所に救援を求めに来たということですか？」

普通は星のようにそう考える。

「残念だけれど、少し違うわね。説明してくれるかしら？」

「……私は、曹操殿の領地の通行許可を求めに参りました」

……やはりか。

「……逃げるつもりか」

そうでなければ俺たちの領地を超える必要はない。

「どういうことだ？」

「士郎以外に気付いた者はいる？」

春蘭が混乱する中、華琳は尋ねた。

「あ、あの……」  
「流琉。言ってみなさい」

おずおずとだか流琉は言う。

「袁紹さんと袁術さんから逃げるために、  
私たちの領地を抜けて益州に向かうということですか？」

「……その通りです」

その解答に凧は、

「なんと無謀な……」  
と感想をもらした。

そう間違いなく無謀だが、上手くいけば一番生き残る可能性が高い。  
それ以前に、劉備は無謀と違っていないかもしれないが。

「皆仲良く」を念頭に置く彼女は、間違いなく性善説を信じている  
だろう。

……彼女は一度、言峰綺礼の心決る説教を聞くべきだな。

俺が奴のミサを録音したテープを遠坂から（強制的に）聞かされた  
時は最悪の気分だった。

ちなみに、このテープは言峰謹製（定価五百円、税込）だったりす  
る。

死してなお、人に嫌がらせをするとは思わなかった。

奴の嬉しそうな笑みが容易に目に浮かぶ。

「けど、袁紹や袁術と正面からぶつかるよりは、マシやと思うで」  
「それはそうだが、我々として別に劉備殿の国と同盟を組んでいるわ  
けではないだろう？」

真桜の言う事も確かだが、凧の言うとおり無謀であることに変わり



はない。

「そういうこと。それに正直、  
関羽もこの案は納得していないようですね……そんな相手に返事をす  
る気にはなれないのよ」

「……」

黙っている関羽に星が問う。

「ならばなぜ、こんな決死の使いを買って出たのだ？」

「我が主、桃香さまの願いを叶えられるのが、私だけだったからだ。  
それに我々が生き残る可能性としては、これが最も高い選択でもあ  
った」

その答えに霞は、

「……主のためやて。どっかの誰かさんみたいなこと言うやん」  
と言って春蘭を見た。

「わ……わたしはこんなに愚直ではないぞ！」

その場を沈黙が支配した。

「誰か何とか言えよ！」

……関羽以上に愚直だと思っただが。

「だからこれから、その返答をしに劉備の元へ向かおうと思っただ  
けれど……」。

誰か、付いてきてくれる子はあるかしら？」

「結局全員付いてきたな。流石の人望だな、華琳」

夜を徹しての行軍にも関わらず、準備は早く、誰一人として文句を言わない。

少人数の行軍だったとはいえ、間違いなくいつもより手際が良かった。

「おだてでも何も出ないわよ」

その割には上機嫌なのが丸わかりなのだが。

「……感謝します、曹操殿」

「さあ。その言葉は、無事に事が済んでから聞くことにするわ」  
「それはどういう……?」

……華琳はまだ【許可する】とは言っていない。  
関羽が礼を言うのはまだ早いだろう。

「華琳さま。先鋒から連絡が来ました。……前方に劉の牙門旗。劉備の本陣のようです」

秋蘭の言うとおり、劉備の本陣があった。  
場所は本当に国境ギリギリの所だった。  
これ以上奥に張ったなら、問題になる絶妙な場所だ。

「なら関羽、あなたの主の所に案内して頂戴。何人が一緒に付いてきてくれる?」

その言葉に皆が危険だと反対したが、  
「私も劉備のことを信用しているわけではないけど、  
そんな臆病な振る舞いを、覇者たらんとしているこの私がいい  
と思うかしら？」  
と華琳に言われ黙り込んだ。

その立ち振る舞いは彼女の信念と同時に武器でもある。  
反することはできないだろう。

結局、俺、春蘭、季衣、流琉、霞・稟の六人が付いていくことにな  
った。

「曹操さん！」

「久しいわね、劉備。連合軍の時以来かしら？」

劉備は満面の笑顔で出迎えた。

「はい。あの時はお世話になりました」

「それで今度は私の領地を抜きたいなどと……また、随分と無茶を  
言ってきたものね」

その言葉に申し訳なさそうな表情を劉備は浮かべた。

「すみません。でも、皆が無事にこの場を生き延びるためには、  
これしか思いつかなかったので……」

「まあ、それを堂々で行うあなたの胆力は大したものだね。……い  
いでしよう。」

わたしの領を通る事を許可しましょう」

いきなり即決した華琳に皆が驚く。

「華琳さま。劉備にはまだ何も話を聞いておりませんが……」

「聞かずとも良い。……こうして劉備を前にすれば、何を考えているのかがわかるのだから」

稟の疑問に華琳は簡潔に答えた。

「曹操さん……」

「ただし街道はこちらで指定させてもらう。……米の一粒でも強奪したなら、

生きて私の領を出られないと知りなさい」

「はい！ありがとうございます！」

「それから通行料は……そうですね。関羽でいいわ」

「……え？」

最後の華琳の言葉に、それまで浮かべていた満面の笑顔を劉備は凍らせた。

……俺にしてみれば予想の範囲内だったが、劉備には想定外だったようだ。

「何を不思議そうな顔をしているの？」

行商でも関所では通行料くらい払うわよ？当たり前でしょう」

「え、でも、それって……！」

劉備はまだ理解できないらしい。

「あなたの全軍が無事に生き延びられるのよ？」

もちろん、追撃に来るだろう袁紹と袁術もこちらで何とかしてあげましょう。

その代価をたつた一人の將の身柄であがなえるのだから……安いものだと思わない？」

王たる物なら受け入れるべき提案だろう。

…だが、おそらく劉備は……。

「曹操さん、ありがとうございます。……でも、ごめんなさい」

「あら」

「愛紗ちゃんは大事なわたしの妹です。鈴々ちゃんも朱里ちゃんも

……他のみんなも、

誰一人欠けさせないための、今回の作戦なんです」

やはりそう言ってきたか。

「だから、愛紗ちゃんがいなくなるんじゃない、意味がないんです。

こんな所まできてもらったのに……本当にごめんなさい」

そう言つて劉備はぺこりと頭を下げた。

「そう。……さすが徳をもって政事を成すという劉備だわ。……残念ね」

「桃香さま……私なら」

関羽は自分を差し出すよう言おうとしたが、

「言ったでしょ？愛紗ちゃんがいなくなるんじゃない、意味がないって  
そう劉備は拒否した。」

そして、他の経路を探すように諸葛亮に指示した。

「劉備」

「……はい？」

「甘えるのもいい加減にしなさい！」

華琳は劉備を一喝した。

そして、その言葉に俺は同意だった。

現実を見ていない彼女に腹が立つ。

……アーチャーもこんな気持ちだったのだろうか？

「……っ！」

「たった一人の将のために、全軍を犠牲にするですって？  
寝惚けた物言いも大概にすることね！」

それは王がしている選択では絶対でない。

それは自分を信じて戦う者たちを我がままで見捨てるということ。

私情を見せるのは良いだろう。でなければ、誰も理解してくれない  
のだから。

セイバーのことが頭によぎる。私情を見せないが故に、理解されな  
かった彼女を。

だが、それに流されて兵を、民を見捨てるような者を王とは認めら  
れない！！

心を傷つけながらも王として一を切り捨て続けた彼女を知るからこ  
そ、

このような選択を王でありながらする劉備を王とは認められない。

「で……でも、愛紗ちゃんはそれだけ大切な人なんです！」

「なら、その為に他の将……張飛や諸葛亮、

そして生き残った兵が死んでも良いというの!？」

華琳の追及は続いた。

「だから今、朱里ちゃんに何とかかなりそうな経路の策定を……！」  
「それがないから、私の領を抜けるという暴挙を思いついたの  
でしょう？……違うかしら？」  
「……そ、それは……」

まだ現実を見ようとしない劉備に華琳は現実を突き付ける。

「諸葛亮」

「はひっ！」

「そんな都合の良い道はあるの？」

「そ……それは……」

その歯切れの悪さが答えを告げている。

「稟。この規模の軍が、袁紹や袁術の追跡を振り切りつつ、

安全に荊州か益州に抜けられる経路に心当たりはある？大陸中を渡  
り歩いたあなたなら、

分かるわよね？」

「はい。幾つか候補はありますが……追跡を完全に振り切れる経路  
はありませんし、

危険な箇所が幾つもあります。

我が国の精兵を基準としても戦闘もしくは強行軍で半数は脱落する  
のではないかと……」

稟の説明は劉備の甘い幻想をぶち壊した。

「……つ。朱里ちゃん……」

「……」

「そんな……」

劉備の顔が悲痛に歪む。

「現実を受け入れなさい、劉備。あなたが本当に兵のためを思うなら、関羽を通行料に、

私の領を安全に抜けるのが一番なのよ」

「曹操さん……だったら……」

劉備が言いそうな戯言に対し、華琳は先に釘を刺す。

「それから、あなたの関羽の代わりになる、などという寝惚けた提案をする気なら、

この場であなただを叩き斬るわよ。国が王を失ってどうするつもりなの？」

「……！」

「……どうしても関羽を譲る気はないの？」

劉備は沈黙で答える。

その姿がかつての自分と重なる。

不釣り合いな理想で、

全員を助ける可能性などないと分かりながらも捨てきれなかったかつての自分を。

だから、今まで黙っていたにも関わらず、俺は耐え切れず劉備に尋ねていた。

「君にいつか言ったな。理想を抱いて溺死する覚悟があるか、と」「え？」



劉備が声を上げた。

周りの者たちも驚いて俺を見た。

「切り捨てたくないから切り捨てず、結果として大勢、  
下手したら全員死ぬかもしれない、今の状況。」

君はまさに理想を抱いて溺死しようとしているわけだ。」

「違う！」

劉備は否定した。

「どう違う？」

「私はそんなの認めていない！」

……認めていない、か。

周囲の者たちは黙って見守っている。

「認めてなくてもそうなりつつあるが？」

「私は諦めない！」

「ならば……黙っていれば事態が好転するとも思っていたのかね  
？」

「そ、それは……！」

劉備が黙っていたのは現実から逃避したに過ぎない。

「認めてなかるうが、諦めてなかるうが、

君は切り捨てない代わりに全滅の可能性すらある選択をした事に  
変わりはない。

それとも黙っていたから選んでいないとも言つつもりかね？

その言い訳、これから死んでいく者たちの家族の前で言い切れるか

な？」

「……………っ！」

「【選ばない】というのも立派な選択だ。さて、改めて聞こう。君は今回のように自分の理想のために切り捨てない結果、より数多の犠牲を出す覚悟があるかどうかを。全滅する覚悟があるかどうかを」

劉備に起きたことは、理想を目指せばいつだって起こりうる可能性だ。

今回のように分かり易い物ではなくても、切り捨てなかった結果としての全滅は容易に起こる。

全滅ではなくても、切り捨てなかったために、より多くの犠牲が出ることなど珍しくもない。

覚悟したから許されるといふものではないが、

覚悟は理想を目指す上での最低条件の一つだと俺は考えている。

自身の想いによる選択の結果を受け入れる覚悟がないなら、目指すべきではないだろう。

それすら出来ないのに目指し続けるなら、

俺は【理想を目指す者】としての劉備も認められない。

「士郎、そこまでしておきなさい。話しても埒があかない。

……………勝手に通って行きなさい」

そう華琳は言った。

「……………え？」

「聞こえなかった？私の領を通って良いと言ったのよ。

……………益州でも荊州でもどこへでも行けば良い」

理解できなかった劉備にもう一度華琳は言った。

「華琳！」

「華琳さま！」

俺と春蘭が驚きの声を上げる。

「そ、曹操さん……ありがとうございます！」

喜ぶ劉備に華琳は宣言をする。

「ただし」

「……通行料、ですか？」

「当たり前でしょう。……先に言っておくわ。」

あなたが南方を統一したとき、私は必ずあなたの国を奪いに行く。  
通行料の利息込みでね」

啞然とする劉備を後眼に華琳は続ける。

「そうされたくないなら、私の隙を狙ってこちらに攻めてきなさい。  
そこで私を殺せれば、借金は帳消しにしてあげる」

「……そんなことは」

「ない？なら、私が滅ぼしに行つてあげるから、せいぜい良い国を  
作つて待つていなさい。」

あなたはとても愛らしいから……私の側仕えにして関羽と一緒に存  
分に可愛がつてあげる」

……挑発半分、本気半分といったところか。

「く……曹操どの！これ以上桃香さまを侮辱するといくら貴方とは  
いえ……！」

憤る関羽を無視して華琳は指示を出す。

「霞、稟。劉備達を向こう側まで案内なさい。街道の選択は任せろ。劉備は一兵たりとも失いたくないようだから

……なるべく安全で危険のない道にしてあげてね？」

「はっ」

「それでウチも連れてきたわけか。了解や」

確かに道に詳しい稟と神速の用兵と馬術の霞はうつつつけだな。

「それでは私たちは戻るわよ。

……劉備、あなたがした選択……間違っていないければ良いけれどね」

「……間違つてなんかいません。それを、絶対に証明してみせますから！」

「良い返事だわ。……帰るぞ」

華琳が背を向け帰り始める。

「……劉備。今回は華琳の慈悲のおかげで事無きを得たが、理想を追うならいくらでも似たような事が起きるだろう。それでも理想を目指すなら、溺死する覚悟を決めておけ」

俺は答えを聞かずその場を立ち去った。

ちなみに季衣と張飛が離れた所で口喧嘩をし、流琉がそれを止めていた。

道理で二人の姿が見えないわけだ。

「……大層な悪役ぶりだったな」

「あなたと良い勝負だったと思うけれど？」

「違うない」

俺たちは互いに微笑む。

「けれど、あの問いは彼女には酷だったでしょうね」

「だが、理想を追うなら……いや、自分の想いに他者を巻き込むなら、」

自身の行動に対する覚悟は最低限しなければならぬことだろう」

華琳が己の覇道のために起きる犠牲に対し、言い訳せずに背負う覚悟を持つように。

「……もし、あなたが劉備の立場だったらどうしたかしら？」

俺ならば……。

「私なら関羽を渡すが交換条件を出してたな」

「交換条件？」

「ああ。物凄い難題を提示して、」

関羽がその功績を達成したら自分の所に戻すという条件を」

少なくとも、これなら戻ってこられる可能性が残される。

面白そうに華琳は俺を見た。

「ちなみに私とその条件を認めなかったら？」

「その時は諦めて関羽を渡しただろう。」

死ぬならともかく、生きていれば、また共に行動できる可能性が零ではないのだから。  
けど、そんな仮定は無意味だと思うが？」

その言葉に華琳は試すように聞く。

「何故、無意味なのかしら？」

「華琳はそういう駆け引きが好きだから認めると思うが？」  
「確かにそのとおりね」

後ろから季衣と流琉を連れた春蘭が、前には秋蘭たち居残り組が見えたので、

無駄話はこちらまでとなった。

こうして劉備たちは逃げ切り、俺たちは袁紹・袁術軍との本格的な戦いへと進む

## 第九話：官渡の戦い（後篇）

劉備たちが逃げてからしばらくの時間が過ぎ。 。  
これから戦うことになる袁紹達に構える計画が進められていた。

「……敵軍が集結している？」

「はい。どうも袁紹と袁術が、官渡に兵を集中させているようなのです」

秋蘭の報告に華琳が確認し直したのも無理はないだろう。

それがどれだけ馬鹿なことか、ある程度の知恵があればすぐ分かることなのだから。

「……そこまで頭の二人は馬鹿だったか。

これでも冷徹に分析していたつもりだったのだが、まだ温かったようだ。

無意味どころか、あの二人では損にしかならんだろうに」

当初の予定では、別々に攻めてくると皆が予想していたのだ。

「兵力は単純に倍になりますけど、

指揮系統が整っていないと、ただ人が増えるだけですからね」

「うまく連携が取れなかった場合、互いの足を引っ張り合って、むしろ味方の不利になる事の方が多い……というより、

あの二人では間違いなくそうなるでしょうからね」

風と桂花が同意を告げた。

「まあ、そのおかげで二面作戦を取らなくて良い分、少し楽になっ

たわね」

楽になったのが明白なのだが、この場にいる内の二名は理解できていないようだ。

「どういう意味ですか、春蘭さまあ」

分かっていない季衣が、もう一人の分かっていない春蘭に尋ねた。

……季衣、聞く相手が致命的に間違っているぞ。

遠坂にパソコンのアドレス設定を、虎に料理のレシピを聞くくらいに間違っている。

春蘭は華琳の言った事をそのまま言い直したが、

「……どう楽になったの？」

という華琳の言葉に詰まった。

仕方がないので季衣に分かりやすく説明することにした。

「最初の作戦では、季衣と流琉は別々に行動するはずだったが、敵が一つにまとまっているため、二人は一緒に戦えるようになったという事だ」

「あー。そういうことなんだー」

素直にうなずく季衣を見ると、春蘭の猪な解答にもうなずいている季衣が目に見えがぶ。

……出来れば早いうちに春蘭に聞く癖を矯正しないといけないな。  
今度華琳にも相談しよう。



「逆に、敵は仲の悪い奴が共同で戦うことになるため、連携が取れないぶん倒しやすいという事だ」  
「仲が悪いつて季衣と張飛さんみたいにですか？」

流琉の例えを聞いて、先日の季衣と張飛の口喧嘩を思い出した。  
近親憎悪の類か？

「そうだな。季衣も張飛と一緒に戦うのは難しいのではないか？」  
「うん、無理。兄ちゃんの説明、すっごくわかりやすかった！」

季衣も納得してくれたようだな。

……そうだな。釘を刺しておくか。

「季衣。分からないことがあったら、いつでも私に聞くといい。  
今のように分かりやすく説明しよう」

「いいの？」

よし！食いついてきた。

「もちろんだ」

「わかっ「それは私の役目だ！」」

季衣の了承をぶった切った春蘭に対し、俺は冷ややかな目を向ける。  
春蘭が役目が果たせていないから、俺がフォローしようとしたんだ  
が？

「ならば、役目が果たせるくらいには正しい知識と知恵をつけてくれ。  
これくらい説明できないのでは不安だ」

「くっ、言われずとも……！」

……多分、言われても無理だろうな。

「はあ……ならば、春蘭も季衣と一緒に土郎から習いなさい」

……華琳？今、とんでもない無理難題を言わなかったか？

「……華琳、もう一度言ってくれないか？どうも私の耳はおかしいようだ。」

私が春蘭に知恵や知識を教えるという空耳が聞こえたのだが？」

「大丈夫。あなたの耳は正常だから」

信じたくなかった俺を後目に、春蘭が抗議をする。

「か、華琳さま！？なぜ私が土郎から！？」

「最低限の知恵や知識を付けてもらいたいからよ。」

季衣も一緒に教えられるし丁度いいでしょ」

俺も抗議をしようとしたが、

「あなたも春蘭にああ言ったのだから責任を持ってもらおうわ」と華琳に釘を刺された。

「大役ですな。土郎」

おかしそうに笑みを浮かべながら言う星に腹が立つ。

小学生に大学の講義内容を理解させるのに等しい……いや、それ以上に難しいんだぞ？

正直、それを達成する想像がつかない。

「話を戻すわよ。……兵を集結させて戦えるというなら、こちらに負ける要素は何もないわ。」

ただ、警戒するべきは……」

「……袁術の客将の孫策の一党かと」

秋蘭の言つとおり、孫策たちには気をつけるべきだな。

孫策の覇気と軍勢は反董卓連合で確認済みだ。

「そういうことね。だから袁術の主力には春蘭、あなたに当たってもらうわ。」

第二陣の全権を任せるから、孫策が出て来たらあなたの判断で行動なさい。」

士郎、季衣、流琉は春蘭の補佐に回って」

ん？今の言い回し……気になるな。

【全権を任せるから、孫策が出て来たらあなたの判断で行動】だって？

そんなことしたら、孫策に借りがある春蘭なら……そういう事が。華琳らしい部下への気遣いだな。

「御意！」

「承知した」

「はいっ！」

「わかりました！」

それぞれが了承の声を上げた。

「袁紹に相對する第一陣は霞が務めなさい。補佐は誰がいいかしら？」

「それなら、夙たち三人でええかなあ。士郎、ええか？」

俺としては問題ない。  
もともと華琳の部下なのだから。

「三人がいいというなら。構わないか？華琳」  
「構わないわ」

まあ、季衣と流琉の二人がいるから戦力的に問題はないから当然か。

「……そうだ。霞たちにはこちらの秘密兵器の講義を受けてもらうよ。」

真桜が一緒だから、ちょうど良いわ」

そういえばアレが完成したんだっとな。

出来栄も確認したが、実用に十分なる物に仕上がっていた。

「そうね……その秘密兵器の運用と護衛を第一陣に任せましょう。  
敵部隊には第二陣の春蘭たちが当たりなさい」

「ええーっ！なんでやねんっ！」

華琳の決定に霞が不満の声を上げた。

強敵との戦いが好きな霞としては当然の反応か。

「はっ！……ふふっ、すまんな霞。華琳さまの命令ではどうしようもない」

「うわー……貧乏くじ引いたあー……」

春蘭の言葉に意気消沈する霞に俺は励ましの言葉を言う事にした。

「あまり気を落とすな。どのみち袁紹の軍では霞を満足させられな

いだろう」

「そんな事いうても、自分は孫策たちと戦えるんやろ？」

ふて腐れる霞に、星がフォローを入れた。

「まあ、貧乏くじでは士郎も良い勝負であろう。猪を抑えなければいけぬのだから」

星の馬鹿。

……できるだけ考えないようにしていたというのに。

正直、気が重い。

しかも、その猪が全権を持っているんだから性質が悪い。

「……まあ、ものすごいエライ事やろうけど、頑張れ」

……さつきとは逆に霞から励まされた。

霞としても、華雄という最上級の猪に苦労したから他人事に思えなかったのだろうな。

……冷静に考えると、その苦労の原因の半分は俺にあるが。猪を徹底的に煽ったからな。

「他の皆も戦の準備を整えなさい。相手はどうしようもない馬鹿だけれど、

油断して勝てる相手でもないわ。

これより我らは、大陸の全てを手に入れる！皆、その初めの一步を勝利で飾りなさい。

いいわね！」

こうして、華琳の宣言で方針決めは終わった。

現在、俺たちは官渡にて布陣を整え待機している。  
二部隊分の準備がまとめで良くなった分、すぐに出撃できたのが  
大きかった。

おかげで短期間で袁一族と相対できた。  
目の前には辺りを埋め尽くす敵軍と、巨大な櫓の列。

「移動式の櫓か。無駄に凝っているな」

あれだけの数の移動式櫓に加え、一般兵の金メッキの鎧……。  
よくもまあ資金が持つものだ。

袁紹は黄金律のスキルでも持っているのだろうか？

「ねえ、兄ちゃん」

「なんだね？」

ずっとそわそわしていた季衣が質問してきた。

「そついえば、秘密兵器って何なの？」

「あ、それ私も気になっていました。教えてくれませんか？」

流琉も話にのってきた。

「……………それはすぐに……………ああ、始まった。あれが答えだ」

俺が指さす方向に二人は目を向けた。

袁紹軍の用意した移動式の巨大な櫓に、大石がぶつかり壊れて崩れた。

「投石機、それが秘密兵器の名だ」

「うわー。どどん壊していくね！」

「確かに秘密兵器ですね」

実際はそれほど強力でもなかったりする。

射程距離、精度はそこそこ、威力は結構あるが、人に当てるのは大きさやタイムラグの問題から難しい。

密集して身動きが取れないならともかく、普通なら余裕でよけられる。

まあ、恐怖心や威圧感で心理的に追い詰めたり、城門や櫓のような動かない物に使うのが関の山だ。……まあ、今回の櫓は遅いけど動いたが。

本当はもつと強力な兵器を作れなくもないのだが、作るつもりはない。

それが戦争をどれだけ悪化させたかは歴史が示している。

そついった技術は必ずどこかで漏れ、互いの被害を拡大させるのだから。

「皆、これが本番よ！向こうの数は圧倒的。けれど、向こうは連携も取れない、

黄巾と同じ烏合の衆よ！」

戦場に華琳の大音声が響く。

「血と涙に彩られたあの調練を思い出さない！あの団結、あの連携をもつてすれば、

この程度の相手に負ける理由などありはしない！

それが大言壮語でないことは、この私が保証してあげましょう！」

華琳の言葉に味方の士気が高まるのが分かる。

「総員、突撃準備！」

春蘭の声を合図に第二軍は戦闘に入った。

弓に矢を番え、敵兵を確実に射抜く。

いつものように優先して狙うのは装備が良い者、或いは動きが良い者。

そういった者は多少の配下や、仲間への影響力を持っている場合が多い。

死ななくても、戦闘不能な重傷を負えば多少は敵に影響が出る。

俺は近くにまで来た敵兵を射抜きながら、そういった者を見つけ次第、狙い討つ。

「春蘭！敵右翼が乱れ始めている！」

原因は投石機による攻撃だろう。

初めてみる攻撃に必要以上に避けてしまったため、陣形が乱れたのだ。

「ならば、その隙を突くのみだ！騎兵隊、突撃！」

春蘭の兵の統率は相変わらず見事だ。

ただの猪には決して出来はしないだろう。

乱れたところを攻められ敵が動揺する中、一糸乱れぬ一団を見つけた。



あの鎧は……やはり孫策か！

「敵右翼の奥に孫策たちがいる！用心しろ！」

袁一族の軍と同じに扱っては無事にはすまない！

「問題ない！勢いをつけて一気に蹴散らす！」

……猪である以上、予想範囲内ではあるが。

まあ冷静に俺が危険を察知して伝えるしかないか。

「士郎は袁紹の軍を相手にしろ！ここはわたしだけで十分だ！」

猪が人の算段をぶち壊す。

「だが……！」

「わたしなら大丈夫だ！全権を任されているわたしの判断なのだからな！」

士郎は季衣たちの援護に行け！」

春蘭は搦め手に弱い事が分かっているから、とてもじゃないが承知できない。

何か方策がないか考える俺の目に、流琉の姿が映った。

「分かった！」

俺はその場では承知して、流琉の所へ向かった。

「流琉！私が代わりに袁紹と戦うから春蘭の抑えを頼む！」

「わたしがですか！？自信がありません！」

「基本的には影で見守りながら、春蘭が罫や搦め手に引つ掛かりそうになったら適当な理由でけむに巻いて止める！」

正直、申し訳ないと思うが……」

それがどれだけ大変かは良く分かっているから余計にそう思う。

「分かりました！全力を尽くします！」

「礼を言う！」

そして流琉と俺は役目を入れ替えた。

流琉の代りに兵を統率しながら敵を射る。

放った矢は数百を超え、……殺した数も相応の数となった。

殺した者たちの姿をこの目に焼き付ける。

殺された者たちにとって大義名分など関係なく、俺は紛れもない人殺しなのだから。

故に、その怨嗟の想いを胸に刻む。それが最低限の義務と思うから。言い訳で綺麗に覆って誤魔化すつもりは毛頭ない。

憎まれて当然の事をしているのだから。

それは前の世界でもこの世界でも変わらない、俺の考え。

俺が切り捨てなかったために、あるいは切り捨て犠牲になった者たちへの礼儀だと思うから。

いくら後始末をして被害を減らそうと、犠牲に変わりはないのだから。

敵を射抜きながらも、戦場を見入る俺の目は顔良と文醜を相手にする季衣の姿を捉えた。

流石に季衣でも二人を同時に相手にするのは厳しいだろう。

俺は二人に対し、数本の矢を射た。  
顔良と文醜は動きを止めざる得なかった。

「季衣！」

「兄ちゃん、ありがとう！」

どうやらかなり疲労しているようだ。

「私が顔良と文醜を相手にするから兵の統率を頼む。出来るか？」

袁紹の軍なら搦め手を使ってこないだろうから季衣でも問題ないはず。

「分かった！」

二人は近距離戦に持ち込むために距離を縮めている。

遠距離では勝ち目が無い以上、当然の判断だろう。

だが、接近戦に持ち込むにはまだ遠い。

俺は矢を番えては放つ。

放った数は十本。

それぞれに五本づつの矢が襲いかかった。

「くう……、後少し近づければ！」

「衛宮さん相手だと、その少しが難しいよ」

二人は何とか防ぐが、得物が重いために確実に守りに余裕が無くなっていく。

さらに指揮をする余裕がなくなったため、ただでさえ押されていた敵軍が敗走を始めた。

懸命に粘る二人だったが、ついに文醜に決定的な隙ができた。

「終わりだ」

その隙を俺は狙い撃った。

そして、体に命中した。

文醜を庇った敵兵の右肩に。

「お、お前……」

呆気にとられる文醜に兵が叫ぶ。

「お逃げ下さい！文醜さま、顔良さま！我らが時間を稼ぎます！」

それと同時に俺に不意打ちを仕掛けてくる数人の敵兵。  
とっさに避けたがバランスを崩した。

その隙に敵兵およそ三百名が俺と二人を遮る壁となった。  
その目に宿るは決意と覚悟。

「け、けど……！！」

「そ、そんな……！！」

渋る二人に彼らは笑みを浮かべ、

「我らは、我らの意思で守るのですから、気に病むのでしたら生き延びてください」  
「そう言いきった。」

「……すまねえ、お前ら！」

「……ありがとう、皆！」

二人は逃げだした。

……袁紹軍は二人の人望で成り立っていたのだろうな。彼らを見ていれば良く分かる。

敵本陣を見ると、火の手が上がっている。

どうやら落ちたようだな。

決して通さぬと目が雄弁に語る彼らに俺は言う事にした。

「……さて、どうやら投降する大量の兵を本陣に引き連れていかなければならないようだ。

これでは、顔良と文醜は追えないな」

「……っ！……！どういっつもりだ！？」

いぶかしむ彼らの代表の一人の台詞に俺は答える。

「なに。君たちを倒す間に二人は逃げ延びる公算が高い。

なら、君たちの本陣も落ちたのだから積極的に倒す理由がない。

君たちにしたって、私から二人が逃げ延びられるのだから悪くはないはずだ。

それともわざわざ死んで二人の負担になるか？」

「それを信じると？」

「私は無意味な殺生が嫌いだね。それに君たちのような忠義は嫌いじゃない。

それに権力と兵を失った袁紹たちには大したことは出来ないだろう

からな。  
というより、乱世で勝ち残れる器でない以上、権力全てを失った方が彼女たちのためだろう」

あの三人なら、しぶとくどこどこでも生き延びるだろう。  
まあ、袁紹が逃げられるかは知らないが。

「……分かった」

彼らが納得したところで、彼らを縛り、捕虜としてつれていくのだ  
った。

現在、本陣で報告が行われている。

「……そう。麗羽は逃がしたか」

どうやら逃げきったらしい。

「……申し訳ありません。こちらの想像以上に素早い相手だったもので……」

風達から逃げきるとは、そういう悪運は強いようだな。

「まあいいわ。ここで兵を失っては、再起は困難でしょう。捨て置  
きなさい」

「はっ」

そういえば霞と星が見当たらないな？

「それから……春蘭」

「はっ……」

「何が言いたいか分かるわね？」

春蘭が孫策たちを見逃したことについてだろう。

第二軍の全権を春蘭に任せると決めた時から、この結果を予測していただろうに。

春蘭が孫策を見逃すことも、孫策が袁術を裏切り撃退することも、全ては春蘭の借りを返すために華琳が行ったこと。

「は。いかような処罰でも……」

「いずれ孫策とも戦うことになるでしょう。……自分のしたことに後悔はない？」

春蘭の答えを分かっている間、華琳に、春蘭は答える。

「わたしはあ奴に預けたままだった借りを返したに過ぎません。

この後に奴と交える刃は、全て華琳さまの意思によってのみ振るわれるでしょう」

「ならいいわ。南皮への指揮を任せるから、

先行した霞と星と共に見事制圧してごらんなさい」

「はっ！」

そして春蘭は、あつという間に袁紹の本拠地を陥落させ……北方四州は、

華琳の支配下に置かれることとなった。

「思ったよりは少なかったが、十分な死者が出たな」

もはや誰もいない戦場に男が一人。

「……もつと。もつとだ！もつと世よ、乱れる！無念と怨嗟の想いを散らせ！

それが私を王に至らせる！流れる血が、果てる命が、私を導く！

く、くくくつ……それが運命なのだ！！」

男が左手に持つ一つの水晶。

懐の書の知識を元に作られたそれは、ここに来る前の純白から色を若干黒く変えていた。

それはまるで世を暗く変えたとを暗示するかのようじ。

これは暗き運命が動き始めた一幕



#### 正義の味方の仕官記録4

雲一つない晴天に、陽が頭上から照らす正午の中庭。  
そこで、想像を上回る難題に俺は取り組んでいる。

「……春蘭、【戦わずして人の兵を屈するが、善の善なるものなり】の意味は分かるか？」

「無論だ！戦わずに倒すくらい相手を威圧しろ、だろ」

「そういえば、前に春蘭さまからそう習ったっけ」

……独自解釈をする春蘭と、その薫陶を受けてしまった季衣の教育という難題を。

この間、二人を教育することを華琳に命じられてから定期的に行っていたはいるが、

……効果は薄い。

この部分も以前教えたはずなのに。

「……完全な間違いではないが、正しくない。」

別に威圧ではなくても、戦争の前に戦いを終わらせるのが一番良いということだ」

「……？」

「……？」

……季衣はともかく、春蘭の猪解釈を何とか矯正できないものか。

「前回、戦争は国にとって負担が大きいと説明したな？」

「……？」

「あーだから戦争することなく終わらせられるのがいいんだね！」

……春蘭より季衣の方が理解が早いな。  
というより教えたことをせめて覚えていてくれ、春蘭。

「おお！そうだった」

季衣の言葉でようやく春蘭も理解したようだ。  
本来なら逆の立場であるべきなのに。

その後も続けるが、結果は芳しくない。

季衣はともかく春蘭が。  
ある意味予想通りだが。

……普通に教えていたら、決して覚えられないか。……季衣はともかく春蘭は。

「（……少し手を変えてみるか）」

「なにか言ったか？」

「いや、別に」

例えで話すなら……。

春蘭の場合は……。  
次で試すか。

「【善く戦う者は、先ずかつ可からざるを為し、  
以て敵の勝つ可きを待つ】の意味だが……。」  
「本当の強者は負ける可能性などない、という意味だろ」

春蘭は相変らすの猪解釈を自信に満ちた声で言い放った。

「それで、その意味はなんなの？」

季衣が猪解釈を頭から信じなくなったのは嬉しい限りだ。とりあえず、季衣の方は食べ物関係で例えるか。

「季衣が名店の饅頭を食べたいと思ったとしよう」

「うん」

「それが何だというのだ？」

口を挟む春蘭に黙って聞くよう言って、説明を続ける。

「だが、いきなり行っても高価で人気の品なため買えない。だから、お金を貯めて、予約して、買える状況を整えて、買える時を待つ。」

「これなら確実に買えるだろう？」

「うん」

「つまり、優れた人は目的を果たすための状況を作って、それを果たす機会を待つということだ。分かったか？」

「うん！分かりやすかった！」

季衣は理解したが、春蘭はいまいち理解できていないようだ。なので、春蘭用の例えを出すことにした。

「もし、春蘭が華琳の寵愛を受けたいなら、そのための状況を整えてから機会を待て。」

「そういうことだ」

「なるほど！！」

……やはり、華琳のことを出した方が覚えが良さそうだな。目の輝きが明らかに違う。

「（春蘭。孫子の正しい解釈を覚えれば、桂花に出し抜かれる機会が減るぞ？）」「

「（本当か！？）」「

本当に覚えられればの話だが。

「（正しく覚え、理解できれば……な。

できないなら、春蘭の華琳への愛はその程度ということになるな）」「  
「なんだと！！」

飴と鞭をすることにした。

【華琳の寵愛】という飴と、挑発という鞭を。

「違うというなら証明するが良い。桂花を出し抜き寵愛を受けられるぐらいにな」

「いいだろう！！わたしの愛の強さを見せてくれる！！」

まあ、これで少しはましになるだろう。

それでも桂花を出し抜くのは無理だろうが……。

「じゃ？何の話？」

「何でもない。それでは続けるぞ」

その後も、華琳を持ち出した例を使って春蘭のに説明を続けた。

この時の俺は気付かなかった。

自分の目的を達成するために行ったこの行為が、自分を苦しめる結果になるとは……。

それからしばらく過ぎたある日……。

「はあ」

このごろ元気のない毒舌軍師のため息が回廊に響く。  
まとう空気が目に見えそうなほど重い。

「どうした？この世の全ての不幸を背負ったかのような雰囲気を放つて」

「……あんたみたいな唐変林に心配されるなんて、私の価値もそこまで落ちちゃったんだ」

内容こそいつも通りだが、いつもの勢いと切れがない。

「本当にどうした？聞くぐらいはしてやるが？」

「……最近、春蘭の邪魔のせいで華琳さまの寵愛を受けにくくなってるね……」

俺は嫌な予感がしたが、それを打ち消すために会話を続けることにした。

こういう嫌な予感が外れた事がないのに。

「邪魔はいつもしていたと思うのだが？」

「以前なら簡単に引っ掛かった謀が利かなくなったのよ。

それどころか何度か出し抜かれたのよ！油断があったとはいえ、春蘭なんかに！！」

会話しながら徐々に激昂する桂花に、俺は動揺を見抜かれないう

注意を払う。

…… 飴と鞭の…… 効果があり過ぎたようだ。

…… あの春蘭がそこまで孫子を覚え、理解しようとは。  
彼女の【愛】を甘く見ていたようだ。

「…… 急に黙ってどうしたのかしら？」

「なに、私では力になれそうにないのでな。悪いが仕事があるので失礼させてもらう」

そう言っつてその場を離れようとしたのだが、

…… 俺が幸運に見舞われることなどあるはずがなかった。

「士郎！ここにいたのか！お前の教え、確かに効果があつたぞ！」

向こうからやってきた春蘭から、死角の位置に桂花がいたのだから仕方がないだろう。

春蘭の声で、全てを悟った桂花がとんでもない殺気を向けてきた。

「…… そう、あなた…… だった…… のね？」

「お、…… 落ち着け！私はただ……！」

「…… ラクニシネルト…… オモワナイコトネ……！」

俺はそれから桂花の様々な面における報復を受けることになる。

…… あげくのはてに、  
春蘭は覚えた知識を華琳の寵愛のためにしか活かせないことが判明した。

これは正義の味方の仕官記録における、墓穴を掘った記録である

## 正義の味方の休日記録6（前書き）

いつもより若干少なくてすみませんが、内容はそれなりの質を保っていると思います。

## 正義の味方の休日記録6

「兄さま？ここ最近、顔色が優れませんがどうしたのですか？」

とある休日の朝、流琉からそう心配された。

「……問題ない。今日の休日は心身の回復のために活用させてもらうしな」

「微妙に答えになっていないような気がしますけど、分かりました。

……無理はなさらないでくださいね？」

休んでもらうために警備隊の朝食を代わりに作っているのですから

……それが顔色の優れない一因なんだが。

きっかけは……春蘭の教育によって桂花の恨みをかったことだった。その日から、桂花の報復は始まった。

383

### 《報復例その一》

「ここ最近、あなたが働き過ぎているのではないかという意見が出されたのだけれど……」

華琳にそう言われた俺は、

「特に問題はないんだが……何故そのような話が？」

そう疑問を投げかけた。

「その意見が警備隊や傭人たちから出されてね。確かに一理あると思つたのよ」



やれやれ、気づかってくれるのはありがたいが。

「さっき言った通り問題はないんだが」

「けれど、あなたの部下達の嘆願だから何もしないのはどうかと思うのよね」

まあ、それはそうだが……。

「なら、食事などの雑事を土郎が止めるのはどうでしょうか？」

……まるで見計らっていたかのように桂花が提案してきた。

「なるほど、悪くない案ね」

俺は華琳が承諾しようとするのを慌てて止めた。

少なくとも、食事作りなどは俺の趣味だ。

というか、楽しみの一つでもある。

「そのひ」あら、部下想いの土郎ともあるうものが、部下の気遣いを無碍にするの？」「……」

桂花の瞳に揺らめく暗い光によって気付いた。

これは報復であり、部下の嘆願もこいつが仕向けたのだからと。

……後に確認したところ、この予想は当たっていた。

「なら決まりね」

こうして、俺は家事をする機会を失った。

《報復例その二》

「何？品切れだと？」

俺がガラクタいじりを楽しむための材料を手に入れようと思い、買い物にいったのだが……。

「はい。城の方で全て買占められました。ちなみに予約までされています」

俺は初耳だったため、信じきれなかったが事実だった。

桂花が提案して工兵の技術力の向上と、新たな兵器の研究開発の名目で行われていた。

……ちなみに【なぜか】俺には連絡の不備で知らされなかった。仕事の多い俺はそれらを弄る機会などなかった。

そして、休日のガラクタいじりは材料不足のために著しく制限されることとなった。

他にも色々手を変え品を替え、報復が行われた。

……性質が悪いことに周りの者たちがそれと気付かず、いくらでも誤魔化せる間接的な報復である。

流星は軍師と言えるが……そんなことに能力を活かすのはどうかと思う。

確かに桂花には悪い事をしてしまったとは思うが……。

おかげでストレスが溜まり気味だ。

そんなストレスを解消するため、今日の休日を満喫しようと思決心している。

そう、苦労を重ねて遂に完成した一品、【エミヤ式リール220】を使った釣りで！！

材料を一から鉄を溶かして作ることから初め、

先日手に入れたあのブラックボックス（仮）によって、

フセススーパーオートメーションの電動操作の高速巻き上げを再現することに成功したのだ。

流石にデータ入力関係は再現不可能だが、それでも及第点を付けられる出来には仕上がった。

……万全の時ならもっと投影を使って楽が出来たのだが。

釣りスポットも決めてある。

なかなかの穴場の湖で、十分な釣果が期待出来る。

かなりの期間を掛けて地図で候補地を決め、実際に調査したのだ。さあ、思う存分楽しむとしよう。

……だが、目的地についた俺が目にしたのは、大勢の泳ぐ人々。

「……………なんでさ……………」

一刻ほど呆然としていた俺は、近くにいた人に尋ねた。

「……………何故、今日はこんなに人がここにいるのだね？」

「知らないんですか？今日は街の人の慰安として、ここで水浴を楽しむことになったんです。

わざわざ兵隊さんを護衛にまで付けてくれて。本当に曹操さまはお

優しい」

……俺は……これも桂花の報復であることに気付いた。いや、人々がいた時点で気付いていたのかもしれない。ただ、認めたくなかったんだと思う。

「……ここまでするか？ふつつ？」

こうして俺の休日は釣りすることなく終えてしまった。残ったのは追加され倍増した精神的ダメージによる疲労のみ。

その後、城に戻った俺は華琳に事情を話し、桂花に対する寵愛の増加と桂花の報復を止めてもらうことを頼みこんだ。

これは正義の味方の休日記録における、台無しにされた一日である。

## 正義の味方の仕官記録5

それは華琳に頼んで、桂花の報復を終わらせる事に成功した数日後の事だった。

「そういえば、隊長と秋蘭さまの弓の腕ってどっちが上なのー？」

そう何気なく沙和が聞いてきたことが切っ掛けだった。

その時、俺は弓の調練をしていたからこそその疑問だったのだと思う。

「状況次第だろうな。移動しないでの射なら私、移動しながらでの射なら秋蘭に分がある。

特に疾走する馬上からの的に向かって射るのなら。

それに遠距離なら私に、中距離なら互角、近距離なら秋蘭に有利だろう。」

これは俺が弓を基本的に遠距離狙撃にのみ使用していたのに対し、秋蘭が弓のみで戦い続けた差異によるものだろう。

「けど、師匠と秋蘭さまの勝負を一度勝負を見てみたいんやけどなあ」

真桜の言葉に、

「確かにそれは見てみたいですね」「私も見てみたいのー」と凧と沙和も同意すした。

俺としては勝負したいとは思わないんだが。

「あら、なんの話かしら？」

「秋蘭について何か言っただみただが？」  
「それにしても相変らすの腕前だな」

……なんで、見計らったかのようなタイミングで現れるかな？この三人は。

「お、ちょうどええ所に！師匠と秋蘭さまの弓による勝負を見たいちう話をしておったんよ」

「あら、それは面白そうね」

……まずいな華琳は乗り気みたいだ。  
おまけに周りも止めてくれそうにな。

「私の弓など見てもさほど面白くはないと思うのだが。秋蘭もそう思わないか？」

この場で唯一味方になってくれそうな秋蘭に援護を求めたが、  
「いや、そうは思わない。それに私としては士郎との勝負をしたい」との返答で覚悟を決めた。

「……仕方がない、受けよう。それで勝負の方法は？」

このルール次第で勝敗の行方は大きく変わる。  
出来れば互いに平等なルールにするべきだろう。

「ならば五十歩の距離の的を交互に射るといっのはどうだろう？」

秋蘭から提案してきた。

五十歩という約七十五メートルか。  
その距離なら互いにそれなりに競えるが……  
止まった状態で交互に一本づつ射るのでは俺に有利になる。

「……その条件がどういう意味か分かっているの提案なのかね？」

冷静な分析の出来る秋蘭だから分かっていると言ったと思うが、念のため確認することにした。

「……気遣いは感謝するが、問題ない」

「……分かった」

こうして秋蘭との弓の勝負は始まった。

まずは秋蘭が射ることとなった。

弓道の八節とは違うが、やはり極めようとするれば、  
自然と動きは美しい滑らかなものになるのだろう。

「はっ！」

矢は見事到的の中央に突き刺さった。

後ろに下がった秋蘭に代わり、俺は前が出る。

俺は弓を構える。

ちなみに基本は射法八節だが、実戦用に俺なりのアレンジを加えたものだ。

……そもそもこの弓は洋弓だから和弓とは勝手が違うのだから当然  
と言えるが。

「ふっ」

俺の放った矢は的……というよりの的に刺さった秋蘭の矢に直撃した。

周りの皆が驚愕する中、俺と華琳、秋蘭だけは平然としていた。

俺達にしてみれば分かり切ったことだったのだから。

互いに射ること一刻。

互いに的の中央を外さないが、あきらかに秋蘭の矢がずれ始めている。

……それは当然だろう。俺が全ての矢を【前の矢】から外さないのだから、

重圧はかなりのものだろう。

にも関わらず、一刻も耐え抜き中央に当て続けた秋蘭は賞賛されるべきだな。

「……はっ」

そして……とうとう外れた。

「勝負ありだな」

皆が俺たちを褒める中、納得済みの表情で淡々と語る秋蘭に俺は声をかけることにした。

「何故、こんな条件にしたのだ？この条件なら私が勝つだろうことは分かっていただろうに」



「随分前に、季衣に言ったそうだな。

【本当に譲れないことなら、出来る出来ないの問題ではない。やるか、やらないかの問題だからだ】と。そういう事だ。それに純粹に挑みたかったのだな」

「そうか」

俺が納得した所で秋蘭から質問してきた。

「以前から疑問に思っていたのだが……。

何故、士郎はあそこまで目的意識を持ちながら自分を空に出来るんだ？」

その言葉に一瞬詰まった。

……流石に一流の弓使いにはその異常性が気付かれるか。

「秋蘭、どういう意味なんだ？」

「言葉通りの意味だ、姉者。士郎の弓の腕は今述べた事に起因する。そして、そんな事は人に耐えられる在り様ではないんだ。普通なら、間違いなく心が壊れる」

驚く皆を横目に俺は答える。

「簡単な話だ。とうの昔に壊れているから、これ以上壊れようがないだけだ」

「……それはどういう事？」

皆が絶句する中、華琳が尋ねた。

「幼いときに地獄の如き大惨事に巻き込まれてね。その時、心が死んだ」

「けれど、隊長はこうして……」

凧の反論に、

「その後、奇跡的に感情を新たに手に入れたが……それでも心が壊れたままだった。」

それだけだ」

そう答えた。

「……直らないのですか？」

「完全には無理だろうな。想いのおかげで【自分】を持つようになったが、

それは【想いで模った自分】であって、本当の意味での【自分】ではないのだから」

そう、自分を大切にするようになったが、

それは自分自身ではなく【約束】のために大切にしているのだから。

「なら、私が直してあげるわ。」

【出来る出来ないの問題ではない。やるか、やらないかの問題】なのでしょう？無理？

知ったことではないわ」

華琳の言葉に俺は苦笑し、

「そうか。では、期待していよう」

そう答えた。

これは正義の味方の仕官記録における、霸王に宣告された一日である。

## 第十話：神医の継承者

現在、袁紹の河北四州を手に入れた事で、華琳の勢力範囲が一気に増大した。

だが、そのために華琳は今まで以上に警戒される存在になった。おかげで、国境あたりは常に警戒されており、その対処にここ最近  
はみんな休む暇もない。

俺も本来なら軍を率いて出かけるはずだったのだが……。

「六日ほど時間をもらいたいですって!?!」

桂花の怒声が玉座の間に響く。

「ふざけているの!?!この忙しい時期に!?!」

まあ、怒るのも無理はないが……。

「悪いとは思うが、必要なことだ。それに戦う場は選ばせて貰う契約もあるのだしな」

「だからと「桂花」……分かりました」

華琳の一言で桂花は渋々黙った。

「理由は聞かせて貰うわよ」

華琳の言い分はもつともなことだ。

「事故の後遺症の治療のためだ」

そう、ついに華陀の居場所に関する情報を掴んだのだ。  
場所はそう遠くはないが、治療にかかる時間や搜索の時間も考えて  
六日とした。

「あれだけ医者では無理だと言っていたのに、治るのかしら？」

「名医である華陀なら風の情報から分析して治療できる可能性は高い。  
い。

だからこそ、この機会は逃せない」

「分かったわ」

華琳の許可を得たので、その場を去ろうとしたが、  
以前から疑問に思っていたことを尋ねることにした。

「……そういえば、妖術の類が嫌いなのに、何故その事を黙っていた私を罰しなかった？」

華琳は即答する。

「基本的には、風評の問題から嫌っているのだけれど、  
あなたもそこは気をつけていたでしょう」

投影する時はあたかも懐から出すように、いつも注意している。

……目立って良い事は大してないからな。

「もう一つは噂の予言があったからよ」

「予言だと？」

それは初耳だな。

「まあ、ずいぶん前の話よ。」

管轄とかいうエセ占い師によると【異なる地から来たりし《むげんのけんせい》が、悪しき定めを砕く。その担い手、赤き聖布を纏いし白髪の男なり】とね。

まあ、当人はそれからしばらくして死んでしまったけど、この噂を利用すればあなたの……魔術だったわね。

あれがそうだと言い張れば、むしろ良い方向に持っていけるでしょう。

赤い装束だし、年をとれば白髪になると言い訳できるわ」

……エセ占いの範疇を超えているな。

未来視の力でもあったのだろうか？それなら遙か未来を言えばエセとも呼ばれるだろう。

「納得したよ。まあ、地和の妖術も許しているのだから当然か」

「そういうこと」

さて、疑問も解けたことだしさっさと出発するか。

「噂だとこの近くの街にいるそうだが……」

馬を駆って丸一日、あと少しで付く所まで来たのだが……。

「流石に見過ごせないな……」

盗賊たちに襲われている商隊を見つけてしまったのだから。

「……いつまで経っても、悪党は完全には無くせないか」

それでも華琳の政策のおかげで随分減ってはいるんだけどな。

弓と矢を投影して一方的な射撃による殲滅を始めた。

盗賊たちはこちらに気づき、慌てて逃げるか反撃をしようと試みる。

……嫌な予感がする。

俺は盗賊たちが人質を使ってこないことで、最悪の事態を想像した。  
結果は半分当たりだった。

盗賊どもを縛り上げた後、馬車の中を覗いた俺が見つけたのは……  
重症を負った者達だった。

「くっ！この出血はまずい！」

商品であろう品々使って応急処置をするが、  
失った血は戻らない以上は危険であることに変わりはない。

「私ではこれ以上の対処は無理か。このままでは……」

街まで行って医者に診せれば助かる可能性は十分あるが、  
俺一人ではそこまで全員を運ぶまでかかる時間に、血を失ったこの  
人達の体力が持たない。

それでも諦めずに一人でも助けられる可能性をかけて、街へ向かおうとした。

「……血の匂いを感じて来てみれば……。俺は医者だ！怪我人がいるなら全て診よう！」



「そうか、礼を言おう。ついでに外の馬鹿どもも見て貰っていいか？  
救える者は全て救う主義なんぞな」

男は少し驚いたようだが、

「ああ。むしろ俺から提案するつもりだった。どうやら気が合うみたいだな。

俺も同じ主義だ。なんせ医者だからな」と答えた。

……どうやら本気のようにだ。盗賊たちまで怪我の治療をしている。

「私の名は衛宮士郎。士郎と呼んでくれ。士郎は真名だが君になら問題はない」

真名の事を知った後、自分の名をそういうふうに変更した。

そういえばこの世界に来てから、男に士郎と呼ぶのを許可したのは初めてだな。

まあ、この男になら良いだろう。

……自分なんかより遥かに正義の味方なのだから。俺では彼らを救えなかった。

「そうか。俺の名は華陀、字は元化。真名は凱我<sup>がいが</sup>だ。凱我と呼んでくれ。

俺も士郎になら呼ばれても良いだろう」

「か……華陀だって？」

「そうだが？」

まさかこんな形で会うとは思わなかった。



「凱我……後で頼みたい事がある」

真剣な様子の俺に何か感じたのだろう。

「……分かった」

凱我はそう短く答えた。

街に着いた俺たちは縛り上げた盗賊たちのことを街の衛兵に報告し、怪我人達を医療施設へ運んだ。

どうやら、盗賊たちのことはこれから華琳への陳情される予定だったらしい。

まあ、首領格を捕まえたから大したことはもう出来ないだろう。商隊の者達も無事に一命を取り留めた。

その後、宿屋にて凱我に本題を話すことにした。

「それで土郎、頼みたい事は何なんだ？」

「私の治療を頼みたい」

「どこか悪いのか？」

俺は今の俺の現状を詳しく話した。

「……つまり、独自の気の流れを制御する疑似神経に負担が掛かる原因の除去と、

その気を利用した魔術とやらがほとんど使えない理由の発見と除去をしてもらいたい？」

「その通りだ。普通の名医ではとてもでは無いが無理だろう。

今のままではいざという時に守りたい者達を守れない。

それに綺麗ごとを実現するには通常の数倍の力が必要だ。今のままでは話にならない」

凱我は良い放つ。

「任せておけ！我が五斗米道ゴトウマイドに治せぬ病などありはしない！あるとすれば、それは恋の病くらいのものだ！」

「魔術回路たる疑似神経は私の場合、神経と融合している。そのことは念頭に置いてくれ。」

凱我に治療出来ないのなら、誰にも治療出来ないだろう。

頼む。やってくれ」

「さて、ならば行くぞ……。はあああああああああっ！」

凱我が叫ぶと目が輝き出す。それは淨眼を思わせるものだった。

「な……っ！」

凱我の表情が驚愕に歪む。

「な……なんだ、この歪み……！こんな物、見たことないぞ……！」

どうやら、エラー部分を見出すことに成功したようだが……。

「ち……。まずは小手調べといかか。はああっ！」

俺の体に一本の針が刺さった。

一瞬、凱我は笑顔を浮かべたが、すぐに険しくなる。

「なっ……っ！修復しただと!？」

歪みが直ったかに見えたが、次の瞬間には再び歪みが現れたのだ。

「ならば……！我が身、我が鍼と一つなり！一鍼いっしんどうたい同体！全力ぜんりょくぜんかい全快！  
必察必治癒ひつさつひつちゅう

……病魔覆滅！でええええええええええええいつ！！」

凱我は複数の針を俺の体に打ち込んだ。

次の瞬間、光が辺りを包んだ。

「……………済まない士郎。俺ではここまでが限界みたいだ」

俺は自分の体を調べることにした。

「 同調・開始<トレース・オン>」

魔術回路……………負担率300%から220%に低下、

これにより宝具投影+真名解放、

及び全投影連続層写使用における身体異常発生時のダメージ率低下、  
詳細…致死率100%から9%に低下、ただし再起動まで意識不明  
状態での待機が一週間必要

エラー……………エラーの一部解消により強化、壊れた幻想の使用が可能、  
ただし、

強化はエラーにより効果は二十秒のみ、また使用のために一分間の  
無防備での集中が必要

注意事項として、本日より三日の休息期間を必要とする。

この期間中に無理をした場合、再び悪化する。

……………微妙だが、確かに改善されている。

まあ、固有結界はどっちみち使用する機会は……………ないと思いたいな。

とにかく、宝具の使用と、強化による超遠距離狙撃が可能になったことは大きい。

……宝具は一発限定とか、強化は遠距離でしか役立てず、狙撃も連射が出来ないとか制限付きだが。

「凱我、礼を言わせてもらう。完治したわけではないが、ある程度は回復した」

俺の礼を聞いても凱我の表情は暗い。

「だが、あれだけ大口たたいておいて、完治できなかった！」

「……ならば、もっと腕を磨いて、いつか私の病を完全に治してくれ」

その言葉に凱我は驚いたようだ。

「え？」

「今はここまでなのだろう？ならば、さらに修行を積みばいけるはずだ。」

少なくとも俺はそう信じているが？お前は自分で自分が信じられないのか？」

凱我の目に確かな輝きが再び灯った。

「士郎！お前の言うとおりだ！そうだ、俺はまだ修行中の身だ！

今は出来くとも、出来るようになってみせる！約束しよう！必ずその病を治すと！」

「ならば、それまで生きぬいてみせよう」

俺は笑顔で返答した。

これは正義の味方と神医の継承者が出会った一幕

「大変だ！」

街の人が慌てて駆け込んできた。

「どうしたんだ？」

「りゅ、劉備の軍が国境を越えて攻めてきたんだ！！呂布を連れて  
！！」

それを聞いた時、自分の顔色が変わったのが分かった。

華琳はわざと攻められやすいように自軍の守りを薄くしていた。

それでも劉備軍【だけ】なら充分対処できる自信があり、出来るか  
らだ。

だが、呂布が敵に加わってしまったら……。

俺は駆け出す。守るべき者達を守るために。

こうして正義の味方は一人行く。ただ一人の援軍として。

第十話：神医の継承者（後書き）

華陀のオリジナル真名を凱我「がいが」にしました。ガオガ ガー  
つながりということで。

## 第十一話：力と代償

ここ首都に近い出城前の荒野にて、二つの軍がぶつかりあっている。長きに渡り拮抗していたが、戦力差は如何ともし難く、勝敗が決するのにも時間の問題だった。

（まだ、負けていない！）

華琳は近寄る敵兵を切り捨てあがいている。

最初から籠城すれば、もっと粘れただろう。

けれど、それは覇者としての振る舞いとはいええず、先のことを考えれば論外だった。

負ければ、自分はそのまでの存在だったということだと決めていた。

（劉備にだけは絶対に負けたくない！）

この戦の開始直前の舌戦で劉備は、

「力で国を侵略して、人を沢山殺して……それで本当の平和が来ると思っっているんですか？」

そう言ってきた。

人を沢山殺した……その点に異論はない。言い訳をするつもりもない。

だが、劉備の言い方は【自分は】違うと言っているようなものだ。私から見れば劉備も沢山殺していることに変わりはない。

理想のためであったとしても、その点に変わりはないのに。

そのことを認識してない劉備に腹が立った。

今までも劉備の甘さは認めがたかったが、今回の言い分は何より不

愉快だった。

(けれど、どうしてここまで腹が立ったのかしら?)

王としての劉備を認められないだけにしては違和感がある。

冷静に自分の考えを分析して気付いた。

士郎の理想に近い考えのくせに、士郎と違ってその重さを理解していないから、

余計に劉備を認められなかったのだと。

士郎の理想に近い考えのくせに、士郎と違って理想の犠牲を直視しようとしなから、

劉備が不愉快だったのだと。

つまり……。

(士郎の理想を汚されているように感じたからということ?)

決して届かないと、その理想の重さを理解しながら、理想を追うその在り様に惹かれた。

理想のために犠牲となった者たちを、言い訳一つせず直視し続け、その咎を背負い続けるその在り様を尊敬した。

思い出すのはあの時の会話。

戦闘後はいつも彼は屍が広がる戦場跡を見続けていた。

「いつも戦闘後はそうしているけど、何をしているの?」

一度そう聞いた私に、

「記憶に刻んでいるだけだ。殺し、犠牲にした者たちのことを」  
痛みに耐えているかのように低い声で答えた。



「何故わざわざ？」

「自分の行為の結果を、その咎を忘れないためだ。最低限の義務は果たすべきだろう」

「……それは罪滅ぼしのつもり？」

「まさか。罪はどうやったところで消えない。消すつもりもない。いつも出来る限りの後始末をしたり、

こうして記憶に刻むのは最低限の義務だと思うからだ」

彼は返答しながらも、視線を反らすことなく立ち続ける。

無表情なのに泣いているように感じた。

彼が殺した者はこの中の一割にも満たないだろう。

それでも彼は自分の咎として己に刻むのだろう。

そこまで背負う必要はないはずなのに。

大抵のことは器用にこなすから気付かなかったけど……。

「……自分に関してはとつても不器用なのね」

「……今頃気づいたのかね？」

私はしばらく彼の傍で同じように戦場跡を見続けた。

だから劉備が余計に不愉快だった。

それにしても……。

（いつのまにかここまで土郎の存在が自分の中大きくなっていったのね）

思考しながらも近付く敵兵を倒し続ける。

だが、関羽が現れたことで思考を切り替えた。

「曹孟徳！いざ尋常に、勝負っ！」

「関羽か！」

「参る！でええええいつ！」

風を切るかのような速さで振るわれた偃月刀を防いだ。振るわれた横凧の一撃に手が痺れる。

「容赦なしというわけね……。……はあっ！」

守勢に回ったら危険だと判断し、絶を振るう。

右肩への一撃を関羽に弾かれたが、その反動を利用して左への横凧を放つ。

だが、それもきっちり防がれた。

「……伊達に前線に立つわけではないか。……なかなかやる！」

「舐めてもらってわ困るわね」

返答しながらも今の状況を分析する。

明晰な頭脳はこのままでは数合しか持たないと理解する。

「ぎゃああああ！」

「ぐわあっ！」

呂布がこの場に現れ、周りの親衛隊を蹴散らしたことで事態はさらに悪化した。

「恋。お主は周りを頼む。私は曹操を……。っ！」

呂布を放っておけば、全滅する！  
不意打ちで倒そうと全力の一撃を放つ。

「……遅い」

「なっ！」

完全な不意打ちだったにも関わらず、顔色一つ変えず防がれた。

「……………っ！」

呂布の放った一撃は、今まで見てきた誰よりも速く、誰よりも重かった。

「くっ……………」

防げはしたけど、体勢が崩れた。

「……………もう、一撃」

呂布が追撃をしてこようとすする。

（ダメ、保たない……………っ！）

「いめん、皆……………」

死を覚悟した私に一つの声が届いた。

「いいからしゃがめ！泣き言など聞く耳もたん！」

反射的にしゃがむと同時に無数の矢が呂布を襲った。

「……………つ！！」

その場の全員が矢の放たれた方向を向いた。

「士郎！！！」

そこには一人の援軍がいた。

ぎりぎり間にあい俺は安堵するが、すぐに気を引き締める。皆が驚く中、呂布だけがこちらへ駆けだしてきたのだ。本能的なモノだったのだろうが、適切ではあるだろう。

俺の弓の厄介さは十分覚えているだろうから。まともに戦えば呂布に勝てはしない。

だから……………悪化を覚悟で切り札を切る。

不意打ちで確実に仕留めるために。

「鶴翼しんぎ、欠落むけつヲ不ラズしてはんじゃく」

魔力を込め左右に投擲された干将・莫耶は弧を描き、鶴翼は美しい十字を象らんと呂布に左右から襲いかかる。

「……………つ！！」

敵上で交差する軌道で迫る夫婦剣を呂布は見事に防ぐが……………狙い通り呂布は動きを止め、二本の刃は宙に舞う。投擲と同時に走りながら唱える。

「  
フリーズ  
凍結、解除」

「「なっ！！」」

見ていた者達は投擲されたはずの干将・莫耶が再びその手に握られたのを見て、驚愕した。

そして華琳は思いだした。彼が【刃物なら作れる】と言ったことを。

「  
ちから  
心技、泰山ニ至リ」

双剣を手に呂布の間合いに踏み込み、干将を振るう。

「……………無…っ！？」

干将の一撃を防ぎ、反撃しようとした呂布の背後から、先ほど弾かれた莫耶が襲いかかった。

体勢を崩しながらも防いだ呂布に俺は莫耶で追撃する。

「  
しゅめい  
心技、黄河ヲ渡ル」

斬りつけられる莫耶を呂布は防ぐが、今度は先ほどの干将が襲いかかった。

「……………ぐっ！！」

それも呂布は防いだが……………二度に渡る“x”の重ね当てと奇襲を防ぐために、

体勢を崩し続けた結果動けなくなる。

そう、全てはこのための布石！

「  
唯名、別天二納メ。  
せいめい りきゅうにとき  
われら ともてんをいだかす  
両雄、共二命ヲ別ツ……!!」

とどめの三つ目の“x”を俺は当てるべく干将・莫耶を振るう。

「……あああああつ!!」  
「なっ!!」

呂布は驚いたことに力任せに体を捻じることとで体をずらし致命傷を避けて見せた。

並はずれた力があるから出来たことだが、あれでは体が壊れる。おそらく足は骨が折れ、筋肉が断裂しただろう。

だが、致命傷は避けても重傷であることに変わりはない。

呂布は崩れ落ちた。

「恋!!」

関羽が慌てて駆け寄ってくる。

本来なら後二日の休養を必要としたにも関わらず、魔術を使用した反動が体を蝕む。

これ以上のまともな戦闘は厳しいと判断。

それ以上に華琳の救助を優先するため、華琳の下へ向かう。

エラーが一部解け、干将・莫耶の投影速度が戻ったおかげで使えたとおき。

干将・莫耶の互いに引き寄せあう性質を利用した切り札、鶴翼三連。本来ならとどめに強化して変化させた干将・莫耶で切りつけるが、今は強化の制約のため出来ない。

それにしても本来の性能ではないとはいえ……。

「……流石は呂布。まさか必殺の鶴翼三連をあんな形で逃れるとはな」

俺は華琳の下へ辿り着く。

「ブローケンファンタズム  
壊れた幻想」

手に持っていた干将・莫耶を投擲しながら、四本の刃を爆発させた。

エラー解除と魔術回路の負担軽減で使えるようになったもう一つの手札を切る。

爆発事態は大したものではないが、それによっておきた砂煙が敵の視界を閉ざす。

「くっ!?!」

その隙をついて、華琳を抱え走り出す。

走り続け、敵軍から十分な距離を離し、止まる。

「士郎……どうして貴方がここに!?!」

「治療後、直ぐに戻って来たからだ。……城まで下がるぞ」

その言葉に華琳が反応する。

「ここで兵を引けというの!?!劉備を相手に負けを認めると?」

「華琳はまだ負けていない!」

「……士郎?」

俺の反応に驚く華琳に言葉をぶつける。

「本当の敗北というのは心が折れた時、死んだ時だ。だが、華琳の心は、信念は折れていない。そして生きている。兵たちの心も折れてはいない。まだ生きてあがいている」

「……………」  
「一度つまずいても、立ち上がればいい。何度つまずこうとその度に立ち上がればいい。それが出来ると俺は華琳を信じている。もっとも、そうそうつまずかないと思うが」

華琳の顔に笑みが浮かぶ。

「ふふっ……………そうね」

「悪いとは思ったが、途中で会った桂花に頼んで撤退命令を送ってもらった」

「あら、無断命令は許さないと言ったと思ったのだけど？いつもなら、首を刎ねているところよ？ふふっ……………」

俺は苦笑する。今から自分が行う事の結果を考えて。

「……………ならば責任を取らなければな」

「あら、何をするつもり？」

「華琳、後は頼む」

俺の顔が険しくなるのを見て華琳の顔に不安がよぎる。

「士郎？」

俺は弓を投影した後、…………… 宝具の投影を行う。



「 投影・開始 トレース・オン 」

鶴翼三連、壊れた幻想ですでにかなり悪化した上での宝具投影……。無理のつけで体に激痛が走る。魔術回路が焼けつくのが分かる。それでも止めない。時間を稼がなければ終わってしまうのだから。残存する兵は皆、傷だらけで戦う余力がないことは明白だったのだから。

溢れる魔力により蝕まれ、血反吐を吐きだした。

「 士郎！？ 」

そうして手にしたのは今必要な時間を稼ぐ矢たる宝具。それは光輝く、一本の光の剣。

「 強化・開始 トレース・オン 」

敵軍の上空まで飛ばすため強化をする。  
……さらに魔術回路が焼けついた。

撤退命令のおかげでもはや生きてあの場にいる自軍はいない。

「 I am the bone of my sword .  
《我が骨子は光り狂う。》 」

意識が混濁し始める中、ありたっけの魔力を込めて、その真名と共に矢を解き放つ。

「 クラウ・ソラス “ 光・螺旋剣 ” 」

クラウソラスはケルト神話に登場するダーナ神族の王、銀の腕又アザの所有する剣。

クラウが剣、ソラスが光の意で、鞘から出れば光で周りの者の目を眩ますと伝えられる。

その剣を改良して生み出したのが、この光・螺旋剣。クラウソラス

そう俺にしか使えない、使い捨ての【非殺傷用・対軍宝具】。

俺は光を放って敵を眩惑するという概念に目をつけ、それを強化した物を作った。

イメージはスタングレネード。

戦争を一時的にしろ停止させることのできるモノを俺は欲した。

例えば、誤解から始まった戦争、

あるいは何のために戦っているのか誰もが分からなくなった戦争。

時間さえあれば解決できる戦争だけでも俺は止めたかった。

試行錯誤のはてに生み出したこの宝具は、その可能性を生み出した。

敵軍の上空まで飛んで行った矢を見て、最後の仕上げをする。

「ブローケンファンタズム  
壊れた幻想」

その瞬間、劉備の軍を極光が包んだ。

その光は人を幻惑させる。

その効果は相手によって軽減するが。

例えば遠坂クラスの魔術師では三分程度しかもたないが、一般人に  
なら半日近く続く。

半日も……あれば春蘭たちも帰ってくる。

そう……すれば、俺た……ちの勝ちだ。

遠……くからあの光を……見た者も多少感覚が……ずれるだろうが、  
影響はほ……とんどないだろう。

……どっちみち……戦う余裕がな……い自軍には関……係ないだ……ろ。

衛宮士郎は意識が混濁し、力が抜け、体が地面に倒れこむ。

遠のく意識の中、最後に見たのは駆け寄る華琳の姿だった。

士郎の体が地面に倒れた。

「士郎っ！！」

駆け寄って息を確かめるが、極めて小さい

私は士郎を背中に背負い、城へと戻った。

「華琳さま！無事……って士郎！？」

「いいから、急いで医者を！！」

「分かりました！」

私は桂花に指示を出した後、士郎を見る。

「なっ！？」

さっきまで気付かなかったが髪が白く変色していた。

「……このまま死ぬなんて、絶対に許さないわよ」

私は士郎を生かすべく、あがき始めた。

「みんな……大丈夫？」

ようやく見えるようになった私はみんなに聞いた。

「は……はい。それにしても、あの光は……？」

「うにゃ……あの光のせいで鈴々まとも動けなかったのだ」

「はわわ。まだ目が見えないです」

重傷の恋ちゃんが本陣に連れ込まれ、みんなでひとまずの治療を終えた時、

曹操さんの軍の方向から一条の光が走って……。

それは自軍の上空まで来たところで全軍を光が覆って……みんな目が見えなくなっただ。

普通の光ならここまで影響はないはずなのに、いつまで経っても目が見えず、

半日経った今になって、ようやく直ってきた。

「……今の恋ちゃんの様子は？」

「……一命を取り留めましたが、当分絶対に安静にしていなければなりません。」

その言葉に悲しみを覚える。

なんで私はこんなに無力なんだろう。

「だけど、どうして恋はやられたのだ？」

「……実際、こうして見ても信じられません。恋さんがやられるなんて。」

曹操さんの軍には李典さんぐらいしか残っていないはずなのに……」

そう、恋ちゃんを倒すには数人がかりでも難しいはずなのに。

「……衛宮だ」

「え？」

「衛宮があの場合に現れたんです」

その名を聞いて、思い出すのは衛宮さんが言った重い言葉。

《理想を抱いて溺死する覚悟はあるか？》

言われた時は理解出来なかった。

けど、袁紹さんたちから逃げる時、その重い意味を告げてきた。

《自分の理想のために切り捨てない結果、より数多の犠牲を出す覚悟があるかがあるかどうかを。全滅する覚悟があるか》

いまだその言葉は、楔の如く刺さったままだ。

だけど……理想を諦められない。

皆が驚く中、朱里は冷静に尋ねる。

「ですが、それなら矢傷でないとおかしい……」

「……奴は道士の類だった」

皆が再び驚く。

「衛宮はまず双剣を左右に投擲しました。そして、それは恋を左右から襲いました」

「え？衛宮さんが持っていたあの双剣？」

「はい」

愛紗ちゃんの私への返答に、朱里ちゃんが反応する。

「……まさかと思ってましたが、やはり干将・莫耶だったんですね」

その言葉に思い出す。

呉の王が干将に鍛えさせた二振りの剣、

人命と共に鍛たれたそれは互いに引き寄せあう力を持つという。

「けど、それって行方不明だったはずなのだ」

「……それも説明できる。衛宮が投擲した後、

あいつの手に干将・莫耶が出現したのだ。投擲した干将・莫耶はまだ宙にあったのに」

皆が驚く中、鈴々ちゃんだけはよく分かっているみたい。

そういえば、噂話を皆で聞いた時鈴々ちゃんはいなかったっけ。

「どづいうことなのだ？」

「おそらく、衛宮の力は武器を作ることにあるのだろう。」

衛宮には何処からともなく矢を取り出すという噂話がある。

正直でたらめだと思っていた」

それが本当だったと。

「……それだったら武を磨くのは納得です。じゃないと活かせませ

んから」

作っても使えなければ意味が無いのだからもつともだと思つ。矢が尽きないのだから、弓使いとしては極めて有利だろう。

「それじゃあ、恋ちゃんが倒されたのは？」

「先に投げた干将・莫耶が背後から襲いかかったせいです。

それに対処したために出来た隙を突かれたんです。

私も一緒に衛宮に対処していれば！」

それはいくらなんでも背負い過ぎだと思つ。

そんなの誰にも予測できないはずなのだから。

「愛紗ちゃん一人で背負つちゃダメだよ。そんなの誰にも対処できないと思つし、

それでも背負うのなら、私も背負うよ？」

「……分かりました。ありがとうございます」

どうやら納得してもらえた見たい。

「全軍立ち直つたみたいだぞ」

華雄こと駆鳴ちゃんが報告しに来てくれた。

駆鳴ちゃんは恋ちゃんと一緒に仲間になってくれた。

最初は嫌がつてたけど、みんなで反董卓連合の時のことを謝り、彼女の武を褒めたら納得してくれた。

なにやら朱里ちゃんのことを聞いて、衛宮さんを罵つてたみたいだけど。

「この後はどうすればいいかな、朱里ちゃん？」

「……正直、撤退するべきだと思います」

その言葉に駆鳴ちゃんが驚く。

「何故だ！？何故引かなければならない！私は嫌だぞ！」

「残念ですが、時間が経ち過ぎました。曹操さんの軍の主力が戻ってくる以上、

早く撤退しなければ危険です。頼りになる駆鳴さんには殿で、

もうすぐ来るはずの夏侯惇さんを相手にして欲しいから、余力を残して欲しいんです」

「なるほど！任せておけ。……ふふっ。ようやくあの時の誓いを果たせるか！」

いつも駆鳴ちゃんは引くとか策とか嫌がるけど、

いつも朱里ちゃんの話で納得するんだよね。

相性がいいのかな？

そして、撤退を始めてからしばらくして、

「報告です！魏の軍勢が戻ってきました！一番近い敵軍は夏侯惇率いる部隊のようです！」

報告が届いた。

「朱里ちゃんのおかげで何とかかなりそうだね」

「いえ、まだ逃げきっていませんから油断出来ません」

その言葉通り、凄まじい勢いで曹操軍は迫ってくる。

「この先に断崖にかかる橋があります！そこで足止めをすれば……！！  
そこなら一人でも足止めができます！」



「なら鈴「私の出番だな!」……えつと」

足止めを志願しよとした鈴々ちゃんの言葉をぶった切って、駆鳴ちやんが名乗り出た。

なんか朱里ちゃんも困惑しているみたい。

「あ、あの「ここまで読みきっていたとは!先ほど言われた通り、殿は任されよう!」

……お願ひします(これが俗に言う“策士、策に溺れる”ということ)とでしょうか?)」

何故か朱里ちゃんは落ち込んだ。

「絶対、ぜーったい、死んじやダメなんだからね!」

「無論だとも!我が武は無敵だ!」

そう自身満々に答える駆鳴ちゃん。

……確かに愛紗ちゃんや鈴々ちゃん、恋ちゃんとの頻繁な試合のおかげで、

以前より遥かに強くなったって愛紗ちゃんも言ってたけど。

みんなの不安に気付かず、意気揚揚と殿をする駆鳴ちゃんを残してその場を立ち去った。

わたしが追撃していた劉備軍の殿は予想だにしていなかった相手だった。

「華雄!??」

「久しいな、夏侯惇！あの時つかなかった戦いの続き、今こそしようぞ！」

そのことに依存はないが、あまり時間をかけては劉備軍に逃げられてしまう。

「……余計なことを考える暇はないと思え」

解き放たれる気迫は以前とは段違いだった。

確かに華雄の言うとおり、その余裕はないようだ。

「……そうだな。すまん、不粋だった」

「それではいくぞ！！」

互いに構え、

「はああああああっ！！」

「うおおおおおおっ！！」

戦闘が始まった。

「せりゃああああっ！！」

わたしは駆け寄りながら、一刀両断のつもりで振り下ろす。

金属音が響く。

その一撃は戦斧の柄で弾かれ、逆に華雄はそのまま戦斧を振り上げた。

再び金属音。

わたしは刃で防ぎながら、蹴り穿たんと胸に蹴りを放つ。華雄もまた、蹴りを放ち、互いの蹴りがぶつかった。

それにより互いに距離ができた。

そして、以前とは比べられないほどの速さで華雄は戦斧を振り回す。わたしはそれに渾身の一撃で風払う。

ぶつかる刃と鳴り響く金属音。

まるで前回の焼き直しであるかのような舞踏の如き戦闘。

ぶつかり合う気迫に雑兵たちは見守ることしかできずにいる。

というより、邪魔にしかない。

そのまま半刻ばかりその状況は続いた。

「腕を上げたな！夏侯惇！」

「貴様もな！華雄！」

だが、この戦闘に思わぬ横やりが入った。

「春蘭さま！」

「流琉か！悪いが！いえ、華琳さまの命令で全軍戻るようにと」なに！？」

それを聞き、後ろに下がる。

「それは本当か？」

「はい。それに……何かあったのかもしれませんが。雰囲気は暗かったです」

最悪の想像が頭によぎる。

「まさか……！く、悪いが引かせて貰うぞ！」

「……いいだろう。余計な事に気が逸らされている貴殿と戦って勝つても意味がない。」

次回こそ、決着をつけさせて貰う！」

こうして互いに引いて二回目の華雄との戦いは終わった。

そして……。

「なっ!?!」

城に戻って待っていたのは……今にも死にそうに見える土郎の姿だった。

これは正義の味方が無理を通して倒れ伏した一幕

「思っていた以上に今回は溜まったな」

戦後の跡にて一人の男が感想を述べた。

「もう少ししたら試すのもいいかもしれんな」

左手に持つ漆黒の水晶はここに来る前より、重い空気を放っている。

「くくく……っ！踊れ愚者ども！戦の舞を！それが私のための舞に

なるのだからな！！」

運命は確実にその時へと力を溜める……………

## 第十一話：力と代償（後書き）

オリジナル真名<sup>2</sup>、華雄の真名は馭鳴にしました。  
他に良い真名があれば感想に書いてください。  
場合によっては変えます。

## 第十二話：生還

劉備が退いて十日が過ぎた。

…… 士郎は未だ眠り続けている。

倒れた直後、診せた医者に言わせると「生きているのが奇跡」だそうだ。

さらに言うと、日に日に健康を取り戻していく士郎を「…… 本当に人間かね？」と称した。

現在は皆で順番で看病をしている。

…… それにしても…… あそこまで皆に好かれていたとは。

倒れ伏した士郎を見て、驚かなかった者も、悲しまなかつた者もいなかった。

季衣や流琉なんて泣いて大変だった。

「ここまで心配かけさせたんだから、目を覚ましたら覚悟しなさいよ……」

私は看病しながら呟いた。

あ…… ね？

どうやら眠ってしまっていたらしい。

体を起こそうとした私はその声を聞いて硬直した。

「……？ここは…… そうか、あの後倒れて……」

士郎が目を覚ました!?

今度こそ体を起こそうとして、

「……く、体の反応が鈍い。やはり、あの時と同じで神経に影響が出たか……」

その言葉に再び硬直した。

……あの時?それは以前も同じように無理をしたということ?

「両手が完全に動かせないとは……。これはしばらく苦労するな……」

士郎は体を起こそうとして、初めて私に気付いたようだ。

「……どうやら、手間をかせかせてしまったようだな」

ちなみに私は目を閉じて寝てる振りをしている。

……起きる機会を逃した。

「まったく。せっかく綺麗な顔なのに。寝不足は女性の大敵なんだが……」

まあ、隈ができた程度では華琳の美貌に変化などないか」

その言葉に、

「ありがとう。けれど、誰のせいだか分かって言っているんでしょうね?」

思わず喋っていた。

「……起きていたのか?」

「ええ。それで覚悟はいい?」



私は怒り、悲しみ、喜び、安堵と照れ隠しを込めて述べた。

「……………ああ」

私は土郎の頬を思いつきりひっぱたいた後、土郎の両目を手で隠した。

……………今の私の顔を見せたくなかったから。

「何を考えているの！？責任を取るとか言っただけで死にかけるとか！そんなことして私が喜ぶとでも思ったの！？」

目から涙がこぼれて土郎の頬に当たる。

「……………すまなかった。言い訳させて貰えば、経験上あのぐらいの無理なら死なないと思っていたから実行したんだが」

「馬鹿！！死にかけたことに変わりはないのよ！？」

……………あのぐらいの無理……………つまり、土郎がこれ以上の無理を経験しているということ。

以前から思っていたけど、土郎は自分を疎かにし過ぎる。

……………死にさえしなければ、何の問題もないと思っているのだろうか？

「もっと自分を大事にきなさい！！」

その言葉に土郎は苦笑した。

「……………いつ以来だろうな。無理して本気で怒られ、泣かれるなんておまけにその言葉……………。これでもましになったかと思っただけだな。」

本当にすまなかった」

私は士郎に背を向け、扉へ向かう。

「……皆を呼んでくるから、全員からの説教を覚悟しておきなさい。

……それから……お帰り、士郎」

「……ああ。ただいま、華琳」

……本当に素直に成り切れない自分には呆れる。

結局、一番言いたかった事が言えなかった。

折を見て、言わないと。

私は皆を呼びに行く間、そのことに思いを馳せるのだった。

あの後、駆けつけた主要メンバー全員からの説教が三刻ほど続いた。十人十色な本気の説教に心も体もかなり痛かった。

……病人だということを忘れているのだろうか、と思わせる「直接的」な説教や、

罪悪感を掻き立てる説教、

言峰ほどでないにしろ心抉る説教などバリエーションに富んでいた。

……まあ、それだけ大切に思われているということであり、それだけ心配させたのだから仕方ないだろう。

説教が一段落した所で、今度は俺のした事に関する追及へと移行した。

「なんで、髪が白くなっちゃったの？」

それは皆が疑問に思っていたことだろうな。

俺は無理な魔術行使の結果だと季衣に返答した。

「それで、あの光は何だったの？アンタ、刃物を作るしか能がなかったはずだけど？」

その桂花の言葉で華琳の表情が変わった。

……どうやら気づいたようだ。

「……そういう事？士郎は嘘をほとんどつかないのだから  
「華琳さま？」

秋蘭の疑問の声を無視して、華琳は確信をつく。

「……士郎。【刃物なら】作れるのよね？」

「……ああ」

「なら、【どの程度】の物まで作れるのかしら？」

その言葉の意味を皆はまだ理解出来てないようだ。

「……どういう事なのか、教えてもらえないでしょうか？」

星の言葉は皆の共通意見だろう。

それに対し、華琳は解説する。

「士郎は呂布を倒す時に干将・莫耶を作って使用したわ。

…… 士郎、あなたの作れる刃物の上限は？」

その言葉に皆ようやく気付いたようだ。

伝説の武具はどここの国にでもあるのだから当然か。

俺は観念して答える。

「…… 本来なら、私は【見たことがある】刃物なら、ほぼ全て完全に再現できる。…… 三つの丘の頂を一振りで切り落とした剣だろうと、放てば必ず心臓を貫く槍だろうと」

乖離剣だけは規格外だから再現出来ないが。

俺の言葉に皆が驚愕し硬直した。

「…… あの光もお兄さんの作った物の効果なんですかー？」

「クラウ・ソラスと呼ばれる光の剣だ。鞘から抜けば、光で敵を眩惑する力を持つ。」

矢に改造してるから少し質が落ちているが」

オリジナルならAランクだが、アレはB・ランクぐらいだろう。」

「それで、治療を終えたはずなのに何故倒れたのかしら？」

「…… ある程度は治ったが、完治は出来なかったからだ。」

クラウ・ソラスほどの武器を投影したら七日は寝込むことは分かっていた。

それに安定のために、あと二日は魔術の使用を控えなければならなかったしな。

三日も延びたのはそのせいだろう。」

淡々と事実を述べた俺に、

「土郎、二度とこんな無理はしないで」  
感情を押し殺した華琳が言った。

「私もこんな無理はそうそう」「それを“あのぐらいの無理”と言う  
あなただから、  
釘をさしているのだけれど?」「……」

まあ、使うべき状況で、死なずに済む範囲の無理なら間違いないくす  
るが。

死ぬ範囲の無理は限界ぎりぎりまではしないだろう。

「……そないなに今まで無理をしてきたん?」

「……以前言っただけ私には心が壊れていると」

霞への俺の返答に皆が黙り込む。

「昔の私は今よりもそれがひどくてね。……自分の命を軽視するど  
ころか、

自分の命の価値を無意識の段階で“除外”していたからな」

「……どういう意味なんだ?」

秋蘭の問いに、

「……昔の私は“自分の命”より“見ず知らずの他人の命”の方が  
重いと、

無意識に判断してしまっていた」

そう俺は答えた。

「……ホンマなん?」

「ああ。今でも本質的には直っていない。なんせ、無意識の思考な  
のでね」

真桜への返答は真実だ。

俺は自分の命を大切にしているのではなく、【約束】を大切にしているのだから。

……自分の歪みをきっちり認識してもらっておいた方がいいだろう。

俺は具体例をあげることにした。

「実際、そのころは自分の意思で毎日魔術の訓練をして死にかけていた。

人助けの延長で心臓を貫けられたり、腹を半分抉られたりもしたな。周りに優秀な者達がいたから九死に一生を得たが」

俺は淡々と事実を述べる。

「……士郎、あなたが私に仕えている以上はあなたの命は私が預かっているの。

覚えておきなさい！二度と勝手な無理は認めないわ！

あなたが自分の存在を軽視しても、私たちはあなたの存在を重視しているのよ！」

華琳の言葉が胸に響く。

かつて言われた言葉が脳裏によぎる。

【シロウが自分の死がどうでもよくても、私には何より重いんだから！

……こんな無理はもうしないで】

……全く。俺は本当に成長しないな。

分かっていながら、それでも同じことを繰り返すのだから。

「ああ。ありがとう、華琳」

俺は心からの笑みを浮かべていた。

「！？べ、別に当然のことを言っただけよ！」

顔を赤くした華琳に周りから暖かい目が向けられた。

「そ、それよりも、土郎！今後は戦争で干将・莫耶以上の武器の使用は認めないから」

……確かに華琳の風評も考えれば使うべきではないな。

光・螺旋剣は眩惑の力により、放たれた位置の正確な場所は分からないはずだ。

かなり、目撃例にばらつきが出るはずだから、いくらでも誤魔化せるだろうが。

「了解した。華琳の部下である限り、人に干将・莫耶以上の武器を使用しない」

「後、今回無理をして皆を心配させた責任を取ってもらおうよ。」

……それと今後は勝手な責任の取り方は認めないからそのつもりでいなさい」

まあ、責任を取るといって無理をしたんだから当然か。

「それで隊長にどんな責任を取らせるのー？」

「私はあの唐変朴の厭味な口を永久に閉ざしたいんですが……」

それは死ねということか、桂花？

「そうね、それ採用しましょう」  
「な!？」

どういう意味だ!？

「今後、士郎は私たちの前では、厭味な口調や慇懃無礼な態度を禁止するわ。

ついでに、“私”という一人称もね」

「……本気か？」

「ええ。今からそうしてもらおうから」

……周りを見回すが……全員興味深々で、援護は期待出来そうになり。

「……分かった。今後はそうするし、呼称も俺に変える。これでいいか？」

まあ、完全には難しいけどな」

……なんせ十年以上続けてきた、口調だ。

逆に本来の口調は十年以上まともに使っていない。

「悪くないと思います」

「素直なお兄さんですか!。まあ、髪の色も変わったことですし、丁度良いのではないかと」

「ふむ。確かにそうですね」

仲良し三人組2を初めとして、皆も納得したようだ。

「それでは、病人であることだし、皆も解散しなさい」



こうして、皆が去った……のだが。

「それで、華琳はまだ何か用が残っているのか？」

「ええ」

そう言っつて、少し動きを止めたが……、華琳は俺の頭を抱きしめた。

「な……？」

「……」

俺は戸惑い、こんなことをする理由を尋ねようとしてが、

「……土郎、ありがとう。おかげで死なずに済んだわ」

そう行動の意味を伝える華琳によって沈黙した。

「どういたしました」

そのまましばらく二人は動くことはなかった。

これは正義の味方が戻った一幕

## 正義の味方の療養記録

今日は朝日ではなく、雨の音で俺は目を覚ました。

起き上がろうとして、体の反応の鈍さに顔をしかめた。

「……………そういえば、無理のついで上手く動けないんだっとな」

現在の俺は魔術回路が焼けついたことにより、一体化していた神経に悪影響が出ている。

体の反応が鈍いどころか、両手が全く動けずいる。

そんな状態であるため、数日は部屋で安静にするとともに、周りが暇を見つけて看病してくれることになった。

……………のだが、

「……………ひどく嫌な予感する」

そして、この類の予感が外れることはほとんどない。

俺はその思考を強制的にカットして、横になった。

……………今の俺に対処する術はないのだから。

朝食

「士郎!」

朝一番の来客は春蘭だった。

後から秋蘭、季衣、流琉が入ってくる。

「おはよう。朝から元気だな」

「それはそうだろう。姉者の長所だからな。それからおはよう、士郎。」

まあ春蘭は華琳か秋蘭が関わらない限り、落ち込むことなどないからな。

「兄ちゃん！おはよう！」

「おはようございます、お兄さま」

二人にも挨拶した所で、現実から目を背ける訳にもいかず、春蘭に尋ねた。

「……それで、春蘭が両手に持っているのは……【春蘭が作った】杏仁豆腐なのか？」

そうではないことを祈ってた俺に、

「その通りだ！以前に秋蘭も流琉も美味いと褒めてくれた特製の杏仁豆腐だ！」

感謝してありがたく食べるように「無残な現実が待っていた。」

何故、朝から杏仁豆腐なのか？何故、杏仁豆腐だけなのか？

何故、ひと抱えもある器に大量に持ってきたのか？

などの問題はある重大事から比べれば些細なこと。

……俺は知っている。

あの二人が必死でそれを完食し、その後医師の世話になっていたことを。

……青ざめた顔で横になる彼女たちの姿が脳裏に思い起こされる。

「わ」「さあ、遠慮なく食べるがいい。さっさと元気になってもらわんとな」「……」

勢いに押されそうになるが、必死で抵抗する。

「両手が動かないんだ。後で侍女に頼んで食べさせて貰うよ」

春蘭が去った後、侍女にコレを処分してもらおうと考えていたけど……。

「む、……仕方がない。士郎、口を開け」

春蘭がソレをレンゲで掬い、俺の口元まで持ってきた。

……男なら喜ぶべき状況なのだろうが……そう感じる余裕は今の俺にはない。

「（士郎）」

「（お兄さま）」

ふと、秋蘭と流琉が無言で口を動かしている。

「（私たちが作ったのとすり替えている）」

「（だから、安心してください）」

読唇術で把握した内容に安心し、……ソレを口にしてしまった。

「（！< ;、 + ・ t ? # s ! ? ! ? )」

俺は声にならない声を上げていた。

な、なんだこれ！？  
泰山製麻婆豆腐並みの辛さと、絶対値の同じ甘さが一緒くたになっ  
て襲ってきたぞ！？  
食べた後に残ったのは背筋が凍るような悪寒。

「どうだ？より美味くなるようにいろいろ改良したんだぞ」  
「……衝撃的な味だった」

そう、この世すべての辛味と甘味を混ぜて混沌を作ったかのような  
素人の改良は改悪だとういう実例だろう。

「そうだろう」

得意げな春蘭の横で二人が戸惑っている。

「（……まさか、あれは姉者の！？）」  
「（けど、確かにすり替えて……）」  
「あれ美味しいんだよねー」

季衣の何気ない言葉に二人は即座に反応した。

二人は季衣を部屋の隅まで引っぱり、詰問する。

「（どういうことだ？何故美味しいと分かる？）」  
「（季衣、春蘭さまに聞こえないように小声で答えて！）」  
「（さつき、厨房にあったのを食べたからだよ。）  
二つもあったから片方なら食べて良いかと思って）」

つまり、季衣が秋蘭たちがすり替えように作ったのを食べてしまい、  
すり替えたはずのが俺に回ってきたと？

二人は悲しげな光を目に浮かべ、黙って首を振った。

……つまり、諦めて完食しろと？

二人はこちらの心を読んだかのように首を縦に振った。

「さあ！どんどん食べる！」

……食べ終わった後、昏倒した。何故か道場の夢を見た。

ちなみにこの時俺は体温が三十三度に下がり、青い顔で『トラが……トラが……』とうなされていたそうだ。

午前

「さつさと元気になりなさいよね！あなたの仕事をいつまで肩代わりさせるつもりよ！」

来て早々、桂花は文句を言ってくる。

まあ、悪いとは思うが……もう少しましな対応をして欲しいところだ。

……期待はこれっぽちもしていないが。

延々と毒舌な文句を続ける桂花を止めるべく、

「華琳の寵愛を一身に受けている、桂花だからこそ華琳は桂花に試練として任せたのかもな」

俺は桂花をそう持ち上げて終わらせようとした。

……結果は悪化した。

「そう！私は華琳さまから　をしてもらい、×××をさせて頂いているわ！」

こんなこと私にしかしていないはず！」

延々と禁止用語のオンパレードが一刻続いている。

……どうやら自己陶醉に浸り切り、こちらの声が一切聞こえていないようだ。

というか、俺の存在を忘れているな。

「桂花？いつまで油を売って……」

「今度は　を華琳さまに　してもらって……」

稟が桂花を連れ戻しに最悪なタイミングで現れた。

「ぷ」

「っ！」

……まるで噴水の如く噴き出す鼻血の行く先は……。

「凜ちゃん？どうしたのですかー？おおっ！？」

風が見た状況はずいぶんとカオスだったろう。

未だ、自分の世界に行きつぱなしな桂花。

未だ桂花の妄想のせいで鼻血を噴き出し、部屋に鮮血を散らす稟。そして……。

「……風。侍女と衛生兵と着替えを頼んでいいか？」

鼻血で全身を真っ赤に染められた俺は言った。

〔昼食〕

「お見舞いに来たでー！」

「ふむ？少しやつれているような？」

霞と星が昼食を持ってやってきた。

「まあ、いろいろあって」

……看病という名の事件がね。

「それより星が作った手料理を食べてみい！めっちゃ美味しいで！」

「味には自信がありますな。なんせ、自慢の一品を使用しているのですし」

……まさか？

「さあ！とくとご覧あれ！」

メンマ粥だった。

メンマが七に米が三と随分アンバランスだが。

この場合、粥メンマの方がいいか？

「……星の個性が良く出た料理？だな」

「ちょっと引つかかる言い方ですが、とにかく食べてください」

レンゲで搦われ、差し出されたので俺は食した。

「……確かに美味しい」



「そつでしようとも！」

満足げな星だったが、病人に出すような食事ではないと思うな。

「飲み物を頼んでいいか？」

味が濃いのでそのまま食べ続けるのは辛い。

「はいよ」

「ありがとう」

霞が口元に持ってきたソレを口にして、むせた。

「これって酒！？しかも凄い強い！」

「酒は百薬の長といますからな」

「どうや？秘蔵の酒やで。好きやろ、酒」

……嫌いではないが……《春蘭特製・暗刃倒腐》でブローケンした  
胃が……

耐えきれない……ようだ。

俺は本日二度目となる昏倒をした。

……道場の夢とトラのうわ言は今回もあった。

〔午後〕

「隊長、見舞に来ました」

「具合はどうなのー？」

「師匠、何かやつれてへん？」

仲良し三人組1が見舞に来た時、衛宮士郎は寝込んでいた。

「トラが……トラが……」

三人は寝込む士郎を覗きこむ。

「うなされてますね」

「なんか微妙に内装が変わっているのー」

「ここは寝させておいてあげた方がええな」

実際、これまでの看護が逆効果になり続けていたのだから英断だった。ただ……。

「そこで、目を覚ました時のためにこれを置いていくで！」

真桜が持ってきたこれさえなければ……。

「なんなの、それー？」

沙和の問いにその名を告げる。

「全自動看護力ラクリ成明守や！こいつが私たちの代りに看護してくれるで！」

「……大丈夫なのか？」

「当たり前や！そこまで複雑な事はさせんし、動力の伝達も問題ないんやから」

風の疑問に答える真桜は、沙和がカラクリの傍にっているのに気

付かない。

……影に隠れて見落とされた血痕が沙和の足もとにあることにも。

「きゃ」

それを踏んで転ぶ沙和は倒れまいとカラクリに手を伸ばした。

そして……派手に両方倒れた。

おかしな具合に倒れたカラクリから煙が噴き出した。

「……ん？なんの騒ぎだ？」

目を覚ました士郎は……三人もろともカラクリの爆発に巻き込まれ、目を覚ましてから三秒で再び昏倒した。

道場+トラも三度目となった。

〔夕食〕

「……うう。俺は？」

気がつけば夜になっていた。

……なんか途中で目を覚ました気がしたんだけど。

「め、目を覚ましたようね」

華琳が傍で看護してくれていたようだ。

……それにしても、華琳が食べるなんて珍しい。

何か口元を押さえているけど？

「何かあったのか？」

「な、なにもないわよ！それより、具合はどう？」

自分の体を確認する。

「回復量と被害量で差し引き零。朝の状態と同じだ」

「そう……。ごめんなさいね。あの子たちも悪気はなかったんだけど」

「それは良く分かっている。それに懐かしい人に再会した夢を見れ  
たし、

それで帳消しということだ」

ただ懐かしい人に会ったという事を漠然としか思い出せないが、それでも嬉しかった。

……何故か酷く疲れた気もするが。

「ありがとう。ふふ、それじゃあ夕食を食べる？」

「ああ。もちろん」

まともな食事を取らないとな。

華琳の作った絶妙な粥を手ずから食べさせて貰った後、寝るまでの間、  
華琳と穏やかな時間を過ごした。

これは正義の味方の療養記録における一日である。

### 第十三話：正義の味方の暗躍活動（前篇）

俺が目を覚ましてから数日が過ぎた。

とりあえずは日常生活が送れるくらいには回復したが……。

「……戦闘が出来るくらいまで回復するには、あと一月といったところか」

魔術の使用は悪化に伴うエラーの拡大で不可、さらに体の反応は相変わらず鈍いままだ。

「「「「……「「「「」

部屋に入ってきた華琳、秋蘭、季衣、星が何か珍獣を目撃したかのような表情を浮かべた。

「どうかしたのか？何もおかしい物はないと思うけど？」

俺は動かしていた筆を止め、尋ねた。

「……士郎？何をしているのかしら？」

「……療養してると思っていたんだが？」

「……兄ちゃん……仕事をしするように見えるんだけど？」

「……流石にこれは援護しかねますな」

どうやら仕事をしていたのが気に入らなかつたらしい。

今日の朝、ようやく腕が鈍いながらも動くようになったから、久し振りに仕事をしていただけだ。

「それがどうかしたのか？」

俺は皆が気に入らない理由が分からず尋ねた。

「どういたもこうしたもないわ！横になっっていないのはともかく、病人が仕事をしているのはどう考えてもおかしいでしょう！」

「なんでさ？体の反応が鈍いだけだぞ？やれることがあり、やることができるんだから、

自分で出来る事で、出来る場合だけ引き受けるだけだし」

“無理”はしていないしな。

別に体を酷使しているわけでもないのだから、怒る理由が分からない。

「……一郎。まさか、いつもそうなのか？」

秋蘭の言葉に、

「そうだけど？」

過去を思い出しながら言った。

「……兄ちゃん、誰にも怒られなかったの？」

「昔、風邪を引いていたのに店番をした時は、後でばれて叱られたけど……」

今回はそこまで酷くないから問題ないはず。

「……成程。一事が万事とありますが、

どうやら一郎の歪みの根は想像以上に深いようですね」

呆れ顔で星が言った言葉に、

「見張りが必要ね……星、頼んで良いかしら？」  
華琳はそう言った。

「まあ、文官達には荷が重いでしようし仕方ないでしょうな」  
自分の意思とは無関係に何かが決定していく。

「……まさか、馬騰との戦いに星を置いていくつもりか？」

先日、華琳は西涼を治める馬騰に降伏するよう交渉を出したが、  
『己は最後まで漢の臣である』と拒否されたのだ。

放っておいては劉備や孫策と連携される危険性がある、というより  
間違いなく連携する。

……そういつた決め手を見逃すほど二つの軍勢は甘くない。  
そこで今の内に対処することになったのだ。

「星一人の穴なら問題ないわ。それよりあなたが無理する方が問題  
よ」

「無理なんて「一般常識ではあなたは無理しているの！  
あなたの自分への判断は当てにならないわ！」……」

誰か援護してくれないか他の三人を見るが……。

「士郎。華琳さまの言う事は当然だ」

「兄ちゃん、自分を疎かにし過ぎ！」

「誰が見張ってないと、皆が不安になるので諦めて頂きたい」

……四面楚歌だった。

「そういうことよ。病気が完治するまで療養していること。いいわ

ね？」

「……………分かった」

こうして星と共に城に残ることになった。

華琳たちが出発した日の夕刻のこと。

「衛宮さま」

兵の一人が部屋へ訪れた。

「どうした？」

「華陀と名乗る医者が衛宮さまに会いたいと」

なんだって!？

「すぐに通せ！」

「はっ！」

治療後にすぐ出発してしまって、別れの挨拶もろくにしなかったからな。

それにしても……………随分とタイミングがいい。

「……………士郎。華陀とはもしや」

「ああ。天下の名医だ」

俺の傍で酒を飲みながら聞いていた星の問いに答えた。



そして、凱我が来た。

「士郎！思ったより元気そうだな！」

「あの時は急に飛びだして行ってすまなかった」

頭を下げる俺に、

「いや、気にしなくて良い。……それに俺も士郎に謝るべきだろう」  
華陀はそう言った。

「どづいつことだ？」

「……ここに来る前に劉備の軍と会い、怪我人を治療をした。……  
呂布もな」

その言葉に、

「なんだと!？」

星が反応した。

「彼女は？」

「俺と同じく華琳の部下で趙雲だ。……星、とにかく落ち着け」

まあ無理も無いだろう。

なんせ、呂布に俺たちは痛い目に遭ったのだから。

「凱我、謝ることはない。医者として当然のことはしたただけだろう  
?怒る筋合いなどないさ」

「ありがとう、士郎」

星も落ち着いてくれたようだ。

「すまなかったな。確かに士郎の言っ通りであろう」

「ありがとう、趙雲。君も謝る必要はないさ。責めらるのは慣れて  
いるし、覚悟の上だ」

凱我らしい返答に、

「……貴殿は士郎によく似ているな」  
そう星は答えた。

「それは嬉しい褒め言葉だな」

……そうストレートに返事されるとこっちが困るんだがな。

「それで呂布の治療はどうなったんだ？」

これは聞いておかなければな。

「骨折、筋肉断裂、出血多量、胴体部の二本の刀傷と酷い状態だっ  
たが……、

回復力が尋常ではない。普通なら二度と戦えないだろうが、  
彼女なら三か月もあれば復帰するだろう」

……本当に人間なんだろうか？

人外存在と言われた方が納得できる。

星も驚いているようだ。

「……士郎にしろ、呂布にしろ出鱈目ですな」

一緒にしないでほしい。俺は“鞘”という種も仕掛けもあるの  
だから。

「凱我、すまないが治療を頼む。無理をした後遺症で、神経が麻痺した上、

凱我の治療の成果まで悪化してしまった」

「分かった！任せてくれ！」

そして……。

「では、行くぞ！我が身、我が鍼と一つなり！一鍼同体！全力全快っ！必察必治癒……」

病魔覆滅！でええええええええええいつ！」

打ち込まれた鍼から暖かい気が流れ、全身を巡った。

「どうだ、士郎？」

「体は完全に動くようになったみたいだ」

柔軟運動で確認しながら言った。

「さて、もう一つも確認しないと。同調・開始《トレース・オン」

魔術回路・エラーの現在状況

魔術回路……負担率190%、

宝具投影……可能（真名解放なしで効力を発揮する物は不可、

ただし干将・莫耶以外の宝具投影後は24時間魔術使用不可

宝具の真名解放……不可

全投影連続層写……不可

壊れた幻想……限定的に可能（宝具以下の武具限定）

強化……可能（効果は15秒のみ、また使用のために1分30秒の無防備での集中が必要）

解析……可能

その他の魔術・固有結界……使用不可

……前回の凱我の治療前以上、治療後以下といったところか。  
負担率は減ったが、エラー内容が微妙に変化・増大したようだ。

「まあ、事故の後遺症は仕方ないな。それより凱我、頼みがあるんだが」

「何だ、士郎？」

俺は数日前の華琳の言葉を思い出す。

『士郎、私は馬騰と会うのを楽しみにしているの。』

おそらく、私に降伏しないと思うけど、馬騰ほどの将と戦うのも楽しみだしね。

会って会話したいわね』

そして春蘭の言葉も。

『どうやら馬騰の病はかなり厳しいようだ。顔色も悪かったしな。あれでは反董卓連合に直接参加できなかったのも仕方あるまい』

俺の知る限りの馬騰の情報から分析すると……一つの懸念が浮かぶ。

「治療してもらいたい病人がいるんだ。しばらくつきあってもらえないか？」

「なんだ、そんなことか。もちろんだとも！病人を治さない医者などこの世にいない！」

凱我にこのタイミングで再開し、

俺が療養のために華琳たちと別行動がとれるのも運命かもしれないな。

「…… 士郎、華琳さまの言葉を忘れていませんか？」

「『療養していること』だったな。だから、温泉にでも療養に行くさ。…… 西涼のな。」

街で留守番してるとは言われていないからな。

「!?!? …… もしや、その病人とは……」

「かの人物は随分と誇り高いらしいからな。」

敗北したら病気のせいでの外的に『死んで責任を取る』、あるいは『辱めを受けないため』などとふざけた考えをする可能性がある」

為政者がそんな形で自害するなど俺は認められない。

…… それに…… 華琳は間違いなく悲しむ。

「…… 私がそれで納得すると?」

「星…… ダメか?」

ダメなら…… 場合によっては強行突破するしかない。

「…… やれやれ、仕方ありませんな。その代わり条件がありますが?」

「行動に支障がなければ認める」

それぐらいの譲歩は当然だな。

「一言は『ごらん?』」

「ああ」

その言葉を聞いた星が……物凄く嬉しそうな笑顔を浮かべた。

それを見た俺は……背筋が凍るような悪寒を感じた。

本能的に体が逃げようとする。

逃げちゃダメだ、 逃げちゃダメだ、 逃げちゃダメだ、  
逃げちゃダメだ、 逃げちゃダメだ、 逃げちゃダメだ、  
逃げちゃダメだ、

逃げちゃダメだ……！

嫌な予感が最大級の警報を鳴らす中、本能を理性で抑え込む。

「我ら……特に士郎は有名ですから、

……これで正体を隠し相応しい行動をするのが条件です」

懐から取り出したのは……忌まわしき蝶の仮面、しかも二つ。

「……………」

この時の俺の顔は酷く歪んでいただろう。  
嫌な汗が頬をつたう。

「……………これをか？」

「これをです」

僅かでも可能性がある限り足掻くのみ……！

「凱我はいいのか……？」

普通ならこのデザインは受け入れられぬはず！！

「いいが？なかなか良い仮面じゃないか」

……普通ではなかった。

「ほう！この仮面の素晴らしさが分かるとは！どつやら仲良くなれそうだな。

私のことは星と呼ぶといい」

「分かった、星。俺のことは凱我と呼んでくれ」

……退路は断たれた。

「この仮面の性能は良くご存じでしょう？」

「……ああ」

確かに今回の活動では認識阻害の力は重宝する。

それをつけるだけなら問題はないが……。

「では決まりですな。今回の旅路において我らは《華蝶連者》として活動することになる。

よって……それにふさわしい振る舞いをしなければなりません。

新たな仲間も増えたことですし、いろいろ決め直さなければ……」

……悪夢再来……。

療養のためにしばらく天然の温泉で療養してくることを城の者に告げ、出発した。

張り切る二人と疲れ果てた一人が西涼へと向かう。

こうして、3人のセイギノミカタが暗躍する。

「……………成功だ。

く、くくくっ！そうだな、これは曹操が馬騰の城に踏み込む直前に  
けしかけるとしよう。

さて、どれだけ抗えるか見せて貰うとしよう」

男は全身に隙間なく長く鋭き針を生やしたソレを見つめて言った。

暗躍するのは正義の味方のみならず……………



正義の味方の暗躍記録(前書き)

……短いデス。すいません……。……。

## 正義の味方の暗躍記録

「はっ！」

俺は二キロ先のゴロツキを陶器製の矢で射抜く。

……本当ならただ村人を脅すぐらいしかせず、出来そうにない者に使う必要はない。

その場へ駆けつけ伸せばいいのだから。

だが、今は出来る限り目立たないようにしなければいけない。  
隠密活動中なのだから。

「弓華蝶！また《華蝶連者》としての活躍の場を奪ったのか！？」

……断じて、《華蝶連者》としての醜態を晒したくないからではない！

衛宮士郎はそう内心で言い聞かせる。

……自己欺瞞以外のなものでもないが。

「……わざわざゴロツキ程度に見せつけるほど、安い俺たちでは無いと思うぞ？」

「それはそうだが……すでに三度目だぞ！？本当にゴロツキだったのか！？」

「紛れもない事実だ」

そう、本来ならこれで三度も目立つ（醜態をさらす）所だった。

一回目は盗賊が商隊を襲おうと待ち構えていた時。

二回目は猛獣に襲われそうになっている子供を助ける時。

この二回は急を要するからと説明（誤魔化）して納得させた。

復活した超遠距離狙撃を利用して、星が視認しないうちに対処すること成功している。

極力このまま行ってみせる！隠密活動を成功させる（名のらずに済ます）ためにも！

「ねえ？」

足元で引っ張る子供達。

「どうして仮面を付けてるの？」

無邪気な子供の何気ない疑問が……心に刺さる。

……ずっと遠巻きにひそひそと不審者を見る、

一般市民の皆さま方の痛い視線を気にしないようにしていたのに。

「正義の味方は仮面を被るものなのだよ」

星がいたいけな子供に碌でもないことを吹き込むのを見て、

「このお姉さんの素敵な趣味なんだよ」

やんわりと俺は訂正することにした。

というか、“これ”が正義の味方のデフォルトなどとは、世界が認めても俺は認めん！

「……弓華蝶」

「真実だろっ？」

一応世辞も含めたことで、星を納得させることに何とか成功。  
……それにしても、出来ればその呼ばれ方も何とかしたかった。  
……完全に手遅れだが。

「お母さん？どうしてあの人たちがおかしな格好をしているの？」  
「（しっ！きつと旅芸人なのよ。いきますよ）」

……名乗りを封じても……村にいただけで精神ダメージが……。

「物資の補給は済んだよな？」

俺は街から一刻も早く退去すべく、凱我に確認の問いをした。

「ああ、もちろんだ。それにしても星は凄いな。

俺も旅をして回っているから詳しいつもりだったんだが……こんな行き方があったんだな」

「少人数だからこそ使える裏道だ。

この調子なら華琳さまたちの軍を追い抜いていてもおかしくなからう。

それと、今は星華蝶だ。気をつけてくれ凱華蝶」

星の言うとおりだ。そしてそれは自軍、あるいは敵軍との遭遇の危険性を意味する。

「そうか。……少し、荒事をするかもしれないが凱……華蝶は治療だけしてくれればいい」

……華琳たちの援護を場合によっては、しなければならぬ。

そして、人殺しは医者である凱我には許容できないことだろう。

「……すまない、弓華蝶」

「当然の気遣いだよ。無理を言っただけで付いて来てもらっているのは、こちらなんだから。」

それより、すぐ出発しよう」

これ以上の疲労を防ぐためにも！

こうして三人は馬騰の本拠地への旅路に行く。

数刻後、俺たちは溪谷の前で足を止めた。

「……星……華蝶、このまま行くと両軍に挟まれる危険がある」

ここに来る途中で華琳たちを目視したからな。

「迂回するととなると数日は……」

数日か……。

「馬騰の城に忍び込む機会を見極めるためにも、出来れば余裕を持っておきたいけど」

「それなら俺に任せろ！」

大きな入口に入らず、崖に沿うこと半刻、

途中の森の中にある横幅三メートルほどの小さい道に着いた。

「地元の者ぐらいいしか知らない道だ。治療のお礼に教えてもらって

な」

情けは人のためならず、か。

ちなみに、この道を選んだ選択は良くもあり、悪くもあった。

「……悪いが見られたからには、捨て置けんな」

良かったのは、華琳たちへの奇襲の準備をしていた涼州兵と遭遇したこと。

どうやら崖の上から岩などを落とすなどの行動をするつもりだったようだ。

彼らを倒しておけば、華琳たちも少しは楽になるだろう。

悪かったのは……曲がり角や急な斜面などが原因で見通しが悪かったため、

敵に気付かず百メートルで遭遇してしまったこと。

「天知る、神知る、我知る、子知る！」

……つまり、名乗りを潰せなかったこと。

星の名乗りに続いて、俺は台詞を続ける……。

「……ぼうりやくのれんげの咲くところ、せいぎのかちょうの姿あり」

以前のトラウマのせいで、俺の台詞は完全な棒読みになった。

「正義の華を咲かせるために、未来という華を守護するために！」

……ノリノリだな、凱我。

「星華蝶！」

「……弓華蝶」

「凱華蝶！」

……微妙に台詞が変わっているが、恥ずかしさは変わらない。

「三人揃って……」

「「華蝶連者ただいま参上」！」

三人になったので変更された【カツコイイK・A・M・A・E3】  
で締める俺たち。

……ますます凝った（恥ずかしくなった）な、これ。  
敵の皆さんを感動（思考停止）させるほどだ。

「……旅芸人か何かか？芸を見せた所で、見逃しはせんぞ」

小隊長らしき人物が感動（思考停止）から意識を復帰させたようだ。  
……まあ、普通はそう思うよな。

「……悪いが機嫌が悪くてね。……少し八つ当たりさせて貰おう」  
名乗る（精神ダメージの）原因となった連中に陶器製の矢を放つ。  
放った三本の矢は前列の3人の額にぶち当り、砕けた。

狭い道であるが故に敵は数の利を活かせないのだから、手加減可能  
と判断した結果だ。

「き、貴様ら……全員、退避！」

敵小隊長は即座に決断した。

ちっ！どうやら予想以上に訓練された部隊のようだ。

小隊長が俺の放った敵意から俺の強さに気付いたことと、

部下の兵が命令にすぐ反応し全力で逃走に入ったことがそれを証明している。

……敵意を殺しきれなかった俺のミスだが。

本来なら少し逃げたぐらいでは逃げられないが、

見通しの悪さと騎兵の速さなら逃げきれぬだろう。

だが、

「ぐっ、か体が……！」

視界から消える前に敵兵たちは崩れ落ちた。

「二人とも、しばらく動かないでくれ。……薬を撒いた」

……流石は医者と言った所か。撒いたのは麻酔薬の一種か？

風上だったから使用できたんだろうけど、よくそんな物を作れたものだ。

五斗米道恐るべし。

「……それは大量に作れる物なのか？」

「いや、作るための材料と手間から無理だろう。……そろそろ大丈夫だ」

そこまで都合良くはいかないか。

俺たちは敵兵たちを縛りあげ、気絶させた。

「さて、彼らをどうするか。捕虜にするのは無理だし放置するしか



ないか……、  
いつそ、ここで会ったことを忘れさせられれば……」

そんな都合の良い方法など……。

「分かった！それで行こう！」

……真剣でか！？

「……何でも在りすな、凱華蝶」

星の言葉に全面的に賛成だ。

「我が五斗米道に不可能はない！」

まあ、俺をまだ完治できないけど。

「では行くぞ！我が身、我が鍼と一つなり！今ここに全ての力をもつて、記憶を戒めん！」

一鍼同体！全力全戒！必察必注！……五斗米道おおおお！」

こうして凱我の活躍で穩便に対処が終わった。

「本来はその人の心を壊しかねないような記憶を封じるためのモノなんだかな」

なるほど。それは医療行為だな。

「それでは先に行こうか。彼らは放っておいていいだろう」

そして出発しようとした。

「あっ！」

「どうした星華蝶？」

「締めの名乗りが出来なかったではないか！」

確かに！ありがとう凱我！凱我がいてくれてほんっとうに良かった！

「済まなかった」

「凱我は謝る必要はないさ。どっちにしろ忘れるのだから関係ないと思うぞ」

むしろ、俺の心労が減ってプラスだ。

「……………次はきつちり全てこなしますぞ！」

……………止めてください。

これは正義の味方の暗躍記録における一日である。

### 第十三話：正義の味方の暗躍活動（後篇）

城を出て数日、涼州の村や街を通りかかるたびに、超遠距離狙撃で火矢を武器庫に撃ちこみながら暗躍を続け、現在の俺たちは涼州のある街に宿泊している。今後の動きを決めるために、作戦会議をしている真つ最中だったりする。

「ここしばらく、華琳たちは涼州連合の軍勢の夜襲に悩まされていたんだが、二・三日前から敵の夜襲が減っているようだ」

俺は千里眼のスキルで目撃した情報を告げた。敵軍はその機動力を活かして、連日ヒット・アンド・アウェイで夜襲を行っていた。

そのせいで、華琳たちは進行速度の低下や寝不足に苦しんでいた。

「その事なのですが、どうやら張三姉妹を導入することで解決したようですな。街で噂になってました」

黄巾党の首魁であった彼女たちは、華琳の援助の元で広報活動をしている。

それによって大量の人が自軍の兵に加わっているのだが……。

「この地で活動をしているということか」

「さよう。この地でも随分人気があるようでした。

それに稟を数刻前に目撃して密かにつけたのですが

……明日、自軍内での応援を頼んでました」

流石は張三姉妹といったところだな。

敵兵はライブに行ったり、それに気が散らされたりしているのだから。

夜襲を封じた以上、華琳たちが勝つのは時間の問題だな。

明日、張三姉妹で士気を上げて一気に勝負を決めるつもりだろう。騎兵対策を使えば勝負は長くかからないだろう。

「……問題は、凱……華蝶の秘薬がいつ完成するか、だな」

凱我は足りない材料を揃えに、

二・三日前から近隣の市場や森で材料集めをしていた。現在は秘薬とやらを知り合いの医者家で製作中だ。

「今戻ったぞ！」

「解毒薬は完成したのか？」

……それが無くては話にならないからな。

「もちろんだ！五斗米道のこの秘薬“ディスケエックス泥救越薬”は、いかなる毒でも破壊・無効とする！

さらにこの“ディスケピ泥救扉瘡”が弱った体を回復させる！」

……本当にチートだな、凱我。

「……良くそんな物が作れるな。材料は何か聞いてもいいだろうか？」

「いいぞ。人食い虎の肝臓、冬虫夏草、蓬萊の玉の枝、火鼠の衣、燕の子安貝、

蓮華の花、泰山の岩塩、一角馬の角、黄河の水、……」

……今、魔獣・幻獣の名が出なかったか？

「……孔雀の羽根だ。流星は涼州、五胡と接しているだけあって、普通なら手に入らない材料まで揃った。

本当は数種類の解毒剤を作るつもりだったんだが」

俺と星は苦笑する。

『……何でそんな物が売られているのか』、それが二人に共通する感想だった。

「ま、まあ後は忍び込む機会を計るだけですな」

「……この戦いの勝敗が着く少し前がやはり良いだろうな」

「……それしかないか」

……自害を図るとしたら、決着が着いて華琳たちが踏み込んだ時だからな。

……病気だけならこんな面倒な手を使わず、凱我一人で訪れれば良かったのだから。

「それでは明日に備えてしっかりと休まなきゃな」

翌日、両軍がぶつかりあう戦場から四キロ離れた地点で、俺たちはタイミングを計っている。

「……やはり、足場を悪くしたか」

敵の主力である騎馬隊は工作兵たちによって作られた溝やぬかるみによって、

その機動力を封じられた。

……騎馬を封じられた涼州兵は羽を折られた鳥のようなものだ。何とか退却しようとしているが……時間の問題だな。

「二人とも行くぞ！これ以上遅くなると手遅れになる！」

「了解！」

そして、城に忍び込んだのだが……。

「誰もいませんな？」

「……いや、向こうの方が騒がしい。他の誰かが先に忍び込もうとしたんじゃないか？」

……もし、凱我の言うとおりだとしたら……。

「まずい！馬騰の元へ急ぐぞ！」

すでに敗戦は確定している頃であり、そんな時に城で兵をかき集める事態が起きたとしたら！

魔術で城の構造を把握した俺を先頭に、馬騰の部屋へ急ぐ。

……ここまで侵入して一度も兵に会わないのが、事態の深刻さを示している。

全兵を集める事態なんて……イレギュラーにもほどがある。

馬騰の部屋に着いて見たのは……毒を飲んで倒れ伏している馬騰だった。



抉りこむように鍼は打ち込まれ、光が弾ける。  
馬騰の死人同然だった肌の色も瑞々しい輝きを持ち、平常の呼吸を繰り返す。

「治療完了！」

「お見事！」

「とりあえず……また自害されると面倒だから縛っておこう」

そうなつては苦勞が水の泡だからな。

「それなら……」

凱我は馬騰の鎖骨辺りに鍼を一刺しした。

「これで一時間は動けない。まあ、口は動かせるけど舌は噛みきれないから問題ない！」

「もう、流石に驚きませんな」

まあ、出鱈目さ加減はもはや分かり切っているからな。

「……………う……………うつつ」

とりあえず、馬騰を椅子の上にのせた。

「……………?ここは……………?」

「気がついたようだな。ここはお前の私室だ。毒で死にかけたお前を私たちが解毒した」

俺の言葉で全部思い出したのだろう。

馬騰は立ち上がるうとして、出来ないと気付くと舌を噛み切ろうと



した。

「な、何故体が!?!」

「自害をさせないため、細工をしたからだ」

俺は感情を押し殺して言った。

「ふざけんじゃないよ!?!」

「……逃げるのか?」

「……何?」

「お前は『己は最後まで漢の臣である』という想いから、この戦に臨んだ。

お前の我がままで民を兵を巻き込んだ」

「……ああ」

「……そこまではまだ許せる。

……自分も似たようなモノなのだから。

だが……。

「彼我の差が分かっているながら、我がままに民を巻き込んだのはま  
だいい。

僅かでも可能性は零ではなかったのだから。……問題なのは死に逃  
げようとしたことだ」

それが何より俺には許せない。

「……自害することで責任を取ろうとしたのが悪いというのかい?」

俺は馬騰の言葉に苛立つ。

「悪いさ。責任を取るだと？お前一人が死ぬことが責任を取ることだと？  
ふざけないでもらおう」

衛宮士郎の口調は平淡だったが……込められた怒りはかなりのモノだった。

「お前は今回の戦いで出た犠牲者たちの命と、自分の命が等価だと思っ  
っているのか？

そんな訳ないだろう。ひと一人の命はひと一人分の命の価値しかない。  
い。

ただ自害したところで責任など取れるものか」

人の命ほど人によって価値が変わる物はない。

ソレは人によつては塵より軽く、人によつては世界より重い。  
死んで取れる責任などたかが知れる。

「責任を取るのなら、生きて責任を果たせ。

生きて一人でも多くの民を、犠牲者の家族を助けるくらいしろ」

「私に生き恥をさらせと？」

責任を果たすなら当然のことだ。

「責任を取るといふなら我慢することだな。

責任を取らないとしても自害などするくらいなら最後まで足掻け。  
死ぬことなどいつでもできる。

せめて他者を巻き込んだのだから、最後までその信念を貫くくらい  
はしろ」

「……その通りだね。どちらにしろ、病で長くはないのだから責任  
は取れそうにないけど」

……そういえば言っていなかったな。

「病はそこにいる凱華蝶が治した」

「は？」

呆気にとられる馬騰に対し、今まで黙っていた凱我が説明する。

「馬騰どのの病は解毒した際に一緒に治療した。実際、心臓の痛みも消えているはずだ」

「……確かに」

まだ実感が湧いていない馬騰に、

「これで病は言い訳に使えなくなりましたな」  
意地悪そうに星が言った。

「逃げ場は全て塞がれたみたいだね」

苦笑しながら馬騰は言った。

「そついや、アンタたち何者だい？」

しまったー！！

「疑問にお答えしよう！天知る、神知る、我知る、子知る！」

馬騰の言葉に生き生きと星が名乗りだした。

……油断した。こうなってしまうていは仕方がない、……覚悟を決めよう。

「……カナシミノレンゲの咲クトコロ、セイギノカチヨウノ姿アリ」

……多分、歴史に残るくらいな棒読みだったことだろう。

「正義の華を咲かせるために、未来という華を守護するために！」

それにしても、よく平気だな、凱我。

「星華蝶！」

「……弓華蝶」

「凱華蝶！」

「三人揃って……」

「」「華蝶連者ただいま参上」！」「」

呆然としていた馬騰が俺をみた。

「……察してくれ」

「……苦労しているんだね」

……気の毒そうな視線が心に痛い。

……認識阻害がきつちり働いてくれることを祈ろう。

「ところで、あなたの部下たちはどうしたのですかな？一人も遭遇しなかったから、

反対側で誰かを相手にしていると思ったのですが」

「アンタたちじゃないのかい？」

……あれから随分と経つ。にもかかわらず、人の気配は……！？

「気をつける!!」

突然ソレは突っ込んできた

俺は傍にいた馬騰を抱え、横に飛び退く。

星も避けることに成功したが、凱我は交わし切れなかったようだ。

「凱我!!」

辛うじて防御に成功したようだが……腕がボロボロでも戦える状態ではない。

「貴様!はあああつ!!」

「よせつ!星!」

星が高速の連続突きを放つ。

「な!?!」

星の得物である槍“龍牙”が折れた。

星に追撃してきたソレを干将・莫耶で何とか逸らす。

双剣は罅は入らなかったものの、その堅き針の毛皮を貫けなかった。

ソレは全身にハリネズミの如き毛が生えた牛だった。

全身を血で染めていることから、兵はこいつが殺したのだろう。

……兵たちの生存は絶望的だろう。

「……窮奇だつて!?!」

馬騰の言葉で思い出した。それは中国神話に登場する怪物の一つ。

「よりによつて幻獣とは……」

時代が古ければそれだけ神秘が幅を利かせるのは当然だが……。

「しかも、宝具である干将・莫耶で切れないか」

このままここで戦うのは危険と判断し、

俺は黒鍵を投影・投擲して、窮奇を部屋の外へ吹き飛ばした。

「星！二人を守つて、避難してくれ！アイツは俺が何とかする！」

得物が壊れた星ではアレの相手は危険だ。

「くっ！無理をするなよ土郎！」

「……ああ」

悪いがそれは無理だろう。無理抜きで倒せるほど優しい相手ではなさそうだ。

中庭に出ると、窮奇は闘牛の如く突っ込んできた。

物騒なことこのうえないが。

俺は双剣で受け流しながら弱点を探す。

「……まさかマタドールの真似ごとをするはめになるとはな」

黒鍵によるダメージは全くないようだ。

死徒ではないのだから当たり前ではあるが。

再び突っ込んできた窮奇の額に干将を叩きこむ。

「くっ!?」

針がなかったはずの額から幾本もの針がいきなり生えた。

魔力を込めて莫耶で切りつけながら交わした。

窮奇の皮は少し傷つき、若干の罅が針に入ったが……。

「……新陳代謝が随分といいな」

罅の入った針が抜け、新たな針が生えた。

傷も少しづつ塞がっていき、治った。

「……このままでは倒せないか」

幸い方法はある。高位宝具なら斬り割けるはず。

だが……。

「……だが、厳しい」

突っ込んでくる窮奇を交わしながらでは、高位宝具の投影は無理だ。

現在の俺では三十秒間は無防備の集中が必要であり……、

「その暇はくれそうにないな」

相手にしないと、星たちを狙いかねないからな。

出来れば避けたかったが、華琳たちが来るのを待つしかないか。

そうすれば、状況は変わる。

そして華琳たちが来たことで確かに状況は変わった。

……悪い方向に。

人の足音がする。

華琳の声が聞こえた。  
ようやく来たか。

その時、高まる魔力を感じた。窮奇から。

「しまった!？」

そう窮奇は風神の類という伝承がある。すなわち風を操る。

今までその様子が全くなかったから失念していたが……初めから華琳を!？」

俺は華琳の下へと駆ける。不意打ちを食らってしまったら死ぬかもしれないのだから。

「これは……きゃっ!？」

俺はぎりぎりの所で華琳を突き飛ばし、襲い来るかまいたちから干将・莫耶で身を守る。

「がはっ!？」

三メートルほど吹き飛ばされ、仮面が砕けた。

……致命傷ではないものの、……相応の重傷だ。

干将・莫耶で魔術防御が上がっていなければ、

或いは仮面が無ければ死んでいたかもしれない。

「……痛い。いつたい……土郎!？なんでここに!？」

「土郎!療養中のは



「……悪いが説……明はあの風を……操る化け物を倒してからだ何!?」

華林と秋蘭は襲いかかってきたかまいたちを回避する。

「おのれ化け物!はっ!」

幾本もの矢を秋蘭は飛ばすが……、  
「なっ!?!」

窮奇の起こす風で全て外れ、窮奇を囲んでいた兵に当たった。

「はあああっ!」

風が矢に使われたタイミングで華琳は大鎌“絶”を振るう。

辺りに絶望の音が響く。

それは“絶”の刀身が砕けた音。

「そんな!?!」

兵たちは華琳を守ろうと窮奇の前に立ちふさがった。

だが……、

「うっわあああっ!」

「ぎゃああああ!」

次々と針で貫かれ、あるいは風で斬られ、あるいは食われた。

そんな阿鼻叫喚の中、無念の思いを押し殺し、衛宮士郎は自分の出来ることを行う。

創造の理念を鑑定し、基本となる骨子を想定し、構成された材質を

複製し、  
制作に及ぶ技術を模倣し、成長に至る経験に共感し、蓄積された年  
月を再現し、  
あらゆる工程を凌駕し尽くし  
。  
だが……。

「（……まずい……血が流れ……過ぎた）」

本来なら気絶する激痛の中、自分の始まりともいえる一つの剣を投  
影しようとしたが、  
いまだ制限がついた状態で、出血多量の身には無理があった。

意識が落ちかける中、俺の目に映ったのは駆け寄ってくる霸王と…  
…“折れた絶”。

《創造理念の一部を代用、基本となる骨子の流用》

抜け落ちた情報を無意識のうちに別の情報おせいで補った。

その手の中に生み出されかけながら、幻想から妄想に堕ちかけたそ  
れは、

現実へと昇った。

それは一つのささやかな奇跡。

まずい！ 士郎の手の中の輝きを見た窮奇は、  
壁となっている兵たちごと士郎に突っ込もうとしている！

私は折れた絶を手にしたまま、士郎を守ろうと駆け寄る。距離と兵たちの守りのおかげで士郎の元に辿り着いたが、窮奇がすぐ傍まで来ている。

「士郎！急いつ！？」

その手の中の輝きはいつの間にか確かな形を成した。

それは金色に輝く……黄金の大鎌。

私は咄嗟に士郎の手ごとその柄を持ち……襲い来る窮奇に振り下ろす。

私は、私たちは生きる！

暖かい手が俺の手を掴んだ。

襲い来る敵、共に武器を握る大切な人。

かつての光景が脳裏に浮かび、無意識にそれをなぞる。

魔術は使えなくとも、魔力は流せる。

魔力を帯びたソレは輝きを放ちながら……窮奇を両断した。両断された窮奇の遺体はまるで塵気楼のように薄れていく。

こうして想定外の大量の死傷者を出した惨劇の夜は幕を閉じた。

「こんな所か。思った以上の成果だが……、やはり奴が危険か……」  
「思々しい！」

男は吐き捨てるように呟いた。

「……念のためにも、幻獣の召還だけでなく、切り札を用意するべきか。」

……南蛮に行くでしょう」

これは潜んでいた黒き運命が僅かに牙を剥いた一幕

## 第十四話：正霸

俺が目を覚ますと、見慣れない部屋に主要メンバーが全員勢ぞろいしていた。

「士郎、何か言い訳はある？」

華琳の笑みと言葉によって、体の痛みを完全に忘れるほどの悪寒が走る。

文句と説教を言おうと思っていたら周囲のみんなも、一斉に引いた。

……生物なら当然の反応だ。

俺は自身の生存をかけて言い訳と謝罪を繰り返した。

……その一刻の間、重い空気が晴れることは無く、……前回の説教三刻より辛かった。

傍観者でしかない流琉が倒れるほどだ。……二度と味わいたくない。

「つまり、華陀の治療で体の機能が直ったけど、念のため療養を続けることにした。

西涼に来たのは療養のためと即座の合流のためであり、

あの場にいたのは不穏な空気を感じたためと？」

「ああ。まさか窮奇なんて化け物がいるとは思わなかったけど。

……窮奇の力を甘く見て、怪我を負ったのは本当にごめん」

華琳への返答は実が三、嘘が七。

……こういった事に関しては、真実を言えば良いというものではない。

……真実を言っただけで痛い目に何度もあった経験から学んだ教訓だ。

「……ふう。仕方がないわね。“とりあえず”納得してあげるわ。  
……華陀は自己治癒能力の促進をする特殊な睡眠法で眠ったままだ  
し、  
星は……」

華琳の言葉に皆が一つの方向を見る。

……そこには未だ部屋の隅で星が暗い空気を纏って座り込んでいる  
の。

龍牙がとか、正義の証がとか時折怨嗟込みで呟かれている。

「……隊長、星殿はどうしたんですか？中庭で何かの残骸を見てか  
らあの調子なのですが？」

「……星は得物と大切な品を同時に失ったんだ。今はそつとしとい  
てあげてくれ」

……見てみると罪悪感が湧いてくるな。それ以上に忌まわしきマス  
クから逃れられた開放感があるが。

……せめて、龍牙の修復を城に戻ったら最優先しよう。

「……それで、この城の生存者は？」

「……馬騰だけよ。あの場に居合わせた自軍の兵も半分は死んだわ」

「……そうか」

桂花の言葉は最悪の想像通りだった。

こういう時はいつも気分が沈む。

……自己欺瞞だと分かっている。

「士郎がいたからこの程度で済んだんだ。もっと胸を張れ」

「そうだな。ありがとう秋蘭」

「そついや師匠、あの鎌は何や？運ぼうとした春蘭さまを始めとして、

華琳さま以外誰も持てへんなんて」

真桜の言葉で思い出した。

……一瞬ではあるものの、これ以上ないほどに想像し創造した黄金の鎌のことを。

「……まだ残っているのか？」

「残ってるけど、どうかしたの兄ちゃん？」

季衣の言葉を横耳に流しながら、俺は思考する。

……エラーの解除で投影物の半永久的な現存が可能になったのは知っている。

だが、あれだけ咄嗟に改造された投影物が残っているとは……。

それだけ“絶”と“勝利<sup>カリバーン</sup>すべき黄金の剣”の相性が良かったのか。

……どちらも王のための武器という理念が共通していたからな。

……それに、それだけ俺が華琳を想っていたということか。

でもなければあの極限状態で、そんなことが出来るはずがない。

「兄ちゃんつてば！」

「ああ、季衣すまない。残っているのに少々驚いただけだ。

真桜、あれが持てないのはあれが“王”のための武器だからだ。

あれは王に相応しい者にしか持てないんだ」

そう元にした“勝利<sup>カリバーン</sup>すべき黄金の剣”は王を選定するための剣。

だからこそ黄金の鎌も王に相応しいものにしか扱えない。

……創った俺は例外だが。

「……これは士郎が創ったモノなのよね。にしては“絶”と同じくらいじっくりするわね」

俺の死角になる場所に置かれていた、黄金の鎌を華琳は持っていた。

「それはそうだろうな。半分は“絶”を元に創ったんだから」  
「半分？それじゃあ後半分は何で出来ているんですかー？」

風の言葉に俺は返答する。

「……“勝利すべき黄金の剣”。  
岩に刺された王を選定する剣で、勝利を誓う黄金の剣であり、偉大なる王が所持した剣だ」

その言葉に華琳一人が反応した。

「……それって」  
「華琳の想像通りだ。  
もともと、“勝利すべき黄金の剣”は彼女のための剣だけど、この鎌は華琳、君のための……霸王のための鎌だ」

“勝利すべき黄金の剣”がセイバーにしか相応しくないように、この鎌も華琳にしか相応しくない。

「名は何というの？」  
「……まだ決めていない。華琳が決めてくれないか？」

華琳は少し考え込んだが、決めたようだ。



「……“正覇”。正統なる覇道を進む信念と勝利の誓いを込めてその名付けるわ」  
「良い名だ」

皆が納得する中、星が、

「……私にも同じように武器を作ってもらえないだろうか？」  
そう言ってきた。

「すまないけど、正覇は例外だ。専用の武器を新たに創り出すのは本来は非常に難しい。」

普通に龍牙の修復と改良で我慢してくれ」

「……こちらこそ無理を言って申し訳ありません」

はつきり言って、世界の修正に耐えられるだけのモノを創れたのは奇跡に等しいだろう。

……もう一度同じことをしると言われても無理だと断言できる。

……宝具を投影して渡しても真名解放はおるか使用も無理だろう。

固有結界展開時なら自分のバックアップで武器としての使用だけなら可能だが。

「そう言えば士郎はどこで療養するつもりだったのかしら？」

「少し先にある温泉宿だけど……っ!？」

……華琳が悪魔の笑みを浮かべていた。

「それじゃあ、士郎が皆を不安にさせたお詫びとして、全額負担してくれるみたいだから、皆で行きましょうか」

「待て！まだ後始末

「それは星がやってくれるわ。何せ療養にここまで付き合ってくらい

仕事熱心なわけだから、  
それくらい問題ないわよね?」……」

……華琳の顔は笑っているが、目が全く笑っていない。

「し、承知しました」

こうして、密かに主要メンバーは俺の貯めた金できつちり楽しんだ。  
結果として皆の気分も軽くなり、俺の懐も軽くなった。

眼を覚ました凱我の治療を受け、ようやく温泉に浸かる事が出来た。  
皆は宴会をして酔いつぶれているので、一人静かに満喫できる。  
ちなみに貸切(俺の金で)なので一般客の心配もない。  
湯に浸かって満月を眺める。やはり温泉は良い。

「……随分嬉しそうね」

「っ!?!?華琳!?!」

いつの間にか華琳が背後にいた……全裸で。

「なんで!?!」

「あら、私が入ってはいけないとでも?」

俺は背を向けて必死で心を落ち着かせる。  
動揺してたら華琳に対処できない。

「いや、そんなことはない。男の俺が「私は気にしてないから問題

ないわ。

それよりこっちを向きなさい。人と話すときは相手の目を見るものよ」……分かった」

感情を制御して華琳と向き合った。

……初めて見た華琳のその姿は……想像以上に綺麗だった。

「あら、どうかしたのかしら？」

「……華琳が想像以上に綺麗だから、見惚れていた」

「っ！？そう、それは当然ね」

一瞬動揺したようだが、すぐ立て直したみたいだ。

「……ありがとうね」

「……何が？」

「馬騰のこと。……馬騰から聞いたわ。自害しようとしたことをあなたに叱られたって。」

……最初からそのために来たんでしょ？」

「偶然だ」

「名医を引き連れて偶然ね。……ひねくれ者」

「……褒め言葉だよ」

そうしてしばらく二人とも黙りこむ。

「……一郎、勝手に城を抜けだした罰を与えるわ」

……まあ仕方ないだろうな。

出来れば軽いものであることを祈ろう。

「分かった。内容は？」

「私にこの場で奉仕しなさい」

.....。

思考が完全に一時停止した。

顔を真っ赤にしている華琳を見て、再起動した俺はもう一度尋ねる。

「イマ、ナント？」

「私にこの場で奉仕しなさいと言っただけだ。」

まあ、馬騰の件が偶然ではないというのなら、罰の代りに褒美でもいいけど」

「.....偶然ではないです」

「そう。なら褒美として私がこの場で奉仕してあげる」

.....つまり、逃げ場はないと？

「さあどっち？」

「どっちも選ばなかったら？」

「つまり、どっちもということね」

そう言っつて、華琳は体を預けてきた。

「.....私とこういう事をするのはイヤ？」

僅かに華琳の体が震えているのを見て.....俺は受け入れた。  
答えはとうの昔に出ていたのだから。

ただ、自分でその事に気付いていなかっただけ。

結局二人は翌朝までその場を離れなかった。

これは正義の味方と霸王の秘められた一幕。

## 正義の味方の休日記録7

「士郎！料理を教えてください！」

涼州遠征から帰ってから数日後、春蘭が言ってきた。

「別に構わないが、急にどうしたんだ？」

春蘭の料理の腕は“暗刃倒腐”で身をもって知っている。だが、春蘭は気付いていないはずだが？

「……あと一月で華琳さまの誕生日が来るんだ」

「本当か！？」

だとしたら準備をしないと。

「それで手作りの料理を食べて貰おうと“これまでにない料理”を作ろうと思ったんだが、私では思い浮かばなかったのだ」

……すでに“暗刃倒腐”という“これまでにない料理”を作っているんだけどな。

「それで参考に士郎から異国の料理を習おうと思ったのだ」

なるほど。それで秋蘭や流琉ではなく俺に習いに来たのか。

……この機会に全力で春蘭の料理を矯正……いや、春蘭が料理を作れるようにしよう。

……あれは料理ではなくて毒物だ。

「分かった。それでは今からでいいか？」  
「無論だ」

こうして俺は春蘭の料理訓練をすることになった。

……後で自分の考えの甘さを痛感することになるとは気付かずに。

俺たちは厨房に行き、早速始めることにした。

「まず、これらの材料を切ってくれ」  
「うむ」

春蘭は包丁を大きく振りかぶり……包丁はその手からすっぽ抜けた。勢いよく放たれた包丁が空気を裂いて壁に当たった。

春蘭の背後の壁に根本近くまで刺さった包丁が威力を物語っている。

「……春蘭。包丁はしっかり持ってくれ。死人が出る。それとそんなに大振りしなくていい」

「い、今のはたまたまだ。今を含めて四回しか飛ばしていない」

「……今まで料理をした回数は？」

「四回だ」

それを人は“いつも”という。

春蘭は包丁を再び構え、食材を切った。

次の瞬間、それは俺の頬を掠め……壁に……突き刺さった。

俺の思考が停止しながらも本能的にテーブルの下に避難する中、春蘭は食材をどんどん切っつていき、食材がどんどん周りに刺さっつていく。

俺が思考を再開し、春蘭が材料を切り終わった時には周りは穴だら

けだった。

「……い、いつもこうなのか？」

……かすり傷一つで済んだことが驚きだった。

「そうだが？」

自分の成した行為に何の疑問も持っていないようだ。

……本当は切り方から教え直したいが、食材を無駄使いするわけにはいかない。

後で練習用の物を用意することを密かに決め、訓練を続ける。

「そういえば、火を使っているか？」

春蘭の言葉に戸惑う。

「火は料理の基本だろ？」

「いや、小さい頃に初めて料理したら、絶対に火を今後は使うなと親に言われたんだが」

まあ小さい子供が火を使うのは危険だから当然か。

というか、“暗刃倒腐”も火を使わずに作ったのか？  
俺が注意していれば問題ないだろう。

この時気付くべきだった。火を禁止された本当の理由を。

その後の料理訓練も大変なものだった。



《例1》

「おい！今何を入れた！？」

「豆板醬と鷹の爪だ」

「この料理に入れてどうする！」

「この程度でもダメなのか？」

「ダメに決まっている！！」

人が悶絶する程度の量が投入。

《例2》

「春蘭！それは砂糖だ！」

「ならば、倍の塩を使えば……！」

「よせ！ソレは……！！」

砂糖と大量の重曹が投入。

その後それを指摘したらさらに倍の塩が投入。

《例3》

「何故、油を入れる！？」

「その方が熱くなりやすいから早く仕上がるではないか」

「そんなことのために入れるな！！」

大量の油が投入。

「……………最後に一つまみ入れれば完成<sup>………だった</sup>」

……………もはや別の形でしか完成しないが。

大から小までミスの連発だったが……………“見た目”は美味しそうだが、作り方を知っている俺としては……………逆にそれが恐怖に感じる。

「分かった」

そう言つて春蘭は“一つかみ”を投入。

直後、輝く煙が噴き出す。

それを吸つた春蘭が倒れ伏した。

「春蘭!!」

煙を吸わないように気をつけながら春蘭に駆け寄つた。

呼吸を確かめようとしたが、煙が蔓延しそうなので春蘭を連れて退避する。

部屋の戸を閉めて角を曲がった頃……………煙が火に接触した。

響く轟音。

気になつたが……………春蘭が呼吸をしていないことの方が不味い!

俺は人工呼吸を始める。

「いったい何が!? 士郎!？」

駆けつけてきた秋蘭が丁度春蘭の口に息を吹き込んでいる所を目撃した。

「姉者にな「いい所に来た！手伝ってくれ！春蘭が息をしないんだ！」なっ！！」

その後、秋蘭と協力で人工呼吸を続けて春蘭の呼吸が戻る。それに安堵した俺たちは状況確認を始めた。

「土郎、いったい何が？」

「すまない。俺の考えが甘かった。……春蘭に料理を教えていたんだ」

「!？」

秋蘭の顔に理解と絶望が浮かんだ。

「火を使つたんだな!？」

「ああ」

「急いで止めないと！あの日の惨劇が!!」

秋蘭が語った。……春蘭が料理で火を使う事を禁止された本当の理由を。

それはそれによって生じた毒ガスで家の多くの者が倒れ、1週間も寝込んだことにある。

幸い、死者はでなかったそうだが……全員生存したのは奇跡だと医者はいったそうだ。

「……すまない。俺の考えの甘さが原因だ」

「いや、そのことを誰にも言っただけでなかった私にも責任がある」

そうして“厨房のあった場所”に着いた俺たちが見たのは……。

「……は、はは。さっきの轟音の正体はこれか」

綺麗なクレーターだった。

調理器具がオブジェのごとく散乱している。

壁の残骸はクレーターの外でその破壊力を物語っていた。

「……………ま、まあ建物の被害だけで良かったではないか」

……………料理で直接的な死者が大量に出しかねない事態が起きるとは。

……………2度と春蘭に料理はさせないと俺はその日誓った。

こうしてしばらく厨房が使えなくなり、投影で間に合わせの代用品を用意させられ、

さらに修理費を春蘭と分割で払う事になった。

春蘭は丸一日寝込み、その日のことを覚えていなかった。

これは正義の味方の休日記録における災害の記録である。

正義の味方の観察記録【沙和編】

「ち、遅刻なの〜!!」

沙和が目を覚ますと、訓練の始まる時刻をとくに過ぎていたの。朝食抜きはつらいけど、仕方ないと既に諦めている。

「お、遅れましたのー……」

「……理由は？」

「……寝坊なのー」

嘘をついても直ぐばれるので率直に言ったの。

「……“特別訓練”を訓練時間を一刻延長して行うことにするか」

「せ、せめて半「二刻がいいか？」……一刻でいいのー」

特別訓練とは何なのか分からないけど、すごく嫌な予感がするのー。

「……どうして起こしてくれなかったのー？」

じと目で凧ちゃんと真桜ちゃんを見ると、二人は気まずげに目を逸らした。

「……何を隠しているの？」

「な、なに「今日の朝食は特別に隊長特製麻婆豆腐の差し入れがあったんだ」ちょ、凧！」

「どうせ直ぐばれるんだ。話した方が早い」

……ようするに、いつものように朝食後に起こしにきてくれなかつ

たのは、  
起こしに行くとか隊長特製麻婆豆腐が食べる暇がなくなるからということなの？

「……うらぎりもの」

沙和も隊長特製麻婆豆腐を食べたかったのー！

「すまん」

「じゅめん」

「で、おしゃべりはもう良いかな？」

見るとこわい笑顔を隊長が浮かべていた。

「ゴメンナサイ」

「それでは沙和には特別訓練をやらせてもらっそのつもりで」

「はいなのー」

一通りのいつもの訓練後、特別訓練の時が来たの。

隊長は一本の矢を取り出す。

……それは先っぽが蛸の吸盤みたいだった。

「今からこの矢で沙和を射続けるから、一刻の間防ぎ続ける」  
思っていたより、マシ見たい。

「二人も射ってくれ」

そう言って、隊長は凧ちゃんたちにも弓と矢を渡した。

「分かりました」

「何でウチまで……」

「連帯責任ということで納得してくれ」

こうして特別訓練が始まった。

「きゃっ！」

隊長の矢が額に見事に命中した。

思っていたより痛いし！

「言い忘れていたが、当たると赤くなるから」

矢を額から取ると確かに赤くなっていた。

そんなの困るの！

午後の巡回の時に恥ずかしいの！

「隊長は乙女の肌を何だと思っているのー!？」

「痛い目に合わないとなかなか反省しないだろ。」

こんなことにならないよう次回から気をつけてくれ」

うう、ひどいすぎるのー。

沙和は必死で矢を弾く。

凧ちゃんたちの矢は外れる場合が多いから問題ないんだけど、

「あう！」

隊長の矢は全然外れない！

避けれたと思ったら、こちらの動作が分かっていたかのように微妙

に軌道が変わり命中する。  
だから全部弾かないといけないの。

「みぎゃー！」

これで額には四度目なのー。

おまけに今回は凄くしみるのー……。

「たまに塩水で濡らしたのも使うから」

鬼なの！

終わるころにはあちこち吸盤の痕だらけになったのー……。

おまけに……訓練が伸びたせいで、  
楽しみにしていた今月号の愛読雑誌『阿蘇阿蘇』が売り切れて買い  
損ねたの……。

「……せつかくのオシャレが台無しなの」

現在、痕が消えないまま街の巡回をしている……。

特に額に沢山くらったからまだ真赤になっているの。

憂鬱な気分のまま饅頭を買い食いして腹を膨らませて巡回している  
と、

オシャレな新作の服が売られているのを発見！

「おじさん！これいくらなのー!?」



「XXXXXXXXになります」

確かこれでぎりぎり足りるはず！

「ほど足りませんよ？」

「うそ！？」

財布の中身を見た。

中はもちろん空っぽ。

「あっ！」

原因は……さっきの饅頭！

その代金を計算に入れ損ねたということみたい。

「……おじさん、まけてほしいの」

「すでに採算ぎりぎりですので……」

「せめて取り置きを！」

「目玉商品ですので……」

……店を出て未練がましく後ろを振り返ると……アレを買って出ていく女性の姿があった。

「……本当についていないの」

暗惨たる気分で巡回に戻る。

せめて、気分晴らせるような事や物があればいいけど……。

「？あれは……？」

見ると隊長が一軒の店に入るのが見えた。

ぼろぼろで訳の分からない物品を売っているぼろぼろな店で、繁盛  
していないことは明白。

隊長はいつたい何のために？

しばらく隠れて見ていると、隊長が出てきたの。

隊長が出ていってからその店に私も入って見た。

やっぱり良く分からないものや、うさんくさいものばかり。

「あの一」

「何じゃね？」

これまたうさんくさい店主だった。

「た、じゃなくて衛宮さまは何を買っていったんですか？」

「石じゃ」

「……石？」

「少し変わった石で凄く堅いんじゃ。見てくれはそんなに良くない  
んじゃが」

何のために買ったんだろう？

堅いということは武器の作成に使うの？

「ありがとつなの一」

そう言っつて店を出る。

後で隊長に聞いてみよう。

「隊長ー？」

隊長の私部屋に入ると見当たらない。

けど、真桜ちゃんから聞いているから慌てないの。

教えて貰った方法で地下にあるという秘密の部屋へと向かう。

そつとその部屋を覗くと……、隊長は何かを削っていた。

さらに手元を見ると……、オシヤレな首飾りが！

「すごいのー！」

器用だとは知っていたけど、あんなオシヤレな物まで作れるなんて！

「っ！？沙和！？」

どうやらすごく熱中していたみたい。

“しまった” って表情が物語っているの。

「……隊長、もしかして不味いものを見られちゃったの？」

削っていたのは……例の石。

削った部分がすごく綺麗で輝いて見える。

「……仕方ない。沙和、今日ここで見た事や物は内緒にしる。代わりにこれをやるから」

隊長が渡してくれたのは腕輪だったの。

沙和はこういう物にはうるさいけど、間違いなく一級品の出来と断

言出来るの！

「ありがとうなのー！もちろん言わないのー！」

終わりよければ全て良しなの。

……それにしても、いったいどうしてあんなに色々な小物を作っていたのかな？

さっきは気付かなかったけど、小物が沢山散らばっている。どれもかなりの出来なのに、どうやら気に入らないみたい。

「か……まで……それまで……完成……」

まあ、沙和には関係ないの。

こうしてお気に入りの一品を沙和は手にいれ、それを凧ちゃんと真桜ちゃんに自慢したのー。

……そのせいで、二人にも隊長は小物を上げることになり、

小物の入手経路を秘密にすることを三人揃って“お願い”されたのー。

……二度とあんな笑顔で“お願い”されたくないというのが三人揃っての感想。

教訓……迂闊な自慢話はすべからず

これは沙和のある一日で、隊長の観察記録ともいえる記録なのー。

## 正義の味方の仕官記録6

いつも賑わう界隈も、いつもは賑わはない界隈も今日は等しく賑わっている。

今日は華琳の誕生日であり、魏の建国記念となる日だからだ。

あちこちで街の商人や旅商人がここぞとばかりに張り切っている。

当然、警備隊の労力は通常の三倍と言っている。

軍からも人員を出しているにも関わらず、どこもかしこも大忙しだ。

「隊長！三番通りで迷子が「すぐに預り所へ」はっ」

「隊長！五番通りで酔漢同士の喧嘩が「距離は！？」二里です」

俺は臨時見張り台に上り、馬鹿を確認し矢を放つ。

命中するのを確認しながらも指示を出す。

「気絶させたから縛って牢屋で反省させておけ！」「はっ！」

「隊長！」「隊長！」「隊長！」「隊長！」

「ええい！順番に言え！いくら私でも纏めては無理だ！」

……警備隊隊長である俺の負担は通常比6倍だ。

とにかく迅速にかつ丁寧な指示を出していく。

「天知る、神知……」

どこかで何かが見えた気もするが、気の所為だ。絶対！きつと！

俺は自分に言い聞かせる。というかソレまで関わっていたら倒れる！

「師匠！」

真桜が息をきらせながら話しかけてきた。

「おかしな仮面の変態を見てまへんか？さっきから追っかけとるんやけど」

「放っておけ。たいした実害はない。それより西地区の警備に戻ってくれ」

現在、凧達三人には各地区の警備のまとめをしてもらっている。全てを俺一人でカバーするのは無理な以上は当然の人事だ。

「了解や！」

そう言っつて真桜は再び駆けていった。

「…………隊長」

いつのまにか凧が傍にいた。

「隊長はやらな」凧、俺は二度とアレに巻き込まれたくないんだ。それとも凧が代わり」失礼しました！」

……………普通の感覚なら誰だつてやりたくないからな。

「それで、何かあつたのか？」

「それが稟どのが売られていた本を読んで鼻」もういい。分かつたから。

風を呼ぶから引き取りに行ってもらおう。血で汚れた品の代金を立て替えといってくれ。

代金は後で稟に払わせる。場所は？「東地区の一番通りの××です。分かつた。持ち場に戻ってくれ」はっ！」

風が走り去る中、俺は風に渡しておいたナイフを消した。しばらくして、風が来た。

「どうかしましたか、お兄さん？」

「東地区の一番通りの××で倒れた稟の回収を頼む」

「なるほど」。いいですよー」

「ついでに代わりのこれを」

俺は短刀を投影して渡した。

「それにしても便利ですねー。緊急時にはすぐ分かりますし」

投影を使った特殊な情報伝達手段として、俺は皆に短刀を渡しておいた。

用がある時はその相手の短刀を消すことで知らせるというもの。

種類は三つで重要度によって消す短刀が違う。

ちなみに今回は一番低い重要度の短刀を消した。

「まあ、一方通行で俺しか使えないけどな」

「警沢言っちゃいけませんよー。これでも十分ですし」

「そうだな。それじゃあよろしく」

「はい」

風はその場を去って行った。

「隊長ー！」

……今度は沙和か。

「いったい何だ？」

「しゅ、春蘭さまが料「なんとしても止める！一番隊、二番隊をつれていけ！場所は？」

南地区五番通りの　　なのー「分かった！秋蘭が行くまで持たせる！「はいなのー！」

めでたい日に死者など出してたまるか！！

沙和が去ってからすぐに秋蘭が来た。……さすがに一番重要度が高い奴を消したから当然か。

「士郎！何が「春蘭が料理を！南地区五番通りの　　だ！」分かった！！」

春蘭の料理が“過程”さえ危険極まりないことを秋蘭も理解している。

秋蘭はかなりの早さで駆けだした。

……頼んだ秋蘭。俺では一時しのぎにしかない以上、秋蘭に期待するしかない。

「隊長！」

「何があった」

「もうすぐ“数え役満 姉妹”のコンサートが始まります」

「そうだったな警備人員を出さない」と

……天然カリスマと暴走アジテーターがいる以上、きっちりやっておかないとな。

「それでは自分も「お前は担当ではないだろ」……後生です！行かせてください！」



この大舞台で天和ちゃんの勇姿を見ないなど、応援隊として失格です！！」  
ダメに決まっているだろう！！観客と一緒に暴走しそうな者を警備に出せるか！！！」

頭痛を堪えて部下の馬鹿一人を持ち場に戻す。

気力がマイナス百分百みたいだが、暴走されるよりはましだ。

「隊長！」 「隊長！」 「隊長！」 「隊長！」

…… 本当にハードだ。

全ての後始末を終えた時には日付が変わりかけていた。  
俺は華琳を探していた。

日付が変わる前に渡したいから……。

そして俺は城の高台にいる華琳を見つけた。

「華琳」

「土郎、お疲れ様。 ずいぶん大変だったみたいね」

「まあな。 だけど、 祝うべき日ならこれぐらいは当然だろ」

「そうね」

俺は懐からソレを取り出した。

この日のために苦労して作ったネックレス。

数多の試作品の果てに生み出した、現時点での俺の最高傑作だ。

「華琳。誕生日おめでとう」

「……これは士郎が？」

驚く華琳に、

「俺が器用なのは知っているだろう？」

そう答えた。

「……ありがとう」

その時の華琳の笑顔は俺が今まで見た中でも最高のものだった。

「……」

「どうかしたかしら？」

「いや、その笑顔で十分な対価だと思っただけだよ」

その言葉に華琳は頬を染めた。

「だったら、もう少し別の物を貰ってもいいわよね？」

そう言っつて華琳は俺にキスをした。

「今夜は寝かせないわよ」

「……今夜じゃなくてはダメか？」

正直、疲労できつい。

「今夜じゃなくてはダメ」

その晩は本当に眠らせて貰えなかった。

「し、士郎!?」「に、兄さま!?」

まるで幽霊を見たかのように驚く秋蘭と流琉。

「……おはよう、二人とも」

「隈が酷いです。それに目の焦点が合っていないような……」

「大丈夫、たかが太陽が黄色くても大地が傾いていようが人は生きていけるさ!」

「それは大丈夫とは言わん!衛生兵!衛生兵!」

こうして医務室へ運ばれ、休日だったその日を俺は睡眠で全て潰しましたとき。

これは、大忙しな正義の味方の仕官記録における一日である。

正義の味方の仕官記録6（後書き）

《その日のしゅらんさん》

「はあああつ！」

剣が振り抜かれ、檻の中の体長二メートルを超える熊が動きを止めた。

春蘭は澄んだ音と共に鞘に剣を納め、熊は鈍い音と共に首を地面に落した。

「後は予定の時刻に秋蘭が来るのを待つだけか」

今日は華琳さまの誕生日。

当初の予定は私の手作り料理を差し上げるつもりだった……のだが、秋蘭が自分も料理を差し上げたいという。

結果、食材集めは私で作るのが秋蘭ということになった。

「……一品くらいは私が……」

そう、せっかくの記念すべき日だ。それくらいは華琳さまにしてあげたい。

私は臨時の厨房で料理を始めた。

-----

食材を切る斬る伐る。

春蘭の気付かない内に、斬られた食材の一部が周りを廃墟へと変えていく。

「いったい何の騒ぎ……春蘭さま！？何をしているのー！？」

沙和が騒ぎに気付いたが、声をかけても春蘭は夢中で気付かず、止めようにも食材の弾幕で近寄れない。

勇気ある警備隊員が楯を構えて近寄ろうとするが……。

「ぐはっ！」「ぎゃああああ！」「た、楯が」

米の散弾を食らって楯は壊れ、散弾によって負傷・戦闘不能に追い込まれた。

「た、隊長に知らせないと！」

しばらくして、援軍が来ても……状況は悪化しようとしていた。

「不味いのー！春蘭さまが火を！」

思い出すのは“厨房爆発消失事件”。

「こ、ここまでなのー！？」

絶望に染まる警備隊員たち。

だが……。

「天知る、神知る、我知る、子知る！悪の蓮花の咲くところ、正義の華蝶の姿あり！」

かよわき華を護るため！華蝶仮面ただいま参上！」

セイギノミカタ？によって流れが変わった。

「せいっ！はあっ！とうっ！てりゃっ！」

宙を漂う物を溶かす泡を風圧で割り、マグマの如き跳ねかう高温の液体を掻い潜り、

「はああああっ！」

“謎料理 改未完成バージョン（仮）”を見事倒した。

「なっ！き、ききき貴様！よくも私の華琳さまへの愛を！」

「……その愛は、随分ときついのだな？」

廃墟同然となった、厨房を指して華蝶仮面は言った。

「ふざけるな！貴様の仕業だろう！この変態めが！」

それが自分の料理行程の結果だと気付かずに、憤怒の表情で怒鳴る春蘭。

周りはその気迫に当てられ、誰も指摘出来ないでいる。

「人に責任を押し付けなくてももらいたいですな」

「問答無用！！」

こうして秋蘭が駆け付けるまで二人は戦闘をし続け、昼食に出すはずだった春蘭・秋蘭の料理は、夕飯に回ったとき。

第十五話：定軍山の戦い（前書き）

更新が遅れてすみませんでした。初の大スランプでどうにも納得できる出来にならず、気付けば一週間も……。出来る限りこんなことがないようにしたいです。

## 第十五話：定軍山の戦い

西涼遠征からしばらくたった。

現在、魏では拡大した領土を治めるため、内政に力を入れている。戦ばかりでは民が疲弊し、国力が低下するからだ。

だが、国を維持するためには敵対勢力に対する備えは欠かせない。

「劉備の兵が国境付近をうろついているから、偵察に行ってきたくないかしら？」

今日の華琳の話はその事についてだった。

「まあ、偵察は俺が適任だからな」

千里眼と地形把握は偵察に重宝する。

「ええ。それに土郎の“アレ”も少し試しておきたいしね」

「わかった。副将は？流琉辺りか？」

「流琉は秋蘭や稟と一緒に西涼の新たな支配体制の仕上げに行っているわ」

「そうか。馬騰が市井に降りた以上、代わりが必要だったな」

馬騰は結局華琳の部下にはならず、その代わりに市井に降りて孤児院を初めた。

また、涼州の人々や華琳の派遣した役人などの相談役をしている。

“最後まで漢の臣下”という誇りと敗戦の責任の両方を取るという馬騰の意思が良く分かる。

「それも馬騰が西涼の民に言い聞かせてくれたから、まもなく終わ



るけどね」

「では誰が副将になるんだ？星か？」

凧たちは新兵の訓練などで忙しいから除外していいだろう。春蘭や季衣は偵察に向かない。有力なのは星になるが……。

「星は前回の一件から、いざという時に士郎を止められそうにないから外したわ。」

それに孫策の偵察も必要だから霞と一緒にそちらへ回したわ。あなたの副将は凧よ」

「良いのか？新兵の訓練に影響が出そうだけど」

「多少は仕方ないわね。そこは真桜と沙和に頑張ってもらおうわ」

ちなみに二人は最初こそ良い顔をしなかったが、臨時給料を渡すというとな納得したそうだ。

……大方、洋服代やカラクリ夏侯惇人形の改造費で懐が厳しかったんだろうな。

「分かった。場所は？」

「定軍山よ」

定軍山か。俺の知る歴史では夏侯淵が殺された場所だ。せつかく行くのだから定軍山の戦いが起きた時の為に、仕掛けをしておくのも良いかもしれない。

俺の場合は常に最悪の事態を想定しておかないと不安だ。

「……行くのは明日だよな？」

「そうだけど。どうかしたのかしら？」

「少し準備をしようと思ったただだよ」

“畏”を仕掛けるために使う“剣”を大量に作っておくつもりだからな。

「それじゃあ、お願いね」

「ああ。任された」

「あ、それと関係ないけれど、華陀が江東で流行病を根こそぎ撲滅したようよ」

「そうか。アイツらしいな」

凱我は怪我の治療の後、再び修行の旅に出た。

どこかで誰かを治療しているだろうとは思っていたが、規模こそ大きいものの想像通りだったようだ。

俺は気分良くその場を去った。

偵察隊の編成や大量の投影など、することはいくらでもある。すぐに取りかかる必要があるのだから。

「それで臨時給料を受け取るというのか!？」

「だって、そうじゃないと割に合わないしー」

「そうやでー。負担が大きくなるんやから、その分貰ってもええやん」

「私たちが働くのは当然のことだ!それで給料を多くもらつなど…」

いつもの三人組が朝から元気に騒いでいる。

「おはよう、三人とも。それにしても騒がしいが、いったいどうした?」

「隊長、聞いてください！二人ときたら！」

まあ、何となく予測は付くな。

「師匠！。 凧の頭が堅くて困つとるんや。」

「ウチらが臨時給料を受け取ることを話したら、怒るんや」

「そうなのー。 大変なんだからそれくらい役得があってもいいはずなのー」

やっぱりそうか。

「隊長もこの二人を叱ってやってください！」

「凧、落ち着け。 臨時給料を与えることは華琳が決めたんだ。」

今更どうこう言っても仕方がない」

「……………はい」

まあ凧としては納得できないか。

「よっし。ウチらの勝利や」

「これであの服を買えるのー」

……………二人に釘を刺しておくか。

「喜ぶのは構わないが、覚悟は当然あるよな？」

「え？」「どういう意味なのー？」

「臨時給料をもらうのだから、相応の働きが必要になるんだけど？  
でなければ臨時給料はなしで今月の給料は半分だからそのつもりで」

その言葉に二人の顔色が変わった。

「ちょ、そんな聞いてへん！」

「そうなのー！もうその分のお金を使っちゃったからご飯代が！」

「相応の苦勞なしで臨時給料を貰えると思ったのか？だとしたら考えが甘い。」

それが嫌なら二人とも頑張れ」

鞭と飴は基本だからな。これで二人も頑張るはず。

「見事な判断です、隊長」

「うう。まさかの敗北なの」

「頑張らへんと、来月発売の品が……」

うなだれる二人を横目に凧と最終チエックを済ませた。

「兄ちゃんでかけるの？」

チエックを済ませた所で季衣がやってきた。

「ああ。定軍山まで偵察にな。留守を頼む」

「まかせてよ！……それと沙和ちゃんたちどうしたの？凄く元気がないみたいけど」

「あの二人は現実の厳しさに直面しているところだ」

「そうなんだ。けど二人なら大丈夫だよな？」

「ああ。すぐに現実に対処するさ。だよな？」

いつまでも蹲っていたら……」

そろそろ訓練の時間だからな。

「そ、そうなのー！」

「急がへんと！」

二人はその場を駆け足で去って行った。

「二人とも頑張ってくれそうですね」

「ああ。俺たちも頑張るとしよう」

「二人とも気を付けてね？」

季衣の言葉に、

「もちろんだ」「はい。ありがとうございます」

そう俺たちは答えた。

こうして俺たちは定軍山へと向かった。

“気を付ける”のが足りないことに気付かずに。

二日後、俺たちは定軍山に到着した。

「ここが定軍山か」

「隊長。周囲を偵察してきましたが、特に変わった様子はありませんでした。」

念のため、近くの村人たちにも話を危機に向かわせましたが……  
見慣れない騎馬が数騎うろついていた以外は、特に変わった様子もなかったそうです」

後で俺も偵察しておくか。俺ならさらに細かい部分まで見極められるからな。

「今のところはやはり唯の偵察の可能性が高いか」

「そうだと思います。無駄足でしたか？」

「来てすぐの報告で判断するのは危険だろ。数日は留まって、情報を集めるぞ。」

俺も後で偵察に行く」

俺は周囲の深い森を見ながら言った。

俺の知る定軍山の戦いはかなり広い範囲での大軍同士の大衝突だ。伏兵など仕掛けてくる可能性が高い。

だから伏兵を潜ませておけそうな場所に罠を仕掛けておくべきだな。

俺は伏兵を隠すのに適した場所の一つを見た時、見つけた。

茂みに隠れ弓矢を構えた敵兵の姿を。

飛来する矢が兵の一人に突き刺さった。

「ぎゃああっ！」

倒れ伏す兵の断末魔の音が響いた。

「隊長！」

「敵襲だ！皆、敵の攻撃に備えろ！」

俺の目は遠巻きに周囲を囲む敵兵たちの姿を捉えた。

そして、俺は失念していたことに気付いた。

俺の知る歴史との微妙なズレと……自分の運の悪さを。すなわち……これが定軍山の戦いになる可能性を。

「そろそろ着いた頃ね」

私は玉座の間の壁に設置されている数十本の武器を先ほどから見て  
いる。

これは士郎が私の誕生日に使った伝達法の発展型で、より細かい内  
容まで知る事が出来る。

今回は実際に使用して見ることで、欠点や長点、改善案などを洗い  
出すことになっている。

そうして見ている最中に数本の武器が目の前で消失した。

「え？」

本来なら到着を知らせる一本だけが消えるはずなのだけど……。  
消えたのは赤の短刀に黒の鎌と黒の戦斧。

それが意味することに一瞬頭の中が白くなったが、直ぐに立ち直る。  
呆けている暇はない。

「誰か！」

「華琳さま。どうしましたか？」

折り良く桂花が入ってきた。

「至急、今出せる最大兵数で軍の準備を！出来る限り早く！」

「わ、分かりました！」

赤の短刀は奇襲を受けたことを意味し、黒の鎌は罠に嵌ったことを  
意味する。

……そして黒の戦斧は敵の軍勢が自軍よりはるかに多いことを意味  
する。

私は焦る気持ちを抑えて、自分の出来る最善の行動を始めた。

夜になった。あの後何とか敵兵を巻き、木の上から周囲をざっと見まわした俺の目に映ったのは、厳しい現実だった。

森の外には大量の敵軍が周囲を囲み、騎兵たちが俺たちが外に出てくるのを待ち構えていた。

結果、俺たちは次々にやってくる敵兵に応戦しながら逃げ続けるしかなかった。

おかげで皆ぼろぼろだ。

二日もすれば援軍が来るという事実で、兵の士気を何とか保てたのは不幸中の幸いだろう。

「……呷。現在どのくらい残っている？」

「四分の三といったところです。散り散りになった者達も、かなりいるかと……」

それを聞いて自責の念をおぼえる。

だが、今はそれに囚われている余裕はない。

それは生き延びてからすべきことだ。

「隊長……。あまり自分を責めるべきではないかと……」

「ありがとう、呷。けど、この事実は俺が背負うべきことだからな。もつとも、それで動きを止めはしないけどな」

「……本当に難儀なお人ですね」

「こればかりは変えるつもりはないからな」

そう、例え生きとし生ける全ての者に否定されたとしても。



「分かりました。」

……それにしても、隊長が持って来ていた大量の武器はほとんど奪われてしまいましたね」

「そうだな。（おかげで今頃向こつの本陣は大変だろうな）」

先ほど、“壊れた幻想”でまとめて爆発させたからな。

「風、しばらく兵の指揮を頼む。明日に備える必要があるから」

「そんな！私では……」

「風なら大丈夫だと信じている。それに……やっておかないと明日で全滅しかねない。」

目印代わりにこの短刀を持っておいでくれ。そうすれば移動しても俺には分かる。」

とにかく生き延びることを最優先にしてくれ」

俺は短刀を風に渡した。

「……分かりました。けど、無茶はしないでください」

「もちろんだ。……ここで俺が倒れたら皆まで犠牲になりかねないしな」

俺は風を残して森の外側へ向かった。

さあ、悪あがきを始めよう。

「姉さま！。準備は出来たよ」

「分かった。それにしても昨日の爆発は何だったんだろうな」

馬超（真名を翠という）は従妹の馬岱（真名を蒲公英という）の報告を聞きながら、

昨晚のことを考えた。

昨晚、突如として本陣の食糧・武器庫が爆発したのだ。

奇襲でも受けたのかと皆が慌て、そのせいで爆発から今まで時間を無駄にってしまった。

「まだ森に潜んでいる事は確かなんだ。騎兵隊を使っていぶり出す！」

「本当は温存しておきたいけど仕方ないわね。

それにしても衛宮とは……。随分と大物が出て来たわねえ」

黄忠（真名を紫苑という）が答えた。

衛宮……“心眼の射手”、“劍製”と呼ばれる魏の重要人物。

朱里からも特に気を付けるように言われている相手だ。

「だからこそあいつを倒せば、曹操にとっても大きな痛手になる。

しばらく南蛮討伐の邪魔もして来ないだろ」

「だと良いのだけれど……。騎兵は半分残してね。逃走対策に必要だから」

「ああ。それじゃあ行くぞ！」

そうして騎兵を森へと進め……、

「ぎゃああああっ！」「ぐああああっ！」「あ、足があああああ！」「絶叫が響いた。

「どづしたー！」

馬超が森に向かうと……、入口からある程度進んだ地点で倒れ伏す騎兵たちの姿があった。ある者は上下に両断され、ある者は馬ごと足を切断され、無事なものはいない。

「大丈夫か!？」

馬超は助けようと向かう。

「き、来ては駄目です! 罨が!」

辛うじて生きている兵の一人の警告で馬超は動きを止めた。

「いったい何が!？」

馬超はそこで赤く染まった数本の線を見つけた。

「これは?」

馬超はその内の一本に指で軽く触れた。

「つつ!？」

触った部分が切れていた。

それこそが騎兵たちが切断された原因であり、衛宮士郎が昨晚に仕掛けた罨だった。

「こんなもの!?!」

馬超は十字槍を振り、ソレをまとめて切断した。

切断されたソレはまるで幻であったかのように消え……。次の瞬間、馬超の足もとが爆発した。

「ぐあああつ！？」

吹き飛ばされ、ぼろぼろになりながらも何とか激痛に耐え意識を保つ。

「な……何なんだよ！これ！？」

混乱しながらも馬超に分かる事は……一筋縄ではいかないということだけだった。

「結局、騎兵は来ませんでしたね」

二度目の晩が明け、俺たちはさらに兵数を二分の一にまで減らしながらも耐えきった。

「仕掛けた罠の対処のせいだろう」

基本は切れ味鋭い鋼糸の投影による罠だ。

糸を切断したり、糸をある程度動かすと分かるので、

その場合は傍に埋めておいた剣を“壊れた幻想”で爆発させた。

これによりかなり敵兵を倒したと思うが、全ての罠を使い切ってしまった。

もっとも相手はそのことを知らないだろう。

結果として騎兵は罠の心配から来ないだろうが、それでも多勢に無勢だった。

「後少し持てば助かりますね」

もつとも、不眠不休で動き続けた結果、  
皆が疲れ切り、俺も傷だらけな上に魔力は尽きてかなり厳しい状況だ。

「いたぞっ！衛宮だ！」

「くっ！」

俺は兵たちから集めた矢を放つ。

「ぐあっ！」

この二日だけでどれほどの人を殺した事か。  
それでも覚悟していたことである以上、泣きごと弱音も吐きはしない。

……ただ、決して忘れないように心の痛みと共に記憶に刻む。

「移動するぞ！」

「はい！」

そうして進む内にかつて慣れ親しんだ匂いを感じた。

……それは木が燃える匂い。

俺は木の上を上り周囲を見ると……そこらじゅうに火の色があった。  
俺は急いで木から下りた。

「不味い！！連中火をつけたみたいだ！」

「なっ！」

このままでは火に巻き込まれる。

「どうやら覚悟を決める必要があるみたいだ」

全滅するのが先か、救援が来るのが先か。

「私たちがする事は一つだけですな」

「ああ。さあ、最後まで足掻くぞ！」

俺たちは森の外へ向かう。

森を出た所で無数の矢が雨の如く降り注ぐ。

「ぐああっ!!」

兵の数名が苦悶の声を上げた。

「っ! 総員……!」

「足を止めるな! 駆け抜けろ!」

矢を干将・莫耶で斬り払いながら凧の言葉を切って兵に命じる。

「させないよ! てやあああああっ!」

「くうっ!」

小柄なポニーテールの少女の一撃に凧が弾かれた。

「凧! ちっ!」

俺は双剣を鞘に納め、弓をとる。

「はっ！」

三本の矢は空を裂き……横合いから飛んできた矢に撃ち落とされた。俺は飛んできた矢の方向を向いた。

「良い判断ね。止まっていたなら、私たちが全員射抜いていた所よ」

妙齡の美女が話しかけてきた。

「……黄忠か？」

「ええ。初めまして」

「噂に違わぬ弓の腕だな」

とにかく時間を稼がなければ。

「あら、“心眼の射手”とまで呼ばれるあなたほどではないわ。衛宮」

「それほどではないさ。実際に撃ち落とされる程度でしかない」

「それは私を見くびり過ぎね。さて無駄話はここまで。時間稼ぎに付き合う暇はないの」

やはり無駄か。

「まあ、予想通りか。ダメ元でやってみたが」

「まあ、そんなものよ！」

放たれる五矢の軌道は全て急所を目指している。

俺は残りの八本の矢を全て射る。

五本は互いに惹かれあうように衝突して地に落ち、三本が黄忠を襲

う。

「はっ！」

黄忠は手甲と外套で矢を弾く。

その間に弓を捨て、双剣をとる。

「せいっ！」

飛来する矢を干将・莫耶で落としながら、少しづつ間合いを詰める。

黄忠の弓矢が見事なまでに正確だからこそ対処しやすい。

だが、間合いが詰まりきることは無かった。

「今よ！翠ちゃん！」

「衛宮！はああああああああっ！」

騎兵に乗った少女が真横から奇襲してくるのを見て、

俺は自分に対処する手段がないことを冷静に判断した。

黄忠の矢に対処しながら、

不意打ち出来た自分より力量の上だと分かる少女の槍を防ぐのは無理だ。

「隊長おおっ！」

凧が叫ぶ。

それでも、覚悟を決めながらも俺は足掻く。

飛来する矢のいくつかを弾くのではなく、当たる個所を調節する。

想定通りに命に支障のない箇所に当たった。

そうしてできた時間の余裕で無理矢理に槍を防ぐ。



「悪あがきを！」

少女はそのまま槍を振り抜き、俺の体制は崩れた。

「とどめだ！」

再び槍が振るわれる。

槍は俺に命中……せずに防がれた。

「え……？」

「……………な」

「どうして、お前が……………！」

槍を止めたのは……………黄金の鎌。

「スキあり！」

「きゃあっ！」

凧と戦っていた少女が季衣の一撃に吹き飛ばされた。

「まるで計っていたかのような登場だな」

「……………お互い様でしょ。今回はあの時とは逆ね」

互いに笑う。

どうやらまだ終わる時ではないらしい。

それとも迎えに来た死神を逆に屠ってしまったのだろうか？  
彼女なら……………華林なら十分にありそうだ。

「というか、王様が前線に出てくるのはどうかと思っぞ……？」

「いやだったかしら……………って！」

得物がぶつかり合い、火花を散らした。

「士郎と話しているんだから邪魔しないでもらいたいわね！」

「曹操おおおっ！！」

怒りを目に写し、少女は十字槍を振るう。

だが……動きに精彩が欠ける。

「……そんなぼろぼろの体で討てると思われるなんて、あまり私を見くびらないことね！」

「がっ！」

正覇の柄が少女の脇腹を痛打した。

「黄忠さま！馬超さま！敵の大軍が我々を囲もうと……！お早くお逃げください！」

一人の敵兵が叫んだ。

「翠ちゃん！逃げるわよ！」

「くそっ！たんぽぽ、退くぞ！」

「う、うんっ！」

敵軍が退いていく。

「逃がすな！不意打ちを受けた我らが同胞の仇、そのまま奴らに返してやれっ！」

春蘭が自軍の兵の兵に命じて追撃をかける中、俺は華琳と会話する。

「……華琳ならいろいろ分かっていて行動したと思うが、出来れば自分から前線に出るのは止めてくれ。肝が冷える」「そうね。士郎が無理をしないと約束したら考えてあげる」  
俺は言葉を詰まらせる。

「まあ、士郎と違って滅多にないことだから安心していいわよ」  
華琳がほほ笑む。

「士郎！華琳さまのためにも二度と無理はするな！」

春蘭の言葉に……、  
「……善処する」  
そう俺には答えるしかなかった。

これは正義の味方が霸王によって九死に一生を得た一幕。

## 人物紹介【第十五話終了時点】（前書き）

かなりいい加減かつインターネットを使ったコピー&ペーストなためおかしい部分が多々あるかもしれないのでご了承ください。誤字・脱字、おかしい点があれば調べ、修正しておきます。

## 人物紹介【第十五話終了時点】

### 登場人物《Fate篇》

・衛宮 士郎

本作主人公、現在の容姿は白髪、肌は黒ずんでいない。服装は赤い聖骸布の外套にボディーアーマー。

基本武装は互いに引き寄せ会う力を持つ夫婦剣【干将・莫耶】。魔術を習得しているが、現在は人災により制限付きでしか使用できない。

武器（刃物関係）を作成できる投影魔術で武装を用意できるため、全ての武器をそれなりに使いこなせるが、弓に関しては超一流で強化魔術を併用すると、四キ口先の標的を正確に射抜く。

“全てを救う正義の味方”という決して届かないと理解している理想を、目指し続けている。

結果として救えた場合のほうが多いが、救えなかった場合も相応にある。

どちらの場合も出来るだけの後始末と犠牲者のことを記憶に刻んでいる。

何でも器用にこなすが、自分自身の事に関しては極めて不器用。長いこと作った口調を使用してきたが、華琳からの罰で禁止されるからは、

イリヤが亡くなってから使用することがなかった本来の口調に戻した。

趣味はガラクタイじり、家事全般、釣り。

・遠坂 凜

プロローグに登場。 士郎の友人。 あらゆる分野で天才的な才能を持つが、  
ここの一番というところで必ず失敗する（一族代々の性質）。  
士郎の魔術制限はこの性質による彼女の“うっかり”が原因。

・キシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグ

プロローグに登場。 死徒二十七祖の四位。 魔道元帥。 カレイドスコープ 万華鏡。  
宝石のゼルレッチ。 時の翁。 五人の魔法使いの一人。 頻繁に俗世と  
関わる変人。

宝石剣を持つ。 宝石をシンボルにする魔法使いで、悪に義憤し善を  
笑うという性格。  
はるか未来の常識を体現している。

万華鏡のごとく、同時に運営される並行世界を『個』として移動  
できる（第二魔法）。

宝石の表面が万華鏡のそれに類似していることから宝石の名を冠す  
る。

彼の弟子の系譜の一つが遠坂の家系。

・蒼崎 橙子

プロローグに登場。 希代の人形師の魔術師で、自分と完全に同一の  
人形の作成に成功した。 『まったく同じならば自分ではなくても問  
題ない』という考えから、  
そのとき生きている橙子が死ぬとストックされていた橙子にスウィ  
ッチする。

そうして目覚めた橙子は、目的を達成してから自分をもとにして人  
形を作り再び眠りに就く。

士郎の現在の肉体は彼女の作成した人形である。

・セイバー

現在名前だけ登場。士郎の最初のパートナー。本名はアルトリア・ペンドラゴン、

ブリテンの王であるアーサー王。故人。

金髪・碧眼の美少女で民のために自らの心を殺して戦い続けた過去を持つ。

士郎に多大な影響を与えた。

・イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

回想でのみ登場。士郎の二人目のパートナー。故人

士郎の血のつながらない姉。見た目は小学生な銀髪・赤い眼の美少女。

“約束”や“教育”で士郎の歪みを矯正した功労者。

それがなかったら本作の士郎はありえなかっただろう。

それでも士郎の歪みは相応に残っている。

・遠坂 桜

名前だけプロローグに登場。

凛の妹で、間桐の家に養子に出され、間桐臓硯・慎二の虐待を受け続けた過去を持つ。

聖杯戦争の結果、下半身が動かなくなっている。

士郎にとっては日常の象徴といふべき存在だった。

また、彼女の苦しみを知らずにいたことに士郎は負い目を感じていたりする。

・藤村 大河

名前だけ登場。通称『藤ねえ』。自分の名前が大嫌いで、タイガーと呼ばれると怒り、泣く。

万物全てが好きだがライオンだけは苦手で、蛇、蜘蛛などの壁を這うものが嫌い。

虎を深く憎み、なおかつ深く愛している。

睡眠時は高校時代から愛用しているトラ柄のパジャマを着用する。

やたらとガラクタを集めてくる。なぜかビデオデッキを真っ二つにしたことがある。

相手こそいないが結婚願望はある。

自堕落で変な性格をしているが、中身はとても責任感が強い。とんでもなく頑強な身体をしている。

本作の士郎の思考で“トラ”とかでたら彼女を指す。

・ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルト

名前だけ登場。魔道の名門エーデルフェルト家のご令嬢。

一族の誇りと謳われる若当主。

優雅な物腰、気品溢れる言葉遣い、白鳥の如き美貌と非の打ち所のない人物と見られている。

もちろんそれは猫かぶりで、負けず嫌いで潔癖症。オレンジまじりの金髪がコンプレックス。

金持ちであるが、無駄な出費は許せない守銭奴でもある。

だが貴族が貴族である為に散布するのは有意義な事としている。

庶民には冷たくあたるお貴族だが、

庶民あつての自分たちだと理解しているので彼らのことを強く愛している。



登場人物《真・恋姫無双篇》

【魏メンバー】

曹操 / 華琳かりん

天下統一に向けて天命を見出し覇道を進む魏の王。本作ヒロイン。武芸に長け政にも秀でた文武両道の少女。それ以外にも文化・芸術・料理など、

あらゆることにおいて類稀なる才能を持っている完璧超人。

誇り高く他人の妬みなどに動じることは無いが、美しい者には目が無い。

気位が高そうに見えて、実は家臣達には情け深い。

だが、基本的に自分にも他人にも厳しい性格のため、失敗した場合には家臣といえども容赦ない罰を下すこともある。

自分の行動によって生じる結果を全て受け入れる覚悟を持つ。

士郎に対しては少しづつではあるが、弱いところを見せつつある。

士郎の歪みを気にしている。歪みを治すためにも、機会があれば士郎の過去を詳細に知りたいと思っている。

夏侯惇 / 春蘭しゅんらん

華琳を敬愛しすべてを捧げている魏の武将。「猪武者」と揶揄されるほど粗忽で短絡的だが、武芸の腕は曹魏一の豪傑。華雄との一騎打ちの際に矢を受けて片眼を失うも、

その眼球を喰らい劣勢をはねのけた。性格は純真で明るく、優しく部下の面倒見もよい為妹や部下からも慕われている。

苦手とする頭脳労働は双子の妹である秋蘭に依存しているが、たまに華琳も驚くような洞察力を見せる。

夏侯淵 / 秋蘭（しゅうらん）

魏の武将で弓の名手、姉の春蘭同様に華琳から格別の寵愛を受けている。

冷静沈着で物分りがよく誰からも信頼される魏の名将。料理の腕は華琳も認めるほど。

とかく姉の補佐として日陰の存在になりがちだが、天真爛漫な姉を心から敬愛している。

基本的には常識人だが、華琳と春蘭が絡むとその限りではない。

荀幾 / 桂花（けいふゑ）

華琳に絶対の忠誠を誓い身も心も華琳に捧げた曹魏の名軍師。

華琳を敬愛するあまり、罵られても快感を覚えるほどの異常な心酔ぶりである。

教養の無い者は「華琳様に御仕えするに相応しくない」として見下す傾向があり、

特に春蘭のような者は目の仇にすることもある。男嫌いで終始土郎へ「ツン」しかない。

蛇が苦手。

許緒 / 季衣（きい）

小柄な体格から想像できない豪腕と食欲の持ち主。一人称はボク。

純真爛漫な性格。自分の村を守る為野盗と闘っていた際に、華琳と出会い彼女の親衛隊隊長となる。

忠犬のように春蘭に仕えており、春蘭も可愛がっている。かなりの食通で、

街の飲食店の品揃えや食材の搬入時刻などにも精通するほど。

蜀の鈴々とはキャラ、体型が被るせいか犬猿の仲である。その鈴々からは「ツルペタ春巻き」と呼ばれている。

典韋 / 流琉るる

同郷の季衣とは親友で、同じく豪腕の持ち主である魏王の親衛隊隊長。

元は料理人であり、美食家で料理の試食・批評を任されるほど華琳から信頼されている。

季衣の衝動的な行動に振り回されやすいせいか、

春蘭を巧みに補佐する秋蘭を尊敬しており憧れている。

意外と耳年増なところがある。季衣が士郎を「兄ちゃん」と呼ぶのを真似て「兄様」と呼ぶ。

郭嘉 / 稟りん

戦略よりも戦術を得意とする魏の軍師。常に冷静沈着で、歯に衣着せぬ物言いは華琳が相手であっても変わらない。

ただ華琳への敬愛ぶりは尋常ではなく、

華琳から受ける辱めを妄想しては独りで鼻血を吹くという厄介な癖がある。

程往 / 風ふう

緩慢な性格で感情の起伏が少ない魏の軍師。軍師としては計算高く、見た目や言動からは想像出来ない冷徹な献策をすることもある。普段は居眠りをしていることが多く日向ぼっこを好む。

稟とはよく行動を共にし、稟が鼻血を噴く度に介抱している。

楽進 / 凧なぎ

黄巾党討伐に加勢した功績を認められ、  
士郎の計らいで華琳に使えることになった元義勇軍の将。  
体術と気を弾の様にして放つ気弾を得意としている。

真桜や沙和と行動を共にすることが多く二人に振り回されることもある。

職務に忠実、真面目で堅物な性格だが全身の傷を気にしたり、蛇を怖がったり、

料理や裁縫といった乙女心を持つ。辛い物が好きでなかなかの食通。

李典 / 真桜まおう

凧や沙和と同じく元義勇軍の一人。魏のために最新鋭の兵器開発をもこなす兵器調達官。

発明が大好きで士郎の事を師匠と呼ぶ。士郎と共に春蘭らの武器を改良したりもする。

そのため、戦闘では工兵隊を率いることもある。

関西訛りで饒舌だが、性格は朗らかで悪意が無い。凧や沙和と行動を共にすることが多い。

なお関西弁繫がりか、霞と仲がよく「姐さん」と呼んでいる。

于禁 / 沙和さわ

凧や真桜と同じく元義勇軍の一人。

語尾に「の」を付ける。三人と共に前線指揮官を務め、新兵の訓練教官も任されている。

服や小物を愛好し、愛らしい声と口調が魅力的である。

しかし新兵の訓練では罵詈雑言を吐き散らす手法を取るといふ奇癖がある。

趙雲 / 星<sup>せい</sup>

文武両道に長けた武将。客将として白蓮の下で身を寄せていたが、士郎の在り方に興味を持ち魏軍に参加。

戦場では勇壮に戦うも普段は穏やかに独りで時間を過ごすことが多い。

冷静沈着な性格でやや斜に構えた言動も多いが、蝶を模した仮面を付け「華蝶仮面」を名乗って街の治安維持に力添えする。

その際には、士郎が巻き込まれる事も……。

猫と話す等奇矯な面がある。無類のメンマ好きで、遠くから取り寄せたメンマの壺を城の食糧庫に所蔵している。

また、稟や風とともに見聞を広める旅に出ていたが、

路銀が尽きてしまったため幽州にて別れ、白蓮のところへ仕官しに行った。

### 【蜀メンバー】

劉備 / 桃香<sup>とうかう</sup>

義姉妹の契りを交わした愛紗、鈴々と共に世を救うために立ち上がった蜀の王。

長姉の筈だがそう思わせないドジっぷりから、国の内外を問わず「天然」と評されている。

お人よしで情に脆く、王の資質を疑われることもあるが、

武と勇に長けた曹魏や血と誇りの孫呉に対し、

義と情を持つて諸国の武将や軍師を取り込むカリスマ性は、

他国と鼎立を生む国を興すほどである。

自身よりも家臣に気を配る気質が蜀の結束力を生み出す原動力とな

っている。

士郎の言葉が棘のように未だ心に刺さっている。

関羽 / 愛紗あいしゃ

蜀の英傑として三国にその名を轟かせる青龍偃月刀の使い手。

義姉妹の契りを交わした桃香を守るべく行動を共にすることが多く、規律や規範に厳格で堅物な性格に見られ勝ち。異性や恋愛ことには疎く、

からかわれると赤面して狼狽することも少なくない。武人として誉れ高く戦に臨むが、

朱里らの献策もよく解し、仲間を指揮する能力に長けた武将。

ただし義理の妹である鈴々に対しては感情的になることもある。

張飛 / 鈴々(りんりん)

愛紗と並び賞されるほどの蜀の豪傑。

並みの武将相手なら数人を相手取るほどの豪腕だが根はまだ幼い。

素朴で屈託の無い性格だが、

武人としての振る舞いに欠ける言動は愛紗にしばしば窘められている。

翠とは馬が合うらしく、武術の鍛錬などで行動を共にすることが多い。

子ども扱いされることを嫌うが、

普段の行動には幼さが目立つためか紫苑らに可愛がられる存在でもある。

諸葛亮 / 朱里しゅし

他国からも一目置かれる蜀の天才軍師。

水鏡先生の私塾（水鏡女学院）で兵法、経済、算術、地理、農政等を学んでいたが、劉備の考えに共感し親友である同門の雛里と共に蜀の旗下に加わる。多くの戦を経験し「伏竜」と称されるまでの大軍師に成長するが、焦ったり困ったりするとカミカミ口調になってしまう。その口癖と容姿から多くの者から「はわわ軍師」「ちびっこ軍師」と呼ばれるが、本人は気にしている。

馬超 / 翠すい

従妹の蒲公英と共に蜀につく。槍や騎馬の腕は一流だが、猪突猛進なところがある。その勇猛さと華やかさから“錦馬超”と称えられる少女。

黄忠 / 紫苑しおん

劉璋配下の武将。自分の意志で桃香達と戦いを挑み、その後自らの治めていた町の住人が桃香を支持しているのを確認して蜀に下った。桔梗とは古い知り合いであり、一緒にいることが多い。穏やかな物腰とあふれる母性から蜀の武将の母親代わりとなっている。

年は二十代後半。

馬岱 / 蒲公英たんぽぽ

翠の従妹で、翠を「お姉さま」と呼び慕う。翠と異なり、サイドポニー気味に髪をまとめている。初心な翠に対してませた性格をしている。

武力はそこそこ。

### 【呉メンバー】

孫策 / 雪蓮しうれん

名前だけ登場。母親（孫堅）の遺志を継いで覇道を進む孫呉の王。武芸もさることながら驚異の的中率を誇る「勘」の持ち主でもある。奔放な性格だが家臣への面倒見がよく義にも厚い。

一方で、敵に対しては笑顔で首を刎ねるほどの冷酷な一面も持つ。軍師である冥琳とは強い絆で結ばれており、二人で天下統一を目指している。

小さい頃から戦場に連れ出されていた影響か、長時間戦闘し、相手の返り血等を見続けていると、暫くの間は興奮が収まらないという困った癖をもっている。

### 【董卓軍メンバー】

董卓 / 月ゆえ

何進や王允、十常侍達の権力争いに巻き込まれた結果暴君呼ばわりされてしまう。

争いごとを嫌う、控え目で穏やかな性格の少女。

士郎によって家族を助けられた。現在は蜀にて侍女をしている。

賈馱 / 詠えい

董卓の幼なじみ兼軍師。董卓のために献策をするが、その全てが裏目に出るドジっ子で、

主の董卓同様、生まれながらにして不幸體質を備えている。



その運の悪さは士郎以上な事は確實。  
董卓とともに侍女を現在はしている。

呂布 / 恋れん

天下無双の豪傑。董卓軍壊滅後は、地方豪族から領地を奪って独立するも、

動物たちの王国を作ること条件に劉備たちの仲間になる。

動物たちを愛する純真で心優しい少女だが、人間離れした強さと生来の無口さから、

孤立してしまいがちだった。

陳宮 / 音々音ねねね

愛称（および一人称）は「ねね」。恋を敬愛しており、一緒に行動する軍師。

そのため恋が蜀に降った際も一緒に投降し、以後は蜀の軍師の一人として活動する。

軍師としてはそれなりに優秀だが、軍人将棋では詠には負け越している。

また、恋を敬愛するあまり、彼女に近づく人間には蹴りをお見舞いする。

張遼 / 霞あし

士郎との一騎打ちの後最後まで魏に籍を置くこととなる。

生粋の武人で、相手が強いほどその闘志も高まっていく。

神速とも呼ばれる槍の腕に加えて、騎馬による機動戦も得意とする。酒好きなため、同じく酒好きな星と良く一緒に飲んでいる。

得物にこだわりがあるらしく、士郎のせいで飾りの部分が壊れた際

は激怒した。

華雄 / 馭鳴くめい

春蘭以上の猪。武勇は一級品だが、その猪のせいで……。

反董卓連合の戦いの後、呂布と共に逃げ落ち、その後蜀に降った。

普通ならその猪な性格のためまともに使えそうにないが、

そこら辺は諸葛亮が上手くコントロールしている。が、諸葛亮の負担はかなりのもので、

正直気苦労の原因になっている。

真名は本作オリジナル。

### 【袁紹軍メンバー】

袁紹 / 麗羽れいは

名門中の名門・袁家のお嬢様。華琳に官渡の戦いで敗れ、現在は文

醜・顔良と放浪中。

考えなしの高慢ちきなうえにいじめっ子気質ではあるが、根は善人で涙もろい。

幸運以外は極めて低スペックだが、天性ともいうべき幸運の持ち主。自覚はない。

士郎の印象は劣化ルヴィア。

文醜 / 猪々子いさづね

顔良と共に袁紹に仕える怪力自慢の武将。無類の賭けごと好きで、世の中の全てを“伸るか反るか”の二者択一で考えてしまう困ったところがある。

相棒の顔良を振り回してばかりだが、はたから見るといいコンビで

ある。

士郎としてはおおざっぱな所や傍若無人な所がタイガーを彷彿とさせるらしい。

顔良 / 斗詩とじ

袁紹軍の良心。トラブルメーカーな二人の後始末を常にやり続けている。

士郎が同情するほどの苦勞人。

だが、本人はまんざらではない様子。世の中上手くはまる事もあるのです。

### 【黄巾党メンバー】

張角 / 天和てんほう

黄巾党首謀者の一人と目されたアイドルユニット

「数え役萬 姉妹」（かぞえやくまん・しすたあず）の長女。

ロングヘアで巨乳の天然癒し系だが割と我が儘。「みんな大好きー！ー」の掛け声に、

ファンたちは「てんほうちゃーん！ー」と合いの手を入れる。

初めはしがない旅芸人だったが、

「太平要術の書」を偶然手に入れたことにより、妹共々大陸一のアイドルへと変貌する。

黄巾党の乱の後、姉妹揃って魏に加わる。

張宝 / 地和ちへほう

黄巾党首謀者の一人と目されたアイドルユニット「数え役萬 姉妹」の次女。

ポニーテイルで生意気な小悪魔系で、姉に対抗心を燃やすこともしばしば。

「みんなの妹」の掛け声に、  
ファンたちは「ちーほーちやーりーん！」と合いの手を入れる。  
次女であるにも関わらず、妹・人和より胸が小さい。

張梁 / 人和れんほう

黄巾党首謀者の一人と目されたアイドルユニット「数え役萬 姉妹」の末妹。  
ショートカットでクールな眼鏡っ子。  
「とっても可愛い」の掛け声に、  
ファンたちは「れんほーちやーりーん！」と合いの手を入れる。  
なおユニットのマネージャーも兼任しており、姉妹の財布の紐は彼女が握っている。

#### 【その他】

公孫賛 / 白蓮ばいれん

幽州を治める太守。袁紹に自国を滅ぼされた後、  
蜀に逃げ込んで食客扱いとなる形で生き延び、  
以後は蜀で武将の一人に準じた活躍をするようになる。  
何事もそれなりに器用にこなすが、あくまでそれなり。  
人の上に立つためのなにかに欠けた、残念な女の子。

華佗 / 凱我がいが

大陸一の医師で、大陸中を周りながら医療を行っている。  
五斗米道の継承者にして医者王。

鍼を使つて病魔と闘い、「元氣になれえええ！」と必殺技のような治療を行う。

しかし病魔は本人にしか見えない為、他人から誤解を受けることがある。

なお、真名の凱我は本作オリジナル。

本作では薬の名や治療台詞で勇者王ガ　ガイ　ーネタを使いまくっているが、それらは本作オリジナルである。

馬騰

馬超の母親。為政者としては優秀であることは、五胡からの侵入を防ぎ続け、

民から慕われていることなどが十二分に示している。

漢の臣であることに誇りを持つが故に、自分の我がままであることを分かっているながら降伏を選べなかった。敗戦が確実になった時自害をして誇りを守りかつ責任を取ろうとしたが、

士郎に邪魔され、死による責任の取り方を否定された。

結局、漢の臣としての誇りを守るため市井に降り、

我がままの責任を孤児院運営や民の相談役になることで取ることにした。

半オリジナル。

王允子師

道術を身につけている悪人。都の混乱に拍車をかけたり、

人質をとって董卓たちを脅したりとかなりやりたい放題やっていた。本来なら士郎から逃げきるだけあって、それなりに厄介な程度だった。

だが、太平要術を手に入れたことにより、  
幻獣や魔獣を召喚・制御する術を手に入れたため、極めて危険な存  
在になっている。

また当初の性格は自意識過剰かつナルシストで自分の器のなさを自  
覚せず天下を狙ったりと、

極めて俗物的な悪人でしかなかったが……現在進行形で……。  
本作オリジナル。

## タイガーどうじょう(前書き)

えー、あくまでギャグなので批判系統は評価ではなく感想でお願いします。

## タイガーどうじょう

### 【タイガーどうじょう】

タイガ「さあ、やってきました！我らの出番が！

ここは悩める筆者の戯言をぶちまけて浄化するコーナーです。進行は師匠たるわたしと」

イリヤ「頼れる姉たる弟子一号でお送りいたします」

タイガ「バカチン！！」

トラが竹刀を閃光のように振り下ろす。

幼女は頭に当てられふらふらする。

イリヤ「ひどいっす、ししよー」

タイガ「何をおかしなことを言っている弟子一号！

“頼れる姉”とはわたしだけに許された称号！弟子一号には十年早い！！」

イリヤ「おーぼーだー！！」

タイガ「シャラップ！これは天てんが認めひつじやようと覆ひらない法則！！」

イリヤ「……仕方ないなー。ししよーがそう名乗りたいなら名乗れば良いと思っ」



タイガ「うつ！？なに、この“譲られた感”は！？  
まるでわたしが聞き分けのない子供で弟子一号が優しい母親だとも規定されたかのような」

イリヤ「そんなことよりししよー。話を続けましょーよー」

タイガ「う、うむ。確かにその通りね。

えっと、このコーナーが作られた理由なんだけどね、

『たまにはこんなコメディーもいいのではないか？』

などと筆者は言ってるけどー、ぶちゃけ外伝ネタが尽きかけてるからという理由よ。

つてザケンナー！！！」

イリヤ「ししよー、落ち着いてー！！

おかげで出番が出来たんだから良しとしましょーよー！」

タイガ「ふむ、一理ある。一理あるが、だがしかし！

こんな所ではなく回想で出すべきではないか！？そうは思わんかね、弟子一号！！！」

イリヤ「やだなー、ししよーったら。

ししよーが本篇に出る余地なんて一ミクロンあるかないかじゃないですかー！！」

再び竹刀が振るわれた。

タイガ「弟子一号！何という言い草か！我らの出番は多くの人に望まれていたというのに！！」

イリヤ「（それは私のことだけだと思っただけだなー）」

タイガ「なにか言ったかね、弟子一号？」

イリヤ「気のせいっす！ええっとそれで筆者の悩みであるネタ不足を解消しよう」と、

記録のネタを募集します。使うかどうかは保証できないそうだけど、

このままだと外伝が著しく減りそう」

タイガ「ならば、それこそわたしが……」

イリヤ「はいはい。それも筆者と読者しだいなんだから慌てない慌てない。

(それだけは絶対にならないって断言できるけど)」

タイガ「む？そうね。では次の話……って何よこれー!!」

事前に渡されていたカンペを見てトラが絶叫。

イリヤ「ああ、そのことね」

幼女が怖い笑みを浮かべた。

タイガ「認めぬ！士郎がハーレムなど、ぜっつったいに認めぬ!!」

イリヤ「落ち着いてししょー！まだ決まっていなから。

えー、現在のところ筆者は“純愛”か“強制ハーレム”か迷っているみたい」

タイガ「ええい！こうなったら筆者をやみ……」

イリヤ「落ち着けー!!」

幼女が必殺へブンズアツパーカットを放った。

トラは天井にまで吹き飛び、落下して床に衝突。

イリヤ「落ち着きましたか、ししよー？」

タイガ「う、うむ。ところで強制ハーレムっていったい？」

イリヤ「筆者いわく『士郎は堅物だから自分からハーレムを作ることはありえない。』

あるとしたら抱かなければならない状況と華琳の許可（強制）があった場合』とのこと」

タイガ「ああ。華琳って子、自分の欲望だとか国にとって良いとか考えてやっちゃいそう」

イリヤ「自分が一番なら何人とやってもって考えそうよねー」。

まあ、「知らないところで」とか「自分以上に」とかの場合は嫉妬するかな？」

タイガ「おかしな感性よねー」。

まあ、とにかくこちら読者にアンケートを取るので感想に書いてね。

多い方の方針で行くそうだから」

イリヤ「ネタの募集は締切ないけど、こっちの締切は二日後までだそうだから」



「先輩……」

刃を体中に生やした辛うじて生命活動が維持されている死体同然の青年。

「……そうだ」

彼女の姉が残したモノを取り出す。  
黒い少女は壊れた笑みを浮かべた。

「これと大聖杯を併用すれば……先輩を……。  
他の先輩を使えば先輩も一人で立てますよね？  
また笑ってくれますよね？何千・何万と吞んでもダメだったけど、  
それならいけますよね？」

しばらく壊れた笑い声が洞窟の中に響き渡る。  
壊れているが故に矛盾に気付かない。

国を呑んだ少女はこうしてその世界を去った。

着いたのは本来なら交わることないほど離れた並行世界。  
イレギュラーが起こした必然。なぜなら、第二法が魔術に落ちた世界。  
そして、数多の来訪者が訪れる世界なのだから。

「……ここは？」

「並行世界だと思うけど……」

「これは巨大ロボット!？」

「土郎？」

「この機体……コクピットとかに魔術的な仕組みが」

「動かせるの!?!」

「どうやら肉体の動きとリンクするみたいだ。イリヤこそ大丈夫か?」

「元聖杯は伊達じゃないわ!この程度の魔力消費ならいくらでも行けるわ!」

「……名前を決める?……よし!行くぞ“ブレイド・アーチャー”!」

自分たちを、そして人々を守るために正義の味方は運命に立ち向かう。

スーパーロボット大戦OG×FATE(仮)

運命は少年に試練を課す。それは果たせなかった少年の業。運命は少女に試練を課す。それは対極なる黒き杯。

|||||

タイガ「って、何で小悪魔っ子がヒロインなの!?!」

イリヤ「んー、人気の差?」

タイガ「何か?年増はちんけな道場主がお似合いだとも言っの?」

イリヤ「あー、その事なんだけどねー」

タイガ「なに?これ以上悪いことでもあるというの?」

やさぐれているトラに真実が襲う。

イリヤ「タイトル、道場じゃなくて“どうじょう”だよ」

タイガ「え？」

イリヤ「筆者いわく『道場ではなくて同情の意味を込めてタイトルを付けた』そうよ？」

タイガ「それは何か？わたしは所詮モブだから同情するとても言うのか！？」

ふぎけるなー！！筆者をぶちのめすー！！」

イリヤ「あ、ししよー。それも違つよ」

タイガ「え？だって同情なんでしょ？」

イリヤ「違つのはそこじゃないの。

筆者いわく『トラは弄られることにこそ価値がある存在だから。同情は的外れだ』だって」

タイガ「ふ、ふふふ」

イリヤ「麩？」

タイガ「ふざけてんのかー！？温厚な虎でも許せないことがある。それは虚偽報告！

【タイガーどうじょう】の看板に偽りあり！」

イリヤ「ししよー間違っているよ。【タイガーどうじょう】だから」

タイガ「なぬ？」

イリヤ「だからカタカナの“タ”じゃなくて漢字の“<sup>ゆう</sup>タ”。つまり、正確には【ゆういがー同情】なんだよ」

タイガ「誰じゃそりゃー！！！！！！“ゆういがー”なんてキャラいないでしょうが！！！！」

……殺す。筆者をぶち殺す！！！！！！」

外へ駆けだそうとするトラ。

入口で入ってきた相手と正面衝突して跳ねとばされる。

タイガ「な……ら、ライオン！？って、二足歩行で腕六本に目が八つで全長十メートル！

加えて金色に輝いているライオンって何よ！？」

イリヤ「えー、こちらは×××星からやってきた×××星のアルティミットワン。

名を“ユウイガー（仮）”というそうです」

タイガ「何よそれ！？実在したの！？」

イリヤ「本当はもっと長くて、

人に発音出来ないのを無理矢理簡単にしたから（仮）なんだって。筆者いわく、

『こんなくだらないことにアルティミットワンとして出されることに同情します』とのこと」

タイガ「マッチポンプ！！<sup>ひんがし</sup>天の意志でしようが！！



許すまじ！！天ひんがが許そうとも、我は許すまじ！！！！」

イリヤ「えー、筆者いわく『トラから身を守るために来て貰った。もし、トラが自分を狙わなければ“タイガー（仮）”は最後まで登場しなかったかも。それも含めて同情します』とのこと」

二体の猛獣が互いに暴れている。

イリヤ「ちなみに嘘予告はあくまでも嘘予告なので本気にしないで下さい。

設定だけしか考えてないので、嘘予告もおかしな点があるかもしれないし。

作者は設定だけ考えて楽しんでいるだけだから。後継機の“ブレード・ワーカー”とか、この世界で呑み込んだ機体をアンリマユで汚染・量産したりした敵軍。

そしてボス格の黒化サーバントとかラスボスとか。

まあ、誰かが代わりに書いてくれると嬉しいそうだけど。

筆者の技量では完結まで無理だからこそその嘘予告ということ」

まだまだ暴れている。

イリヤ「実際のところ、

“運命＋恋姫”も設定だけ出して代わりに誰かに書いて欲しかったみたい。

まあ、ここまで書いたからには最後まで書き切るみたいだけ。

それはさておき、かなりぐたくたになってしまいましたがここでお聞き。さよーならー」

END?

## 正義の味方の女難記録（前書き）

強制ハーレムに決定しました。

ただ、士郎と華琳の関係に変更はありません。

ちなみにハーレムは華琳のものでもあったり（笑）

ハーレム部分になる女難記録シリーズは、

読まなくてもまったく問題にならないようにするので、

純愛が好きな人は読まずにおくことをお勧めします。

また、筆者の技量不足からつまらないと思われる人がかなりいるようですので、

それを承知の上で読んでください。

以後の女難記録に関する批判・酷評は注意書きを書いた以上は受け付けませんのでご了承ください。

## 正義の味方の女難記録

定軍山の戦いは結果だけを見れば魏の勝利に終わった。だが、馬超たちと騎兵部隊には逃げられてしまった。

理由は機動力の差だ。もし、霞が率いる部隊があの場合にいたら対処できたと思うが、

仮定を持ち出しても意味がない。

俺はというと城に戻った後、自室での療養を申し渡された。

全身ぼろぼろで深い矢傷もあるため一見大丈夫に見えないのだから当然だと思う。

だが、俺には偉大なる騎士王の鞘である“アヴァロン全て遠き理想郷”があるから、

それによる治癒能力で二・三日も安静にしていれば完治する……何もなければ。

むしろ、アレが……看護という名の暴虐が再び起きるのではないかと不安がよぎる。

それを想像するだけで胃が軋む。

俺が胃を抑えていると、戸が叩かれた。

俺は嫌な想像を振り払い、相手を招き入れた。

「士郎。具合はどう？」

入ってきたのは朝食を運んできた華琳だった。

「良かった。華琳か」

「何が良か……なるほどね」

どうやら俺が例の事件の再現を恐れていることに気付いたようだ。

「安心して良いわよ。完治するまでここで私が見張るから」  
華琳は事も無げに言った。

「ちょっと待て。仕事があるだろ？」

「この部屋でやるわよ。机借りるわね」

その言葉が終わらないうちに、文官たちが書類を持ってきて、机に  
乗せていく。

少し許可するか否かを考えたが、意味がないことに気づく。

「俺に選択の余地は？」

「あるわけないじゃない」

予想通りだった。

「……土郎」

「何だ？」

華琳が朝食を俺の口まで持って来て、

「ほら、あーんして」

ちよつと待て。

やること事態はまだいい。

だが……。

「……後ではダメか？」

文官たちの前でやるのは嫌なんだが。

「ダメよ。それとも恥ずかしいのかしら？」

……口元が僅かに歪んでいる時点で、分かっている言っているのが明白だ。

本当にドSだな。

だが、今はそれよりも先ほどから背筋を凍らす視線が問題だ。

「……士郎……よくも華琳さまに……！」

俺の目はこちらを覗いて怨嗟の声を漏らす桂花ストーカーを捉えていた。

「そう言ったら後にしてくれるのか？」

「さあ？」

諦めるしかないようだ。

恥ずかしさ・居心地の悪さ・後に待つであろう

面倒事に対する心的負担の三重苦と共に味わう朝食は舌には美味く、心には甘酸っぱくも苦かった。

「……………」

視線が痛い。

「……………」

体を休めても心が休まらない。

「……………」

いや、胃がキリキリと痛む以上は体も休まっているとは言い難い。

「……………」

視線で人が殺せたら、すでに千は死んでいただろう。

桂花がこの部屋で仕事を始めて三刻も経つ。

だが、状況は全く変わらない。

華琳は桂花と俺の反応を見て楽しんでいるようだ。……トS過ぎないか？

「……華琳」

流石にこれ以上は胃が持たない。

止めて貰わないと俺の胃に大穴が開くことになる。

「仕方ないわね。桂花」

「なんでしよう、華琳さま」

相変わらず切り替えが速いな。

「いつまでもすねないの。私にとって桂花も大切な一人なんだから」

「華琳さま……………」

華琳は桂花に口づけをすると同時に手を桂花の胸へ当てる。

というか……………ここでやる気か!?

「あ……………あの華琳さま」

「私たちの関係の深さを士郎にも見せてあげましょう」

「そ、そんな！？男に見られるなんて、妊娠しますっ！肌が穢れま  
すっ！」

……想像妊娠でもするのだろうか？桂花ならありえそうで笑えない。

「あなたの提出した書類の一部に不備があつたわ。これはその罰で  
もあるの」

「！？」

桂花は華琳から罰エツチなおしおを受けたくて、時々わざとミスをする。

今回のもそうだったんだと思うが……タイミングが悪かったようだ。  
というか、それがなかったらあの状態を放っておいたのだろうか？  
嫌な想像を慌てて振り払う。

そうこうしている内に、華琳は桂花の服を脱がせ始めた。

「ダ、ダメです……！」

「あら、それにしては濡れ……」

桂花に運があつたのか無かつたのか、乱入者が現れた。

「華琳さま。れ……い……」

次に何が起こるのか分かり切っている。

俺は布団の一枚を楯代りに掲げた。

「ぶ……」

鼻血がアーチを描いた。

「……がくっ」



稟が自ら作つた鼻血溜まりに崩れ落ちた。  
よく思うのだが、あの鼻血の量でよく直ぐに復活できるよな。  
それにしても、俺は布団のおかげで鼻血から身を守れたが……。

「……………」

「……………」

二人は鼻血まみれでその場に立ちつくしている。

桃色だった空気は血の臭いで淀んだものになってしまった。

俺は通りかかった侍女に風呂と二人の着替えと代わりの布団を頼んだ。

稟はあつちからやつてくる風に任せよう。

俺は精神的な疲れからため息を一つ吐いた。

昼になり侍女が気を効かせて持ってきた昼飯を食べていた。

何事もなく昼飯が終わると思つて……いや、終わつて欲しいと思つていた。

「土郎！元気が出るように杏仁豆腐を作ってきたぞ！」

甘い考えだと分かつていても、考えては駄目ですか？

春蘭の持ってきた暗刃倒腐を前に現実逃避する俺だったが、口につつまれたソレの味覚破壊能力の前に現実へと戻された。

「( @あE ; ; \* > , - ￥ ・ 1 t , \$ < & || 6 \$ % ! ? ! ? ! ? ! ? ! ? ! ? )

「

声に出せないほどの衝撃が全身を走る。

一瞬道場が見えた。

こ、これは……！

「どうだ？より美味くなるように改良したのだ」

改悪されている！！

俺は今にも反逆しそうになる舌と胃を制御しつつ、春蘭に疑問をぶつけた。

「……どこでこれを？」

厨房では誰も作らせないはずだが？

「ああ。士郎が用意していた“移動型厨房”を使わせて貰ったんだ」

「！？」

その言葉で俺は試作品が廃品に変えられたと悟った。

……手作りだったから時間がかかったのに。

ちなみに、春蘭がかなり大量に作られたソレを厨房に置いてきたことを士郎は知らない。

ご丁寧に“皆で食べてくれ”と置手紙まで置いてきたことも。

……その結果……起きることも。

「……そうか」

「ん？元気がないな？ほら、もっと食べて元気を出せ」

……食べる元気がなくなるんだけどな。

吐き気の上に眩暈がする。

「あら？春蘭来ていたの？」

華琳が戻ってきた。

心なしか肌がいつもより瑞々しいような気がする。

……まあ、楽しんできたんだろうな。

「華琳さま！そくだ！華琳さまもどうです？」

まずい！！

「よ「そうね。頂くわ」……遅かったか」

春蘭の料理品の恐ろしい所は“見かけ”が良い事だろう。  
だから……華琳はソレを杏仁豆腐と間違えてしまった。

「（？gy2！#4・|・+\*：{^0@%！？！？！？）  
「華琳！大丈夫か！？」

俺は華琳を揺さぶった。

「……な、なんとか。……春蘭、コレはあなたが作ったの？」

華琳から凄い殺気が放たれる。

青ざめた顔が怖さに拍車をかける。

「か、華琳さま！？そ、そうですが……」

「ソレ、あなたが責任を持ってこの場で全部食べなさい」

それはいくらなんでも危険じゃ!?

「さす「士郎は黙ってて!」……」

華琳の怒声で声が止まった。

華琳が本気で怒っている。こうなっては止められそうない。

「分かりました!」

そう言つて春蘭は一気に“暗刃倒腐・改”を……食べ切つた。

あれだけ一気に食べたからこそ、異変が起きる前に食べ切れたのだらう。

けれどその反動はどれほど凄まじいものになるか想像に難くない。

「ちよ、春蘭!」

「急いで吐き出せ!」

だが、春蘭は反応しない。

「春蘭?」

春蘭は気絶していた。

「……医務室へ行こう。俺たちも診てもらつ必要があるみたいだ」

腹痛と発熱の症状が出てきたようだ。

……一口でこれほどのダメージを与えるとは。“暗刃倒腐・改”……恐るべし。

医務室は久し振りに満員になっている。  
原因は春蘭特製“暗刃倒腐・改”にある。  
皆の分が個別に用意されていたことが被害を拡大させた。  
アレを食べたものは一人残らず吐き気・腹痛・眩暈・発熱などの症  
状を引き起こした。  
ちなみに大量に食べた春蘭は先ほどまで生死の境にいたようだ。

「……ああ。せっかく楽しみにしていたメンマ丼が……」  
「……う、うう。油断してもうた。まさか、あんなもんが厨房にあ  
るやなんて」

「姐さんですか。ウチらもですわ」

「……なんかお腹の気分が悪いのー……」

「……みんな同じだ沙和。とにかく耐えるしかない」

「……みんな、すまない。姉者の罪は私の罪だ」

「そんな！秋蘭さまは何も悪くありません！春蘭さまも善意で……  
！」

「……うう。夕飯が……」

「……何事もあきらめが肝心ですよー」

「……ああ。空の彼方に華琳さまのお姿が……」

「ちょ、稟！？私はここにいるわ！しっかりなさい！」

「華琳さま！私も目の前が真っ暗に！」

「……う、うう……」

「……全滅だな……」

侍女さんたちがわざわざ全員に配ったために、全員ダウンとは。  
朝には皆が復帰できることを祈ろう。

夜、誰かが起きる気配に目が覚めた。

……目が覚めたのだが……、それまでの症状が軽くなった代わりに体が酷く熱い。

……それに本能が女性を求めているのが分かる。

……これも……後遺症なのか？

暗い中、俺の顔を覗き込んできたのは華林だった。

それにしても明らかに様子がおかしい。

目が虚ろで頬が紅潮している。

「しゅーらの料りのせえ？」

……呂律が回らない。おまけになんか華琳が二人に見える。

「……熱い……」

華琳が服を脱ぎはじめた。というか華琳の眼の光がおかしい！？  
かくいう自分も本能が暴れようとしている。  
それを必死で理性が食い止め続ける。

「……しるー……」

……このままではまずい！！

俺は逃げようとしたが、背後から誰かがのしかかってきた！

「！？」

「……しりょー……あついによだー……」

振り向くと、あきらかにイッテしまっている春蘭がそこにいた。

「しゅ、しゅんら!?!」

次の瞬間、強引に顔を掴まれ奪われるように口づけをされた。

「ぶはっ! しゅんりゃんしっか……!?!」

今度は華琳に口を奪われた。

抵抗しようとするが、体が上手く動かない!

その間に……他の眠っていた皆も眼を覚ましたようだ。

当然、眼が虚ろだ。

こうして、淫獄の夜が幕を上げた。

……気付けば翌日の昼だった。

曖昧ではあるが、ある程度の記憶が残っている。

そしてその記憶が正しいことは、完治まで二日延びたことが証明している。

……おかげで自己嫌悪し続けている。

「暗い顔しとるなー」

「……霞か」

廊下で霞と出くわした。

相変わらずハイテンションだ。

昨日のことを気にしていないのだろうか?

「すまなかつたな」

「んー？なんで、謝るん？ウチは気にしておらん……、ちゆうより、みな気にしてへんやろ」

にしては話しかけると挙動不審になる者がいるんだが。

「何人が気にしているが？」

「恥ずかしいだけやろ」

……桂花以外は確かにそうかもしれないが。

「だからと言って……」

「はい、そこまでや。」

その連中にそれ以上謝ると逆に傷つけることになるよ。それとも、士郎は嫌だったん？

ウチらに魅力を感じない？」

「嫌とは言わないし、女性としての魅力も認めている。」

だけど、皆に俺が抱いている感情はどちらかというところと友情とかそちらの感情だ。

そんな感情でするのは……」

「それでも抱いて欲しいと思う人もいると思うわ。」

謝るくらいなら、責任とってそういう子は抱いてやりなよ」

だが、華琳に対して不誠実になりたくないんだが。

「そうそう、華琳さまから伝言や。』するのは構わないわ。」

ただし、私を誰よりも愛し優先すること。私の許可を得てからにすること』だそうや」

「……」

ああ。華琳らしいと言おうか。



「ちなみに『自分も交ることがあるからそのつもりで』だそうや」

……華琳らしいな。

「『皆を背負えるだけのモノがアナタにあると期待してるわ。』

期待を裏切らないでね』とも言うてたでー？いやー、愛されとるな

」

どつやら逃げ場はないらしい。

「……最善を尽くすしかないか」

こうして、前の世界とは別の形の女性に対する苦勞が始まった。

これは正義の味方の療養記録における一日である。

## 正義の味方の女難記録（後書き）

というわけで、強制ハーレムの下地作りの回でした。

矛盾点やこつした方がより強制ハーレムの違和感を消せるという意見があったら感想をお願いします。

参考にさせていただきます。

正義の味方の女難記録【春蘭・秋蘭編】（前書き）

ハーレム部分になる女難記録シリーズは、

読まなくてもまったく問題にならないようにするので、

純愛が好きな人は読まずにおくことをお勧めします。

また、筆者の技量不足からつまらないと思われる人がかなりいるようにですので、

それを承知の方だけ読んでください。

以後の女難記録に関する批判・酷評は注意書きを書いた以上は受け付けませんのでご了承ください。

正義の味方の女難記録【春蘭・秋蘭編】

“暗刃倒腐・改事件”から数日が経った。

姉者が起こした事件は街でも（悪い意味で）評判になっている。

おかげで「夏侯惇將軍の料理は災厄を起こす」や

「泣く者を黙らせるには夏侯惇將軍の料理を出せ」などの噂も生まれた。

これが過大表現なら全力で黙らせるのだが。

……姉者が作った初めての料理で生まれた煙で泣いていた大人が気絶した。

今回の料理では主要な人材が寝込んだために業務が滞り、結果として民の迷惑につながった。

これは民にとって災厄だろう。

噂が真だからこそ、消すのは難しい。

噂を聞いて姉者が傷つくことを考えると胸が痛む。

いや、それよりも今は別に考えなければならぬことがある。

現実から目を背けても意味はない。

「あら？秋蘭、どうかしたの？」

「ああ、桂花か……」

「何よ、その言い方。って隈が出来ているわよ？」

「……そうだろうな。どうしても眠れなくてな」

「……“暗刃倒腐・改事件”の責任についてかしら？」

「そつだ……」

あれだけの事を起こしてしまった以上、お咎めなしとはいかない。

まして、華琳さままで巻き込んでしまったのだ。

姉者には厳罰が下されてもおかしくはない。

あの事件から私はどうすれば姉者の罰を軽くできるか考えている。

だが、未だ名案は思い浮かばない。

「諦めたら？春蘭の自業自得なのだから」

「そんなことはない！私が姉者に真実を告げていれば……！！」

「それはあなただけじゃなくてアイツも……そうね。一つ良い案が思いついたわ」

桂花が笑みを浮かべた。

まるで悪魔のような笑みだったが……この事態を乗り切れるなら悪魔でも構わん！

「本当か!？」

「ええ。けど、あなたに春蘭と一緒に罰を負う覚悟はあるかしら？」

「当然だ！」

「私が思いついた案は……」

桂花の案は名案だった。

今の時点でならソレは罰になる。

そして責任を複数で背負うという名目で軽い罰だと説明できる。

私は華琳さまに話をつけに走りだした。

## 《翌日》

SIDE 春蘭

ようやく復調したわたしだが、ひどく暗い顔をしているだろう。

あれから皆（というか桂花）に責められた。

私は自分の料理の腕はそれなりだと思っていた。

だが……違った。

あれほど酷いモノだとは想像もしなかった。

アレは言葉に表現できないし、すべきでもないモノだった。

大量に一気食いをしたわたしは医務室で今日まで療養するはめになった。

そんなモノを華琳さまに食べさせてしまった。

わたしはなんてことを。

おまけに副作用であんなことに……。

「春蘭？」

「し、士郎!？」

廊下で士郎と鉢合わせた。

士郎の顔を見たことであの時の光景が浮かんできた。

「す、すすす、すすつ、す、済まなかったな！」

そう言つてわたしは逃げ出していた。

きちんと謝るべきところだというのに！

だが、恥ずかしくてあの場に留まっていられなかった。

「う、うう。わたしは何をやっているんだ？」

……もともと士郎のことは嫌いではなかった。

男など貧弱で話にもならない奴ばかりだった。

そんな中、士郎はわたしと互角に戦ってみせた。

というか、未だ引き分けが継続中だ。

華琳さまのための服を作ってくれた。

捻くれた形ではあるが、作り方まで教えて貰った。

勉強を教えて貰った。

おかげで桂花に嵌められなくなったため、華琳さまに可愛がってもらえる機会が増えた。

料理を教えてもらった。

……療養中に秋蘭からあの日のことを聞いて思い出した。

料理が原因で倒れたわたしを士郎が必死で助けてくれたことも。

……考えれば考えるほど士郎には迷惑しかかけてないことに気づく。看病しようとして“暗刃倒腐”を食べさせてしまったとか。

士郎は最後までわたしに気づかせず食べ切って見せた。

病床の身だったのに。

そういう下地があったから、

事件以来、わたしは士郎を“男”だとはっきり意識するようになったのだと思う。

「姉者」

秋蘭がわたしに駆け寄ってきた。

わたしは意識を切り替えた。

「秋蘭？どうかしたのか？」

「華琳さまが呼んでる。行こう」

……事件の責任の件だろうな。

けど……責任を取らない方が苦しい。

皆に、そして華琳さまに迷惑をかけたのだから。

玉座の間には華琳さまの他に秋蘭・桂花・士郎そして何人かの親衛隊がいた。

わたしは華琳さまの前に出た。

「さて、春蘭。あなたには、罰を受けてもらっわ  
「はい……」

厳罰を受ける覚悟はある。

ただ、……華琳さまが今回の件で単純な罰を与えてくれるとは思わ  
ない。

出来れば鞭打ちとか、断食とか、全ての生爪を剥がすとかならいい  
のだが。

「三つの中から好きな罰を選びなさい」

鞭打ち・断食・生爪剥がしが入っていますように！

「土郎、春蘭を犯しなさい」

周囲が静まり返る。

頭の中が真っ白になった。

「……華琳。どうも俺の耳はおかしいみたいだ。春蘭を犯せと聞こ  
えただけど？」

もう一度言ってくれないか？」

「あなたの耳は正常よ、土郎。春蘭を抱きなさいと言ったわ。  
ついでに言っと一晩中眠らせないようお願いい」

ようやくわたし言われた内容を理解した。

「そ、そんなあ……。それだけは、ご勘弁を……」

会話すらおぼつかない状態なのに1



「……そんなに嫌なの？経験済みなのに」

「……はい」

「ならふたつめ。……桂花」

なぜ桂花が呼ばれるのだろうか？

「あなたの思うがままに、春蘭を可愛がってあげなさい。方法は全てあなたに任せるわ」

「はいっ！」

桂花が歓喜の表情を浮かべている。

まずい！桂花のことだから想像もつかない責めをねちっこくやってくるに決まってる！

絶対に酷い目に合わされる！

「み、みつつめは!？」

「せっかちな。みつつめは……」コレ」

華琳さまが取りだしたのはここ最近よく見慣れたモノだった。

真桜が作ったいわゆる大人のおもちゃだ。

これなら……。

「顔が見えないように覆面をかぶった上で、全裸でコレをつけて街を一日歩きなさい」

無理でした。

というか、それをしたら人として終わっている。

「さあ、選びなさい」

「う、うう」

「選びたくはない。けど、選ばないと全部やらされるかもしれない。なら……。」

「…………… 士郎が、いいです」

「あら。聞こえないわね」

「し…………… 士郎に犯されるのがいいですっ!」

「せ、責任を取るとは覚悟してたけど…………… どうしてこんなことにな……………」

「…………… 華琳。俺の意思は無視か?」

「あら? そもそも春蘭に料理の腕を自覚させなかったのは誰だったかしら?」

「ぐっ!」

「誰かさんが教えていれば、春蘭も罰を受けずに済んだのにね。その辺りはどう思う? 自分の行動に責任を持つと常々言っていたけど。」

「士郎が犯さないせいで、春蘭はいつたいどんな目に会うのかしらね?」

「…………… 分かった」

「なんだその間は?」

「そんなにわたしを犯すのは嫌なのか!? 少し腹が立った。」

「けど…………… それを言うと秋蘭も同罪ね。士郎、秋蘭も犯しなさい」「華琳さま!?!」

秋蘭まで付き合う必要は……！

「いいんだ、姉者。姉者の罪は私の罪でもある。

姉者が罰を受けるのに私だけ罰を受けずに済ませることの方が辛い」

「秋蘭……」

わたしは……本当にいい妹を持った。

「ふがない姉で済まない、秋蘭」

「いいさ。姉者が姉だからこそ、私は頑張れるのだから」

「納得したところで士郎の部屋へ行くわよ。それともこの場で済ませた方が良いかしら？」

「『すぐにいきます！！』」「『』」

こうして華琳さま立会の元、士郎としたのだった。

## SIDE 秋蘭

私は火照った体を冷ます為に城壁に佇んでいる。

「どうだったかしら？」

振り返ると桂花がいた。

「悪くなかった。まあ、士郎の事はどちらかというところ好きだからな」  
「そう。まあ、私には理解出来ないし、するつもりもないけど、良かったわね」

桂花の案の通りに、華琳さま主導の元での行為を罰してもらった。これで三人とも罰を受けたということ、この件はお終いとなる。私は華琳さまが受け入れてくれるか不安だったが、桂花は自信があったようだ。

「桂花は どうして華琳さまが受け入れてくださると思ったんだ？」

「正直に認めたくはないけど、華琳さまにとって士郎は大切な存在だわ。」

「だけど、アイツは覇道を達成したらいなくなるかもしれない。」

それを防ぐための楔は多く、深い方が良いに決まっているわ。」

だから華琳さまにとっても今回の件は悪くないから受け取ってくださると思ったの。」

なるほど。」

それにしても、あの件があるにも関わらず、よく桂花は士郎のことを平静に語れるな。」

正直に言っと、士郎を毒殺ぐらいしかねないと思ったんだが。」

「桂花は士郎とや……。」

「アレは華琳さまへの奉仕で、士郎は道具に過ぎないわ。」

どうやら、アレをそう位置づけたみたいだ。」

「それで良いのか？」

「……本当は良くないけど、華琳さまのために“最善”を我慢するだけよ。」

“最善”は士郎の排除なのだろうな。」

「だから、“次善”として今回の案を出した訳か。」

「さあ、何のことかしら？」

とぼけているが、今回一番得をしたのは桂花だろう。

私や姉者が土郎とやるようになれば、華琳さまの閨が空いて自分が代わりとなる。

閨の邪魔者である三人をまとめて減らせるのだから、一石三鳥と言っ  
つていい。

まあ、姉者のあまり見られない可愛い姿を堪能できだし、  
姉者も悪い気はしてないようだから、時々なら良いだろう。

……逆に割を食ったのは土郎か。負担が三倍になったのだから。

……その辺りは責任の内ということで我慢してもらおう。

ちなみに土郎は精根尽きはて、せっかくの休日を睡眠で潰した。

まあ、いつものことだから誰も気にしなかった。

これは私と姉者の記録であり、土郎のとある一日の記録だ。

正義の味方の女難記録【凧・沙和・真桜編】（前書き）

前回は今一つだったので、頑張ったら本篇並みに長くorz  
ハーレム部分になる女難記録シリーズは、

読まなくても良かった問題にならないようにするので、

純愛が好きな人は読まずにおくことをお勧めします。

また、筆者の技量不足からつまらないと思われる人がかなりいるよ  
うですので、

それを承知の方だけ読んでください。

以後の女難記録に関する批判・酷評は注意書きを書いた以上は  
受け付けませんのでご了承ください。

正義の味方の女難記録【凧・沙和・真桜編】

“あの事件”からしばらく経ち、  
巻き込まれた皆はそれぞれ自分なりに割り切ったようだけど……。

「はあ……」

私は未だ割り切れず、ため息ばかりついている。

「探したぞ、凧」

このごろ隊長のことばかり考えてしまう。

戦の時は泰然自若で冷静な将であり、素の時はどこか素朴で子供の  
ような人。

「聞いているか、凧？」

初めはその武と知に尊敬の念を抱いているだけだった……。  
けれど、部下として接している内に……。

「凧？」

決定的だったのはあの時だろう。

その日も敵軍と戦っていた。

結果は当然快勝した。

だが、隊長は少しも嬉しくなさそうだった。

考えれば、敵軍に勝利して隊長が喜んだ事は一度もない。  
むしろ……悲しげだった。  
無表情なのに眼が悲しげだった。

「隊長は敵に勝って嬉しくないのですか？」

だから私は隊長に尋ねた。

「……そうだな。嬉しくはないな」

「どうしてですか？これで華琳さまの覇道は前に進んだのに」

「だが敵にしる味方にしろ、戦争で亡くなった者たちがいる」

「確かにそうですが、それは仕方がないことだと思えます。」

私たちはそれを覚悟の上で戦っているんですから。

それに敵は倒すのは当然のことでは？」

私の言葉に……隊長は静かに答えた。

「仕方がない」か。そうなのだろうな。それが当然なのだろう。

だが、私は……それを“仕方がない”で済ませたくはない。

それが真理だとは分かっている。それでも私はそれを当然だと認めることだけはしたくない」

「……何故ですか？」

「亡くなった者達にとって、どんな大義名分を出したところで関係ないことだ。

……人によっては関係があるかもしれないが、その家族にとっては関係ないだろう。

私たちは自分たちのために“人殺し”をしている。それは覆らない。だから、せめて自分だけでも己の行為を“仕方がない”で正当化し  
たくない。



例え自分の自己満足に過ぎなくてもな」

「……辛くないんですか？」

「それが“仕方がない”で終わらせないということだと私は思っている」

隊長はいつもそう思っていたのだろう。

だから私は……隊長を弱いと思った。

いつだってこうして心を痛め続けるのだから。

だから私は……隊長を強いと思った。

どれだけ心を痛めようと、止まることなく進み続けるのだから。

だから私は……その痛みを理解しようと思った。

本当は痛みを和らげてあげたいけど、それは出来ない。

その痛みを忘れることなく刻むことが隊長にとって譲れないことだから。

この日、私は隊長への想いが恋に変わっていることに気づいた。

恋をしたところで実らないと初めから諦めていた。

隊長と華琳さまの関係を考えれば当然だ。

ところが、“あの事件”が事態をややこしくしてしまった。

私は……私の気持はどうすれば……。

「おーい、尻！」

突然揺さぶられ、私は前を見た。

そこには隊長がいた。

「た、隊長！？どうしてここに！？」

「……さつきから居ただけだな。」

それにしても、ここ最近うわの空だな。何度も呼んだんだが」

「す、すいません!」

「……やっぱり、俺のせいか?」

まずい!

隊長が“あの事件”を気にしていることは霞さまから聞いている。隊長をこれ以上落ち込ませる訳にはいかない。

「そんなことはありません!」

「けど、あの日から……」

「少なくとも私はうれ……!?!」

私は何を言おうと!?

「し、失礼しました!」

私はその場を離脱した。

私は自室で椅子に座りながら落ち込んでいる。

あそこで逃げだすなんて……。

私の臆病者。

考えれば考えるほど自己嫌悪してしまう。

「凧ちゃん、どうしたのー?」

隊長は華琳さまの大切な人なのに私は……。

「凧？」

それに……私は全身傷跡だらけだ……。こんな女として失格な私が……。

「凧ちゃんつてばー!!」

「……沙和？どうかしたのか？」

「それは沙和の台詞なのー！さっから声をかけてるのに、聞いてないみたいだしー」

どうやら思考に没頭しすぎていたようだ。

「すまなかつた。別にどうかしたわけじゃ……」

「嘘なのー！このごろいつももうわの空なのー」

「そんなことは……」

「あるに決まっとするやないか」

「!?!」

真桜!?

「い、いつから!?!」

「……最初からや」

……気付かなかった。

「はあ。本当に重症やな。やっぱり“アレ”が原因か？」

「そ、そんな！隊長は何も関係……」

「真桜ちゃんは隊長なんて一言も言っていないのー」

うう。どうしても過剰に反応してしまっ。

「師匠のことが好きなんやろ？」

「なっ!?!」

「凶星なのー」

「ばればれやな」

頬が紅く染まるのが自分でも分かる。

「だったらどうだと言っただ！」

「お、認めた」

「認めたのー」

「……人をからかいに来たのか？」

今なら最高の威力の気弾が放てそうだ。

「お、落ち着いてなのー!ほら、お茶でも飲んで!」

水筒に入れたお茶を沙和が差し出してきた。

あまり見ない茶だが……。

「いつものとは違うんだな？」

「そっや!なんせ            もしたんやで!」

「な!?!」

私たちの一か月分の給料と同じ値段だと!?

「……そうか。気を使わせてしまったみたいで悪かった」

「ええから飲んでみてや!」

「特別なお茶なのー」

まず、一口飲んでみた。  
口の中に芳醇な香りが広がり、喉を過ぎた後も心地よい余韻を残した。

「……美味しい」

「でしょ、でしょ！」

「高い買い物だから当然やな！それと、ええ話もってきたんや！」

真桜の顔に笑顔が浮かんだ。

……私は真桜のこの笑みを何度も見てきた。

それは……悪だくみの時によく浮かべる。

本能が警鐘を鳴らした。

「いい話？」

「華琳さまに頼んで、今夜隊長に夜這いの許可を取ってきたんや」

「ぶっ！？」

今何と！？

「華琳さまに凧ちゃんの重傷具合を報告したのー」

「そしたら許可ももらえたでー」

“夜這い”という言葉に思考が凍結した。

「凧ちゃん？」

「あかん。また、思考が止まっとる。てえい！」

「痛っ！」

どうやら意識が飛んでいたようだ。けど、拳骨で起こさなくてもいいだろうに。

「それじゃあ、まずはお着替えなのー」

沙和が鞆から可愛らしい服を取り出した。  
私は突然の話題の進行に混乱した。

「沙和！？何故いきなり着替えになるんだ！？」

「もちろん、隊長に尻ちゃんの魅力を知ってもらい、夜這いの成功率を上げるためのなのー」

「師匠は堅物やから、やれること全部やっつくべきや」

ちよつと待て！私は夜這いを承認していないぞ！

「私は……！」

「ああ。言つとくけど、しないのは無理や。華琳さまにお手数をかけてしもたんやから」

「いろいろ下準備までしてもらったのー」

……天は私を見捨てたらしい。

隊長にこんな傷だらけの体を見せることになるなんて……。

「……非常に不本意だが、それは干歩譲って諦める。

けど、そんな服は私には似合わない！」

服の出来栄えは見事で可愛いと思う。だからこそ、傷だらけな私が着ても無様なだけだ。

「そんなことないで。もつと自分に自信を持たなあかん」

「そうなのー。それにこの服は隊長が作ったものなのー」

「隊長が！？」

その言葉に心が惹かれたが、すぐに打ち消す。  
それなら余計に私に相応しくない！

「だ、だったら余計に私が着るわけには……！」

「本当に頑固やなー」

「まったくなのー。……けど、諦めるつもりはないのー」

私は逃げようと椅子から立ち上がるうとした。  
だが……。

「か、体が!？」

体が上手く動かない！

おまけに感覚が鋭敏になっているような!？

「どうやら薬茶の効果は抜群みたいやな」

「これなら隊長に使っても上手く行くのー」

私は二人に嵌められたことに気付いた。

「沙和！真桜！最初から……!!！」

「何年一緒にいると思うてるんや?」

「凧ちゃんの考え方は良くわかってるのー」

二人が服を持ってにじり寄ってきた。

「よ……よせ!」

「問答無用」

……二人に着せ替え人形として弄ばれた。  
すぐに本命の隊長作品を着せればいいものを、  
他に似合うのがあるかもとか言って、半刻ばかり着せられては脱が  
された。

「……二人とも、後でおぼえてろ」

「こわいのー」

「ま、まあとりあえず隊長に見せるで」

その言葉に二人の目的を思い出した。

「こ、こんな姿を隊長に見られたら……!!」

脳裏に隊長の落胆する光景が浮かぶ。

「往生際が悪いのー」

「そろそろ時間や」

部屋の戸を叩く音がした。

「どつぞなのー」

「さて、お披露目や」

そして……。

SIDE 士郎

「言われた通り来たぞ。それで話……」



部屋に入ると、にやにや笑う沙和と真桜、  
それに今にも泣きそうな女の子らしい服装の凧がいた。  
いつもは簡素でおしゃれな格好をしない凧だが、  
やはりこうして見ると可愛い女の子なのが良く分かる。  
もう少し自分に自信を持てば良いのにな。

「どうしたんだ、凧？今にも泣きそうな顔をして」  
「う、うう、うわあああああん！！！」

凧が大声で泣き出した！  
って、何故！？

「お、おい！二人とも、事情を説明しろ！！」

凧から相談があると言って俺を呼びだした二人に説明を求めた。

「似合わないって思い込んでる服装を隊長に見られたから泣いてるのー」

「ちゅーことで、師匠に慰めて欲しいんや」

つまり、最初からこれを企んでいたということか。

まあ、凧が全身にある傷を気にしているようだし、荒療治も悪くないか。

「凧、泣くことはないと思うぞ。よく似合っている」  
「ぐすつ。本当……ですか……？」

「本当だ。凧は可愛い女の子なんだから似合って当然だ」

だが、凧は俺の言葉に頷けないようだ。

「私は……ぐすっ……傷だらけで……ぐすっ……」  
「傷だらけだろうと、関係ない。誰が見ても凧は可愛いよ」

俺の素直な言葉にようやく凧は泣きやんだが、それでも信じられないようだ。

「隊長は……優しいですから、慰めるために嘘を……」

さすがに凧の自虐に腹が立った。

「信じられないか？なら、証明するぞ！ついてこい！」

俺は凧の手を引っ張った。

「え！？きゃっ！？」

「と、大丈夫か！？」

何故かは知らないけど、凧はふらふらしている。

「だ、大丈夫です！」

「きつと、泣き過ぎて力が上手く入らないのー」

「しばらく抱っこして運んであげたらどうやる？」

その言葉に凧は紅くなった。

さすがに男にそれをされるのは恥ずかしいから当然か。

「必要ありません！！（二人とも後で覚悟しろ）」

凧は見るからに過剰な力を入れて、歩きはじめた。

「そうか、それじゃあ行くでしょう」

俺は逃げないように手を掴んで駆け出した。

S I D E  
凧

強引に隊長に引つ張られた私は城内中の者に晒しものにされた。だが、意外な事に皆が似合っていると云ってくれた。

最初は信じられなかったが、会う人全てが褒めてくれた。

一部、敵意を向けられた。

隊長曰く、嫉妬だそうだ。

それでも信じられなかったけど、華琳さまたちまで褒めてくれた。

私は……傷だらけの体を武人としては誇りに思っていた。

けど、女としては常に劣等感を持っていた。

だから、女としては自信など持ちようもなかった。

けど……初めて女として自信を持ってそうに思った。

隊長と別れた後、華琳さまに呼びとめられた。

「そうそう、凧」

「何でしょう?」

「特別に今日は譲ってあげるけど、制限の事を忘れないでね」

私は夜這いの件を思い出した。

顔が紅潮した。

けど、引つかかる言葉を聞いたので尋ねることにした。

「制限？」

「まず、一人ではやらないこと」

イミガワカリマセン。

「要するに、一体一でするのは私だけの特権ということよ」  
「了解しました」

まあ、仕方が……！？

「それでは今日も！？」

「聞いてないの？沙和と真桜も一緒よ」

……あの二人……絞める！

「……他には？」

「どのように士郎としたか、報告書を書いてもらっわ」

……はい？

「そ、それは……」

「できるだけ克明に書いてもらっからね。拒否は許さないわ」  
「な、何のために？」

華琳さまが悪い笑みを浮かべた。

「士郎に“再現”させるのと、言葉攻めにちよっとな」

……聞くんじゃないかった。

「後は私が最優先だから、事前に私の了承を得ておくこと。重なるようならずれてもらうから」

「えっと、それは？」

「次回からのことよ。それとも一回だけで満足できるのかしら？」

私は……了承した。

そして、華琳さまは去り際に……。

「ああ、言い忘れていたけど、最後の制限として“私”もあなたたちを抱くかもしれないから。その時は拒否できないわよ」

爆弾発言をして去って行った。

「え！？」

華琳さまの女性好きは有名だ。けど……。

「き、きつと冗談ですよね」

自分に言い聞かせた。

さもないと挫けそうだから。

私は部屋に戻り、二人と合流した。

……もちろん、相応の報いは受けて貰った。そして……決行の時が来た。

私は高まる心を抑え、隊長の部屋の前に立った。戸を叩く。それだけのことなのに、汗が流れた。せつかく風呂に入って身を清めたのに。

「どうしたこんな時間に？」

隊長の姿を見て、心臓が暴れ出したように感じた。

「た、隊長にお礼が言いたくて！少し良いでしょうか！？」  
「構わないけど……少し緊張しすぎじゃないか？」

これからする事を考えれば緊張しない方がおかしい。

「お邪魔しますなのー」

「お邪魔するで」

「二人も来たのか？」

普段通りの二人は例外みたいだが。

「いやー、ウチらの問題に巻き込んでしもうたんやから詫びないか  
んと思うてな」

「お菓子やお茶を持ってきたのー」

「そうか。とりあえず部屋に入ってくれ」

SIDE 士郎

「隊長、あの豪華な寝台は？」

「……この間、華琳が買ってきた」

部屋に入ってきた風が疑問を呈した寝台は、春蘭の件で壊れた寝台の代りに華琳が買ってきたものだ。

【これからも四人ですることもあるから】と。

……俺に拒否権はなかった。

正直、本当の意味で愛せるのは華琳だけだと思う。もちろん、皆に魅力を感じないわけではないが、それでも華琳のようにはいかないと分かっている。その事は華琳に言った。

【責任を取ると言った以上、全力で責任を取ることには変わりはないでしょ?】

アクマの笑みで釘を刺された。

不器用な俺にどこまで出来るか分からない。とりあえず、出来る範囲で頑張るしかないか。

そうこう考えているうちに準備が整えられたようだ。

「まあ、とりあえず隊長からのー」

「そうや、侘びなんやから隊長に一番に味わってもらわなあかんやろ?」

そういつて進められたが、正直に言つと嫌な予感がした。

「そうだな。頂くよ。けど、気を遣わせるのも悪いから皆も食べてくれ」

「なら、遠慮なく!」

「まずはこれを食べるのー」

「では、私も」

お菓子とお茶を三人は味わい始めた。  
どうやら気の所為だったようだ。

……何か仕込んでいるんじゃないかと思っただけだ。  
お皿と湯呑はこの部屋にあったものだからな。

「それじゃあ俺も頂くよ」

……お菓子とお茶はどちらも美味だった。

「どこで買ったんだ？」

後で作り方を探ろうと尋ねた。

「そういえばどこで買ったんだ、二人とも？」

「旅商人や」

それではレシピを知るのは難しいか。

「あ、あの隊長……」

「どうした、凧」

拳動不審なのは、まだ女の子らしい格好になれてないからだろうか？

「そ、その……」

だが、それだけではないような？

「わ、私たちを抱いてください」



脳がその情報を理解することを拒否するため、フリーズした。

「隊長！返事は！？」

揺さぶられてようやく情報が正しく理解された。

「……俺が華琳を愛していることを分かっていて……」  
「当然やる」

「華琳さまから許可は貰ってるのー」

俺はすでに外堀を埋められていることを知った。  
それでも、俺は足掻くことにした。

「三人ともそれで良いのか！？」  
「当然です！私はそれでも構いません！」  
「沙和ものー。隊長はカッコイイし、後宮の一員で良いのー」  
「ウチもや！……それに試作品を師匠で試すのはおも……げふっ、」  
「ふっ」

いろいろ気になるが……真桜の言葉が一番気になる！  
そういえば、お菓子だけにしてお荷物が多いと思っていたが……。

「真桜？お前が持ってきた鞆に詰められているのはナンダ？」  
「師匠の想像通りやと思うでー」

嫌な汗が流れる。

「そんなの大人のおもちゃの試作品たちに決まってるやない」

聞きたくなかった！そして見たくなかった！  
真桜は明らかに用途が分かるものから、  
分かりたくないものまでイロイロと取りだして見せた。

「抱くのは了承しよう。だが、今日は日が悪い。後日にさせてもら  
う！」

封印したアーチャー口調になりつつも、俺は逃げようとした。  
……………逃げようとした。

「か、体が！？」

だが、体が動かなかった。

「まさか薬！？」

どうやって！？

「実はあの薬茶、あの菓子を食べると女には効かなくなるんよ」

「逆に男には効くようになるのー。それも三倍増なのー」

「隊長、お覚悟を」

体の感覚が鋭敏になっているのが分かる。そして動けない。とどめ  
に意識は明確だ。

誰だ！こんな物を作ったやつ！！

「へっくしー！」

どこかの荒野で熱血漢な医師がくしゃみをした。

俺の憤怒の念は、にじり寄る三人によって打ち消された。  
冷や汗が止まらない。

「こ、これは“抱く”ではなくて、“抱かれる”じゃ……………!!!!」  
「「「問答無用」」」

こうしてドーピングと試作品たちによって朝には干からびた……………。  
おまけに……………副作用で体温が三十四度になった。

それでも溜まってしまった仕事を休むわけにもいかず、最後までこ  
なしてからぶっ倒れた。

とどめに……………完治後に華琳からの説教を受けた後、  
副作用を無くした改良型の薬茶と完成品の大人のおもちやたちで……………。

これは正義の味方の女難記録における、部下三人による一日である。

## 正義の味方の仕官記録7

その悪夢のきつかけは華琳から頼まれた仕事だった。

「倉庫の整理？」

「ええ。いろいろ美術品を手に入れたことだし、一度整理しようと思っの」

それは分かる。分かるが…。

「俺がやる必要はなさそうだけど？」

こういった整理関係はいつも侍女たちの仕事なはず……俺がやるうとしても、

その理由で断られ続けている。

「……普通はそうなんだけど、今回は士郎の力を借りる必要があるの」

「俺の力？」

道術絡みだろうか？

「せっかくだから、倉庫の品の鑑定を頼みたいの」

「なるほど。それなら俺が適任だな」

物品の解析をすればよっぽどの例外でもなあ限り、判明する。

「（まあ、士郎に自慢したいしね）」

何故か上機嫌な華琳を訝しげに思いながら倉庫へと向かった。

倉庫に着くと先客が二名いた。

「季衣と流琉も来ていたのか」

「うん。せっかくだから見ておくようにって」

「それにちょうど暇でしたから」

二人とも楽しそうなのは良いんだけど……。

「美術品には壊れやすい物も沢山あるから注意してくれ」

もともと、壊れにくい品でも（物理的に）壊す機械音痴にして、宝石剣で城ごと芸術品を破壊しつくした【うっかり魔術師】に比べれば問題ないと思うが。

いや、比べる相手に問題がありそうだけど……。

「入るわよ」

倉庫入ると以外に広く、そして大量の品がしまわれていた。

「それじゃあ全て外に運ぶわよ」

一刻後、全ての品が運び出された。

「華琳、血止めをしなくていいのか？」

「いいわよこれくらい。(……土郎に舐めてもらったし)」

華琳が指先を少し紙で切ってしまったが、  
本人が問題ないという以上は放っておくしかないか。

俺たちは臨時に組み立てられた天幕の中で鑑定を始めた。

「これは……」

「それは倭の国からの輸入品よ」

火焰土器……日本最古の国宝として有名な土器だ。

「なんかカツコイイね」

「面白い形の土器ですね」

「火焰土器……しかも損傷がどこにもない。これは良い仕事してる  
な」

「やっぱり貴重な品なんだ」

「ああ。もともと貴重な上、完品だからな。値段なんてつけられな  
い」

なんせ国宝だ。

「次は……」

ペルシャ 緑釉耳付壺……良い品だが……。

「これはどこで？」

「旅商人から母様が一括で買った品だけど？」

これ……五世紀に作られた品の筈なんだけど!?

ま、まあ並行世界だからこれぐらいは誤差の範囲……なのか？

「どうかしたの兄ちゃん？」

「何か気になることでも？」

「いや、何でもない。そこそこの品だな」

「なら、実用品として使用しましょうか」

まあ、城で使っている品の値段と同じだからな。

「次は………！?!？」

「どうしたの？……ああ、これ？さっきの品と一括で買われた品の一つよ。」

これって最初は光を放ったんだけど、直ぐに使えなくなって……」

か、懐中電灯だと?!しかも、日本の一般家庭で使われているような!

「……………」

「兄ちゃん！これは？」

「季衣！順番に見ていくんだから勝手に開けちゃダメでしょ」

季衣が手に持っていたその品は……。

「ル、ルトルブレイカー“破戒すべき全ての符”だって!？」

ルトルブレイカー“破戒すべき全ての符”

……あらゆる魔術契約を断ち切る宝具なのだが……。  
これって……。

「……俺が作った品じゃないか」

そう俺の投影品で間違いない。  
けど、なんでこの場所に!?

「へえ、兄ちゃんが作った品なんだ!切れ味はどうなのかな?」

「こら、季衣!振り回しちゃ……!」

俺はこの世界で“ルールブレイカー破戒すべき全ての符”は投影していなし、  
出来ない。

「あつ!?!」

「箱に!?!」

「嘘!?!それ今までどうやっても開かなかつたのに!」

ならば可能性として考えられるのは……。

「中身は……鎖で巻かれた杖?」

「とりあえず、はずしますね」

「かわいい形だね。羽があつて」

“鎖で巻かれた杖”という言葉で忌まわしき記憶と共に全てを悟つた。

あるはずのない品は……遠坂の“宝石剣起動実験”で飛ばされた品か!!--

いや、それより問題なのは、行方不明になった品の中に……!!

『いや〜!ひさしぶりの娑婆の空気は美味しいですね〜』

愉快型最悪魔術礼装があつたことだ!



「しゃ、しゃべった!？」

「うそ!？」

「こ、これはいったい!？」

俺は無言で黒鍵を投影した。

「……壊れる!?!」

俺は破壊対象に対して本気で投擲した。

『わっ!もう士郎さんったら。相変わらず激しいですね。(笑) 懐かしい人に再会できて、ルビーちゃん感激です!』

「私は二度と見たくなかったな。よってここで永遠に別れさせて貰おう!」

平和を守るためにも!!二度と悪夢に会わないためにも!

『つれませんね。……それにしても似合わない口調でツンツンしちゃって。』

いつの間にかすっかりツンデレですね。(笑)』

俺は溢れる殺意をカレイドステッキの人工腹黒精霊マジカルルビーに向けた。

カレイドステッキ……

契約者に第二法を利用した変身を“強制的”に行わせる魔術礼装。

こいつのせいで俺は……遠坂のとばかりを食らって……!!二度と悪事を起こせないように、嚴重に封印したというのに!

「問答無用だ!!ここで消えろ!!」



「きゅー……きゅーきゅーきゅーきゅー……《俺は……止められなかったのか……》」

ん！？視点がやけに低い！？

「か、かわいい！」

「本当！見たことない動物だけど！」

俺は美術品の中にあつた鏡を覗いた。

……移つたのは……ハリネズミらしき生き物。

まさか……！？

よろめき俺は支柱にぶつかった。

ドスつという音が背後から聞こえた。

おそろおそろ振り返ると……柱を針が貫通していた。

どんなハリネズミだ！！

触ろうとしていた季衣と流琉は冷や汗を流しながら、手を引っ込めた。

『いやー。魔法少女にはマスコットが不可欠ですから。土郎さん、似合ってますよ（笑）』

「きゅー……！！《ふざけるな……！！》」

俺はルビーに殺意を向けると……大量の針がルビーに向かって飛んで行った。

「きゅー！？キョー……！？《な！？なんでさ……！？》」

『やっぱり最近のマスコットは戦えませんとね』

「シエロ！行くわよ……可愛い少女の呼ぶ声が聞こえたわ！」

ルビーの洗脳能力で暴走する華琳に掴まれ、俺は華琳に引っ張られていった。

というか、魔法少女になっても少女好きは変わらないんだな……。

後には茫然とする少女二人が残された……。

「おうおう姉ちゃん？よくも服を汚してくれたな？」  
「ひっ！？」

がらの悪いゴロツキ数人が気弱そうな美少女にいちゃもんをつけている。

「お頭！急がないと警備隊が！」  
「そうだな。姉ちゃん、ちょっとこいや」  
「イヤ！誰か助けて！！」  
「助けなんて……！！？」

ツンツンツンツンツンツンツンツンツンツンデレ！  
ツンツンツンツンツンツンツンツンツンツンデレ！  
ツンツンツンツンツンツンツンツンツンツンデレ！  
ツンとデレの黄金比〜九対一なの〜

辺りに場違いなBGMが流れ出す。

「そこまでよ！」  
「だ、誰だ！？」

ゴロツキリーダーが振り向くと、民家の屋根に一人の少女がいた。

「神も仏もこの世にいないが、魔法少女はここにいます！  
我を崇めよ！奉れ！ならば助けてあげなくもないわ！  
べ、別にあなたのためにきたんじゃないからね！  
魔法少女カレイドかりん！ここに見参！」

場が凍りついた。

「……………これが噂の変態か？」

「……………きゅー《…別口だ》」

かちょうかめん  
変態が乱入しないことを祈ろう。  
ややこしくなる。

「あら？下衆で低能で醜くて節穴なんて、生きる価値が見当たらないわね？」

「なんだとテーマー！！皆やっちまえー！！」

「遅いわ」

魔法少女は残像を残すほどの速さでゴロツキどもを秒殺した。  
生きてるけど。

「じ、こんな……………」

「さて、お仕置きのお時間よ？」

華琳は俺を掴み……………。

「えい」

「きゅー！きゅー！きゅー！！《痛て！ちょ！止めてー！！》」

俺の針を人数分抜いた……。

「それじゃあ、逃げられないように……」

ゴロツキに針が打ち込まれていく。

「か、体がうごかねえ!!」

「さて、あなたたちが身の程を知るために“治療”してア・ゲ・ル」

……そこからは阿鼻叫喚だった。

俺とゴロツキたちにとって。

俺は無理矢理に針を抜かれ、即座に針が生え、また抜かれを延々と。ゴロツキたちは全身に針を打たれ、激痛に身をよじった。

「も、もうや……ぎゃっ!!お、俺たちがわ……アあぁっ!!」

「何を言っているのか分からないわ。きっちり最後まで言ってもらわないと」

「おかあちゃーーン!!!!」

「あはははははは!!!!!!」

ゴロツキたちは最後まで言おうとすると、針による激痛で言葉を封じられた。

結局、全員が気絶するまで続けられた。

「ふう。楽しかった」

満足そうな笑顔を浮かべる魔法少女に、助けられた少女が駆け寄った。

「あ、ありがとうございます!!」

「べ、別にあなたの為じゃないんだからね!」

そう言っつてその場を去った。

『さあ、どんどん行きましょー 魔法少女らしく愛と正義で  
楽しんでことだし、城に帰りましょーか』

『え?』

華琳が凄くイイ笑顔を浮かべた。

「……私が誰かに支配されるとでも思ったの?」

『そ、そんな馬鹿な……!?!?』

華琳は両手でルビーを持った。

「さて、契約とやらを解除してもらいたんだけど、良いわよね?」

みしみしとルビーから音がする。

『わ、わかりましたー!ー!えいつ!ー!』

……………何も起こらない。

「……そう。そんなに折られたいのね?」

『そ、そんなことは!し、土郎さん!ヘルプミー!ー!ー!ー!』

「きゅきゅきゅ 《因果応報だ》」

「覚悟は良い?」

『きやーーーーー!?!?!?』

最終的には“ルールブレイカー破戒すべき全ての符”で契約を解除した。

ちなみに洗脳と解除が上手くいかなかったのは、

俺が作ったペンダントに使った加護の力を持つ魔術品のおかげだと分かった。

その後、ルビーは再び嚴重に封印され、華琳としては中々楽しい一日になったようだ。

……華琳とルビーにおもちゃにされた俺には悪夢だったが。

これは正義の味方の仕官記録における、悪夢の再来たる一日である。



## 第十六話：親（前書き）

すみません。なかなか時間がとれず、更新が遅れてしまいました。皆さんに楽しんでもらえる質になっていればいいのですが。

## 第十六話：親

定軍山の戦いから数か月が経った。

弱小勢力は淘汰され、魏・呉・蜀の内のどれかに吸収された。

各国は取込んだ地域の内政をしたため、ここしばらく平穏だった。

だが、これはいつまでも続かない事は誰の目にも明らかだ。

ほんの少しの影響で崩れる仮初めの平穏なのだから。

それでも、平穏な時は貴重だ。

特に、感受性の高い子供には。

その日、俺が中庭に行くと季衣と流琉が談笑していた。

特に流琉の表情は何時にも増して明るい。

「ご機嫌だな、流琉。何か良いことでもあったのか？」

「あ、兄さま。実は両親から手紙が来たんです」

「えっとね、畑の収穫も終わって暇を作れたから会いに来るんだって！」

それは嬉しいだろうな。

いくら強くても流琉はまだ子供なんだから、親に甘えたいと思うのは自然なことだ。

「良かったな、流琉。」

それでいつ頃来るんだ？その日は非番になるよう調整しておかないとな」

「えっとですね、ここに来る前に両親が出会った場所である合肥に行くそうです。」

何でも二日後がその日なのだそうです、その後だから五日後くらいかと」

「なら、さっそく華琳に相談に行こうか」

今の時間なら仕事を一時やめ、休憩しているはず。

「あら？三人とも嬉しそうだけどどうかしたのかしら」

噂をすれば影、いやこの場合は説曹操、曹操就到了《曹操の話をする、すぐに曹操が来た》  
の方がふさわしいか。本人だし。

「あ、華琳さま。実は……」

流琉が華琳に事情を告げた。

「そついえば、季衣のご両親は……」  
「士郎！」

何気ない俺の一言を華琳は言葉を遮った。  
しかし、俺の言葉によって流琉は一瞬硬直し、季衣は一瞬寂しげな表情を浮かべた。

「ボクの両親はボクの小さい時に亡くなってるんだ……」

その言葉に俺は自分の失言を自覚した。

「け、けど！流琉の両親がずっと面倒を見てくれたから、ボクにとつても両親同然だよ！」  
「そうか。なら、季衣もしっかり甘えなきゃな」

本当は季衣に謝りたかったが、それは季衣の気遣いに対する侮辱に

なる。

俺はせめて気分を盛りたてようと明るく言った。

「もう、兄ちゃん！ボクはもうそんな年じゃないんだから！」

「季衣ったらそう言ってますけど、いつも甘えてますから大丈夫です」

「流琉!？」

季衣が顔を真っ赤にし、俺たち三人は笑みをこらえた。

「そういう兄ちゃんはどっだったのさ？」

「あら、それは私も興味があるわね」

「兄さまもやっぱり甘えたんですか？」

思わぬ話の展開に思考が一瞬停止した。

「士郎？」

思い出すのは紅蓮に焼けた空、そして月夜の晩……。

「兄ちゃん？」

…… しろつは…… 親に甘えたことがあったのかもしれない。

だが…… 衛宮士郎は……。

「兄さま、気分でも悪いのですか？」

そこで俺は思考を現実に戻した。

「いや、少し考えていただけだよ。…… 実は小さい時の事は覚えて

いないんだ」

「そう……」

華琳は【心が壊れた】と俺が言ったのを思い出したのだろう。気まずく思っているようだ。

「それじゃあ、兄ちゃんの両親ってどんな人だったの？」

「……そうだな。実の両親は覚えていないから、養父について話すよ」

その言葉に三人は表情を一瞬暗くした。

俺はそれを払拭するべく明るく話す事にした。

「夢見がちな人で、『今日から世界中を冒険するのだ』なんて子供みたいな事を言っつて、

良く旅に出ていたよ。それで帰ってきて、子供のように自慢話をしていたな」

「えっと……、寂しくなかつたんですか？」

「寂しくなかつたわけじゃないけど、それでも土産話で帳消しに出来たから。」

ちなみに家事全般が得意なのは養父が下手だったからなんだけどな」

俺は懐かしい記憶を思い出しながら答えた。

「いい人だつたんだね」

季衣のまつすくな言葉に俺は……、

「ああ。俺にとっては間違いない」

胸の痛みを抑えながら答えた。

「季衣、そろそろ仕事に戻らないと」

「そうだね。それじゃあボクたちはこれで」

二人がその場を去っていった。

「…… 士郎。教えて貰っても良いかしら」

「……何を？」

「あなたにとって”の意味を」

流石に華琳は誤魔化せなかつたようだ。

「…… 季衣たちに語ったのは“俺が見た” 事実だ」

「…… どういうこと？」

「養父…… 衛宮切嗣の過去について詳しく知ったの亡くなってから随分経つてからだった。

“正義の味方” はもともと切嗣の成りたかつたものだ。けど、誰よりもそれを諦めていた。

全てを救うことなど無理だと知っていたから。でもそれが許せなくて、

世界平和を願い戦い続けた。九を助けるために一を切り捨て続けた。どう思う？」

俺の話に華琳は辛そうな顔をしながらも口を開いた。

「…… 悪い人ではないようだけど」

「ああ。“過程”を聞かなければ大抵の人はそう思うかな」

「…… 何をしたというの？」

俺は一呼吸を置いて切嗣の行為を語り出した。

「一を切り捨てるためなら“あらゆる手段”を取った」

「それは……」

「騙し、裏切り、不意打ち、暗殺、どんな汚い手段だろうと。」

「……人質をとって、人質ごと殺すなんてこともしたらしい」

華琳が息を飲む。

「誰よりも殺人を憎みながら、最悪の事態を避けるのに殺人という方法しか知らない。」

「……正義の味方になれないから、悪役になることで人を助けることを選んだ。」

それが俺と会う前の衛宮切嗣という人物だ」

だから、裏の世界において衛宮切嗣の名は忌み名だった。

「……遺族にとっては悪人以外の何ものでもないでしょうね」

「ああ。だから大勢の人に憎まれていたよ。」

それでも俺にとっては……」

「そう……」

静寂が辺りを数分占めた。

「士郎」

「なんだ？」

「……話してくれてありがとう」

華琳は礼を言ってきたけど、話を聞いた華琳の方が辛そうだ。

「こちらこそ、切嗣のことを悲しんでくれてありがとうな」

「べ、別にそんなことはないわ！ただ、憐れに思うだけよ！」

俺は華琳の華琳らしい言葉に微笑んだ。

「もう！聞いてる！？」

「もちろんだ」

「というか、その子供に向けるかのような笑顔はやめなさいよ！」

だが、痴話喧嘩は…… 駆け寄ってきた桂花によって幕を閉じた。

「華琳さま！呉の軍勢が国境に向かっていくとの報告が！」

俺たちはその言葉に思考を切り替えた。

「出陣の準備を！」

「はっ！」

こうして魏と呉の戦争は始まった。

…… 仕組まれたものと気付かずに。

次の日…… それは起きた。

「ほ、報告します！！」

「どうしたの？」

兵の慌て様が唯ごとではないと告げている。

「合肥の街に盗賊が……！！！」

「何ですって！？」



本来なら常駐の兵がいるのだが、彼らの国境の城の防衛に行ってしまうている。

放っておけば相応の犠牲者が出る。

「華琳さま!!」「行かせてください!!」

流琉と季衣が叫んだ。

大切な家族の危機を見逃せる子ではないのだから当然の反応だ。

「華琳、俺達だけでも頼む……!!」

そして俺も救える可能性を見逃すことなど出来ない!

「……分かったわ。けど、すぐに蹴散らして戻ってくるよ。良いわね?」

「はい!」

「了解です!」

「もちろんだ!」

俺たち三人は合肥へ向かった。

そして、次の日の夕刻に俺たちは合肥に着いた。

……待っていたのは……あの日を思わせる紅蓮の炎……数多の屍。俺は自分の中の何かが切れた音を聞いた。

俺は無言で足を止めた。

「兄ちゃん?」

「兄さま?」

いぶかしむ二人を余所に俺は弓を構えた。

「強化・開始 トレース・オン」

魔力が体を巡る。

そして、強化が成立した所で矢を放つ。何度も何度も。

奴らとの距離は四里あり、敵味方共に相手に気付いていない。

だが、俺の目は敵を捉えている。

俺の矢は狙い通りにひと際立派な鎧を着けた男とその周囲の賊を射抜いていった。

首魁らしい奴だけは手と足を射抜いて逃げられなくした。

まだ、死なせるわけにはいかない。

なぜなら聞きたいことがあったからだ。

……この辺りに多くはないとはいえ、  
常駐兵を皆殺しに出来る盗賊団はいないはずなのだから。

動揺する盗賊たちに追撃をするべく、俺は駈け出した。

慌てて季衣たちも付いてきた。

そして……二人もその光景を見た。

木が燃え、屍が燃え、家が燃え、街が燃えていた。

天は炎でより赤く染まり、地は死者の血で赤く染まっていた。

住人達は死者へと変わり果て、生ける者はうるたえる盗賊どもしか見当たらない。

そして、二人の目はある一点に釘づけになった。

体の半分が燃え尽きた男女の死骸。

残されたその顔は……流琉に似ていた。

呆然とする二人。

当然の反応と言えるが、それを許される状況ではない。

「二人とも！しっかりしろ！奴らを殲滅するぞ！」

俺の言葉で現実思考を戻した二人の目に怒りの炎が灯った。

俺は首魁らしき男の手足を切断した後、血止めを行った。

そして、布で口を塞いだ。

「……………殺さないの？」

「正直、生きているのが認められませんが」

様々な負の感情が込められた声を痛々しく思いながらも、冷静に答えた。

「殺して楽にしてやらないだけだ。それより……………」

俺は賊の一人に黒鍵を叩きこんだ。

「一人でも多く倒して、一人でも多く生存者を捜すぞ！」

半刻後、賊は死ぬか逃げるかしていなくなった。

降り出した雨が炎を消していく。

まるで、二人の涙に天が答えるかのように。

「……………う、う……………う……………」

「……………どう……………して……………ど……………う……………して……………」

……………想像通り、あの遺体は流琉の両親だった。

怒りが静まったことで、悲しみが抑えきれなくなったみたいだ。

俺に出来るのは……二人を抱きしめて一緒に悲しむことだけだった。

二人が泣きやんだ所で生存者を改めて探した。

だが……絶望的だった。

街は廃墟とかし、雨以外の音は聞こえない。

それでも、俺は生存者を探して呼びかけ続けた。

「誰か！誰か生きていないか！？」

時間も差し迫り、諦めかけた俺の耳にかすかな呼吸音が届いた。

それは瓦礫の下から聞こえた。

俺は瓦礫を除けていくと……七歳くらいの少女がいた。

……彼女の上には女性の死体が覆いかぶさっていた。

おそらく母親が少女を庇ったのだろう。

「……良かった。生きてる」

少女の意識は朦朧としているようだが、大きな怪我はないようだ。俺は笑顔を浮かべた。

「……奇しくも俺は切嗣に似た状況になったけど、

俺は切嗣のようにこの子を“救える”かな？」

その表情はどこか嬉しげでありながら悲しげだった。

その表情をただ少女だけが見ていた。

これは正義の味方に始まりを思い出させた一幕

「計画通りに行ったようだな」

男は嗤う。

男は仕組んだ。

魏と呉の戦端が開くように、薬物を併用して敵軍が迫っていると両軍の兵に思いこませた。  
さらに……。

「欲深い奴ほど扱いやすいものはないな」

ほんの少し後押しするだけで、行動してくれる。

例えば……呉に所属する新参の豪族に取り入って街を襲わせたように。

「常駐兵が国境に向かったこと、少数で多大の利が得られること、そして皆殺しにして火を放って証拠を消せばいい……」。

こんな説明と盗賊の装備を渡すだけで実行してくれるのだから」

よく考えれば穴だらけなのに。

まあ、考えられないように暗示をかけたが。

「もっとも、正体がばれない目も十分にありましたが……」

それでは意味がないので魏兵の一人に暗示をかけて報告をさせた。

「魏には優秀な人材が多いですから、きっとばれて呉が憎悪される」

くつくつと愉快そうに嗤う。



## 第十六話：親（後書き）

というわけでオリキャラを出しました！性格はとにかく無感動・無感情・無表情です。話しかければ返事を返しますが、自分から話しかけることは全くなし。

恋と違って無口ではないですが、感情が薄いといった感じですよ。

名前・真名・容姿は決めていないので募集します。ご協力お願いします。

第十七話：壊れた心・芽生えた心（前書き）

……遅れに遅れてすみませんとしか言いようがありません。

オリジナル部分を入れることの大変さに四苦八苦しています。

こんな至らない自作を楽しみにしてください。約七千人の読者に感謝の念で一杯です。

それでは本篇をどうぞ。



## 第十七話：壊れた心・芽生えた心

惨劇から翌日、俺たちは本陣に合流した。  
救出した少女は軍医に預けられ、死んだように眠り続けている。

「…………二人とも、ここで休んでいてくれ。報告は俺がやっておく」  
「ボク達も報告に行くよ！」  
「最後までやらせてください！」

季衣と流琉は当然の如く異議を唱えた。  
だが、二人の顔色は誰が見ても悪い。

…………合肥の街に向かってから一睡もしていないうえに、精神的シヨツクもある。

二人の心身は限界だ。

だが…………普通にそれを言っても納得しないだろう。

…………それだけ惨劇が…………両親の死が二人の傷になっている。

だから、俺は本音と嘘を混ぜて話すことにした。

「二人にはこの子と一緒にいてあげて欲しい。…………起きた時、この子が寂しくないように」

俺の言葉に二人は気付いたようだ。

確かに季衣と流琉は大切な人たちを失った。

けれど、二人にはお互いが、そして俺たちがいる。

対して、今の少女には…………誰もいない。

「そう…………だね」

「けれど、いったいどうすれば…………」

二人は困惑しているようだ。  
少女に対して二人が出来ることは……普段の二人なら当たり前  
に気づくことなのに。

「……友達になればいい」

「え？」

「それだけでいいんですか？」

二人は驚いた表情で俺と少女を交互に見つめた。

「それだけ”じゃないさ。それがこの子にとってどれだけ大切な  
ことか……」。

それに、凄く大変なことだと思う。

……この子の心の傷を考えれば」

心を閉ざしてしまっているかもしれないし……俺のように心が壊れ  
てしまったかもしれない。

少なくとも、誰にでも出来ることではない。

「……分かった！きつと友達になるよ！」

「任せてください！こういうことは得意なんです！」

二人の顔に精彩が戻った。

「なら、この子が起きた時に行動できるように今は眠ってくれ。  
軍医が言うには数時間は起きないようだしな」

こうして、二人を休ませることに成功した。

だけど、二人に頼んだ事は俺の本心であることに変わりはない。  
少女を通じて二人が元の明るさを取り戻し、

二人の明るさが少女の救いになることを俺は祈り、華琳の下へ向かった。

「呉の豪族の火事場泥棒だと判明したぞ」

俺は捕らえた賊の拷問の結果を華琳に伝えた。  
華琳は俺の言葉に訝しげな表情を浮かべた。

……俺と同じ部分で疑問を抱いたんだろうな。

「……詳しく聞かせて」

「合肥の街の警備が薄くなっている内に襲って富を略奪、そして証拠は燃やしつつす。

俺たちが異変に気づくころには全て手遅れ……と考えていたらしい」  
「……その話は本当か？」

俺の報告に秋蘭も違和感を抱いたようだ。

「何かおかしいか？」

春蘭の言葉に全員がため息をついた。

「……相変わらず鈍いわね。まあ、それがあなたの限界だし仕方ないか」

「なんだと!？」

桂花の呆れはてたと言わんばかりの態度に春蘭が噛みつく。

「姉者、落ち着け。桂花も煽るな。……土郎、合肥の街を賊が襲っ

たのはいつだ？」

「……昨日だ」

「それがどうかしたのか？」

春蘭の言葉に俺は暗澹とした気分になった。

兵法とかそれ以前の問題を習わすべきだったか。

「……知らせが来たのはいつだったかした、春蘭？」

「一昨日……あ」

「そういうこと。……兵が言うには盗賊が街に向かうのを見たとのことだけど」

「秘密裏に事を運ぶため目立たない格好で向かったと吐いたぞ」

「当然そうでしょうね……」

では……どうして兵は報告を出来たのか？

明らかに不自然だ。

「……後でさらに細かく兵に聞いてみるべきだな」

「そうね。それはさておき土郎、明日一番に愚か者の首を持って呉の陣に向かって。」

戦闘前にきつちり返礼しないとね」

「分かった。呉の豪族げすのおやだまに報いは受けてもらいたいのは同感だよ。」

いざという時に対処できる実力と、弁舌の両方を持つ俺が適任か」

捕えた賊は呉の豪族げすのおやだまの腹心らしいから知っている者は呉にいるだろう。

敵に心理的動揺を与えられるし、同時に下衆の肅清も行われる公算も強い。

……というか、しなければ流される悪評の質がより高くなるだろう。

こうして俺は敵陣へ向かうことが決定した。

仮眠を取り終えた俺は少女の元へ向かった。

俺は天幕の外で暗い空気を漂わせる季衣と流琉の姿を見つけた。

「……どうやら苦勞しているみたいだな」

「……兄ちゃん？」

「兄さま……すみません。力不足みたいです」

簡単に行くとは最初から思っていなかったけど……。

「やはり心を閉ざしているのか？」

「……そうじゃないと思う。話しかけると返事はしてくれるし」

「……お人形さんに話しかけてるみたいです。会話が噛み合わないというか……。

話が続かないんです。接し方が分からないなんて初めてです」

実際に話してみないと分からないが、俺と同じ様に“壊れた”のかもしれない。

……だとしたら、絶対に救いたい。それが出来なくて何が正義の味方か！

「俺も話してくる。……二人とも、諦めることなんていつでも出来るんだ。

諦めなくても出来ないかもしれない。けど、諦めたらもつと出来ない。

諦めるのは足掻き切ってからじゃないと損だぞ？友達になりたいと言ったか？」

「切り出せなかったよ」

「そこまで会話が持っていけませんでした」

ますます気落ちする二人だったが、俺からしたら予想通りだ。

「なら今度は直球で言ってみるのも手だぞ？」

まあ、会う状況を選ぶ必要はあるけどな」

俺はそう言い残して天幕に入った。

入ると少女が俺を見つめてきた。

銀色の髪、赤い瞳、幼い姿……少女は……イリヤに……“姉”によく似ていた。

いや、似ていることには初めから気付いていた。ただ、目をそらしただけだ。

けれど、同一視するつもりはない。どれだけ似ていても少女は少女で、イリヤはイリヤだ。

同一視することは少女とイリヤの両方に対する侮辱だ。

「こんにちわ」

「……こんにちわ」

無表情で一拍遅れて返事をする少女。

その目に映る感情は……僅かな諦観のみ。

ソレはかつての自分と重なる。

「俺の名前は衛宮士郎。君の名前は？」

「……ない」

少女は呟くように答えた。

「何故、ないんだい？」

「……………わたし”はお母さんと一緒に死んだから……………」ここにわたしたしにはない」

少女の言葉が俺には理解できる。

それは彼女の心が母親と共に死んだと言うこと。

ただ、肉体という空っぽな器が残ったと少女は言いたいのだろう。

「そうか。……………君は確かに“君”じゃないかもしれない」

「……………否定しないの？」

相変わらず無表情だけど、俺の反応に疑問を持ったようだ。

もっとも、“喜怒哀楽”といった感情は未だ欠落しているみたいだが。

「……………俺も同じく“自分”を失い、今の自分となったから」

俺は微笑んだ。

SIDE ???

「……………どうして、笑えるの？……………悲しめるの？」

わたしは衛宮という男の笑みがどこか悲しげに見えた。

故にその言葉は嘘ではないと思った。

だからこそ、疑問に思った。

わたしと同じなら、何故感情を持っているのだろうか？

わたしに喜びはない。

ソレは辺りに響く悲鳴と共に消え去った。

わたしに怒りはない。  
ソレは炎の中で燃え尽きた。  
わたしに哀しみはない。  
ソレはお母さんと一緒にあの世へ逝った。  
わたしに楽しみはない。  
ソレは“わたし”と一緒に死んだ。  
ただ……疑問に思う気持ちだけはあ  
る。  
何故かはわからないけど。  
だから疑問に思ったことを尋ねて  
いた。

「……救ってくれた人がいた。その人があまりにも嬉しそうに笑うから、懂れたんだ。

……自分もそんな風に笑ってみたいって」

その言葉にわたしは気付いた。  
何故自分が疑問を感じられるのかを。

……自分を救った時この人は……笑っているのに泣いているように  
……、  
それがあまりにも不思議だったから尋ねてみたいと感じたんだ。  
ようやくこの人がわたしと“同じ”だと実感した。

「それと“君”は確かに死んだけど、君は君のお母さんが守ったん  
だ。  
だから、君は生きないと」

その言葉にわたしは戸惑う。

「……わたしは……感情が死んだ。……だから死んでないけど……  
生きていない」



生きるとは“感じる”ということだと思っただから……わたしには……。

「死んだとしても再び芽生えさせればいい」

その言葉にわたしは驚いた。

出来るのだろうか。わたしに。

「……わたし一人で……出来ることじゃ」

「君は一人じゃない。少なくとも俺がいる。そして……二人とも覗き見していないで入ってこい」

その言葉に入口を見ると人影が二つあった。

「う、うん」

「すみません。どうしても気になって」

そこにいたのは先ほどの二人だった。

話かけてきたから返事を返していたのだけど、感情のないわたしに戸惑っているようだった。

何がしたいのか分からないまま、会話が止まってしまい二人は出て行ったのだけだ。

「えつとね、ボクはキミと一緒に笑いたいんだ！」

「私たちと友達になってくれませんか？」

二人の言葉にわたしは戸惑った。

「……えつと」

「言っただろ？一人じゃないって」

「ダメ……かな？」  
「迷惑ですか？」

正直なぜ二人がそんなことを言い出したのか分からない。  
感情を失ったから分からないんだだろうか？

「……どうして？」

「友達になりたいから！」

「……感情がないわたしと友達になっても……つまらないと思う」  
「関係ないよ」

「そうです。それに楽しくするのは得意なんです！」

先ほどとは違って凄く勢いがある。さっきとはまるで別人みたいだ。  
……こちらが本来の彼女たちなのだろうか？

「……わたしは……別に構いません」

「決まりだね！」

「名前……はないんですかね？」

「……ええ」

“わたし”は死んだ以上、その名を名乗るのは筋違いに思う。

「死んだ“君”の名を聞いて良いか？」

「……性は司馬……名は懿……字は仲達……真名は……」

「そこまでで良い」

「……え？」

「真名は死んだ“君”のものでしょうか。“司馬懿仲達”は君も名乗っても良いと思う」

「……けど」

……良いのだろうか？残骸でしかないわたしが名乗っても。

「君は君の母親が守ったんだ。……繋がり全て絶つべきじゃないと思う。」

あまり卑下するべきじゃないぞ？」

衛宮は頭を撫でながら言ってきた。

衛宮の言葉で、わたしが自分を卑下するのはお母さんの想いを無碍にすることだと自覚した。

「……分かりました。……真名を決めてもらえませんか？」

わたしを救った衛宮に真名を決めてもらうことにした。

わたしが“わたし”ではなくわたしとして生きていくのに必要なこと。

だからこそわたしが初めて会った人である衛宮に決めてもらおうと思った。

「……そうだな」

そして衛宮が幽かに独り言をつぶやいた。

そして……。

「君の真名は……“璃夜”<sup>（りや）</sup>なんてどうだろうか？」

衛宮の独り言に若干戸惑ったが、わたしはその名を受け入れた。

「……分かりました。……璃夜と名乗ることにします。」

……ありがとうございます……衛宮」

「出来れば士郎と呼んでくれ。よろしく璃夜」

こうしてわたしは“璃夜”と名乗り、衛宮士郎は私の保護者になった。

ただ気になるのは士郎が、

『名前の一部をあげてもいいかな、イリヤ……』。

この子と俺がイリヤと俺のように“家族”になるというのを誓いを込めて……』

と小声で呟っていたこと。

その時の表情と言葉に胸が一瞬痛んだ気がする。……病気だろうか？

これは正義の味方によって少女が“生まれた”一幕

## 第十七話：壊れた心・芽生えた心（後書き）

というわけで、オリキャラである司馬懿仲達こと璃夜が本格登場。オリキャラ案を出してくださいだった方々にお礼をもうしあげます。

璃夜の精神年齢が高くないか？と思われるかもしれませんが、そこは歴史的に孔明のライバル的存在ということで+補正が入ります！

現在喜怒哀楽が欠落中。少しずつ感情を芽生えさせていくつもりです。

## 第十八話：仕組まれし戦

「……」

俺は現在呉の砦に到着している……はずだった。

向かう途中で森に向かう数名の自軍の兵を見つけなければ。

戦場になるであろう場所から距離があることから森に兵を配置する予定はないし、

僅か数名というのも不審極まりない。

偵察にしてもあの森に行く理由はないはずだ。

見つけた時点でかなりの距離があり、直ぐに森に入られたため、止めることは出来なかった。

俺は現在進行形でそいつ等を追っている。

何もなければいいが。。

そして、俺がそいつ等に追いついて見たのは……、

禍々しく濡れた矢尻をは孫策に向けて放たんとする兵たちだった。

「ちっ！」

何故、孫策がこの場にいるのか？何故、こいつ等は孫策がいると分かっていたのか？

もし、孫策を暗殺したらどうなるのか？

様々な思考を浮かばせながらも、警告は間に合わない判断し、俺は咄嗟に三本の黒鍵を投影して投擲した。

二本は二人の兵の腕を穿ち、二本の矢は放たれず地に落ちた。

一本は放たれた矢と克ち合い、矢を上空へ弾いた。

だが……。

四本目の矢が孫策の肩へと刺さる。

「ぐっ!？」

「雪蓮さまっ!？」

孫策は苦悶の声と共に苦痛と混乱を顔に浮かべ、傍にいた女性が悲鳴を上げた。

「貴様ら!よくも……!!」

「ひ、ひっ!？」

「逃げ……がつ!？」

逃げようとする兵たちだが、俺の投石を頭部に受けて地に伏した。

「貴様……!？」

「話は後だ!」

急いで応急処置をしなければ!

俺は孫策から矢を引き抜く。

「ぐっ……うっっ……」

矢を引き抜かれ、苦悶の声を孫策はあげた。

俺は傷口から毒を吸い出し始めた。

「何を……!」

「毒矢だ!いいから黙れ!死なせたいのか!」

俺は懐からある物を取り出した。

そして……。

「これを飲め!逃げ!」

「ぐむ！？……………かはっ、けほっ……………」

有無を言わず孫策の口にあて、強制的に飲ませた。

「貴様！何を飲ませた！？」

「……………華陀特製の万能の解毒剤だ。これで命の危険は去ったはずだ」

以前、馬騰に使われた秘薬“ディスクエックス泥救越薬”の余りを俺は常に常備していた。

いざという時の保険のつもりだったが、こういった形でその時が来るとは思わなかった。

「華陀の……………」

華陀が呉で流行病を撲滅して有名になっているからな。

おかげで説明の手間が省けた。

「……………一応お礼を言うけど、もう少しやりようは無かったわけ？」

孫策が仏頂面で文句を言ってきた。

まあ、当然の言葉だな。

「悪いが、そこまでの余裕はなかったのですね。だが、すまなかった」

俺は頭を下げた。

「……………それは何に対しての謝罪かしら、“心眼の射手”さん？」

「貴様！？あの衛宮か！」

まあ、目立つ格好な訳だから気付かれて当然か。



……情報に変な尾ひれが着いていないことを祈るが。

「どの衛宮か知らないが、曹孟徳配下の衛宮だ」

「まさか、この兵は貴様の仕業か！」

……そう思われても仕方がないな。

「……違うと言ったら信じるのか？」

「貴様……斬り捨て……」

「思春、落ち着きなさい。……それで返答は？」

「両方だ。治療の件も、……そして、兵を止められなかった件も」

相変わらず険呑な目つきで殺気を放つ思春を後目に、会話は続く。

「参考までに聞かせて貰っていいかしら」

「何をだ？」

「どうして私がここにいると分かったの？数名にしか知らせていないし、

決めたのはつい先日なんだけど？」

……黙って出てきたのか？

いい性格している。……というか、王は癖が強くないとなれないのか？

騎士王とか、

英雄王とか、

霸王とか、

仁王とか枚挙にいとまがない。

……話を戻して、……また不自然な話だな。

数名と言うからには信用のおける相手のはずだ。

そんな極秘の情報を兵たち……そしてその上役が知りえたんだ？

そいつ等が得られるくらいなら華琳にも得られていいはずなのに。

「……少なくとも私は知らなかった」

「……どういうことだ？」

「魏の上層部にそんな情報は来ていない。私は偶然不審な兵を発見して追跡しただけでしかない」

その言葉に考え込む孫策を後目に、思春は怒気を込めて言い放つ。

「……どちらにしろ、暗殺などという汚い手を使ったのだから覚悟をしておけ。」

配下の仕業であろうと、制御出来なかった以上は言い訳にならない」

思春の言葉に異論はない。

俺は静かに来た道を戻り出した。

「貴様！まだ話は……」

俺は先ほど黒鍵を投擲するために放り捨てた桶を拾い上げ、思春に向けて放り投げた。

桶は思春と孫策の手前で地に落ち、中身がこぼれて孫策たちの目に晒された。

……それは合肥の街を襲った賊の首魁の生首。

孫策たちは息を呑んだ。

「私も同感だよ。……それは合肥の街の住民を皆殺しにして火事場泥棒をした賊の首魁だ。」

財を持ち出す前に殲滅されたが、無辜の民の命は戻らない。

……出来れば責任を負うべき者が取るべき責任を取るように祈らせて貰おう。

本来の目的は済ませたので失礼させて貰う」

俺はそう言ってその場を去った。

「何だつて!？」

深夜、華琳の下へ戻った俺は孫策暗殺未遂の報告をしたのだが……。

「今日の昼ごろに突然倒れて変死したわ。……原因は不明」

事件の首謀者の死を知らされることになった。

「……よりによって事件発生と同じ頃か。きな臭いにもほどがあるぞ」

「口封じ……でしょうね」

これで情報入手経路は闇の中か。

俺も華琳も憮然とした表情を浮かべた。

「……呉でも同じことが起きてるかもしれないな」

不自然な事象が立て続けに起きた以上、十二分に可能性がある。

「だとしたら黒幕はとんでもなく厄介で下衆な輩ね」

静かな物言いだが、華琳は腸が煮えくり返るほどの怒りを目に灯っている。

そして、気持は俺も同じだ。

「……目的は魏と呉の潰し合いといった所か。」

暗殺が成功していれば呉は憎悪によって死兵となっていた」

「でしょうね。……少なくとも我が軍では合肥の件で憎しみを燃やしている。」

憎悪のぶつかり合いによって戦の被害は増大するのは目に見えているわ」

普通に考えれば蜀軍が怪しいところだが……。

劉備とその臣下の性格を考えると可能性は高くないな。

「……首謀者を探し出すには情報が足りないか」

「……そうね。とりあえず士気に関わるから黙っていて。士郎、止めてくれてありがとう」

華琳はそう言って俺に微笑んだ。

「どづいたしまして」

その言葉と笑顔が正義の味方にとっては十二分の報酬だった。

翌日俺たちは呉の砦前の荒野に到着した。

……考えてみれば、呉軍が国境を越えておきながら攻める前に城へ引き返したのも不自然だな。

後で調べる必要がありそうだ。

「……黄蓋と周瑜が？」

「はい。どうも、降伏するか否かで揉めた後、黄蓋は軍議を退場。」

それから周瑜に公衆の面前で懲罰を受けたとか……」

……三国史上で尤も有名な戦である赤壁の戦いの前段階か。並行世界上の差異も念頭に置きながら注意しておこう。

「華琳さまー。敵の将が出て来たようですが、どうなさいますか？」  
「突出してきたということは、舌戦を交わしたいということでしょうけど……」

出てきたのは一人の少女。  
年は季衣たちと同じくらいだろう。  
華琳も前に行けた。

「……………」  
「……………」  
「……………」

沈黙は華琳が鼻で笑うことで破られた。  
相応に距離があるから他の者には聞こえないだろう。  
俺は唇の動きで分かるが。

「な、なによ！いま、シャオのこと鼻で笑ったわね！」

少女がいきり立つ。……もう少し誰かいなかったのだろうか？

「我が名は孫尚香！江東の虎、孫策の妹が一人！直ぐに笑えなくしてやるんだから！」

「まあ、それはあなた達の方が先でしょうけれど……」

見下した態度で接する華琳に孫尚香はますますヒートアップする。

「ムキーっ！なによ、偉そうに！」

実際に偉いんだが。

「背だつておっぱいだつて、シャオよりぺったんこのくせにっ！」

「な……っ！あ……あなたも似たようなものでしょう！」

“肉体的特徴”に対する孫尚香の発言に華琳は敏感に反応した。

……“唯一の欠点”と華琳は考え、コンプレックスに感じているからな。

「残念でした。雪蓮姉様も蓮華姉様も母様もすごいもん。シャオのおっぱいが大きくなるのは、

孫家の血筋的にも保証済みなのよっ！」

「……たまに、例外っているわよね」

「むっかああああああ！なんですってえ！」

……舌戦はもはや子供の口喧嘩レベルに堕ち果てた。

脱力感を感じても仕方ないと思う。

「知らない？足の速い馬から、遅い馬が生まれることもあるんだけど……」

「なら、アンタだつて同じ事よね！そのままぺったんこかもよ！」

「……それがどうしたの？」

「……！」

冷徹に答える華琳に孫尚香は絶句した。

……俺から見ると明らかに強がりだと分かるけど。

「胸の大きさなど、支配者の度量とは関係ないものだわ」

「つまり、女として敗北を宣言するわけね？」

「あら、女として勝っているわよ。女としての幸せも手に入れてるのだから」

華琳の爆弾発言にその場が凍る。

というか、俺が凍った。

…………… ナニヲコンナバシヨデイツテルノデスカ？

「よ、よっぽどの物好きなのね！というか、変態？」

その発言が胸に刺さった。

変態なんかじゃないと言いたかった。

だが…………… 愛した女性たちが脳裏に浮かぶ……………。

セイバー…………… ペったんこ。

イリヤ…………… ペったんこ…………… というか第二次性徴前で肉体成長停止のため見た目は幼女。

遠坂からは事あるごとにロリコンと…………… 呼ばれた。

というか、ある程度親しくなってイリヤとの関係を告げると大抵は…………… 呼ばれた。

「俺はロリコンじゃない…………… 変態じゃない…………… ロリコンじゃ……………」

俺はトラウマによって壊れた人形のように呟き続ける。

それは戻ってきた華琳に叩かれるまで続いた。

「槍兵隊、前進しろ！弓兵隊は左翼へ牽制！」

戦場に雨が降る。

戦闘開始から二刻ほどで空が黒くなりはじめた。そしてそのまま豪雨となった。

吹き荒ぶ風は強く体を障害し、叩きつけるが如き雨粒は視界を制限する。

まさしく泥試合と言っていい状況だ。

こんな最悪な天候では弓は使い物にならない。

突風で距離が、雨で狙いが狂う。

精々牽制程度にしか使えない。

そのため俺も双剣を持って戦っている。

「衛宮！」

乱戦の中、思春が現れた。

「……………そういえば名前を聞いていなかったな」

「我が名は甘寧！我が刃を黄泉路の道しるべと思え！」

閃光の如く振るわれた曲刀が首を襲う。

間に差し入れた干将とぶつかり合った。

「くっ」

「はっ！」

荒れ狂う嵐の中、剣戟の乱舞が始めた。

俺は刃を交わし、刃を躲す。

甘寧の剣戟はさほど重くないが、速く、鋭い。

先ほどから防戦一方だ。

おまけに視界の悪さが状況を悪化させている。



眼の良さで技量差を補えないからだ。  
それでも、俺は耐え凌ぐ。  
この状況を改善する機会を伺いながら。

「そこっ！」

そして機会は来た。  
わざと作った正面の隙を甘寧が蹴り穿つ。  
当然、食らって俺は吹き飛んだ。

「ぐはっ」

……肋骨二本と叫ぶところか。  
だが、必要な距離は出来た。  
俺は黒鍵を投影し、投擲を開始した。

「なっ!?!」

攻守は逆転した。  
俺はひたすら投擲し、甘寧は防ぎ続ける。  
だが、手甲作用のキレが悪い。  
肋骨二本が響いている。  
俺は勝負に出た。

「ブロックファンタズム  
壊れた幻想」

新たに投げた四本と、甘寧の周囲の数本を爆発させた。  
威力はさほどでもないが、無傷では済まないだろう。

「……………」

思ったほどのダメージは与えられなかったようだ。だが、甘寧は警戒しているようだ。まだ、周囲には黒鍵が散乱しているから当然か。

「……ここは痛み分けにしておかないか？これ以上は相打ちになりそうだ」

「……それを信じると？」

「お互いにまだ死にどころではないと思うのだがね？」

俺の言葉に考え込む甘寧だったが、どうやら退くことを選んだようだ。

「次は首を頂く」

「遠慮させて貰う」

立ち去ろうとした甘寧は足を止めた。

「……首謀者はあの時刻に変死した」

そうポツリと言った。

「……こちらもだ。……軍を出したのはいつだ？」

「お前たちが出陣したと報告を聞いてからすぐに決まっているだろう？とにかく、確かに伝えたぞ」

そう言って甘寧は走り去った。

他の呉軍も撤退を開始した。

「……やれやれ」

……実際の所、魔力切れでこれ以上の戦闘は厳しかった。  
まあ、はったりも手札のうちだ。  
それより……。

「………これだけで大掛かりにやっている以上、警戒を強めた方がいいな」

これは暗躍する者に気付き始めた一幕。

## 第十九話：沈む赤壁（前書き）

長いことほったらかしにして済みませんでした。

ウィルスにやられたパソコンも修理が完了し、ようやく書き上げました。

物語も終盤に入り、

色々とまじめに入る中で内容がおかしくなっていないか心配だったりしますが、

引き続き頑張ります。

\*しばらく忙しかったため、更新が今まで以上に不規則になることをご容赦下さい。

## 第十九話：沈む赤壁

呉との初戦で勝利した魏軍は呉の領内を侵攻している。魏と比べて南方に位置する呉は暑い。

広大な大陸であるからそれも当然のこと。

問題なのは、その暑さで調子を崩して風土病を患う者も出てきたことにある。

そのため、俺はつい先日落したばかりの城の一角で病人の治療を手伝っている。

……璃夜と一緒に。

「……これ」

「ありがとう、璃夜。それにしても医療の心得があるとは思わなかったよ」

「……お母さんから……教わったの。……昔からよく……手伝っていたから」

璃夜は話しながらも、手際よく薬を調合していく。

……本当は初戦の後、都に送る……はずだった。

軍医が病気で倒れなければ。

医者の不養生とは良く言うが、もう少し何とかならなかったのだろうか？

随分前から無理をしていたらしい。

気力だけで持たせていたところへ、連日の猛暑が追い打ちをかけた結果、病人たちの仲間入り。

新しい軍医をどうするか相談しているところで、璃夜が名乗り出て現在に至る。

最初は皆渋ったが、腕前を実際に見たところ十二分であったことや、軍医を手配・派遣するまでの時間の問題から承諾された。

流石に一人では大の大人を治療するのは難しいため、俺と沙和が補助を行っている。

「……それにしても、沙和の奴遅いな。水を取りにいつてから結構時間が経ってるのに」

「……水瓶の水が……もうありません」

自分で水を取りにいかうと思ひ、立ち上がった所へ沙和が室内に飛び込んできた。

「沙和！おそ「隊長っ！侵入者なの！」門番は！？」

「それが、少し揉めた後、あっさりと突破されたの！かなり強いのだ！」

正面から来た？だとすると目立つ必要性があるということか？

「沙和はここで璃夜の護衛と手伝いをしていてくれ！」

俺は部屋を出て廊下を駆け出した。

「士郎！」

「師匠！」

対面から秋蘭と真桜が駆け寄ってきた。

「秋蘭、真桜！侵入者は？」

「いま霞が先行している。士郎は真桜の代りに私と来てくれ。真桜は華琳さまの護衛を頼む」

「分かった」

「了解や」

俺たちは再び駆け出した。

S I D E ？？

偃月刀が空を切る。

風を切る音がその斬撃の速さを物語っている。

だが、幾ら速くてもそこに込められた敵意で狙いがばれただ。

「はあ……はあ……はあ……。何やコイツ！」

先ほどからムキになって得物を振り回した結果、女は息切れをしている。

感情の制御が甘いようだ。なら、その弱みに付け込ませてもらうか。

「なんだなんだ。その偃月刀は風車かい？」

「んなわけあるか！神速とうたわれたウチの一撃、受けてみいっ！」

再び振るわれた一撃は確かに神速と言えるだけの速さがあった。けれど……。

「な……っ！？」

感情に振り回された一撃はより読みやすかった。

手にした剣でその一撃をいなす。

「……筋は悪くないが、少々我慢が足りんな。出直してこい」

渾身の一撃を放ったせいで硬直している女の腹に蹴りを放った。

「があっ!?!」

おもしろいくらい吹き飛んだ。

「霞!大丈夫か!?!」

増援か。

男と女……両方ともそれなりに腕が立ちそうだ。力量は今の相手と同じくらいか。

「見りゃ分かるやる!大丈夫に決まっとるわ!」

「見て分かるのは負けそうな事くらいではないか?ああ、認めたくないだけか」

協力されると面倒なのでさらに挑発をした。

「ざけんなボケえ!」

再び刃が振るわれるが、怒りで動きがより乱雑になったせいで思うように誘導できる。

向こうで二人が矢を構えているが、コイツが邪魔になって放てまい。とりあえず、コイツを気絶させてから……。

「なっ!?!バカもの!?!」

男が矢を放ってきた。

だが、それはコイツに当たる軌道だ。

何を考えている!?!ここで事故を起こされては……。



「!?!」

次の瞬間、当たる寸前だった矢は幻であったかのように忽然と消えた。

「もらったあ!!」

呆気に取られ無防備になってしまった私に刃が迫る！  
まずい……!!

S I D E    ? ? o u t

霞の偃月刀が侵入者の肩を斬った。

致命傷を与えるはずだった斬撃の軌道を無理に弾いた結果だ。

あのタイミングで間に合わせる技量には舌を巻く。

だが、あの傷ではこれ以上の戦闘は厳しいだろう。

「とどめや!」

これで終わらせんと霞が刃を振るう。

「待て、霞！いろいろ聞かなければならない事がある」

「止め」返礼は今の一撃で十分だろ。決着は後でもいいはずだ!」

……しゃあない。

ま、痛い目をよう見たようやし、引いたるわ」

俺は侵入者の前に入る。

「さて、何者か問おう。ここが魏の前線基地なのは分かっていると思うが?」

「やれやれ。自分の名を名乗らず名を尋ねる無礼者か。いきなり殴りかかってくるヒヨッコといい、碌な人材がいないと見える。まったく、曹孟得の器が知れるぞ」

ここで挑発を重ねらるとは大した度胸だ。もつとも、その程度の挑発は効かない。

「なんだと……？」

……秋蘭には十二分に効いているか。

秋蘭が食いつく前に俺は返答をすることにした。

「ふむ。いきなり基地に押し入ってくるという無礼極まりない相手に言われるとは恐れ入る。

無礼な行為が好きなようだから無礼に対処したのだが、余計な気遣いだったようだな。

私の名は衛宮だ。……それにしてもヒヨッコと侮った相手に斬られるのなら、

君はヒヨッコ以下という訳だ。そんな輩が人材云々とは……。

我が主の器が分からないほどその身が矮小なだけではないかな？」

挑発には挑発で返させて貰おう。

「おお、それはすまん。いつものクセでな……。確かに俺も無礼じやったな。俺の名は黄蓋。

だが、無礼を働いた相手に無礼で返すといのでは芸がないようじやな。

それに、俺はそなたをヒヨッコと言った覚えはないのう」

……手強いな。前言は撤回していないし、挑発にも乗らないか。

それにしても黄蓋か。……やはり、赤壁のために来たのか？

「どつやら一段落ついているようね」

皆が振り向くと、そこには流琉たちを引き連れた華琳の姿があった。

「華琳！」

「華琳さま！おまえら、何をしている……！」

秋蘭は護衛役をしていたであろう風を含めた三人に厳しい目を向けた。

「申し訳ありません。お止めしたのですが……」

こういう時、華琳を止めても無駄だろうな。

「私が行くと自ら言ったのよ。そちらは呉の宿将、黄蓋ね？私は魏の曹操。」

この者達の無礼、主として詫びをさせてもらうわ」

「こちら名乗らずに来たからお互いさまじゃ。こちら改めてお詫びしよう」

「それで、その呉の宿将殿が何の用や？」

まさか、ウチらにケンカ売りに来ただけ……ちゆうことはないやろ」

刺々しく霞が口を挟んだ。

……ヒョッコ発言で怒りが再燃したようだ。

「うむ。儂は売られた喧嘩を買ってやっただけじゃ。……少々高くついたがのう」

そう言つて黄蓋は肩の傷を見る。  
傷口を抑える手から血が滲み出て、地に滴り落ちている。

「すぐに軍医に治療をさせましょう」

「ありがたい。それと曹操殿、少々話をさせてもらいたい。

良ければ、席を設けてはくれんかの？」

「いいでしょう。流琉、沙和、席の用意を、士郎は黄蓋を璃夜の下  
へ」

「はい」

「わかつたの！」

「わかつた」

三者三様の返事をして行動に移つた。

「黄蓋殿、傷の具合は問題ないかね？」

「うむ。多少違和感があるようじゃが、些細なこと。

小さいながらも名医なようじゃの」

「……あまり、動かさないでください。……傷が開きます」

肩を動かして状態を確かめる黄蓋に璃夜は批難の視線を向けた。

「おお、すまんすまん。幼子に気遣いをされるようでは……」

「……幼子の前に……医者です」

「重ねてすまんな」

「……別に……どうでもいいです。……あくまで……医者だから……  
……注意しただけ。」

「……あなたが死のうと……生きようと……知ったことでは……あり  
ませんから」

「……………」

淡々と受け答えをする璃夜に、黄蓋もどう接して良いかわからないようだ。

「何か恨まれるようなことをした覚えはないんじゃないか……………」

「残念だが、黄蓋殿は本来なら八つ当たりで恨まれても仕方がない立場だ。」

もっとも、璃夜にしてみれば他人のことを本心からどうでもいいと思っっているから、

関係ないがね」

そう、彼女は他人に対して基本的には無関心だ。

にも関わらず、璃夜が軍医に志願したのは、

医者だった彼女の母親の代わりに生き残ったから、母親の代わりにやることにしたからだ。

「八つ当たり？」

「……………彼女は合肥のただ一人の生存者だ」

「……………っ!？」

黄蓋は愕然とした表情で璃夜を見た。

「すま……………謝らないで……………下さい。……………あなたが謝ったところで

……………意味はありません。

……………価値も……………認めません。

……………起きてしまった事が……………その程度で変えられる……………と思っ  
ているのですか？

……………あなたの……………謝罪に……………それだけの価値が……………意味が……………ある  
とでも？

……だとしたら……随分と傲慢ですね？  
……謝るくらいなら……心に刻んでください。……犠牲になった……  
……みんなのことを」  
……肝に銘じておこう」

気まずい沈黙が辺りを統べる。

「そろそろ席の準備も出来ているはずだ。案内しよう」

「うむ。……治療の件に礼を言ってもいいかの？」

「……好きに……したら」

「うむ。ありがとう」

部屋を出る時、“どういたしまして”と幽かに、だが確かに聞こえたが、

それが黄蓋に聞こえたかは知らない。

現在、俺たちは長江にて船で移動をしている。

黄蓋は予想通り、魏に降りたいと申し出てきた。

鞭打ちの痕も、伝えられてきた情報通りであった。

史実通りに裏切る可能性は極めて高い。

劉備の将が何人か呉の軍勢に合流し、戦場が赤壁になることもそれを裏付ける。

ただ、華琳は十中八九裏切ると判断しながらも、それを使いこなしてこそその霸王だと言い、

黄蓋が降る事を認めた以上はそのことに異論を挟む余地はない。

……ただ、その時に備えるだけだ。

……にしても。

「……長江はこんなに川幅があつたか？」

確かに世界でも有数の大河だが、これほどだったのだろうか？

「おそらく、先日の嵐が原因で水の量が増大したのかと」

「そういえば、大量に降つたな」

「ただでさえ長江は広いんやから当然やろ……うええ」

真桜が船酔いでノックアウト状態になりながらも返答した。

「ほら、あそこにも漁師さんの船が……」

沙和の指さす方向を見ると、確かに漁師の船があつた。

……何故か鎖でつながっている船が。

その船は小さなボートを鎖で繋ぎ合わせた、見たこともない形をしていた。

あきらかに漕ぎにくそうで、慣れていないことを伺わせる。

「……あれは昔からののか？」

「そんなのわかんないの……」。

でも、大きな川だからこうやって船団でも移動できるのー……うう  
）……」

船酔いでダウンする沙和を後目に、俺は兵に調べるように指示を出した。

……これで黒なら史実通りに火刑で来ることは確定する。

……報告が届き次第、華琳に報告をしよう。

凧も船酔いにやられ、三人揃ってダウンするそばで俺は報告内容のパターンの試行を続けるのだった。

「華琳」

その晩、調査結果を聞いた俺は華琳の下へ報告に行った。

「あ、兄様」

「あら、こんな時間に……どうしたの、士郎。」

わたしは黄蓋との話が終わって寝るところなんだけど？」

「……大事な話があるんだ。華琳の天幕とかもう少し人目につかない場所で話したい」

周りにはまだ、夜番の兵士達もそれなりに多い。  
ばれる可能性は出来るだけ下げておきたい。

「……いいでしょう。流琉に頼んで良いかしら？」

「もちろんだ。……あの二人は抜きで」

「……分かりました」

流琉がその場を去った後、俺たちは華琳の天幕に移動した。

「今日、鎖で繋いだ漁師の船が通ったよな？」

「ええ」

「どうやら一週間前までそんなことはしていなかったみたいだ」

俺の言葉に華琳が薄く笑った。

「……なるほどね。さきほど黄蓋が船酔い対策として  
船を鎖で繋いだらどうかと意見を出してきたわ。

黄蓋の連れの鳳雛とやらが昔からの風習と言っていたけど……」



「……罨、だな」

「火計は風向き上ないと断っていたけど……」

「それを鵜呑みにするのは危険だと思う」

「失礼します」

そこへ流琉が皆を引き連れて入ってきた。

当然、春蘭と季衣以外だが。

あの二人は顔に表情が出過ぎるからな。

こうして改めて対策について話し合われた。

結果、俺と真桜、及び工兵部隊は徹夜で作業をする羽目になった。

「よく寝たのーーーっ！」

翌日、部隊の様子を見に行くと昨日とは打って変わって元気いっぱいな皆がいた。

「……元気だな」

「うん。今日は船が揺れないから、気持ち悪くならないの。この鎖のおかげかなの？」

さっそく効果があつたらしい。

「どうもそうらしい。こんな鎖があるだけで、随分と違うものだな」

全ての船には、船と船を固定する鉄の鎖ががちりと組み付けられていた。

昨日はこれらを実験工事で俺たちが付けた。

やたらと頑丈そうで人が渡れそうなくらいなのに“触るな”と書か

れた札を貼られているものだから、  
兵たちは訝しげだ。

凧などは不思議そうに触ろうとしていた。

「触りなやつ！」

同じく徹夜明けで気が立っている真桜はそれを見て怒声を上げた。

「……………っ!？」

慌てて凧は手を引っ込めた。

「真桜、気持ちちは分かるが落ち着け。

念のために警告文を貼ってあるが、普通に触るぐらいなら問題はないんだから」

「……………どうして同じく徹夜なのに、師匠は平気なんやろう」

「……………慣れてるから、としか言えないな。人間は一週間くらい寝なくても死にはしないさ」

それに怪我、命の危機、食量不足が重なると厳しいが。

「それは師匠だけや」

「隊長だけですな」

「ぜーったい、沙和には無理なのー」

まあ、お勧めはしない。

「とにかく、真桜は眠っておけ」

「んじゃ、お言葉に甘えて」

そう言っつて船内の仮眠室へ向かって行つた。

「……………あれ？」

「どうした？」

「……………おかしい」

沙和と凧が訝しげな視線の先を見ると本国の一部隊がいた。

「あいつらが……………！？」

そこで俺も気付いた。……………見かけない顔だったのだ。

魏の鎧はある程度のバリエーションがあるが、その兵たちのは本国のものだ。

そして、本国の兵なら凧たちと共に訓練をする過程で何度か顔をみているはずだ。

にも関わらず、その顔を見たことがない。

一人や二人ならともかく、全員に見覚えがなかった。

「凧。その件、華琳に伝えてくれ。くれぐれも黄蓋に気付かれないようにな……………」

「……………了解です」

その晩、風向きが変わると同時に俺たちは表に出た。

予想通り、炎が空を赤く染めていた。

「華琳さま！」

「黄蓋が火を放ったわね？」

「沙和たちが怪しいと言っていた者達が予想通りの動きをしたようですな。  
いま風と桂花が真桜たちを連れて、消火と迎撃に向かっています。  
あと、呉の船団も近付いてきていますな。明かりがなかったから気付くのが遅れたようですが」

事態は想定通りに動いている。

鎖は簡単に外れるように細工済みで、紛れ込んだ敵兵の識別用に黄巾を付けている。

イレギュラーでも起きない限り、軽微な損害で勝てるだろう。

そう……この時思っていた。

だが、それは起こった。

魏・蜀・呉の誰もが予想しない形で。

揺れる。全てが揺れた。

……戦場に混乱が起きた。

「これは……!?!」

「地震だと……!?!」

かなり大きな地震だったが、水の上であつたが故に被害はなかった。  
この時点では。

だが、俺は地震と水上の二点からあることを連想していた。

俺は震源である方向を見た。

千里眼だからこそ、遙か遠くからこちらに向かうソレを発見できた。

「華琳!!退くぞ!!!」

「え!?!」

俺は真桜と開発した伝令用の青く燃える火矢を放った。

「何を考えているの!？」

「いいから逃げるぞ!!!このままでは全滅する!!!!」

俺は華琳を担ぐと一目散に岸へと逃げだした。

「士郎!!何を!？」

「とにかく岸に逃げろ!!長江から出来るだけ離れるんだ!!」

状況をつかめないまでも、

退却命令が出たことにより主要メンバーと全兵の三分の二が安全地帯まで避難出来た。

鎖で繋がってたからこそ、これだけ避難できた。

敵軍は追撃をかけるべく抜け柄となった船団を燃やしつつ追撃をかけている。

主要な将たちは突然変化した状況に対応すべく対岸にとどまっているようだが。

「何を考えてるのよ!!!華琳さまの悲願をつ……!？」

罵声を浴びせようとした桂花の顔色が蒼白になる。

皆もつられて桂花の視線の先に顔を向けた。

「な、なんやあれ!？」

「な……み!？」

地震に常に付きものなそれがまさに赤壁を蹂躪しようとしていた。

あちこちで悲鳴が驚愕が絶望が湧いた。

巨大な津波が敵も味方も関係なく巻き込んでいく。

先日の嵐で川幅が広がっていたが故に、避難が間に合わず被害は増大する。

誰もが信じられないと目を見開く中で、屈強な精兵たちが命を無残に散らしていく。あれだけ赤く燃えていた炎も巻き込まれ、辺りを暗闇へと戻していった。

大陸史上、有数の大規模な戦いは史上最短で最多の犠牲を叩き出した。

こうして、誰もが予想しない形で赤壁の戦いは幕を閉じた。

「く、くくく……」

遙か川上で嗤う男が一人いた。

男の視線の先で消えていく、巨大な蛇の姿があった。

その怪物の名は修陀。

南方の洞庭湖に棲んでいたとされる巨大な大蛇。

大きな津波を起こしては漁民たちを死に追いやったという。

男は事前に嵐を起こして準備をした上で、修陀を召喚して津波を起こしたのだ。

結果、男の企み通りに甚大な死者を出すに至った。

「ここまで上手くいくとはおもいませんでしたね！

消費する力も、半刻にも満たない召喚時間だったからさほどでもない。

そして手に入る力はそれをはるかに上回る！

ひやはははははっ！これで！これで後は仕上げの準備にとりかかるだけだ！

王に……後少して王になる！私一人のための！僕一人が統べる、自分だけの世界の王に！

……そうだ……生きてるのは俺だけでいい。……それ以外など……

私以外などこの世に必要な……」

かつて王允子師だったソレは、  
数多の怨念を力に変えたが故に“自己”を怨念に塗りつぶされた王  
允子師のなれの果ては、  
本能のままに優れた理性の下に歓喜しながら人間の虐殺のための準  
備を始める。

これは黒き運命が赤き定めを塗りつぶした一幕。

## 第二十話：幕間

数多の命が失われた赤壁の大災害からしばらくの時が経った。津波によつて呉の軍勢はほぼ全滅した。

多くの犠牲を出しながらも十分な兵力を残す魏軍に現状では対処できないと判断し、

孫策達は蜀軍に合流した。

どうやら協力をするなら魏を破つた後に呉の領土を返還すると約束したらしい。

劉備らしい約束だと言える。

現在、蜀は呉に派遣して失われた兵の補充と訓練を、魏は津波と地震によつて荒れた呉の領土の復興と新たな統治体制の構築を行っている。

俺はというと、津波の被害についての報告を見ている。

「……………」

「どうかしたのですか？ 難しい顔をして」

「そうなのー。そんなんじゃないや皆が心配するのー」

「何かおかしなことでもあつたん？」

新兵の訓練を終えた凧たち三人が入ってきた。

「……………津波の被害報告を見ているんだけど」

「……………被害は信じられない規模でしたね」

「兵も沢山死んだのー……………」

「正直、あん時は生きた心地がしなかつたわー」

それはあの場で生き残つた者の共通した想いだらう。

幾ら武勇に優れても、巻き込まれれば終わりなのだから。



実際、呉はそれで負けたと言っている。だが、問題はそこではない。

「気になったのはそれだけか？」

「え？」

それは随分前から分かっていたことだ。問題なのは、その被害範囲だった。

「……津波は地震によっておきる。震源地から円周状に津波は発生するんだ」

「それがどうかしたのですか？」

「……津波の被害が上がっているのは具体的に上げてみれば分かる」

「ええと、赤壁、江夏、夏口……」

そこまで真桜が言ったところで、沙和は気付いたようだ。

「……反対側には発生してない？」

「そうだ。位置的には江陵、夷陵にも被害が発生しているはずなんだ」

地震が発生してから津波が襲いかかるまでの時間で大体の位置を割り出した。

位置が大幅に間違っているということとはまずない。

「……どうということなのですか？」

「少なくとも、普通の津波ではないことは確かだ」

陸地で発生したこともおかしいが、何よりタイミングが良すぎた。まるで狙って起こったかのような……。

「狐に化かされたみたいやな」

「そこで妖怪を出すのはおかしい」

「伝説の妲己でも無理なのー」

三人の何気ない会話で思い出した。

……窮奇、風を操る幻獣のことを。

よく考えればあの時、窮奇が馬騰を襲った事もタイミングが良すぎる。

……この時代は科学が発達していない分、神秘の度合いが高い。

津波を起こすと神話で謡われる魔物はいくつか存在する。

そういったモノがまだ幅を利かせてもおかしくはない時代だ。

だが、それでもタイミングの問題は変わらない。

……嫌な想像が頭を過る。

この馬鹿げた考えが杞憂であれば良い。

そう思った。

「それじゃあ、俺は報告書を提出しにいくが、何かまだ用はあるか？」

「そうそう、忘れとった！師匠、干将・莫耶貰いたいんやけど、ええやろうか？」

……そういえば最近、真桜は武器の作成に凝っていたな。

「構わないけど、意味がないぞ。壊れたら消滅するから」

所詮は贋作、分解して調べるなどといったオーソドックスな手段は使えない。

「それでも学べる点はそれなりに……」

「……おまけに人命で打たれた代物だから、普通には打てないと思うぞ?」

人の命を犠牲にして武器を作らることなど許容できない。

「……そうやけど」

しょんぼりする真桜を見かねてフォローすることにした。

「今度、いろいろ武器の製法を教えてやるからそれで我慢してくれ」

「それじゃあ、早速……」

「三日前に炉を爆発させたばかりで使えないはずだろ」

俺たちは呉にいたため呉の城の炉を使っていた。

そして、いつも使用していた炉は開発に熱心だった華琳のおかげでかなり良質のものだった。

結果、いつもの調子で真桜が使って爆発させてしまった。

「というか、これから真桜は私と街の警備の仕事だ!」

そう言っただけは真桜の襟首を掴むと引き摺りだした。

「ちよ、凧、首、首!」

みるみる顔色が変わっていく真桜に気を荒立てている凧は気付かない。

「まったく!趣味に文句をいうつもりはないが、仕事をいつも疎かにするなんて言語道断だ!」

「(隊長、このままじゃまずい!。なんとか助け船を出してあげ

て欲しいのー）」

沙和の訴えに俺は頷いた。

「凧、忘れものだ」

「え？」

俺は沙和を掴んで凧に放った。

沙和を受け止めるために凧は真桜を手放した。

「あ、すいません」

「ぜーはー、ぜーはー……」

「隊長！いくらなんでもこれはないのー！」

「さぼるうとして自分から真桜を助けようとしなからだ。」

沙和も今日は南地区の警備があるんじゃないか？」

「う……」

「ほら！行くぞ二人とも」

こうして、サボリ魔二人を引き連れ凧は出て行った。

一通り文官としての仕事を終えた後、俺はようやくとれた休憩をどう活用するか考えていた。

釣りに行くか、街の復興具合を見ながら買い物を済ますか……。

移動しながら考えていた俺は中庭に出たところで思考と足の両方止めた。

「……………これは？」

つい一刻前に通りかかった時とは比べようもなく荒れ果てていた。穴だらけの地面に、断ち切られた植木。

まるで爆撃されたかのような有様だった。

そして、傷だらけの季衣と流琉に傷薬を塗る璃夜がいた。

「あ、兄ちゃんどうかしたの？」

「季衣、この惨状を見れば誰だって戸惑うと思うよ」

「……二人が本気で訓練した結果です」

璃夜の説明でおおいに納得した。

したが……。

「二人とも場所は選んでからにしてくれないか？」

「はい……」

二人は申し訳なさそうに謝った。

「璃夜もありがとだな。二人の手当をしてくれて」

「……当然のことを……しただけです」

いつもより少し長い沈黙の後、璃夜はそう返した。

それが彼女の心の動きに思えて嬉しかった。

「さて、それじゃあ後始末をするぞ。まずは穴埋めからだ」

「はい」

「……私も……やります」

「いいのか？」

「……軍医が……当番制になったので……今は暇です」

「それじゃあお願いするよ」

こうして日が暮れるまで四人で中庭の修復をした。

「ええい！今日はわたしが……！」

「いいえ！それは私の……！」

それから一刻後、土郎たちが去った後、華琳の好物を同時に手に入れてしまったが故に、争う二人の姿がその場にあつた。

「はん！それだから……！」

「あら、あなたは……！」

二人は無駄にヒートアップし続ける。

だから気付かなかつた。自分たちが茂みに向かっていていることに。そして……。

「「え？」」

二人揃つて茂みの影に隠れていたため埋め忘れられた穴に落ちた。

「いたた……！」

「もう！なんなのこれ！」

二人は起き上がろうとして気付いた。

相手の下敷きになつて潰れた華琳の好物を。

半泣きになつた二人の喧嘩は明け方まで人知れず続いたが、穴を開けた当人たちがその事を知ることはいになかつた。

……二人の怒りは全て一人に向かつたために。

夜になり、月があの日のように綺麗だったので城壁に向かった。偶には故人を偲びながら酒を飲むのも良いだろう。

よく考えたら今までそういった形で酒を飲んだ事はなかったしな。

「士郎、ええ所へきた!」

「一杯いかがでしょうか?」

思いがけない先客がいた。

霞と星が酒宴を行っていた。

あたりには空になった酒樽が転がっている。

何か色々台無しだ。

「う、うう……」

「あははー 星が回っているのー」

「も、もう飲めへん……」

酒宴の参加人数を訂正。

どうやら部下三人も参加（恐らく強制）していたようだ。

しこたま飲まされたらしく、酔いつぶれて石畳に転がっている。

「……随分派手にやっているな」

「そんなことあらへんよ。少々若いもんには早かったようやけど」

「うむ。このくらいで情けないですな。どうでしょう、士郎も一杯いかが?」

そう言っつて酒を進めてきた。

というか……。

「……これは俺が作った酒じゃないか？」  
「気のせいでしょう」

星はしれつと宣った。

……調味料用として苦労して作った酒をほぼ飲みつくされたのだから怒っても良いよな？

「……相応の返礼はするから覚悟しておけ」

秘蔵のメンマを軒並み料理して城の皆（星以外）に振る舞ってやる！

「まあ、そないなに怒っておらんで、いっしょに酒を飲もうやないか」

「……はあ」

俺はため息をついてやけ酒を飲みはじめた。

「お、結構いけるんや」

「昔、訓練したからな」

その時の事を思い出そうとして……。

イリヤの持ってきた酒が試験薬で、碌でもない目にあつたのを思い出した。

出来れば思い出したくなかった……。

「どっしかしたのですかな？急に黙りこんで」

「……昔のことを思い出していただけだよ」

慌てて取りつくろった。



「ふむ。今日は格別に月が綺麗ですからな。何か思い入れでも？」

月の夜……今日のような……あの日は……。

「あるにはあるな。子供らしい何の根拠もない“口約束”の思い出が」

そう、その子供らしい何の根拠もない“口約束”に“安心した”と言いつつ残された思い出が。

「小さい頃か……士郎はどんな子だったんや？」

「そうだな……夢見がちな事を本気で目指していて、何一つ現実の重みを知らなかったガキかな？」

「子供とはそんなものでしょうな」

「違ういな」

もともと、今は現実の重みを理解していながら、夢見がちな事を変わらず目指しているのだから、始末におえないだろうな。

「そういう二人はどんな子供だったんだ？」

「ん？ウチは……やっぱクソガキやな。いっつも強い喧嘩相手を探しては倒して、」

オノレの力に自惚れるようなガキや。正直、今思い出すと顔から火が噴くわ」

霞は当時を思い出して羞恥にもだえた。

「ははは。子供らしくて良いですな。私はあまり子供らしくない子

供で冷めてましたな」

「嘘や(だ)」「」

俺たちは同時に星に突っ込んだ。

華蝶仮面などというキワモノを正気でやる人間が冷めているわけがない。

「失礼な！何を根拠に……」

「華蝶仮面に決まっとするやないか。あれを素面でやれる人間を冷めるとは言わん」

「アレは……ではないか！」

「それが………やる！」

俺をおいてきぼりにして白熱している酔っ払い二人を後目に、

俺は当初の目的通りに月を見ながら酒を飲むことにした。

あの日を思い起こさせる月を見ながら、俺は改めて思う。

……切嗣オヤジの夢をどこまで形に出来たかは分からない。

けど、最後までこの理想を追い続けるとここに再び宣告しよう。

偽物で歪な自分を認めてくれた人がいた。

欠陥品同然の自分を愛してくれた人がいた。

それだけで俺には十分だ。

その事実おもいだけで、この道は無意味じゃないと胸を張れる。

例え報われないと分かり切った道でも、変わることなく進んでいく。願わくば、俺の道が切嗣の夢を少しでも形にしていることを祈ろう。

俺はますます騒がしくなる喧噪に気付かず、想いと共に酒を呷った。

これは正義の味方のとある日常的一幕

蛇足だが、この直後に横の二人から同時に絡まれ、  
夜明けまで騒がしいことこの上ない酒宴に付き合い合わされたのだった。

## 正義の味方の観察記録【風編】

「ふーむ？」

風は現在趣味で日課の猫観察をしてるのですが、いつもとはちょっと趣が違うのですよー。

きっかけは数日前、一匹の白い子猫……そうですねー、璃夜一号（仮）と呼びましょうか。  
白い子猫で牝ですし。

この璃夜一号（仮）の行動に興味を持ったことにあるのですー。

猫のたまり場で周りの猫から可愛がれたり、行動範囲が街の外にまで及んでいることとか。

極めつけに城内で見かけた時は驚きましたよ。

……そのまま、後をつけようとしたら、桂花に捕まってしまう泣く泣く断念したのですが、

今日は桂花対策もしてきて準備万端なのです！

今頃、わざと書き間違えた報告書が発覚して、

華琳さまからの罰を喜んでその身に受けてるでしょうねー！

華琳さまにばれる時期を調節するには苦労したのですよ。

現在、璃夜一号（仮）を追跡しているのですが、街はずれにまで来てしまいました。

子猫にしてこの行動力。将来が楽しみですよねー！

何をしに街の外にまで行くのか興味津々なのです。

街の外に出てから半刻が経ったのですが、まだ移動しています。  
てつきり小動物を狩るのかと思っていたのですが……。

ん？何か声が聞こえてきますね？

「二十四目フィィィイツシュー！！」

「……………」

……あまりにも予想外の光景に思考が一時停止したみたいです。

お兄さんが明らかに可笑しいのに似合っている恰好で生き生きと釣りをしているのです。

可笑しな掛け声と共に川から魚を釣り上げる光景を見れば、誰もがお兄さんに対する認識を変えること間違いなしです。

……子供っぽいところがあるとは思っていましたが、ここまでとは改めてお兄さんを見て見ると、足元の箱に魚が山積みになっていました。

……そしてそこに忍び寄る白猫の姿が。

「よし！」

魚がかかり、そちらにお兄さんが集中する中、

璃夜一号（仮）は山積みになった魚を一匹口に加えるとて茂みの中に。

極めて自然な動きが熟練の技を思わせるのです。

……なるほど、街の外に来ていたのはこのためですか。

子猫では魚を捕まえるのは難しいですね。

璃夜一号（仮）はおいしそうに魚を平らげると、立ち上がりました。街に帰るんですかねー？

おお？近くの雑草を口にしました。

何故わざわざ？その後の毛繕いや口の周りをなめるのは普通の行動でしょうけど……。

「みゃー」

「ん？また、お前か？子猫なのによくいつも必ず来るな……」

……自分からお兄さんの所に甘えにいきましたよ？

というか、いつもやっていいるのですか？璃夜一号（仮）は仕切りに魚の匂いを嗅いでいます。

「やれやれ。……一匹いるか？」

「ミャー！」

あげく、魚をねだりました。

すでに一匹かすめ取ったのに。

もしや先ほどの草は臭い消しですか？

悪女ですね、璃夜一号（仮）……。

二匹目を食べる璃夜一号（仮）の傍らで、訝しげな表情を浮かべるお兄さん。

「おかしいな？また、一匹数が合わない。

何か原因があるのか？おまえは何か……知る訳ないか」

いや、知っていますから。というか、原因ですから。

「大量に釣れたことだし帰るか」

お兄さんがそう言って箱の蓋を閉じると、璃夜一号（仮）は箱の上に乗りました。

「ちゃっかりしてるな、お前」

「みゃー」

……ちやつかりどころか利用し尽くされちゃってますよ？  
したたかですねー、璃夜一号（仮）。

「そこにいる者も出て来たらどうだ？」

……気付かれていたみたいですねー。

「……こんにちわ、お兄さん」

「風か。こんなところにどうして？」

「その子猫を追ってきただけなのですよー」

「……また猫観察か？桂花にまた叱られるぞ？」

「対策済みですから」

「やれやれ」

お兄さんがため息をつきました。

理由も分かりますが、治す気は全くありません。

そんなどうでもいい事より、猫観察のほうに優先順位が高いので。

「それにしても良く分かりましたねー？」

「……監視の視線には慣れているからな」

猫の視線には慣れていないようですけどねー。

「……一緒にもいいですかー？」

「かまわないけど」

こうして二人と一匹は街へ帰還しました。

街に戻ったところで降りるとばかり思っていたんですが、璃夜一号（仮）は未だ箱の上です。

「……お兄さん」

「どうかしたのか、風？」

「その子猫は飼っているのですか？」

「いや、違うけど？」

「……なら、どうして城にまで乗せてきたのですかー？」

未だ箱の上に乗る璃夜一号（仮）を見ながら言いました。

「降りしてもついてくるからな。」

……部屋を覚えてるみたいで勝手に部屋に侵入していることもあるくらいだし」

それで城内にもいるのですか、璃夜一号（仮）。

けど、特に何も……というか必要最低限の物しかない部屋にどうしていくのですかねー？

「風も来るか？特に何も無い部屋だけど」

「そうですねー、御邪魔します」

お兄さんの部屋に入ると、見慣れないモノが部屋の中央にどかんとありました。

「お兄さん、これは何ですかー？」

「それは俺の国の伝統的な暖房器具で炬燵っていうんだ。いい加減寒くなってきたからな」

一見、机に布団をかぶせただけに見えましたが、



中を覗くと何やらカラクリがついているようで暖かい空気が漏れてきました。

「あまりめくらないでくれ。熱が逃げるから」

そう言いながら、お兄さんは璃夜一号（仮）のノミを取り出しました。

……取らないとノミが部屋に巣くうからなのでしょうが、とことん利用されていますねー。

ノミを取り終わった璃夜一号（仮）は炬燵に入るとお兄さんの膝の上に乗って丸くなりました。

「……懐かれますねー」

「そうだな。まあ、餌も自分で確保しているみたいだし、問題は特にないからいいさ」

まあ鳥を狩ったりもできるみたいですが、他の猫や人からの貢ぎものや、

お兄さんからくすねたりとほとんど自分で餌をとってませんけどねー。

……けど、お兄さんに懐いているのは確かで、本当に幸せそうに寝ていますよー。

……それにしても、炬燵って暖かくていいですねー。

……だんだん眠くなってきちゃいましたー。

……目的は果たせた事ですし、……眠っちゃってもいいですよねー？  
こうして風は眠りに落ちたのです。

これは風の猫観察記録における正義の味方の観察記録部分なので  
よー。

## 正義の味方の休日記録8（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません。

最近、リアルが忙しくなってきたため中々時間がとれません。  
今後も更新が遅れそうなので先にお詫びいたします。

## 正義の味方の休日記録 8

霧雨が降る中、

俺と季衣・流琉・璃夜の幼子三人組は巨大な墓標の前に立っている。ここはかつて合肥の街があった場所。

廃墟とかした街の残骸は撤去され、今では巨大な墓標が佇んでいる。あの惨劇の犠牲者を弔うために作られた巨大な墓標は、

“街”そのものの墓だということを示すかのようだ。墓標の前にはたくさんのお花が添えられている。俺達も持ってきた花を墓標の前に置いた。

「……………」

「……………」

「……………」

そして、俺たちは静かに黙祷を捧げる。

救えなかった命に対し、愛していた命に対し、万感の想いを込めて静かに祈る。

犠牲になった人々に平穏と安らぎがあらんことを。

「……………別に泣いてもいいんだぞ？」

季衣と流琉は今にも泣きだしそうなのを先ほどからずっと我慢している。

こういつ時まで我慢する必要はないのに。

「いいんだ。ここで泣いたらおばちゃんたちが心配するもん」

「だから、代わりに両親が誇りに思えるような姿を見せたいんです」

「……そうか」

二人の想いを否定など俺には出来ない。

……俺もまた同じだったのだから。

「やっぱり最後は安心させてあげたいよな」

「……士郎も……そうだったの？」

「ああ。今際の際で寂しそうに自分の夢を語る親父を安心させたくて、

親父の代りにその夢を形にするって約束したんだ。

何の保障もない子供の口約束だったのに“安心した”って言葉を残して亡くなったよ」

そうして俺は切嗣の夢を受け継いだ。

“正義の味方”という理想を。  
そこに後悔など一片もない。

「三人の両親はどうな人だったんだ？」

「ボクは幼かったからよく覚えてないけど、  
すごく温かかったのは覚えてるよ」

「私の両親はいつもにぎやかでした。

父さまはすごく料理が上手くて、私の料理の師匠でした。

母さまは昔は凄く強かったそうなのですが、戦で大怪我をして引退したそうです。

私と季衣が華琳さまに仕えることになったのを凄く……喜んでました。

だから、私は自分を誇りに思います」

「……お母さんは医者で、……いつもみんなを助けてた。

……みんな……お母さんを慕ってた。

……わたしは……そんなお母さんが……大好きだった。

……父親が……いなくても……幸せだった」

そういえば、璃夜は父親に関してはひと言も言っていなかったな。

「亡くなっていたのか？」

「……たぶん……生きてます。」

……けど……父は……わたしの存在を……知りません」

どうやら璃夜の家庭は複雑なようだ。

「……お母さんの……話だと、

……お母さんが妊娠したことを……知る前に……旅に出たそうです。

……お母さんは……笑いながら、……『きっと再会する日が来る』  
って。

……分かっているのは……母さんと同じで……医者ということだけ  
「何かてがかりはないの？」

先ほどから黙っていた季衣が尋ねた。  
家族がいるのなら会わせてあげたい。  
そう思つての質問なのだろう。

「……これ」

璃夜が懐から取り出したのは……金色の鍵だった。

「それは？」

「……“最後の鍵”、……世界に一つしかない……二人の絆だつて。  
……だから、……もし会えたら……お母さんのかわりに……父に渡  
すつもり。」

……父に会えたとしても……それだけしか……会う理由が……あり

ません」  
「どうして？」

季衣は璃夜の言葉をよく理解できずに、疑問を呈した。

「……………わたしにとって……………父は……………血がつながっているだけの……………  
“他人”だから。」

……………父に期待することは……………何もありません」

ある意味、それは仕方がないことだろう。

親とは血さえ繋がっていればなれる存在ではないのだから。  
血の繋がりはあくまでも生物学的な意味での親でしかなく、  
過去の積み重ねが会って初めて親と呼べる。

故に、璃夜の言葉通りだろう。

「璃夜の父さまは璃夜の事を知らないんだから、  
そこまで言わなくても……………」

父親に対する辛辣な璃夜の言葉に流琉はフォローを入れた。  
流琉の言葉はある意味正論だ。

知っててずっと放置していたのなら、  
親であることを放棄したと判断してもいいと思うけど。

……………もつとも、それだけじゃないだろう。

「……………それに……………わたしには……………お母さん以外との絆は、

……………あの日に全て……………失ったから」  
「……………！」  
「……………！」

そう、かつての璃夜は父親に対して何か思うことがあったかもしれない。

けど、今の璃夜には父親に対する“愛”も“憎悪”もないのだろう。あるのは感情が伴わない事実だけ。

俺はそれを理解したが、それでも璃夜が父親を全否定するのが悲しかった。

それはイリヤと再会すべくあがいたにも関わらず再会することなく亡くなった切嗣と、

そんな切嗣のあがきを知らずに、切嗣を憎んでいたかつてのイリヤを連想させたから。

「けど、これから先の絆は分からないんだから、全否定はまだしなくても良いと思うぞ？」

だから、俺は璃夜の言葉に異論を挟んだ。

少なくとも、可能性がある内は希望を残してあげたいと思った。

「……………そうですね。……………保留して……………おきます」

あくまでも淡々と璃夜は答える。

これ以上は俺にはどうしようもない。

父親に関して感情が伴わない事実は変えられない。

こういうときは自分の限界を痛感する。

俺は璃夜と父親の未来に希望があることを祈るしかなかった。

これは正義の味方の休日記録における追悼の記録。

## 第二十一話：荊州攻略戦（前篇）

とうとう来るべき日が来た。

津波からの復興と呉の旧領統一も済み、兵の訓練も済んだ。

出来る手は全て打たれた。

その結果が目の前に広がる銀色の荒野。

曹魏全軍、五十万による鉄刃の海原。

魏の皆のこれまでの全てによって存在する軍勢。

俺はそこから遙か離れた場所にてその光景を眺めている。

「……壮観ですな」

この光景を見て星の言葉に異論を唱える者はいないだろう。

「ああ」

だが、俺としてはそれより彼らが一人でも多く戻ってこれるかに考えが向いてしまう。

というより、敵味方問わず少しでも少ない犠牲で戦が終わる事を願ってしまう。

出来れば誰一人犠牲にならなければいいとすら思ってしまう。

その甘さも歪さも不可能さも承知の上で。

だから光景は壮観だと思うけど、星と違って別に心に響かない。

俺は内心を悟られないように音を立てて馬を進めた。

「俺たちも行くとしよう」

例の孫策暗殺未遂の件や津波の一件など、最近は不自然な事件が多かったため、



偵察も兼ねて俺は遠距離からの戦場の監視を願い出た。最初は渋っていた華琳たちだったが、何とか説得することに成功した。

……代わりに二つ条件を付けられたが。だから、こうして星と共に別行動をとっているわけだ。

「……それに、華琳さまから『士郎からくれぐれも……くれぐれ・も！』

目を放さないよう気をつけてちょうだい』

と頼まれましたからな。愛されているようでなにより」

条件その一、戦が終わるまで星の監視下にいること。

ここで絶対に無理はするなどは言わないところが味噌だろう。

言っても無駄だと分かっているから強制的に止めようということだ。

……そこまで信用がない、というより逆の形で信じられているのか。まあ、こんな物を密かに所持している時点で大当たりだが。

俺は懐にしまっている物を思い出して苦笑した。

>数日前>

「璃夜、頼まれていた薬草を見つけてきたぞ」

「……ありがとう」

医務室に入るとネズミに餌をやっている璃夜の姿があった。

「それと、強力な睡眠剤をくれないか？」

一人、煩い囚人がいて他の囚人から苦情が来てるから」

俺は薬草を渡し、睡眠剤を受け取りながらネズミを見た。

「ネズミを飼うことにしたのか？」

「……違います。……効果の……確認」

その言葉の意味はすぐ分かった。

突然、ネズミの動きが活発になった。

狭い鉄製の檻の中を縦横無尽に駆け回る。

とうにか上手く制御出来ていないのか、柵に幾度となくぶつかっている。

……しかも、ぶつかった箇所が見事に凹んでいる。

「……何をやったんだ？」

「……“秘薬・破和”……効果は……限界を超えた……あらゆる能力の……増大です。」

……お母さんに……教わったきりで……作るのは……初めてだから」

璃夜は赤い錠剤を見せて言った。

つまり、一種のドーピングか？

効果がケタ違いだが。

「副作用はあるのか？」

璃夜が答えようとしたその時、破碎音と共に灰色の弾丸が璃夜を襲った。

「璃夜！！」

咄嗟に璃夜を引っ張った。

倒れこむ璃夜を掠めてネズミが壁に衝突した。

……壁に罅が入ったが、ネズミはびんびんしている。

そのまま近くの家具を齧っては倒壊させるなど、好き勝手に暴れまわる。

対処しようにも璃夜を庇いながら追うのは難しい。

「……………あれ、どうにかならないのか？」

「……………効果が……………切れるまで……………待つしか」

それから半刻後、部屋を廃墟に変えた後、ネズミは倒れた。ネズミは体を痙攣させて、泡を吹いている。

先ほどまで鉄や木材を豆腐の如く容易に噛み砕いた歯は無残に砕け散っている。

傷一つ負っていなかった全身は今や内出血で痛々しい色合いに変色し、

あれほどの速度を出した四肢は明らかに歪に折れ曲がっている。

「……………副作用として……………力を発揮した箇所……………悪影響が……………でます。

腕力を……………発揮すれば……………腕に、……………視力を……………発揮すれば……………目に。

……………症状の重さは……………時間と出力に……………応じます。……………最悪……………死にます」

そう言つて、璃夜は青い錠剤を砕いてネズミに飲ませた。

「それは？」

「……………緩和剤です。……………秘薬・破和パワー……………生命力の……………水増しをして、

……………治療を……………間に合わせ、……………緩和剤で……………副作用を……………抑えるのが……………基本です」

「なるほどな」

緩和剤が効いたのか、ネズミの痙攣は止んだようだ。

ネズミは虫の息のようだが、一命は取り留めた。

問題なのは荒れ果てた部屋の片づけだ。

璃夜と共に部屋を片付ける中、

俺は先ほど倒れた時に落したと思われる赤と青の錠剤を一つずつ拾い上げ、懐にしまった。

使用しないにこしたことはないが、保険は持っていた方がいい。いざという時のために。

「それに私としましても名誉挽回をしたいですからお気になさらず、皆としては西涼の件から、星以外に任せられたかと思うけど、星以外で俺を止められそうな者は将として軍を率いらなければならぬ立場にある。結果、客将の星に任せるしかなかったわけだ。星は前回は止めるどころか一緒に行動したせいで皆から攻められ、仮面は壊すなど散々な目にあつたから余計に気合が入っているようだ。」

もつとも、それはかなりの難事であることは懐の中のモノが証明している。

だから、俺は星の言葉を聞いて、

「出来るといいな」

そう答えた。

「……士郎が自重すれば良いだけの話では？」

「……出来ると思うか？」

「……………はあ」

星のため息がこれ以上ないほど明確に思いを表した。  
申し訳ないと思うが、こればかりは性分で変えられそうにない。

「まあ、無理をしない士郎など泳がない魚ぐらいありえませんか  
な」

「……………否定したいけど、否定出来ないな」

「自覚があるくせに改善しようと思っていないのが始末に悪い  
「全くだな」

互いに苦笑しあう俺たちだった。

それから数日が経った。

蜀と呉の将が代わる代わる攻め続けるが、確実に魏軍は進んでいく。

「今度は山道出口で待ち伏せか。こちらは少数しか動員できず、敵  
は全軍を動員できる。」

基本的だが効果的だな。……………数は……………だいたい四万で将は……………馬超、

馬岱、甘寧か。

伏兵は……………」

俺は布に情報を書き込むと矢に結んだ。

弓に矢をたがえて詠唱を開始する。

トリス・オン  
「強化・開始」

強化により身体能力を増大させて4km離れた本陣の的に矢を放つ。

狙い通りに命中した矢を当番の兵が回収するのを確認すると一息ついた。

「まるで先読みされたかのように動きが読まれて、敵軍も困惑しているでしょうな」

戦において正確かつ迅速な情報はそれだけで戦局を左右する。

しかも、偵察兵を出したそぶりも見せないのに、ためらいもなくノ一タイムで攻めてくるのだ。

約4 km + 約4 kmで約8 kmも手前から準備が出来るからなわけだけど。

事情を知らない敵の困惑は計り知れない。

「だからこそ意味があるんじゃないか」

ただでさえ、敵軍のほうが将の数で勝っているのにも関わらず、将を二人も動員しているのだから結果が伴わないとな。

「けど……そろそろ気付けれる頃合いか？」

「まあ、我らがいないことには気付かれているころでしょう。」

しかし、まさかこんな離れた場所から見張られているとは思いませんまい。

……実際、私は役立たず状態ですし」

まあ、4 km先が見える俺が異常なだけだが。

「まあ、俺を見張る役目だから役立たずなわけないだろう？」

「……なら、夜はきちんと寝て貰いたいですな」

密かに起きていたのがばれていたか。

「何の事かな？」

「強制的に眠らされるのが好みのようでしたか。では今後は……」

「分かったから止めてくれ。きちんと眠るから」

「……三時間は寝て貰いますからそのつもりで」

「……分かった」

時間指定で退路は断られたか。

「今の間が気になりますが……とにかく、」

士郎に倒れられたら皆に影響が出るのですから気をつけてもらいたい」

「そうだな。結婚の約束までしてしまった以上、倒れるのは不味いな」

「それは良かった………なんですと？」

そういえば、このことは華琳と俺しか知らないことだったな。

“ハトが豆鉄砲を食らったかのような”という表現があるけど、まさしく今の星がそうだな。

星が思いっきり呆気に取られている。

まあ、突然のカミングアウトに驚愕するのも無理はないか。

条件その二、この戦が終わったら私と結婚すること。

そう華琳から二人きりの状況で告げられた時、俺も同じ顔をしていたことだろう。

俺はその時のことを思い出しながら話した。

「それで、もう一つの条件は？」

二人きりになったことを神経質なまでに確認すると、華琳は深呼吸をしてから一気に会心の一言を放った。

「この戦が終わったら私と結婚しなさい!!」

顔を真っ赤にしながら放たれた言葉の意味が理解できず思考が真っ白になった。

「……………イマ、ナント？」

「……………私と……………結婚しなさいって言ったの!」

「ゼンタイノクミタテ？」

「それは“結構”」

「コウゾウヤキノウノケツテン？」

「“欠陥”」

「チノツイタアト……………」

「“血痕”ではあるわね。で、これ以上ボケるのは無しよ。それとも辺りに血痕をつけたい？」

首筋に触れた冷たい刃の感触でようやく正気に戻った。

「……………とりあえず、何故それが条件になるのか聞いて良いか？」

「……………士郎はこの戦が終わったらどうするつもりだった？」

その言葉で華琳の真意に気付いた。

そして、俺の行動が読まれていた事にも。

俺は全てが終わったら去るつもりだった。

「……………そのためか」

「勝手に消えるなんて絶対に許さないわ!!」

あなたの存在がこの国にとって私にとってどれだけ重要なのか分か



っているの？」

「……ああ。そして、俺の“理想”がどれだけ迷惑なのかもな」

十のうち十、全てを救いたい。

悪人ですら救えるなら救いたい。

だが、それは国にとって害にしかない。

そして……俺は理想を捨てられない。

「……士郎、私がそれを理解していないとでも？」

「なら……」

「甘く見ないで!!」

華琳の一喝が辺りに響いた。

それは初めて会った時と全く変わらず揺るがない一喝だった。

「あなたがこの地で理想を追えないほど、私たちの国が脆いと思っ  
ているの!？」

あなたの信念を蔑ろにするほど、私の想いが軽いと思っっているの!？  
私たちの培ってきたものが、私たちの絆が、それほど安易なわけな  
いでしょ!?!」

涙目で叫ぶ華琳に俺は言葉を失った。

「それに士郎は私の覇道の一助となるって誓ったはずよ。

そして私の覇道とは私の生きざまに他ならない。なら、最後まで付  
き合うのが筋でしょう？」

私はこの大陸の範囲だけでも、民が絶望に涙を流さなくて良いよう  
にしたい。

そして、士郎と共に歩んでいきたいの。

共に幸せになりたいの。

それとも…… 士郎は私のことが嫌い？」

最後に華琳が浮かべた表情は寂しげな少女の顔だった。  
強気な態度と覚悟の果てに見せた霸王しやうおうの弱さを見て、俺は覚悟を決めた。

「分かった。その条件を飲むよ」

こうして俺たちは婚約を結んだ。

「ちなみに断っていたらどうした？」

「勝利したらこのことを大々的に発表するつもりだったわ。」

まあ、実行したあげく士郎がいなくなったら国中が混乱、

私の権威は失墜してと碌なことにならないわね」

「…………… ちなみにどうして最初からそれを言い出さなかったんだ？」

「…………… バカ。私だって好きな人には本心から選んでもらいたいに決まっているでしょ」

「というわけだ」

「…………… 惚気話にしか聞こえませんか。けど、目出度い話でもある。」

なら、最後まで生き延びるためにも無理はしなくてももらいたい」

「ああ」

まあ、最後まで生き足掻くさ。

……………この生き方を貫きながら。

決戦に向けて運命は進む。

## 第二十一話：荊州攻略戦（中篇）

蜀の首都である成都への距離が縮まるにつれて、劉備たちの攻撃頻度も激しさを増した。

だが、今に至るまで互いに被害はあまりなかった。

理由としては劉備たちがヒット&ウェイに徹しているためだ。

まあ、兵数にかなりの大差があるのだから当然の判断だと言える。

それに成都での最終決戦のためにも戦力は温存する目的もあるのだろう。

本来ならばもう少し味方に被害が出てても可笑しくはなかったが、情報戦において圧倒的に有利な立場にあるため、被害は抑えられていた。

……それでも犠牲はゼロにはならない。

しかも、今回はこれまでと違い孫策率いる呉のフルメンバーとの戦闘だ。

津波によって敗れるという納得できない決着に区切りを告げるためか、かなりの兵を連れて来た。

当然、戦いも相応に激化した。

現在、戦場を俯瞰している俺の目に、また一人致命傷を受けて倒れる者が映った。

高所で戦場を見張っているせいで、いつも以上に克明にそれが分かる。

兵の一人や二人の死は戦局的に影響がない。

だが、俺にとっては十二分に胸が痛む。

それが敵兵であろうとも。

信念と覚悟を持って戦場に立っているのだろうから、余計な感傷に過ぎないのは分かっている。

……それでも、この痛みは決して消すつもりはない。

それが最低限の礼儀だと思うから。

ひたすら戦場における全ての呪を、絶望を、死を、祈りを心に刻み続ける。

刻み込んだ死の数が六万を超えたころ、勝敗は決した。

「戦局は？」

星はもどかしそうに聞いてきた。

まあ、星の目には状況が見えないのだから当然だろう。

「敵軍は撤退を開始したみたいだ。現在追撃を……！？」

「どうかしたのですかな？」

「……敵の救援だ。率いているのは……蜀の将全員だ」

敵の後方から、かなりの速度で軍勢が戦場に向かってきた。

「まずいな。春蘭が前に出過ぎている。このままじゃ挟まれる」

どうやら孫策たちに対して追撃をしかけていて深追いしそうになっているようだ。

副官として季衣が付いているとはいえ、援軍を相手取るのは厳しい。華琳たちからの伝令は間に合いそうにない。

俺はため息を一つ吐いた。

「追いつ！？」

ようやく追撃していた相手の姿を捉え、呼び止めるべく声を上げた所へ突然の衝撃が襲った。

混乱する中、落馬こそ避けたものの事態がさっぱり理解できない。

「はあ……はあ……ようやく追いついた。って春蘭さま？」

「なんだ季衣？」

「こめかみのソレは？」

わたしはこめかみ辺りに手をやり、季衣の言っていたソレを手にとった。

矢文だった。矢先が吸盤だったため刺さらずに衝撃だけを受けたわけだ。

未だ混乱したまま、わたしはついていた文に目を通した。

【蜀の全武将が率いる援軍来たり。直ぐ戻れ】

文を見て、ようやくそれが士郎からの連絡だと分かった。分かったが……。

怒りに手が震え出す。

「春蘭さま？」

「ふざけるな！孫策がすぐそこに居るのに引き下がれるか！」

持っていた矢を地面に叩きつけた。

ようは援軍が来る前に孫策を討てば良いだけの話だ。

「その春蘭さま？」

「なんだ！！」

いけない。どうにも気が立って納まらない。

「孫策はどこにも見えないんですけど？」

「え？」

先ほどまで孫策のいた方向を見ると確かに誰もいない。  
ただ乾いた一陣の風が吹いただけだった。

「急いで追撃を…あう!？」

「春蘭さま!？」

再び矢がこめかみに命中した。

……ちなみに華琳さまが来るまでの間に、都合五回も繰り返された。  
もちろん、殺傷能力がないことも分かっているから三回目以降は手で受けたが、

そのせいで追撃に移れなかった。

…… 土郎め…後で覚えてろ!!

無事撤退を終えた後、気になったことを話している。

「それは突然のことだったわ。

夏侯惇が背後から迫ってくるのを見て、一戦するのを覚悟したんだ  
けど……」

「けど?」

「夏侯惇に矢が当たって追撃がとまったのよね」

「それじゃあ、夏侯惇さんは脱落したんですか!？」

桃香の発言通りだったら良かったんだけど……。

「残念だけど、その矢尻は吸盤で殺傷能力はなかったみたい」

「そうか……その隙はつけなかったのか?」

私も冥琳と同じく反撃の機会だとその瞬間は思ったわ。思ったんだけど……。

「しようと思っただら、首筋がちりちりしてね。」

勘に任せてそのまま止まらずに進んだら、先ほどまでいた場所を矢が通ったわ。

もちろん鉄製の矢尻付き。……そのままそこに居るのは危険だからさっさと逃げたわ」

「射手はどこにいたんだ？」

おそらく皆の頭に浮かんだのは今に至るまで姿を見せない、稀代の弓使いである衛宮でしょうね。

あそこまで正確に射ることが出来るのだから彼だと思う……けど。

「それがどこにも見当たらないのよね」

周囲に気を配ってもそれらしき姿などどこにもなかったわ。だからこそ気になっているんだけど。

「恋、飛んできた場所分かる」

「「「「「え？」「」「」」」」」

「あそこから飛んだ来た」

呂布が指差したのは………遙か離れた山の中腹。

「冗談……だよな？」

「……恋、冗談つかない……矢が飛んできたの、見た」

もし、本当だとしたら八里もの遠距離狙撃が行われたことになる。はつきり言って人間に出来ることじゃないわ。

「……けど、それなら納得できます。そんなことが出来るなら、当然見えているはずですから、動きは筒抜けでしょうし、姿を見せずに戦えます」

「だが、そうだとしたらどうする？放っておくには危険すぎる」

その日の夜、最終決戦における衛宮対策が話し合われた。

「苦労したようですね」

「まったくだ」

春蘭の猪突猛進には困ったものだ。

いろいろ孫子を教えたはずなのに。

知識を身につけても、使わなければ意味がない。まさしく猫に小判といったところか。

それが良く悪くも春蘭の有り様でもあるけどな。

時には“考えない”というの必要なことだ。

「下手の考え休むに似たり」という言葉があるが、人はどうしても考えすぎてしまうことがある。

だが、春蘭には無縁なことだ。

だから、春蘭に自重を覚えてもらうより、

季衣に春蘭の抑え役ができるほど成長してもらった方が良いかもしれない。

……というより、それを率先して過保護な秋蘭がやり続けた結果が今の春蘭なのかもしれない。

それとも逆か？

まあ、卵が先か、鶏が先かみたいな答えなのでないことだけだ。



「それはともかく、いよいよですな」  
「……長かったな」

次の戦闘が最後の決戦になることは誰の目にも明らかだ。  
そして、その準備に両陣営は取りかかっている。

「……だからこそ、余計な横槍を出させる訳にはいかない」  
「やはり、出してくると？」

「両方が疲弊したところを纏めて倒すのは漁夫の利を狙う基本だろ？  
出さない方が可笑しい。そして、こういう嫌な予想が外れるほど運  
に恵まれていないんだ」

俺の言葉に星は微妙な顔をした。

「……何だ？」  
「……いや、あまりに自虐的な言葉にどう答えたものかと」  
「客観的な事実を述べただけなんだけど？」  
「それはそれで返答に困りますな」

その言葉に苦笑するしかなかった。

「出来れば万全の状態にしたかったけど……」  
「それは凱我がいないと難しいでしょうな」  
「まあ、凱我のことだからきつと戦場に生じる大量の負傷者を見逃  
すとは思わないけどな」

実際、津波の被害があつた各地で目撃例が噂されていた。

「こつやって噂話をしていたら来るかな？」  
「それは無「見つけた！どうやら間に合ったみたいだな！」理では

なかつたみたいですね」

背後の崖の上、約50メートル上に正義の味方の如く立つ白衣の男。俺なんかより、ずっとソレらしい。

「とう！！」

飛び降りてから着地するまでソレらしい。

「本当にここぞという時に現れるな」

「それが出来なくては医者と名乗れはしない！」

凱我の中では医者とはどれだけ高みにあるんだろうか？

「それでは凱我以外は医者と名乗れないのでは？」

「そんなことはないさ。勇気がそこにあれば不可能ではない！」

「いや、勇気は関係ないのでは？」

「あるさ！真の勇気とは病魔に勝ち、

患者と己の命を救うための希望を最後まで諦めない不屈の精神なのだから！」

俺も星もそれ以上は何も言えなかった。

「それじゃあ、士郎。横になってくれ」

「分かった」

そして、三度目になる治療が始まった。

凱我が取りだしたのは初めて目にする金の鍼だった。

「修行の成果を今ここに！いくぞ！我が金鍼に全ての力、賦して相

成るこの一撃！

輝けええっ！一賦相成・五斗米道《ファイナル・ゴットヴェイドオ  
オオオオオオッ》！」

凱我の叫びに呼応して金鍼が宝具の如く輝きだした！

「うおおおおおおおおおおおおおおおつ！」

もはや、鍼自体が光で出来ているかのような光景だ。

辺りは夜の闇に染まっていたはずなのに、今は昼間よりも明るい。

「げ・ん・き・に・なれええええええええええええつ！」

振り下ろされた光が丹田に突き刺さった。

光は俺の体に溶け込もうとするが、

まるで何かが押し出そうと抵抗しているかのようになかなか進まない。

「はあああああああああああああ！！！」

それでも凱我の叫びに応じるかのように、少しずつ沈み込む。

「ああああああ、ぐあつ！？」

凱我の苦悶の声と同時に閃光が全てを白く染めた。

そして、再び夜の闇が戻ってきた。

「ぐ、ど……うなった!？」

「待ってくれ。今、確認する。トレース・オン同調・開始」

魔術回路・エラーの現在状況  
魔術回路……負担率132%、  
宝具投影……エラー解除、  
宝具の真名解放……不可、  
全投影連続層写……不可、  
壊れた幻想……エラー解除、  
強化……エラー解除、  
変化……エラー解除、  
解析……可能、  
固有結界……エラー解除、  
その他の魔術……不可

「どうやらかなり良くなったようだ。」

「全投影連続層写が使えないため、あまり意味のない固有結界はともかく、強化の解禁は有り難い。」

「どうだ!？」

「まだ完治には至らないみたいだけど、かなり良くなったみたいだ。ありがとうな、凱我」

「……届かなかった。自分の全てを込めた一撃が……。五斗米道の全てを治めていない自分では無理なのか?」  
「それほどの腕で全てを修めていないのか!？」

星も俺も本気で驚いた。

「どれだけ規格外なんだ、五斗米道!？」

「師匠なら当の昔に士郎を治せているはずだ」

「その師匠は?」

「……10年前に亡くなってしまった。俺を侵していた病魔を倒すために全ての力を振り絞って。」

俺は……俺は彼女に誓ったのに！

師匠の出来るはずだったことを代わりにすると。

大陸を脅かす病魔を撲滅すると。そして、師匠を超える医者になると……！

それなのに……10年も時を掛けて置きながら……この体たらくだ。師匠に……それに、彼女に会わせる顔がない……」

「諦めるのか？」

「!？」

「凱我の言っていた勇氣とはその程度のものだったのか？」

先ほど言っていたじゃないか。“最後まで諦めない不屈の精神”だと。少なくとも、この程度で諦めるのが君の言う勇氣だとは思えない」

俺の言葉が効いたのか、先ほどまで消えていた凱我の目に火が灯った。

「そうだ……その通りだ、士郎！まだ、士郎は生きている！

そして、俺も生きている！なら、絶望するには早すぎる！

いや、真の勇氣の前に絶望は何があってもするべきではない！！

すまないな、士郎。明後日が師匠の命日なこともあって焦っていたみたいだ」

「それにしても……“彼女”とは、なかなか隅に置けないではないか、凱我」

星はにやにや笑いながら、からかい始めた。

「べ、別に彼女とはそんな関係では……」

「では、どんな関係なのか聞かせて貰いましょう」

「その……彼女は師匠の娘で、た、ただ幼い頃から一緒にいただけだ！」

「ほおほお。つまり、結婚を誓うほどの幼馴染と」  
「ち、誓っていない！それは誓いを果し終え……！？」  
「つまり、そのつもりはあると」

星のからかいに真赤になって言い訳し、ど壺に嵌まっていく凱我に同情するしか出来なかった。

（決して、矛先がこちらに来て欲しくなかったからではない……はず？）

「そ、それに10年も会っていないんだぞ」

「それは甲斐性なしにもほどがあるのでは？彼女とやらには同情を禁じえませんか」

……星の言葉が痛い。

俺も家族同然の人達をそれ以上放置していたからな。

……巻き込むわけにはいかなかったからだとは言え、そんなの言い訳にもならない。

「まあ、凱我をからかうのはその辺にして、解放された俺の力について話がある」

「それは剣を作ることで？」

「いや、実の所それは力の限定使用なんだ。

本当の力は使える状況じゃなかったし、使う事態はなさそうだったから言わなかったけど」

「……追及は後でするとして、どんな力ですか？」

「固有結界と言われる禁呪で、自己の心象世界を現実に侵食させ、現実を現実ならざるものに変化させる、要するに一時的に辺りを異界に変える術だと思えば良い」

二人は心象世界という聞きなれない言葉などのせいでいまいち理解

できていないようだ。  
とりあえずもう少し説明しないとな。

「心象世界というのは簡単に言ってしまうえば心の風景とでも思ってくれば良いよ。」

その人間の心の在り様を風景という形で表したものだ」

「異界に変わるとどうなるんだ？」

「人によって違うけど、俺の場合は視認したことのある全ての剣を作成・貯蔵・使用が出来る。」

結果として膨大な量の剣が地に刺さった状態になるんだ。

いつもはここから必要なだけ取り出す形になるけど、

異界に変わった時は瞬時にそれらの剣を持つことが出来る。

……現状では出来ないけど、本来ならそれらを使って剣の雨を降らせることも可能だ。」

この方法だと万単位の敵でも一分で殲滅できる」

聞いていた二人は絶句した。

恐らくその光景を思い浮かべたのだろう。

「ただし、固有結界は長時間の維持は不可能だし、暴走の危険がある諸刃のの剣だ」

「暴走？」

「固有結界は術者の心象世界を投影して世界を侵食することで異界を成立させる。」

そんな規格外な心象世界を術者は常に制御しなければならぬ。出来なくなれば暴走する。

暴走した場合、自らの心象世界に殺されることになるんだ。

俺の場合なら、内側から膨大な量の剣で串刺しになる」

「何故、それをここで？」





運命は収束へ向かう。

**第二十一話：荊州攻略戦（後篇）（前書き）**

前話のエラー解除を少し修正しました。

## 第二十一話：荊州攻略戦（後篇）

成都前の荒野にて最後の決戦が始まった。

兵の数と質では魏が、将の数と質では蜀が勝っている。

互いが互いの血で血を洗う激戦を前に、俺は戦場を見張り続ける。

何かがいるはずだと戦場を凝視する。

だが、見つからない。

けれど、そんなはずはない。

これが最後の決戦である以上、今をおいて動く時はない。

何より幾度の戦場を超えてきた自身の勘が異常を感じている。

どこだ？どこにいる？

「土郎、そんなに根を詰めて凝視していたら目が疲労するぞ。少し空でも見て……」

「それだ!!」

凱我の何気ない一言で空を見る。

タイミングを計るためには戦場を見張る必要がある。

そしてそれなら高所が都合がいい。

だから俺は高台などを重点的に見張っていた。

だが、その理屈なら空の方が良いに決まっている。

空にあるなら影が落ちる。

そう無意識に思っていたせいで除外していた。

しかし、暗躍している者は普通じゃない。

俺は空を凝視する。

異変はない。一見だけならそう思ってしまったかもしれない。

しかし……。

「……あれは」

空のある一点が歪んでいる。

まるでセイバーの宝具の仮鞘である風王結界インビシブル・エアのような。

風王結界、それは風を纏わりつかせて光の屈折率を変化させ、剣の形状を不可視にする宝具。

ならあの歪みが不可視にしているのは……。

俺は迷わずそこに矢を放った。

矢が停止した。

いや、矢を押し戻そうとするかのように風が吹いた。

少し拮抗した後、矢は力尽きて地に堕ちた。

「  
トレス・オン  
投影・開始」

俺は即座に次の投影を開始する。

投影するのは破魔ゲイ・ジャルグの紅薔薇。魔力を霧散させる魔槍。

「  
I am the bone of my sword .  
《我が骨子は捻じれ狂う。》」

その骨子を歪めて、矢に変えて放った。

前回以上の速度で風を切りながら破魔ゲイ・ジャルグの紅薔薇は歪みへ向かう。

再び風が矢を防ごうとした。

だが、魔力を散らす宝具の前では無意味だ。

破魔ゲイ・ジャルグの紅薔薇が空に停止した。

一見、さきほどと同じ様に見えるが全く異なる。

なぜなら……。

矢尻の先から黒い液体が滲み出した。

次いで、異形が姿を現しながら地へと落ちていく。

だが、それが地に落ちることはなかった。

異形の化物はまるで溶けるかのように消えていったからだ。

「確定だな。化物を召喚出来る者がいる」

あの消え方は召喚したモノが還る時固有の現象だ。

窮奇の死体は気付いたら消えていたそうだから確認しようもなかったが、今回は確認できた。

今の化物はおそらく偵察用だろう。

だとしたら、目を潰した以上は黒幕の行動が早まるかもしれない。何があるか分からない以上、華琳と合流しておかないと。

「星、急いで華琳の下に向か……」

俺の言葉は吹きつける敵意の前に止まった。

「……………おまえはここで倒す」

そういえば戦場にいなかったな。

けどどうしてここに？

いや、俺が遠距離狙撃を可能と考えたなら最適な場所はこの付近だ。そして、優秀な軍師なら対策を立てても可笑しくない。

そこら辺の考察は今も考えても仕方ない。問題なのは……。

「よりによってこの状況で……………!!」

呂布と相対してしまったことだ。

そもそも時間を稼ぐことすら大変な相手だ。

急いで華琳の下へ向かう必要がある時に、呂布と戦っていては手遅れになるかもしれない。

かと言って、逃げられるほど甘い相手ではない。

出来ることは一刻も早く呂布を倒すしか……。

「星、出来るだけ早く呂布を倒して華琳と合流するぞ」

「……暗躍者が？」

「そうだ」

その言葉に星は少しため息をついた。

そして、俺に向かって信じられない言葉を小声で告げた。

「ここはこの趙子龍に任せて土郎は先に」

「何を言って「時間がないのでしょうか？ 私なら大丈夫。なに、土郎と違って無茶などしませぬ。」

それに死ななければ凱我が何とかしてくれましょう。倒せなくても時間稼ぎなら「……」

本当なら反対したかった。

しかし、そんな我がままを言える状況ではない。

そして星の言っている言葉は正しい。

俺は歯をかみしめて、走りだした。

「帰ったらきつちり文句を言わせて貰うぞ!!」

だから……死ぬなよ、星！

「逃がさない」

「それはこちらの台詞だ！追いたければ私を倒してからにして貰いたい」

「……邪魔」

背後から鳴り響く激戦の音色を後目にその場を後にした。

魔力で強化した身体を持って戦場を走破する。  
あちこちで兵が殺し合い、倒れていく戦場を。  
すでに戦いも佳境を越えて魏の勝利が見え始めた。  
けれど、その勝利を……いや、大陸に住み大陸の未来を願い、  
戦い続けた人々の想いを踏み躪ろうとする者がいる。  
そんなこと……。

「絶対にさせるか!!」

華琳が敵の本陣に乗り込んでいくのは確認済みだ。  
故に俺もそこへ向かう。

だが、敵の中枢へ向かう以上、敵の抵抗も激しくなる。  
それでも最小限の戦闘だけで戦場を進む。

「そこまでだ!」

俺は足を止めた。

「……………華雄か」

出来る限り敵将との戦闘は避けたかったが。

「悪いがさつさと「わたしが先約だろ、華雄?」……………春蘭か。ずいぶん良い時に来たな」

「お前が血相を変えて戦場を走っていると兵から報告があったからな。」

「ここはわたしに任せて先に行け!」

……今日でその手の台詞は二回目なんだが。  
せつかなので、星の時には言えなかつたことを言い残すことにした。

「分かつた。けど、その台詞は死「いいだろう、夏侯惇！いざ尋常に勝負！」……………」

「ああ！行くぞ華雄！長きにわたる戦いの終止符をここに打つ！」

空気を読めない二人を残して先を急ぐことにした。

まあ、死亡フラグくらい春蘭なら空気を読まず踏み倒すだろう。

城門前にて私は劉備と戦っている。

舌戦で言った理想を証明するなら私を打倒しなさいという言葉に  
じて劉備は私の前に立っている。

すでに劉備は何度となく地に倒れ、土に塗れられている。

あちこち傷だらけでぼろぼろだ。

それでも目の光は消えていない。

心が折れていない。

「はあ、はあ、はあ……………」

けれどそれは当然のこと。

この程度の困難に心が折れるようでは初めから理想など語るべきで



はない。

「さあ。掛かってきなさい」

歯を食いしばりながら劉備は立ち上がる。

「……私は……私は、あなたや衛宮さん、雪連さんがつらやましかつたのかもしれない……」

「……それで？」

「強くて、優しくて、何でも出来て……っ！わたし……何も出来ないから……っ！」

何を言い出すかと思えば……。

「何も出来ない？あなたはそれを覆すだけの行動をしたの？少なくとも土郎は行動し続けたわ。才能がないことを認め、それでもあがき続けた。」

……あなたは一体、何をしてきた？何がしたかった？」

「それは……！蜀のみんなの……王として！」

劉備は叫ぶ。

みんなで笑って、仲良く過ごせれば良かったと。

自分たちだけが笑って過ごせる世界なんて、無理だと知ったからと。

世界の広さを知り、悪い人がたくさんいるから、

みんなが笑って暮らせる優しい国を作りたいと思ったと。

だから立ち上がったと。変わったと。

一人じゃ出来なくてもみんななら大きな事だって出来ると。

叫びながら刃を振るう。

一撃ごとに籠もる力が強くなる。

一撃ごとに振るう刃が鋭くなる。

それは紛れもなく強い想いが籠もっている。

「……………分かっていない」

だから腹が立つ。

王の重みも理想の重みも分かっていない劉備に。

「私はあなたが気に入らない！王のくせに！その背中に多くの人々の命を背負っているくせに！

その重みを気付かず、背負うのを忘れていくくせに！」

怒りを込めて刃を振るう。

「王と言うなら、もっと現実を見据えなさい！」

「現実なんか朱里ちゃんや雛里ちゃんがいくらでも見てくれる！なら、上に立つ者はもっと遠くを見るべきでしょうっ！？」

その言葉に怒りはさらに深くなった。

「だから！私はあなたが許せない！」

「きゃあっ！？」

吹き飛ばされる劉備に言葉を、怒りをぶつける。

「理想を追うくせに、自分の起こした行動を見ようとしないくせに！理想を追いながら、切り捨てられる者を見ようとしないくせに！」

士郎はいつだって切り捨てられる者のことを忘れない。

行動の結果をいつだって直視する。

理想を目指しながら、現実を見続ける。

理想の矛盾を理解して、その上で理想を追い続けている。  
なのに劉備は！  
現実を他人任せにすると言った！

「理想を追うなら、現実を見据えなさい！！」  
「けど！世界を良くするなら！遠くを見ないとたどり着けない！！」

劉備の言葉に私は言葉をぶつけようとして……。

「だが、近くを見なければ倒れ伏す者に気付けない」

士郎の言葉が遮った。

「……士郎」

「ごめん。けど、理想を追う者としてあまりに聞き捨てならなかったから」

いつのまにか周りに皆が集まっていた。  
本来なら王同士の言葉に口を挟むなど敵も味方も許さないとはいはずなのだが……。

「やっ」

士郎の纏う雰囲気は黙り込んでいる。

「劉備、先ほど現実には他の者が見てくれると言ったな」

静かな怒り。

劉備の言葉は士郎としてはあまりにも許せないだろう。

「……そう……だけど」

「だから、今まで君のために倒れ伏した兵たちも見なくて良いと？」

その言葉に劉備は激しく反応した。

「そんなこと言っていない！」

「では、君のために亡くなった兵の家族を見たことがあるか？」

その人たちは“みんな笑っていた”か？」

劉備は答えられず黙った。

「笑えるはずがない。それでもいつかは笑えるかもしれない。

笑えないかもしれない。君は彼らがまた笑えるように努力したかね？」

その“現実”すら君の部下に押し付けたのか？彼らの嘆きも怒りも憎悪も」

「平和になれば……きっとみんな……！」

その言葉に士郎は冷ややかに返す。

「平和になったら彼らも笑える？だから見なくても良い。そう言いたいのか？」

それを亡くなった兵やその家族を前に言えるか？」

“あなたたちを見ていませんでしたが、

平和になりみんなが笑える世界になったから良いですよね？”と

士郎の言葉に劉備の言葉に顔色が悪くなる。

「遠くを見るのは結構だ。しかし、近くを……傍で倒れ伏す者に気付かず遠くしか見えないなら、

その理想は妄想に落ちるだけだ」

「だったら、曹操さんたちは正しいんですか!！」

その言葉に士郎は冷静に返答した。

「私は華琳を王として正しいと思っている。どうやっても犠牲は出る。君は言ったな。

“みんなでなら大きなことが出来る”と。だが、手が大きくなっても隙間は出来る。

大きければ大きいほど大きな隙間が。華琳は犠牲をいつだって見ている。

そしてそれを肯定し言い訳をしない。ただ、自分の行動に全責任を持っている。

王とは全ての民の命を背負い、庇護す守り手だ。

同時に、必要に応じて多数を生かすため少数を切り捨てる剪定者だ。その行動に民の全てを背負う覚悟があるからこそ私は華琳の在り様を尊いと思ってる」

士郎の言葉が凄く嬉しい。

だから、私は言う。

「私は士郎を理想を追う者として正しいと思っているわ。

どうやっても犠牲は出てしまう。あなたは言ったわね。

遠くを見ないとたどり着けないと。だけど、遠くを見ても届きはしない。

地をどれだけ歩いても空には届かないのだから。士郎はそれをいつだって理解しているわ。

そして届かないことを理解した上で目指し続けている。ただ、行動の結果を常に胸に刻んで。

理想を追う者は手の届かない遠くを見る夢想家よ。

同時に、手の届く近くを見据える現実主義者でもあるわ。

理想に届かないと理解しながら目指し続ける覚悟があるからこそ私は士郎の在り様を尊いと思ってる」

私の言葉に士郎は驚いた表情を浮かべたが、すぐに苦笑に変わった。顔が少し赤くなっている。照れ隠しなのがばればれた。

「……私は……間違っているの？」

「劉備、君は“人”として正しい。みんなが笑えたら、それは誰しも思うことだ。

だけど、王は多数を…民を生かすために部下を…大切な仲間を犠牲にしなくてはならない時がある。

君はそれを肯定出来なかった」

そう、袁紹から逃げる時に劉備は関羽を犠牲に選べなかった。

「そして、理想を追う者は全てを救う行動の結果、皆を犠牲にしてしまう時がある。

君はそれを背負う覚悟がなかった」

そう、袁紹から逃げる時に劉備は皆を救おうとして危機に墮ち、それを認められなかった。

「だから劉備、君は王になるべきでも理想を追うべきでもない。大切な身近な者の笑顔を守る、それが君のすべきことだと思っ」

劉備は膝を地に着いた。

終わった。そう思って士郎を見た所で、士郎に任せていた任務を思い出した。

士郎が傍にいるということはつまり……。

「……………土郎」

「ああ。いつ何が起こってもおかしくない。見張っていた化物がいた」

その言葉に緩みかけていた気を引き締める。

私は伝令を上げようとした。

だが、その光景を目にして硬直した。

見ると土郎も啞然としている。

兵達もそれに気付いて騒ぎ出した。

もはや敵も味方もない。

「……………嘘でしょ」

地平線を越えて進んできたソレを見て、驚愕しない者はいないだろう。

万を超える異形の軍勢が姿を現したのだから。

これは黒き運命が結実した一幕。

## 第二十二話：無限の剣製

地を覆うその軍勢は悪夢そのもの。

噂で囁かれていたモノ、伝承で語られたモノ、神話に出てくるようなモノで構成された軍勢。

ソレは優れた理性で人を殺し、喜んで人を殺し、生きるために殺すのではなく殺すために生きるモノ。  
すなわち……。

「化け物……」

そう。正しくその通り。

ソイツらは様々な形をしているが、ソイツらを纏めて呼ぶなら化け物は適格だ。

一匹だけでも大量に人を殺すソイツらが万を越えて進軍してくるのだ。

「……予想のななめ上だな」

神獣による攻撃があるかもしれないとは思っていた。

しかし、これは想定していなかった。

軍勢を構成する大半は魔獣のようだが、何割か幻獣が存在している。

その量は下手な質などよりよっぽど性質が悪い。

魔物の軍勢に人間である兵たちが動揺し、混乱している。

「うるたえるな!!」

戦場に言葉が響いた。



「この場に集う勇士たちよ！みなは何のために戦ってきた！」

華琳の言葉が動揺を抑えていく。

「より良き明日を願い、痛みと苦しみに耐え、友の屍を越えて戦ってきたはずだ！」

兵たちの目に火が灯る。

「そして、今ここでその明日を奪おうとするモノが来た！  
今までの戦いを無意味に変えようとしているモノが！」

華琳の傍で座り込んでいた劉備が立ちあがった。

「みんな、形は違っても明日を願って戦ってきた！」

劉備が叫ぶ。

「私自身は間違っていたとしても、みんなの想いは間違いなんかじゃない！」

そして、その想いを……ここに至るまでの全てを否定されようとしている！

私は！それを許せない！」

自分の根幹の理想を否定されても、それでも劉備は信じてくれた者たちのために想いを叫ぶ。

「ならば我らがすべきことは一つ……！」

「みんな！迎え撃つ準備を……！」



その言葉に敵意を皆が強めた。

「一人でね。それは後ろの醜い連中のことを除外してるのかしら？」

華琳の言葉に化け物は嗤う。

「醜い……醜いか！かかかかかか！そりやそうだろう！  
なんせこいつ等はお前たちのおかげで呼び出せたんだよ！  
お前たちの廃棄物を使って呼んだ以上は醜いのは当然ですな！」

廃棄物？

「分からないか？具体的に言ってやろう！やさしいな俺様！  
こいつらはな、死者の憎悪を糧にして呼んだのさ！！」

その言葉に場が凍った。

「死者は何も思わない？ああそうとも！けれど死ぬ瞬間に残される  
のさ！

無念の想いが！苦しみが！痛みが！悲しみが！憎悪が！  
どうだ？お前たちが当然のこととして積み重ねてきた負の想いがお  
前たちを滅ぼすんじゃ！

おお！復讐を遂げさせてやるなんて……ワイはなんて優しいんやろ  
！」

そのふざけた言葉に皆、怒りを覚えた。

つまり、コイツは……！！

「死者の想いを弄んだのね……」

「いいや。有効活用してやったのさ！！」

まるで子供が遊具を自慢するかのようにつつた。

「これは運命なのさ！コイツが私の元に来たのが証拠さ！」

懐から一冊の書を取りだされた。

「なっ！？太平要術！！！」

その言葉に以前に告げられた予言を思い出した。

「コイツのおかげで今の我が存在する。そしてこれを作れた」

懐に太平要術をしまつと今度は漆黒の水晶を取り出した。

「これは負の想念を力に変えてくれるのだ！」

天はこんな乱世に都合のいい力を俺にくれたんだ。

運命さ！お前たちの大義の！理想の！願いの！犠牲になった者達の憎悪を使って、

大義や理想や願いにしがみ付くお前たちを浄化しろってね！」

ソイツは直ぐに水晶を懐にしまった。

「それじゃあ皆さん、精々苦しみ悶えて死んでください。せつかくの幕引きなのだから、

盛り上げてくれないとつまらん」

そう言ってソイツは魔物の群れに戻ろうとした。

「ふざけるな化け物！！！」

一人の兵が矢を放つ。  
それは見事な放物線を描いて親玉を貫かんとする。  
しかし、傍にいた魔獣が楯となり、魔獣に当たった。  
当たったが……。

「そ、そんな!？」

矢は魔獣に傷一つ付けなかった。  
カランと軽い音を立て、矢は地に落ちる。

「全軍!迎撃を!!!」

「弓兵のみんなは下がって!!!」

兵たちは斧で槍で剣で異形の軍勢と相對した。  
だが、それらは通じない。

神秘も何もない鉄の固まりでは、神秘そのものと言っていい魔獣や  
幻獣には通じない。

そして、やつらの牙は、爪は容易に鎧を切り裂く。  
結果、戦いと呼べない虐殺に落ちるのを防ぐことしか出来ないで  
いる。

そして、このままでは力尽きるのは必定だ。  
だから……俺は覚悟を決めた。

「……分の悪い賭けにも程があるな」  
「士郎?」

俺は懐から赤い錠剤を取り出し、飲み込んだ。  
生き残れる可能性はある以上、命を賭けない理由など存在しない。

「ごめん、華琳。今から無茶をする」

俺の言葉に華琳は苦渋の表情を浮かべた。

「……………絶対に死なないですよ」

「……………足掻くさ。最後まで生にしがみ付いて」

攻撃が全く通じない敵に押され、殺されていく兵たちを見据えながら、俺は詠唱を開始する。

「I am the bone of my sword」

《体は剣で出来ている。》

それは自らの起源たる言葉

この場に集う全ての人たちが必死で守り、化物の軍勢を抑えている。

明日を守るために。

「Steel is my body, and fire is my blood」

《血潮は鉄で、心は硝子。》

それは自らの心を示す言葉

絶望的な能力差にも関わらず、みんな必死で抵抗している。

「I have created over a thousand blades」

《幾たびの戦場を越えて不敗。》

それは自らの生き様たる言葉

敗北が守りたい全てを破壊すると知っているから。

「Unaware of stop. Nor aware of move.”」

《ただ一度の敗走もなく、ただ一度の忘却もなし。》

それは理想を追い続け、全ての結果と共に刻んできた言葉

傷つき、倒れながら、それでも前を見続ける。

積み重ねてきた想いを、託された想いを忘れられないから。

「Withstood pain to create weapons. Making a vow of my soul.”」

《担い手は雪の丘にて 果てなき想いを鉄と鍛つ。》

それはあの雪の日から幾多の想いを鉄に変え、これから先も鉄と共に鍛つ言葉

積み重ねた幾多の戦いが、積み重ねてきた想いが彼らを鍛え、支えている。

「So, those hands will ever hold memories.”」

《故に、我が生涯に意味はあり。》

それは自らの理想の意味を証明する言葉

これまでの全てに意味があつたと証明するかのように。

「My soulful wish was unlimitable blade works.”」

《この心は無限の剣で出来ていた。》

それは世界を侵食する自身の世界を現す言葉

ならばその想いに俺は答えよう。絶望から人を救うその在り様に俺は憧れたのだから。

光が走る。

地面を走る光は境界線。

光が全てを白く染める。敵も味方も等しく。その光が過ぎ去った後に異界が姿を現した。

「……これは!？」

空の半分は赤き黄昏。紅蓮の炎に染まった始まりの空の色。

空の半分は瑠璃色の夜明け。彼女と駆け抜けた日々を示す空の色。

その境目に浮かぶは満月。切嗣に誓った理想の象徴。

降り注ぐのは雪のような光。それは一見綺麗だけど、

実際の雪が塵やゴミを核として形成されるのと同じで、

その実、どこまでも汚れている。それでも綺麗だと思えるそれは、

今なお刻み続ける人々の想いの象徴。積み重なるそれは自身に罪重ねる象徴。

一面に広がる白き雪原は同時にイリヤに対する想いそのもの。

荒れ果てた荒野を覆うそれは、イリヤとの約束で覆われた自分そのもの。

雪原に刺さっているのは無限の刃。

伝説に歌われる名剣・聖剣・魔剣が無造作に刺さっている。

全て写しとられた偽物である剣だけど、同時に刻んできた本物だ。

無限に突き刺さるのは幾度折られても折り切れない不屈の証。

同時に幾度繰り返してもその都度忘れずに刻む、殺してきた人々の墓標の証。

身を切るような冷たき風は、刃と雪しかないここは紛れもない衛宮士郎の心そのもの。



その理想はどれだけ美しくても、誰も生きられない残酷な形。  
固有結界・一無限の剣製《unlimited blade works》は今ここに現れた。

本来なら後は無限の剣舞によって剣の雨を降らせてしまえば殲滅は容易だろう。

しかし、制限が未だに解けていないためその手は使えない。

だから俺一人なら無限の剣製を使用する意味は全くない。

無限に剣があっても使い切れないのだから。

しかし、足りないなら有る所から持つてくればいい。

俺は行動しようとして……その前に劉備を見た。

「劉備、君はこの風景をどう思う?」

「え?えと、……すごくきれい……けど、すごく寂しい感じがする」

俺は劉備の言葉に答える。

「その通りだ。この風景は俺の在り様そのものと言っていい。

どこまでも美しく見えるかもしれないが、生を拒む不毛な形だ。

よく胸に刻んでおけ劉備。他者を蝕む理想の本質を」

黙り込む劉備を後目に、俺は口を開いた。

「告げる!」

呆然とする敵と味方に対し、俺は叫ぶ。

「この場に集う勇士達よ!みな護りたいものがあるか!

その想いがあるのなら 武器を抜け!ならば我が心たる無限の

刃、皆に預けよう……!

守りたいものがあるのなら、勝ち取りたい明日があるのならば応え

よ！！！！！」

歡声が沸き起こる。

あちこちで剣が抜かれる音が響く。

そう、自分では使い切れないなら、使う者に預ければいい。

「始めよう！奪うための戦争ではなく、守るための戦いを！！！！」

一人の兵が魔獣のそばにあつた剣を抜いた。

剣の名はデュランダル。聖剣であるそれは布を裂くかのように魔獣を切り裂いた。

それを目にした兵たちはここに攻勢へと転じた。

「…………… 士郎。この世界は何？」

「俺の剣製の本当の姿だ。自らの心の風景で世界を塗り替える秘術。つい先日、凱我の治療で再び使用が可能になったばかりだ」

俺は全身に魔力を巡らせながら華琳に答える。

とりあえず、賭けの一つ目には成功した。

総数六桁にも及ぶ存在を纏めて取り込み、広大な範囲を塗り替えるのは通常なら不可能だ。

おまけに人数分の剣が揃えるのは絶望的だ。

しかし、それを可能にする奥の手が存在した。

“秘薬・破和”<sup>パワー</sup>が。

上手く行くか不安があつたが成功した。

今もなお新たに剣の複製が行われている。

魔力も一時的にだろっけど増大している。

これなら長時間の維持も可能だ。

問題なのは二つ目…………… 反動だ。

「……………大丈夫な「華琳。事が終わったら璃夜と凱我を呼んでくれ。  
“秘薬・破和”<sup>パワー</sup>を飲んだということも伝えてくれると助かる」士郎  
!?!」

俺はそれだけ言い残してその場を去って前線へ向かった。

ただでさえ固有結界は反動がひどいのに、“秘薬・破和”<sup>パワー</sup>まで使っ  
た。

生存には反動で即死しないこと、そして凱我たちの治療が上手くい  
くことが必要だ。

「全く。幸運の低い俺が幸運に頼らないといけないなんてな」

それでも打てる手は打った。

「ならば後は足掻くだけだ！」

刃を抜いて戦闘を開始した。

戦況は一進一退という状況になった。

魔獣・幻獣の一撃も、人々の宝具による一撃も一撃必殺に等しい力  
を持っている。

異形の軍勢は人外の身体能力で、人々は連携によって拮抗する。

「てりゃあああああああ！」

季衣の一撃を双頭に二本の足を持つ蛇は交わす。

いつもとは違う得物を使うが故に、季衣動きがぎこちない。

自分が追い詰められているのが分かるから顔色が悪い。

そしてその隙をついて異形の蛇が襲いかかる。

「っ!?!」

逃れられないタイミングに季衣は死を覚悟したが、それはやってこなかった。

「せりゃあああああああ!?!」

矛状の宝具によって二つの首が宙を舞う。

「油断大敵なのだ!」

自慢げに語る張飛に季衣は二本の剣を引き抜き投げた。

「にやつ!?!なにをするのだ!?!」

「油断大敵だね!」

その言葉に張飛が後ろを振り向くと、頭だけでも関わらず不意を突こうとしていた蛇が縫い止められて足掻いていた。

「き、気付いていたのだ!?!」

「ほんとーに?」

「う、うるさいのだ!ちびっこ!」

「な、自分のことを棚にあげるなちびっ子!」

そのまま子供らしい口喧嘩に発展しそうになった。

だが、その暇は与えられなかった。

すでに魔獣が二人を襲いかかったからだ。

「にゃ！話は後なのだ！」

「そうだね。けどぜったい、ぜーったいに謝らせてやるんだから！」

先ほどまでの暗い表情はもはや微塵もない。

「はあああああああつ！」

「おおおおおおおおおつ！」

獅子奮迅な活躍をする二人が駆ける。

「これで二十四目だ！」

「私は二十一匹目だ！このまま勝たせて貰うぞ！夏侯惇！」

「まだまだ！！！」

そう言って走りだす。

目指すは兵を襲おうとしていた二匹の魔獣。  
それを二匹纏めて串刺しにした。

「これで逆転だ！ははははは！勝利を華琳さまのために！」

「ええい！まだまだ！まだ終わらん！」

理由はおかしくても彼女たちの活躍は確実に兵の士気を上げてい  
る。

「ああ。やはり姉者はああでないとな。だからこそ、姉者が心おき  
なく戦えるようにしなくては。

槍兵隊！迎撃！弓兵隊は一斉射！」

そしてシスコンの士気も上げている。

「くっつ！？」

「凧！しっかりせい！」

「真桜ちゃん！前見てなの〜！」

三羽鳥の三人は苦戦している。

凧の武器は手甲。そして手甲の宝具は存在しない。

結果として、武器を持たない彼女は守りに入らざる負えない。

真桜の武器はからくり仕掛けの槍。

回転によるトリッキーな攻撃が持ち味だ。

しかし、宝具にカラクリなどついていない。

しかも、手にしているのは偽・螺旋剣。カラトボルケ

矢として使うのが正しいのにそれで近接戦闘を行っている。

まあ、無限の剣製ないにドリルな宝具などそれしかないのだからしようがないかもしれない。

そして沙和が持っているのは干将・莫耶。

そこそこに傷つけ、倒すことは出来るが決定力不足な宝具。

干将・莫耶は複数を同時に使わなければ必殺にならない。

結果として当然の苦戦。

それでも三人は諦めない。

「喰らえ！！」

放たれた気弾が地を爆ぜる。

これにより一つ目の巨人は三人を見失った。

煙の中から突っ込んでくる影。

巨人は棍棒を振り下ろした。  
そして、沙和が吹き飛ばされた。

「い、今なの！真桜ちゃん！」  
「まかしとき！！」

沙和が作った隙をついて偽・螺旋剣カラトボルゲを突きだす。

「G A O O !?!?」

頭を貫通され、絶命した。

「大丈夫か、沙和！！」

「う、うう……服がぼろぼろなの。お気にいりだったのに……」

「大丈夫みたいやな」

「大丈夫じゃないの〜！！」

不利な状況でもみんな諦めずに戦い続ける。

戦場を縦横無尽にかけるのは四人の将に率いられる騎兵部隊だ。

「このまま攪乱するんや！ついてこれる者はいるか？」

「ここにいるぞーっ！！」

「大丈夫に決まっているだろ！むしろお前こそついてこい！！」

「ちよつと無」よし！よく言った！なら全力でいくで！！」「まっ」  
おうー！！」「」

とにかく走りまわる。

そして一撃を入れて駆け抜ける。  
確実に戦果を上げていくが、そうすんなり行くわけがない。

「ちよっ！？なんやあれ！！」

強いて言うなら空飛ぶ鹿。鹿の頭に鳥の羽を持つ戦闘力などなさ  
そうな化け物。

さしずめ飛行部隊。  
空を飛ぶ異形が空から追ってくる。

「ちっ！ここからじゃ届かない！」

そいつらの一匹が一人の兵の頭上にまで来た。

その瞬間、そいつは消えた。

同時にその兵は落馬した。

何が起こったのか分からなかった。

しかし、すぐに何が起こっているか知る。

次々と兵の頭上までそいつ等は飛び、その度にそいつ等は消え、兵  
は落馬した。

「し、死んでいる！？」

「総員！影に触れられるな！！死ぬぞ！！」

要するに自爆。

自分ごと相手を殺す力と霞は考えた。

実際は違う。その化け物の名はペリュトン。

人間の影のなかに現われ、人を一人殺すと去っていく。鹿の頭と足、  
鳥の羽根を持つ化け物。

相手が消えたのは条件を満たしたから去っただけ。

それでも現状に差異はない。



影に触れられたら死ぬという反則能力。

魔術耐性があれば耐えられるだろうが、彼らにはない。

結局、敵のその部隊は消失した。

……騎兵隊の命と共に。

「ちくしょうー!!」

「こんなのって……」

「……嘆く暇はウチらにないんや。

今は……今は戦って戦って、明日を勝ち取ってから初めて嘆くんや  
!!!」

「だな。みんな私たちを庇って死んだんだ。なら答えないと」

……反則的な力の前に犠牲を出しながら、それでも戦い続ける。

彼は不満だった。

絶望に嘆く顔が見たかった。悲嘆に暮れる顔が見たかった。  
憎悪に染まる顔が見たかった。苦痛に歪む顔が見たかった。  
それなのに……。

「……まだ諦めないのか」

圧倒的な力で蹂躪するはずが、拮抗している。

このままでも負けはしないだろう。

しかし、見たいものが見れないかもしれない。  
だから……。

「なら、ダメ押しするべきだな!」

切り札を作っておいて正解だった。

衛宮士郎！あいつはいつも邪魔をする！

「あれ？」

いつもって……いつだ？

かつて王允子師だったものは気付かない。

もはや、自身の記憶や人格など崩壊して欠片が残っているに過ぎない。

「ま、どうでもいいことか！さあ、終焉を始めようじゃないか！！」

陣はすでに張っている。

後は仕上げだけ。

詠唱も終わっている。

後は力を注ぐだけ。

「さあ、その姿を見せつけろ！悪！？」

取りだした水晶が宙を舞う。

「増援は却下させてもらうぞ」

それは衛宮士郎の必中の一矢。

そのタイミングを計り続け、届かせた一矢。  
剣が突き刺さり、水晶に罅が入った。

「おのれ！！」

伸ばした先の水晶が横に吹き飛んだ。

「それが要か。正直これ以上見るに堪えないモノを呼ばれたくないな」

矢が刺さり、水晶の罅が広がった。

「邪魔を……！！」

「しているのはあなたでしょう？娘の教育に悪すぎます」

止めの一矢が突き刺さる。

致命的な音が鳴る。

それに気付かず彼は手を伸ばした。

次の瞬間、瘴気が溢れだした。

そして……。

「我の……」

彼の手と首が水晶ごと消失した。

黒い血を撒き散らしながら、王允子師だった者は絶命した。

だが、そんなことを気にする暇などなかった。

「……バカな」

水晶がなくなったために呼び出されていた魔獣や幻獣たちが消えていく。

しかし、あれは消えない。

水晶が壊れ暴走した状態で呼び出され、

水晶を呑みこみ王允子師だった者の血肉を喰らった神話の怪物は。

衛宮士郎は知っていた。

その化け物の名を。

とある宝具はその化け物を殺すためだけに作られていたが故に。

「悪龍……ヴリトラ」

運命は未だ終わらない。

## 第二十二話：無限の剣製（後書き）

ラスボスがついに登場。こいつが原作に出たからFATEとのクロスなどという無謀に挑戦できたと言っても過言じゃないのです。伏線は王允が南蛮に向かったこと。その時に手に入れました。やはり英雄が戦うのはドラゴンと相場が決まっていますから。

無限の剣製は軍と相性がもの凄く良いですから、こっぴつ出し方にしました。

最初から書きたいと考えた無限の剣製で強化された軍VS魔獣軍団が書いて満足です。

ラスボス戦、そして士郎の命運……。

いつ書けるだろう？早く書けるようにしたいです。

## 第二十三話・運命の終焉（前書き）

手違いでお騒がせしてしまい、すいませんでした。

頑張って戦闘描写を書きましたが、

自分の力量では焼け石に水かもしれないので、

過度の期待や要求はしないでもらえるとうれしいです。

## 第二十三話・運命の終焉

悪龍ヴリトラ。それは古代インドの聖典であるリグ・ヴェーダに書かれている、

神に対抗するために炎の中から生み出された龍。

全長数百メートルにも及ぶ巨体が空を飛んでいる姿は、見る者に畏怖の念を抱かせるには十分だ。

龍という種族は幻想種の頂点。それ自体が神秘・超越の具現。

圧倒的な身体、魔力、回復力と規格外な存在だ。

そんな伝説の龍が、空の高みから一方的な暴虐を始めんと悪意を地にいる兵たちに向けた。

口の中に火が灯り、時間と共に禍々しい光を帯びだす。

「まずい！！ 急いで退却を……！！」

俺の言葉が終わらないうちに、ヴリトラの口からレーザーのような光が吐き出された。

……一瞬だった。

吹き出された光は地を吹き飛ばし、その進路上にいた兵士たちを痕跡する残さず消し飛ばした。

残されたのは一直線に深い傷を刻まれた大地のみ。

たった一撃で四桁に及ぶ人間がこの世を去った。

「……くっ！！」

俺は一人誰もいない方向へ走りだす。

龍を相手にするのはどれだけ人数を整えようと人には無理だ。

まして、普通なら矢すら届かない上空から一方的な攻撃をしてくるのだ。





ることにした。

ヴリトラはレーザーが放たれる直前に動きを止める。おそらく反動に耐えるためなんだろう。

その動作だけが俺の命綱になる。

吐き出されるタイミングに合わせて駆ける。

一瞬前にいた場所を光が走った。

光と地面の衝突によって衝撃波が生じた。

俺は衝撃に体を浮かせながらも、体勢を立て直す。

それにしても本当にでたらめな威力だ。今でまた大量の兵が巻き込まれて消し飛んだ。

このまま一方的な攻撃を食らってでは話にならない。それにこれ以上死傷者を出すのは避けたい。

俺は交わし終えるやいなや、剣を射る。

弾幕の如く剣は飛んでいき、豆鉄砲のように弾かれ続ける。

ヴリトラは当たり続ける剣が鬱陶しいのか、空を高速で移動しました。

速度はおそらく音速。普通なら空を自在にその速度で移動したら当たらないだろう。

しかし、それくらいで避けられるほど、俺の弓は甘くない。

矢継ぎ早に放たれる剣は狙い通りに命中し続ける。

どう動こうと慣性を完全には殺し切れない以上、機動は限られる。

まして、あれだけの巨体だ。当てることなど造作もない。……当てるだけなら。

計三十本射たが、三十本弾かれダメージを与えられなかった。

それらは全部龍殺しの宝具なのだから、乾いた笑みの一つも浮かべたくなる。

だが、煩わしく思ってくれたようで、俺一人に狙いを絞ってくれた。

「……真名解放ができれば簡単に倒せるのにな」

かつて悪龍ヴリトラを殺した宝具が存在する。  
ヴァジユラ……雷神インドラの使用した宝具。

これによって放たれた雷でヴリトラは倒された。

しかし、真名解放が使えない限り意味がない。

だから地道に剣を射ながら方策を考えるしかない。

放たれる光を交わして剣を放つ。

響く咆哮。再び口に炎が溜めこま……れない!?

口から吐き出される炎は一メートル程度の球状の炎弾。

しかし、問題はそこじゃない……!!

「くっ!! 質より量か!!」

剣の弾幕が余程腹に立ったのか、お返しとばかりに炎弾の弾幕が降り注ぐ。

爆ぜる音が絶え間なく続き、空気は焼け、大地は穴を空けられ、辺りは火の海と化す。

その惨状の中、俺は走る。止まり、跳び、宝具を投げ、走り、攻撃の機会を得るまで耐え凌ぐ。

右へ飛び着弾を回避、即座に体制を低くとり炎弾をやり過ごす。

そのまま前へ走りながら矢を射た。

放った剣は四本。

一本目は鼻に命中し弾かれた。

二本目は右目に命中し弾かれた。

三本目は左目に命中し弾かれた。

四本目は口に吸い込まれた。

与えられたダメージは零。口の中に入った矢は着弾する前に吸い込まれるようだ。

それでヴリトラを倒したインドラは一度ヴリトラに呑み込まれ、あくびをしたところで逃げ出したという逸話を思い出した。

ならば……！！

俺はとにかく剣を射る。狙いは……口だ。とにかく奴の腹に宝具を溜めこむ。その後、“壊れた幻想”で内側から爆発させて倒す。

それしかない。普通に“壊れた幻想”を使用したのでは大したダメージは与えられず、

すぐ龍種の生命力で回復するのが目に見えている。決めるなら一撃で仕留める！！

俺の思考を余所にヴリトラが手を変えてきた。

周りを囲むように炎弾が降る。

交わす必要のない距離だったが余波が肌を焼き、雪を溶かして発生した水蒸気が視界を閉ざす。

すると同時に弾幕が止んだ。

それが意味するのは一つだろう。

水蒸気の霧を急いで脱出しヴリトラを探した。辺りを見回そうとして……そのまま走りだした。

光の雪で分かり難かったが、巨大な影が差していた。

それが意味するのは……真上！！

放たれた光が地を穿つ。

俺は秘薬・破和で強化されていた身体能力を活かして交わすことに成功した。

しかし、吹き飛ばされた地面の破片や剣が襲いかかる！！

剣は消すだけだから問題なかったけど、地盤はそうはいかなかない。

搦んだ剣で防ぐが、その勢いを抑えきれなかった。

結果としてかなり吹き飛ばされて雪原を転がる。

追い打ちしてくる炎弾を必死で交わしながら、弓矢を再び手に取った。

状況は刻一刻と悪化を続ける。

なぜなら無限の剣製の反動がすでに始めているからだ。

ぎしぎしと動いたたびに内部で生じた剣が擦れ異音を発す。

それも当然。

こんな長時間、しかもこれだけの大人数を取りこむなど無謀と断言している行為だ。

秘薬・破和のおかげで持っているが、それでも反動は抑えきれない。体の内側から確実に刃が出てくるのが分かる。

だからと言って、無限の剣製を解くわけにもいかない。

なぜなら、悪龍グリトラのもう一つの守りである

“昼も夜も自分を攻めることができない”という時間規定があるからだ。

現実の時刻は夜。

無限の剣製の空が示すのは黄昏と夜明けだからこそ攻撃できるが、解除したら数時間は攻撃できなくなる。

さらに、秘薬・破和の効果が切れる時が迫っている。

切れたら、最悪即死。運がよくても戦闘不能になるのは確定だ。

だからこそ、それまでに確実に仕留めなければならない。

そんな焦りから、射ることを優先した結果、無理な攻めを行い続けた。

全身は軽度の火傷、打撲、切傷、出血多量と満身創痍というべき状態だ。

それでも酷使を止めない。気付かう余裕など微塵もない。

「!？」

グリトラが火を溜めこむ。問題なのは溜め時間。今までと比べ物にならないほど長い。

回避され続けるなら回避できない攻撃を放つ。

それは定石だ。

俺は即座に高位宝具を射た。

溜めこまれる炎が大きくなり、吐き出される前に剣がグリトラに命

中する。

「フロクン・ファンタ  
壊れた幻くふっ!?」

生えてくる剣によって内臓が傷つき、口中に血が溢れた。

……それが爆発のタイミングを僅かに遅らせた。

次の瞬間に剣は爆発し、ヴリトラの照準がずれた。

ヴリトラから放たれた光は放射線状に範囲内の全てを吹き飛ばす。

大地を揺るがす衝撃に無限せかいの剣製が震える。

目と鼻の先を破壊のブレスが吹き荒れ、地面を吹き飛ばしていった。

俺がぎりぎり範囲から逃れられた……代償は五桁に及ぶ兵だった。

避難していた軍勢の端が消滅したのだ。

わずかなタイミングのずれがその結果をもたらした。

慙愧の念を感じつつも俺は剣を射る。

嘆きは全て終わってからしよう。今は……最善を尽くすだけだ。

再び溜めこまれる炎を見据えながら剣を放つ。

「痛っ!?」

体から生える剣が右腕の筋を切ったみたいだ。

右手が動かない。これではもう弓は射れない。

だから、俺は積み立てた攻撃の仕上げの言葉を告げた。

「フロクンファンタズム  
壊れた幻想」

悪龍ヴリトラの中心から光が溢れる。

そして……。

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!?!?!?!」

胴体の真ん中の部分で轟音と共に真っ二つになった。  
どうやら仕込んだ宝具は足りたらしい。

ヴリトラは地へと墮ちていき、地響きを立て沈んだ。

何とか勝てたことを喜んでいる暇は俺にない。……生き残らなければ。

俺は懐から緩和剤を取りだし飲んで、固有結界を解こうとしたところで呼ぶ声が聞こえた。

「士郎……!!」

華琳が駆けってくる。その背後に気付かずに。

後は凱我たちの治療に賭けるだけ、そう思っていた俺はそれを見て凍りつく。

上半身だけの姿にも関わらず、未だ炎を溜めこむヴリトラがそこにいた。

今、華琳を止めても間に合わない。

考える！

(弓は使えない以上、逸らすのは不可能だ)

考える！

(それ以前に、俺には戦う力が残されていない)

考える！

(他の者が戦おうにもヴリトラには直接的な攻撃は通じない。宝具の真名解放ならともかく……!!?)

考える！

(普通、真名解放の条件は？)

1、魔力。

2、担い手であること。

(この場に宝具の担い手は仮初めではあるが俺だけ……ではない。彼女が……華琳がいる。

正覇は彼女のためだけの宝具。当然、その担い手も彼女だけだ。

それに正覇はカリバーンを元に生まれた宝具だから、真名解放の効果も光の斬撃になる可能性が高い。

そうなら、ヴリトラの概念防壁に無効化されないはず。

ならば、彼女に真名解放が出来るか？)

無理だ。魔力を込められない。

(なら、魔力を込めさえすれば？)

俺は華琳に向かって駆けだす。

「士郎、あなた……!?!」

「華琳！ 正覇を!!」

俺は華琳の手の上から正覇に残っていたありったけの魔力を込めた。

「!?!」

遠ざかり始める意識。

体中で筋肉が千切れ、骨が砕けた。

魔術回路が焼き切れた。

剣が凄まじい速度で体から生えるのが分かる。

何より……心が……記憶が砕けていく。

どうやら秘薬・破和の効果が切れたようだ。

文字通りの死ぬほどの激痛に耐えながら、壊れていく精神を繋ぎとめながら、

それでも伝えるべき言葉を伝える。

「華……琳……！！ 正……覇……を……叫びながら……龍に振れ……！！」

そこで俺の意識は途絶えた。

最後に見たのは壊れゆく世界を疾走たしやくする一条の光。

士郎の言葉を聞いて華琳が背後を向くと、そこには上半身だけでも関わらず敵意を向ける龍がいた。

口に溜めこまれた炎が華琳に、そして士郎に吐き出されようとしている。

華琳は士郎を信じ、突然輝きだした正覇を構えた。

いつも以上に手になじむ己の得物に全てを託す。

正覇を掴む手が熱い。初めから使い方を知っていたかのように、自然と体が、口が動く。

それも当然。正覇は曹孟得のためだけにある武器なのだから。



(やるなら思いっきりやるだけ！)

「切り拓く覇者の道”！！！！”」

叫びながら振り下ろされた金色の大鎌から光が疾走った。瞬きしていたら見逃すほどの一瞬。それは刹那に消えたが、確かに龍を通り過ぎた。

しかし、龍は顕在。世界も本来の姿に戻った。

絶望的な状況だが、それでも華琳は目を離さず龍を見る。

龍は業火を吐きだそうとして……左右にずれた。

胴体から真っ二つになっていた龍は、今度は縦から真っ二つになって地面に落ちて行った。

華琳は生き残れた事に安堵した。背後で倒れる音を聞くまでは。

「士郎!？」

目にした士郎の姿に衝撃を華琳は受けた。

無茶の結果、かなりの重傷なのは分かっていた……。

それでも戦が終われば何とかなると、そう思っていた。

だが……事態は華琳の想定を遥かに超えていた。

全身火傷……それは当然。

手足の骨が折れたのか不自然な曲がり方をしているのも……納得できないが理解の範疇。

しかし……。

「何よ……それ……」

全身から生えてくる剣はあまりにも現実から乖離していた。

ぎしぎしと、異音を発しながら一本、また一本と新しく体中から生えてくる。

内側から全身を貫いていく無慈悲な剣。傷口から血が流れる。

「りさま!!」

士郎が血反吐を吐いた。

内蔵を傷つけたのかもしれない。

何も出来ない自分に華琳は初めて自らの無力を呪った。

「しっかりしてください華琳さま!!」

春蘭に揺さぶられて私が周りを見ると、皆が集まっていた。

「……早く……早く……華陀を!!」

普通の医者に治せるようなものではないのは一目瞭然。

士郎は恐らくこの事態を想定していた。

なら、彼に希望を託すしかない。

「士郎!!」

華陀が駆けてくる。

星と呂布を連れて。

「華陀!士郎を助けて!!」

華陀も焦った様子で口を開いた。

「分かつてる！！ 我が金鍼に全ての力、賦して相成るこの一撃！  
輝けええっ！ 賦相成・五斗米道ファイナル・ゴットウエイドオオオオオオツ！」

華陀は取りだした金の鍼を振り下ろした。

鍼は見事に士郎に刺さ……らない。  
良く見ると、生えてきた剣が邪魔をしている。

「……くそ！ 五斗米道ゴットウエイドオの全てを治めているならともかく、  
今の俺では鍼が刺せなくては……！ いや、諦めてなるものか……  
！！！！

我が金鍼に全ての力、賦して相成るこの一撃！……」

再び振るわれた金の鍼は今度は士郎に刺さった。

しかし、剣の進行を止められない。

「くっ！？ やはり本来刺すべき箇所じゃないと効果がない！！」

華陀は金鍼を何度も振り下ろし、その度に弾かれ、あるいは効果がない。

あきらかに華陀は疲弊していく。

そんな中、誰も何も出来ずにいる。

「華琳さ……士郎！？」

蜀や呉の者までいる中で、ただ一人いなかった秋蘭が駆けつけてきた。

「し、士郎はいつたい！？」

「秋蘭、今までどこに？」

その言葉に秋蘭は手にした物を渡してきた。

「これは……太平要術!？」

「はっ! これを放置しておくのは危険ですから」

(このせいで士郎は……!!)

華琳は切り捨てようとして……華陀の言葉と太平要術の性質を思い出した。

華陀はさっき言った。“ゴットウエイトオ五斗米道の全てを治めているならともかく”と。

そして、太平要術は……!

「華陀! これを読みなさい!」

華琳は太平要術を華陀に突きだした。

「なにを「いいから!」それにゴットウエイトオ五斗米道の全てが書かれているかも知れないわ!」  
「なんだって!？」

太平要術は読み手に相応しい内容に変わる。

なら、華陀なら……!

華琳は一縷の希望を運命の書に託した。

「………そんな」

「書いて………ないの？」

華陀の暗い表情から華琳は希望が潰えたと思った。

「書いて……書いてあるんだ」  
「なら……!!」

華陀は懐から何かを取り出した。  
それは黒くて箱状の物だった。

「これは師匠の形見で我慈惠ガジエツトキユフ渡休撫ゴットウエイドオというんだが、  
これの使用が五斗米道の秘奥を使うのに必須みたいなんだ」  
「だったら使えばいいだろ!!」

春蘭の言葉に華陀は首を振った。

「使用するには……証履の鍵が必要なんだ。そして……俺は持って  
いないんだ。」

彼女が……深言が持っているから」

その言葉は絶望的だった。

皆が諦めかける中、華陀は再び鍼を振るう。

「諦めるか！ 諦めてなるものか！ 士郎に言った！ 最後まで諦  
めない不屈の精神を持つと！  
彼女に誓った！ 師匠の出来るはずだったことを代わりにすると！  
ここで諦めたら俺を待たせてくれる彼女に会わせる顔がない!!!!  
我が金し」……あなたに……これを……」……み……こと？」

そこには静謐な雰囲気霧の璃夜がいた。  
呆けたように華陀は璃夜を見続ける。

「……きつと……もそれを……望んでいると……思うから。  
……けど、……必ず……士郎を助けて」

それだけ言うと璃夜は黙り込んだ。

璃夜の言葉を聞いて、華陀の顔に様々な感情が過った。

喜・怒・恐・哀・楽・迷・否・肯・惑……そして、最後に決意が残った。

「……分かった。行くぞ！！ 我が身、我が鍼と一つなり！ 一鍼同体！ 全力全快っ！」

義の流、儀の務、願い護る具を奉ずる！！！！

はああああああああつ！ふんっ！！！！！！」

華陀の手に渡った金色の鍵は光だし、黒い箱に鍵穴が出現した。

「これが証履の鍵だ！！！！我治恵渡休撫！！！！」  
ガジェットキューブ

鍵が差し込まれると形を変えていく。

「我治恵渡絆真！！！！」  
ガジェットハンマー

箱は錠へとその姿を変えた。

「治し恵む音はここに疾駆する！！ 煌めけ……！！！！」  
ジエネシク・ゴットヴエイドオ

治恵音疾駆・五斗米道オオオオオオオオオオオオツ！！！！」

錠から光が溢れだし、一丈もの巨大な光の錠となった。

「げ・ん・き・に・なれええええええええええつ！！！！」

瞬間、  
士郎から生えた刀身に沿えるように触れている金鍼に錠が触れた

澄んだ音が辺りに響いた。

それに応じて鍼は震え、光が土郎の体を駆けていく。そして……光が辺りを染め上げた。

華琳が目を開けると、土郎にあれほど生えていた剣が無くなっていた。

「華陀………礼を言「まだだ！」えっ？」

華陀は険しい顔で言った。

「今のは応急処置でしかない。ひとまず命に危険はなくなったが……これからが本当に大変なんだ。

それに“そのこと”を抜きにしても重傷に変わりはない。

皆！ 龍を解体して薬を作る！！ 手伝ってくれ！！！」

こうして決戦は幕を閉じた。

目覚めない正義の味方を一人残して。

これは運命が正義の味方を残したまま収束した一幕。

## 第二十三話・運命の終焉（後書き）

後書き

今回で仕込んでいた伏線を回収したので解説を。

伏線1 王允の南蛮への移動

悪龍ウリトラを手に入れるために行きました。原作の真・恋姫では華陀が薬の材料にするため南蛮まで狩りに行きました。

伏線2 璃夜と凱我の関係。

璃夜の父親についての言及で、大抵の人は予測がついたはず。おまけに凱我の想い人に関する話で補強。

さらに秘薬・破和はガ ガ ガーの【パワー】のパクリですが、その繋がりまで分かった人は何人くらいですかね。

伏線3 証履の鍵

これはガ ガ ガーFINALのゴルディオンハンマー使用時に使う金色の

“勝利の鍵”のパクリです。璃夜の

分かった人は最後の治療に関わるアイテムだと気付いたと思います。

まあ、大した伏線は入れられませんでした。ラスボス戦終了+土郎危篤まで書けました。このままエピローグに行けなくもありませんが、もう少し続く予定です。

ちなみに星と呂布の戦いは相打ち寸前の所で凱我が播いていた薬で



ダブルノックアウトになりました。（結果として決戦から三人が省  
かれました

正覇の真名解放を若干修正。

本当はカッコイイ振り仮名をつけたいけど、中国語が分からないた  
め省きました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2452h/>

---

恋姫+運命 正義の味方と霸王の物語

2010年10月9日10時25分発行